鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（204）

主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）改築事業に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

宇都上遺跡（うとうえいせき）

（志布志市志布志町）

２０２０年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



遺跡遠景（北から志布志湾を望む）



縄文時代早期の出土遺物



中世の出土遺物

図版１　遺跡遠景　旧石器時代・縄文時代早期の調査









① 遺跡遠景（南から）　② 旧石器時代遺物出土状況
③ 縄文時代早期遺物出土状況（Ｇ－５区付近）　④ 縄文時代早期集石検出状況（14 ～ 16号）

図版２　縄文時代早期の集石

















① 集石１号　② 集石２号　③ 集石３号　④ 集石４号
⑤ 集石５号　⑥ 集石６号　⑦ 集石７号　⑧ 集石８号

図版３　縄文時代早期の集石

















① 集石９号　② 集石10号　③ 集石11号　④ 集石12号
⑤ 集石13号　⑥ 集石14号　⑦ 集石15号　⑧ 集石16号

図版4　縄文時代早期の集石

















① 集石17号　② 集石18号　③ 集石19号　④ 集石19号 掘り込み
⑤ 集石20号　⑥ 集石22号　⑦ 集石23号　⑧ 集石24号

図版5　縄文時代早期の集石

















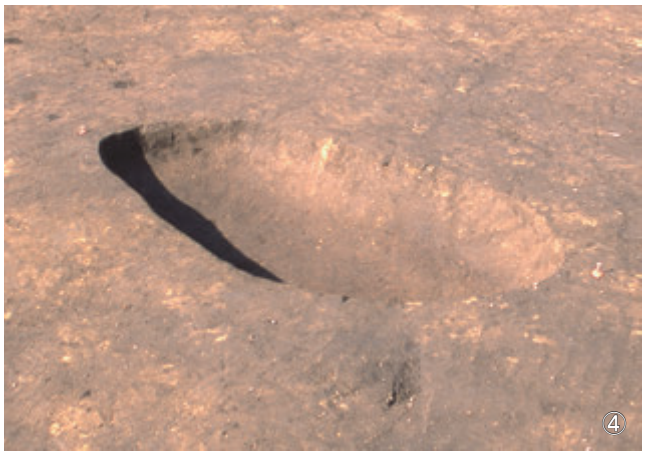
① 集石25号　② 集石26号　③ 集石27･28号　④ 集石29号
⑤ 集石29号掘り込み　⑥ 集石30号　⑦ 集石31･32号　⑧ 集石33号

図版６　縄文時代早期の土坑・落とし穴

















① 土坑１号　② 土坑２号　③ 土坑３号　④ 土坑５号　⑤ 土坑６号
⑥ 土坑７号　⑦ 落とし穴　⑧ 落とし穴半裁

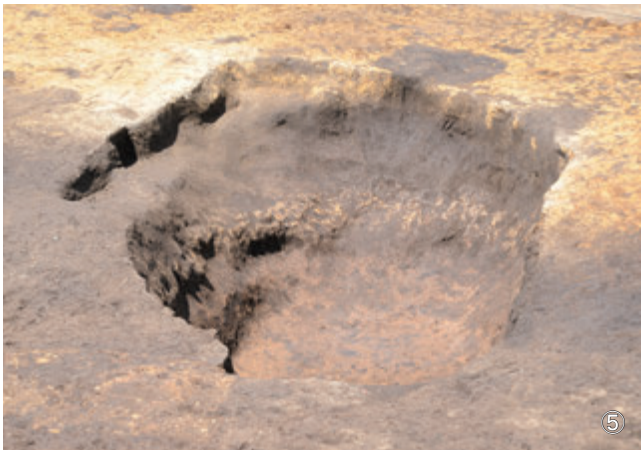
図版7　中世の大型土坑1号











① 遺物等出土状況　② 検出状況　③ 埋土断面
④ 石塔出土状況　⑤ 完掘状況

図版８　中世の大型土坑２号・土坑・硬化面

















① 大型土坑２号検出状況　②･③ 大型土坑２号埋土断面　④ 大型土坑２号
⑤ 土坑８号　⑥ 土坑９号半裁　⑦ 土坑９号　⑧ 硬化面検出状況

















① １号検出状況　② １号　③ ２号埋土断面　④ ２号
⑤ ３号検出状況　⑥ ３号　⑦ ４号検出状況　⑧ ４号

図版10　近世の土坑・溝状遺構















① 土坑10号　② 土坑12号　③ 土坑13号　④ 溝状遺構５号検出状況
⑤ 溝状遺構５号　⑥ 溝状遺構６号埋土Ｂ断面　⑦ 溝状遺構６号

図版11　近世の石塔・土坑・杭列











① 石塔・石碑（正面から）　② 石塔の台座
③ 土坑11号検出状況　④ 土坑11号　⑤ 杭列

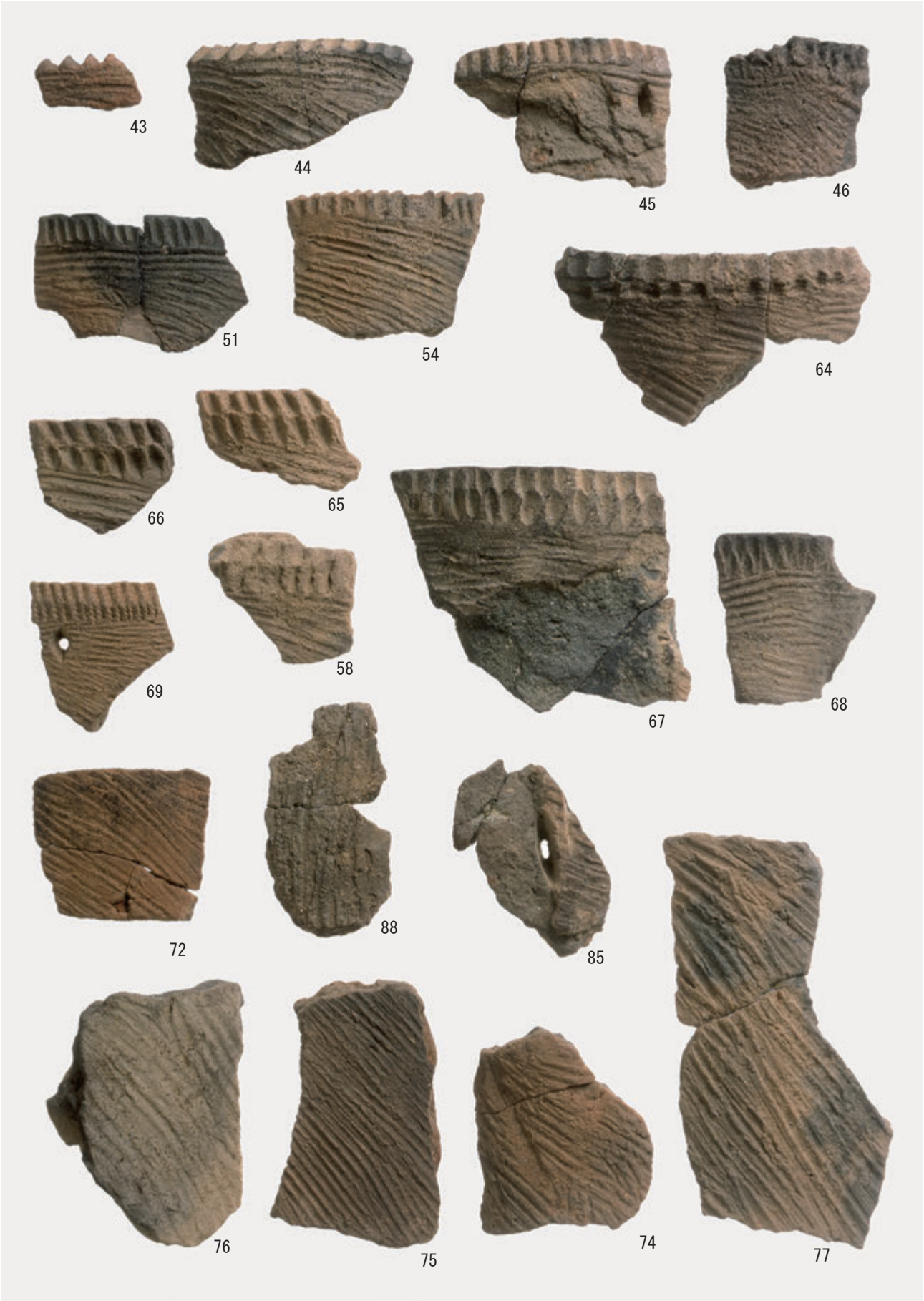
図版12　縄文時代早期の出土土器（1）










43
44
45
46
51
54
64
66
65
58
69
67
68
72
88
85
76
75
74
77

図版14　縄文時代早期の出土土器（3）



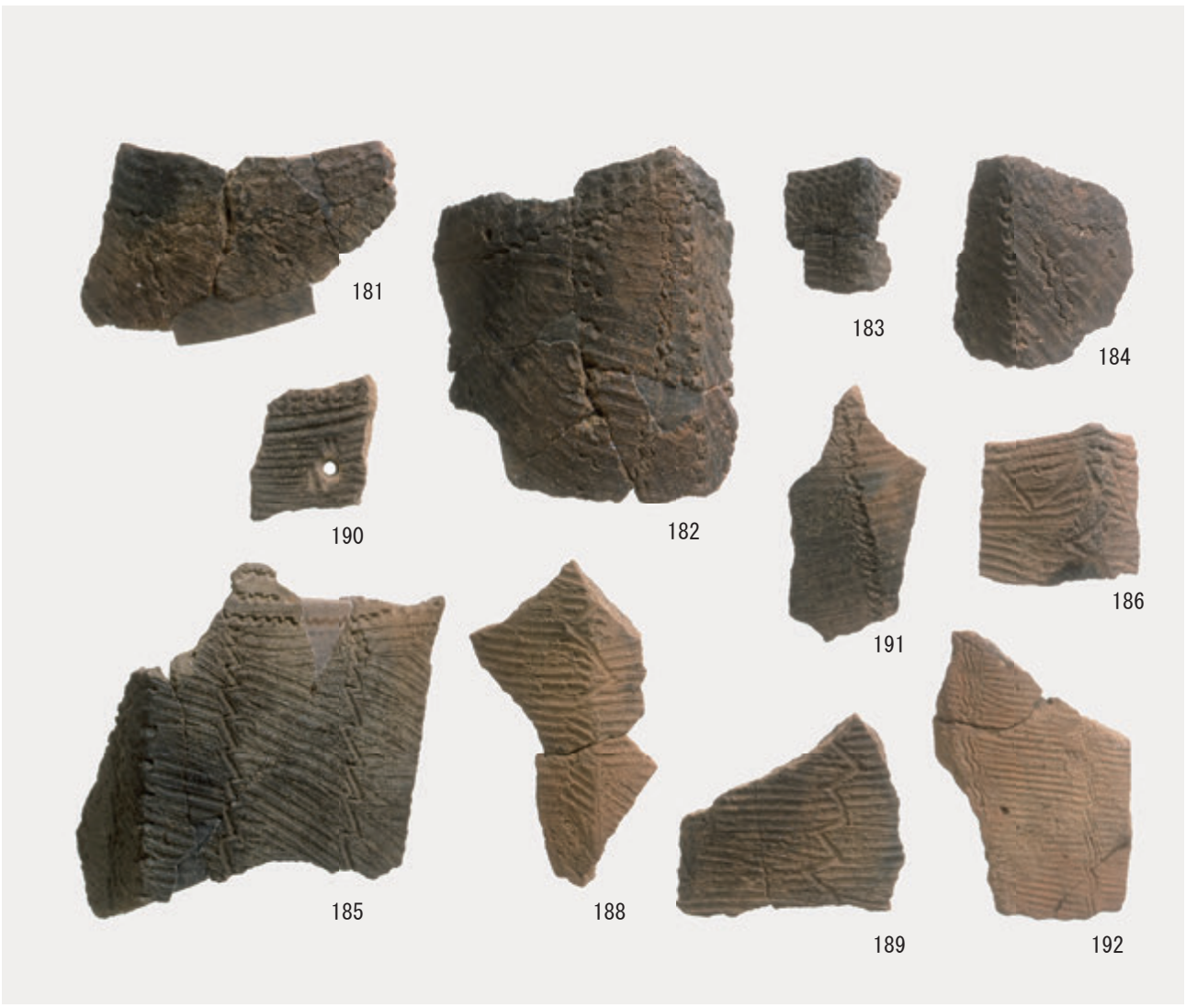

112
111
115
116
117
125
130
131
132
134
137
139
145
152
149
151
159
160

図版16　縄文時代早期の出土土器（5）




175


177


181
182
183
184
190
186
191
185
188
189
192

図版18　縄文時代早期の出土土器（7）



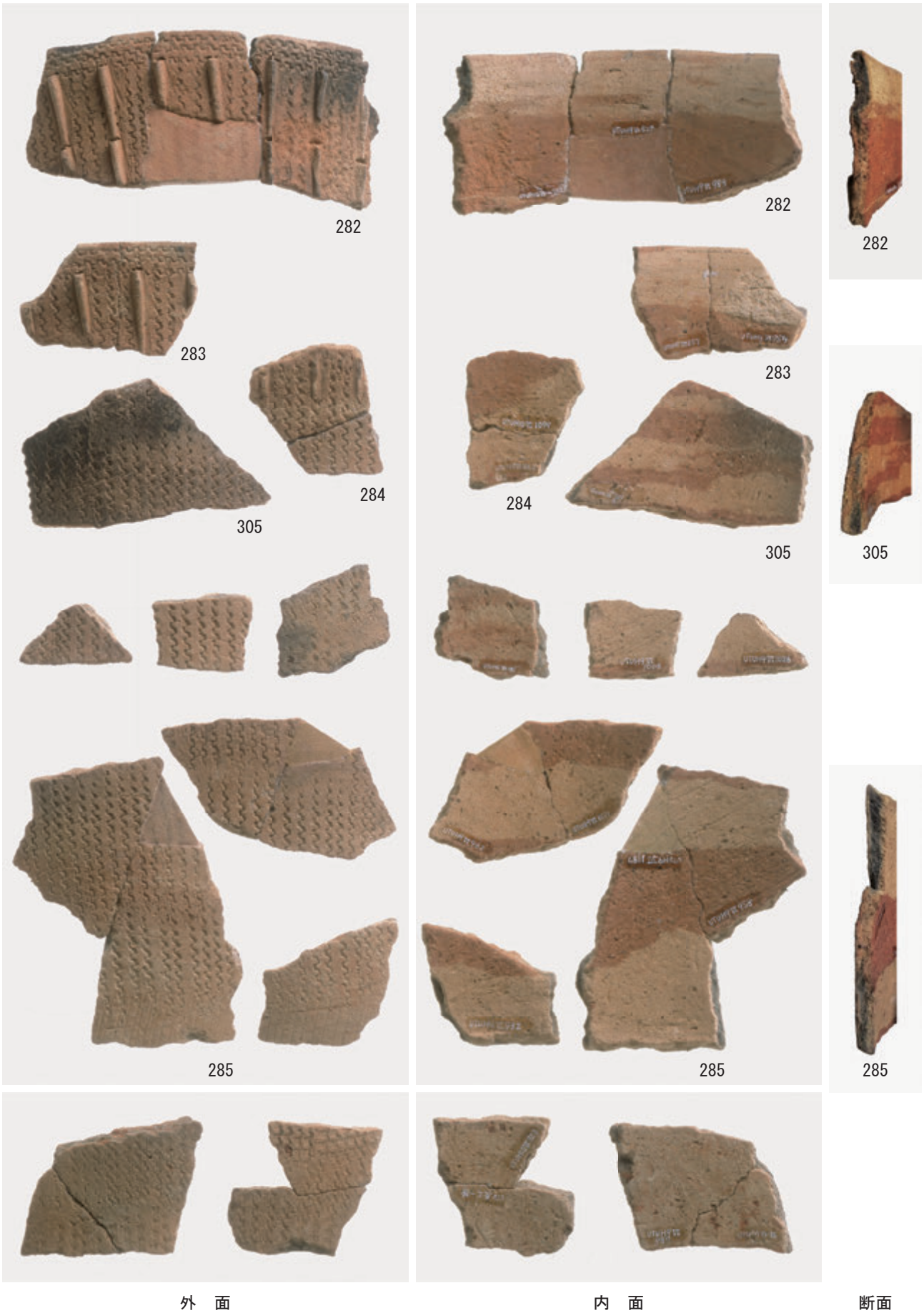

237
236
225
220
249
230
222
252
251
243
263
261
274
273
264
270
275

図版20　縄文時代早期の出土土器（9）




317
319
318
314
320
329
322
323
330
335
338
345
334
357
353
356
359
349
372
374
363
365
371
376

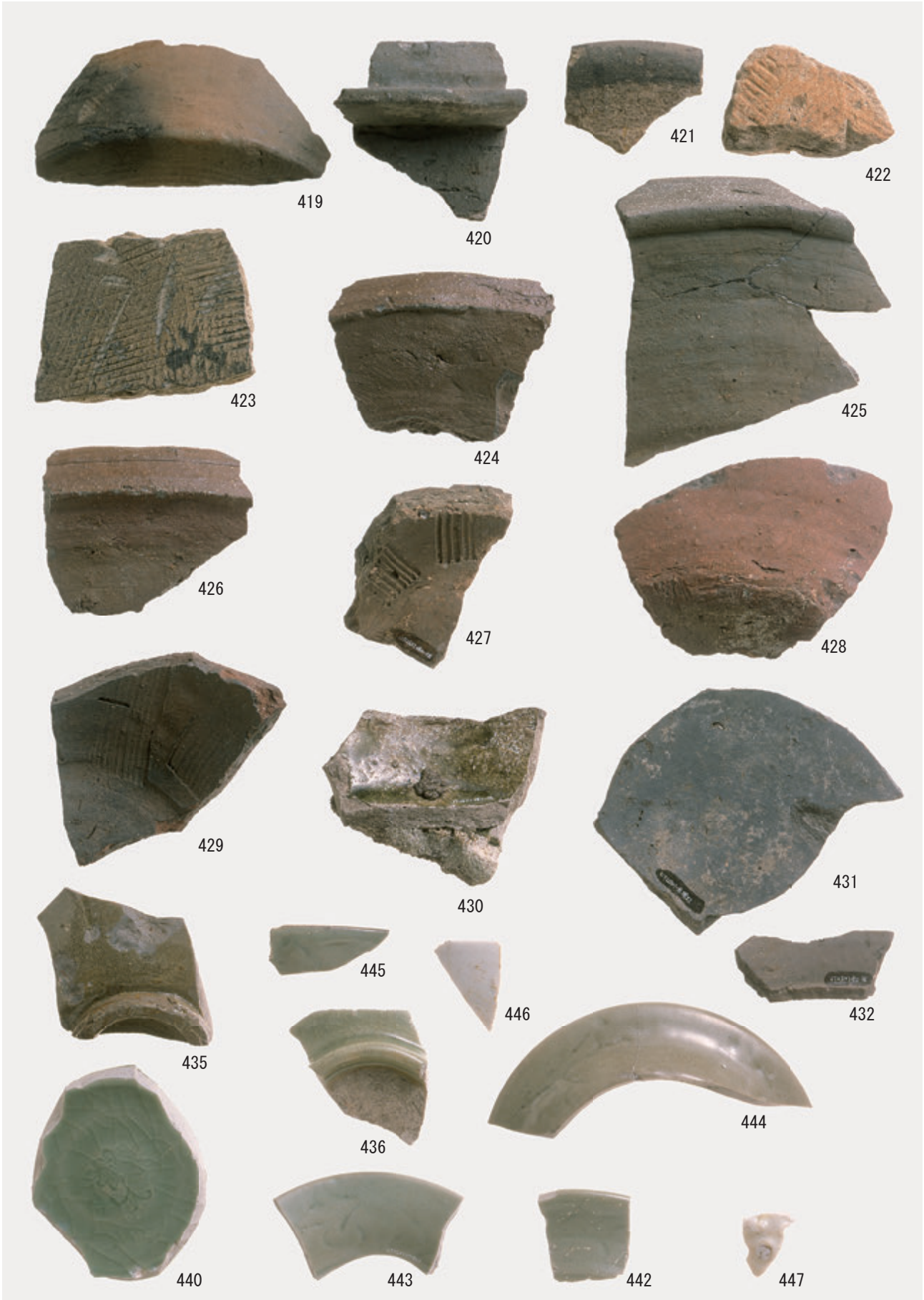
図版22　縄文時代早期の出土土器（11）




42
377
378
279
380
386
381
382
383
384
385


387
388
389
390
391
392
394
393
395
398
400
399

図版24　中世の出土遺物（1）

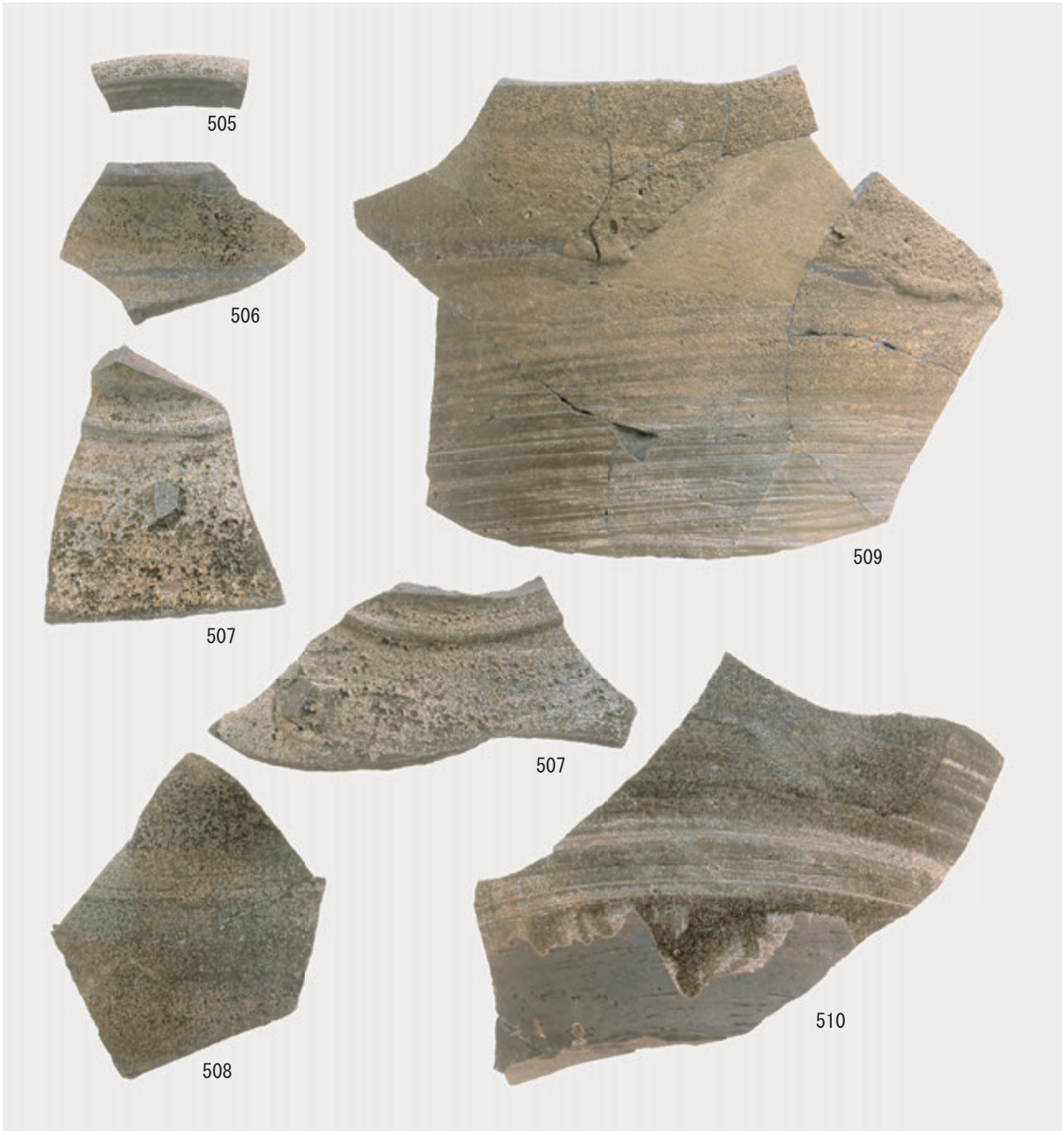



441
439
438


491
485
484


471
472
474
473
475
476
477
478
482
488
478
479
486
487
489
483
493
494
495


498
500
501
532


505
506
509
507
507
508
510


502
504
499
512
518
517
523
533
514
519
521
511
515
513
531
526
530
503
529
527
528

図版28　中世の出土遺物（5）


448　449


450


451


452


453


454


455


456


457


458


459


462


463


464


465


468

図版30　石塔周辺の出土遺物（1）




589
587
588
590
592
593
594
604
600
595
595
598
601
602

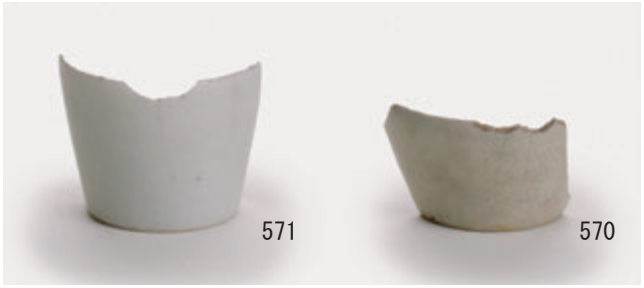
図版32　石塔周辺の出土遺物（3）

















序　文

この報告書は，主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）改築事業に伴って，平成30年度に実施した志布志市志布志町に所在する宇都上遺跡の発掘調査の記録です。

宇都上遺跡は，志布志湾から北に約５㎞の内陸部に位置し，安楽川の浸食を受けた台地と河川部の中間に所在します。

縄文時代においては早期前半を中心に，前平式土器などの土器や石器とともに集石遺構33基・土坑７基・落とし穴１基が発見されており，同時期の多数の集石遺構や連穴土坑が検出された，近接する高吉Ｂ遺跡との関連が想定されます。また，青磁・白磁等の陶磁器類や五輪塔などの石塔類が入った中世の土坑が検出され，古くから知られる港町としての「志布志」の歴史を考える上で，重要な資料を提供してくれました。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査にあたり御協力をいただいた，県土木部道路建設課，志布志市教育委員会，関係各機関及び発掘調査・整理作業に従事された方々に厚くお礼を申し上げます。

令和２年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　　長　　前迫　亮一

報　告　書　抄　録

ふりがな	うとうえいせき
書名	宇都上遺跡
副書名	主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	204
編集者名	藤島伸一郎・株式会社パスコ（池畑耕一・関口昌和・関口真由美）
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　℡ 0995-48－5811
発行年月	2020年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
うとうえいせき 宇都上遺跡	かごしまけん 鹿児島県 しぶしし 志布志市 しぶしちょう 志布志町 あんらく 安楽 あざうとうえ 字宇都上・ たかよし 高吉	46221	292	31° 50’ 46”	131° 08’ 60”	2018.06.04～ 2018.11.28	4,998㎡	主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）改築事業に伴う記録保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宇都上遺跡	散布地	旧石器時代		加工痕のある剥片	
		縄文時代 早期	集石遺構33基 土坑７基 落とし穴１基	前平式土器，志風頭式土器， 加栗山式土器，小牧３Ａ式土器， 札ノ元Ⅶ類土器，石坂式土器， 別府原式土器，下剥峯式土器， 桑ノ丸式土器，押型文土器， 手向山式土器，塞ノ神Ａａ式土器， 塞ノ神Ａｂ式土器，円盤形土製品， 磨製石鏃，打製石鏃，削器，磨製石斧，磨石，石核，剥片	
		弥生時代 前期・中期		高橋式土器，入来式土器	
		古墳時代		辻堂原式土器	
		中世	大型土坑２基 土坑２基 溝状遺構４条 硬化面１条	土師器，土師質土器， 東播系須恵器，備前焼，常滑焼， 瀬戸焼，青磁，白磁，中国産陶器， タイ産陶器，染付，砥石，軽石製品， 石塔，石臼，鉄製品	
		近世	土坑４基 石塔１基・石碑１基 溝状遺構２条	薩摩焼，肥前系陶磁器，煙管， 石硯	
		時代不明	杭列２列		

要約

宇都上遺跡は縄文時代早期と中世を主体とする遺跡である。

縄文時代早期は多種の土器とともに33基の集石などが検出されている。主となるのは前平式土器・加栗山式土器・小牧３Ａ式土器など前葉の土器で，谷を挟んだ両側平坦地に各型式の土器が集中して出土している。集石の集中域と重なり活動域の変動がわかる貴重な資料である。

中世は陶磁器や石塔が入った２基の大型土坑が検出された。遺物は一括性がうかがわれ，石塔の廃棄理由など，その性格が注目される。



第１図　遺跡位置図（１:50,000）

例　言

1　本書は，主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）改築事業に伴う宇都上遺跡発掘調査報告書である。

2　本遺跡は，鹿児島県志布志市志布志町安楽字宇都上・高吉に所在する。

3　発掘調査は，鹿児島県土木部道路建設課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」）が担当した。

4　発掘調査は，平成 30 年度に埋文センターが実施した。

5　整理作業・報告書作成作業は，令和元年度に埋文センターが実施した。

6　平成 30 年度は，発掘調査業務を新和技術コンサルタント株式会社へ委託し，埋文センターの指揮・監督のもとに調査を行った。また，空中写真撮影は株式会社ふじたに再委託した。

7　令和元年度は，整理作業及び報告書作成作業・自然科学分析・印刷製本を株式会社パスコへ委託し，埋文センターの指揮・監督のもとに実施した。

8　遺構図・遺物分布図の作成及びトレース，出土遺物の実測・拓本・トレースは株式会社パスコが行った。なお，報告書の作成には Adobe 社製「InDesignCC」，「IllustratorCC」，「PhotoshopCC」を使用した。

9　出土遺物の写真撮影は，埋文センターの写場にて，西園勝彦が行った。

11　金属製品の保存処理は，埋文センターが実施した。

12　本報告に係る自然科学分析は，放射性炭素年代測定をパリノサーヴェイ株式会社・株式会社パレオ・ラボへ委託した。

13　使用した土色は『新版　標準土色帳』（2013 農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。

14　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高度である。

15　本書で使用した方位は，すべて座標北（Ｇ．Ｎ.）であり，測量座標は国土座標系第Ⅱ系を基準としている。

16　遺構種別ごとに略記号を付して調査を行った。遺構の略記号を次に示す。

ＳＳ：集石　ＳＫ：土坑　ＳＤ：溝状遺構

ＳＡ：杭列

17　執筆担当は以下のとおりである。

第１章，第２章第３節，第３章，第４章第２・５・６・７節　遺構，第６章　藤島伸一郎

第２章第１・２節，第４章第２～４節　土器

池畑耕一・関口真由美

第４章第１・２節　石器　関口昌和

第５章は委託業者の納品原稿をもとに藤島が編集した。

18　遺構の縮尺は次を基本とした。

集石 1/20，土坑 1/20，落とし穴 1/20

大型土坑 1/60，溝状遺構・硬化面 1/100

杭列 1/40，石塔・石碑 1/40

19　掲載遺物の縮尺は次を基本とした。

土器・土製品 1/3，石器・石製品 1/1 ～ 1/3

石塔・石臼 1/8，鉄製品 1/3，キセル 1/2

各図中にスケールを示してある。

20　掲載土器の拓本を表裏とも貼付の場合，表面が左，裏面が右に配置してある。

21　掲載遺物番号はすべて通し番号であり，本文，挿図，表及び図版の番号は一致する。

22　観察表中の胎土は次のとおりである。

白石・茶石・黄白石・灰石：その色を呈する小礫

黒石：黒色を呈する小礫もしくは黒色の鉱物

長石：主に白色の角張ったもの

雲母：主に金色を呈する薄い板状のもの

石英：透明度が高くガラス質の光沢をもつ

火山ガラスも一部含まれる

23　本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は埋文センターで保管し，展示・活用を図る予定である。なお，遺物注記等で用いた遺跡記号は「ＵＴＵ」である。

本 文 目 次

巻頭図版（カラー）
序文
報告書抄録
例言
目次
第１章　発掘調査の経過・・・

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡位置図
第 2 図 試掘調査トレンチ配置図及び調査区・・・・ 1
第 3 図 周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第 4 図 都城志布志道路建設に伴う
県内の遺跡・・・・・・・・ 12
第 5 図 グリッド配置及び調査範囲図・・・・・・・・ 14
第 6 図 基本土層柱状図・・・・・・・・・・・・・・ 15
第 7 図 土層断面図（1）・・・・・・・・・・・・・ 16
第 8 図 土層断面図（2）・・・・・・・・・・・・・ 17
第 9 図 土層断面図（3）・・・・・・・・・・・・・ 18
第 10 図 旧石器時代の試掘坑配置と
石器分布図・・・・・・・・ 19
第 11 図 旧石器時代の石器・・・・・・・・・・・・ 19
第 12 図 縄文時代早期の遺構配置図 ・・・・・・・・ 20
第 13 図 集石 1 号と出土遺物・・・・・・・・・・・ 21
第 14 図 集石 2 号と出土遺物 ・・・・・・・・・・・ 22
第 15 図 集石 3 号～ 5 号と出土遺物・・・・・・・・ 23
第 16 図 集石 6 号～ 8 号と出土遺物・・・・・・・・ 24
第 17 図 集石 9 号・10 号と出土遺物 ・・・・・・・・ 25
第 18 図 集石 11 号～ 13 号と出土遺物・・・・・・・・ 26
第 19 図 集石 14 号と出土遺物 ・・・・・・・・・・・ 27
第 20 図 集石 15 号・16 号と出土遺物 ・・・・・・・・ 28
第 21 図 集石 17 号と出土遺物 ・・・・・・・・・・・ 29
第 22 図 集石 18 号と出土遺物 ・・・・・・・・・・・ 30
第 23 図 集石 19 号～ 21 号・・・・・・・・・・・・ 31
第 24 図 集石 22 号 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
第 25 図 集石 23 号と出土遺物 ・・・・・・・・・・・ 33
第 26 図 集石 24 号と出土遺物 ・・・・・・・・・・・ 34
第 27 図 集石 25 号と出土遺物 ・・・・・・・・・・・ 35
第 28 図 集石 26 号・27 号 ・・・・・・・・・・・・・ 36
第 29 図 集石 28 号 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
第 30 図 集石 29 号・30 号 ・・・・・・・・・・・・・ 38
第 31 図 集石 31 号と出土遺物 ・・・・・・・・・・・ 39
第 32 図 集石 32 号と出土遺物 ・・・・・・・・・・・ 40
第 33 図 集石 33 号と出土遺物 ・・・・・・・・・・・ 41
第 34 図 土坑 1 号～ 4 号・・・・・・・・・・・・・・ 42
第 35 図 土坑 5 号～ 7 号・・・・・・・・・・・・・・ 43
第 36 図 落とし穴と出土遺物・・・・・・・・・・・・ 44
第 37 図 縄文時代早期の土器分布図・・・・・・・・・ 45
第 38 図 縄文時代早期の土器（1）・・・・・・・・・ 46
第 39 図 縄文時代早期の土器（2）・・・・・・・・・ 47
第 40 図 縄文時代早期の土器（3）・・・・・・・・・ 48
第 41 図 縄文時代早期の土器（4）・・・・・・・・・ 49
第 42 図 縄文時代早期の土器（5）・・・・・・・・・ 50
第 43 図 縄文時代早期の土器（6）・・・・・・・・・ 51
第 44 図 縄文時代早期の土器（7）・・・・・・・・・ 52
第 45 図 縄文時代早期の土器（8）・・・・・・・・・ 53
第 46 図 縄文時代早期の土器（9）・・・・・・・・・ 54
第 47 図 縄文時代早期の土器（10）・・・・・・・・・ 55
第 48 図 縄文時代早期の土器（11）・・・・・・・・・ 56
第 49 図 縄文時代早期の土器（12）・・・・・・・・・ 57
第 50 図 縄文時代早期の土器（13）・・・・・・・・・ 58
第 51 図 縄文時代早期の土器（14）・・・・・・・・・ 59
第 52 図 縄文時代早期の土器（15）・・・・・・・・・ 60
第 53 図 縄文時代早期の土器（16）・・・・・・・・・ 61
第 54 図 縄文時代早期の土器（17）・・・・・・・・・ 62
第 55 図 縄文時代早期の土器（18）・・・・・・・・・ 63
第 56 図 縄文時代早期の土器（19）・・・・・・・・・ 64
第 57 図 縄文時代早期の土器（20）・・・・・・・・・ 65
第 58 図 縄文時代早期の土器（21）・・・・・・・・・ 66
第 59 図 縄文時代早期の土器（22）・・・・・・・・・ 67
第 60 図 縄文時代早期の石器分布図・・・・・・・・・ 68

第 61 図 縄文時代早期の石器（１）・・・・・・・・・ 69
第 62 図 縄文時代早期の石器（２）・・・・・・・・・ 70
第 63 図 縄文時代早期の石器（３）・・・・・・・・・ 71
第 64 図 縄文時代早期の石器（４）・・・・・・・・・ 72
第 65 図 弥生時代の土器・・・・・・・・・・・・・・ 82
第 66 図 古墳時代の土器・・・・・・・・・・・・・・ 82
第 67 図 中世の遺構配置図・・・・・・・・・・・・・ 83
第 68 図 大型土坑１号・・・・・・・・・・・・・・・ 84
第 69 図 大型土坑２号・・・・・・・・・・・・・・・ 85
第 70 図 大型土坑１号の出土遺物（１）・・・・・・・ 86
第 71 図 大型土坑１号の出土遺物（２）・・・・・・・ 87
第 72 図 大型土坑１号の出土遺物（３）・・・・・・・ 88
第 73 図 大型土坑１号の出土遺物（４）・・・・・・・ 89
第 74 図 大型土坑２号の出土遺物・・・・・・・・・・ 90
第 75 図 大型土坑１号・２号の出土遺物（１）・・・ 91
第 76 図 大型土坑１号・２号の出土遺物（２）・・・ 92
第 77 図 大型土坑１号・２号の出土遺物（３）・・・ 93
第 78 図 土坑８号・９号・・・・・・・・・・・・・・ 94
第 79 図 溝状遺構１号・２号・・・・・・・・・・・・ 95
第 80 図 溝状遺構３号・４号と
溝状遺構の出土遺物・・・ 96
第 81 図 硬化面と出土遺物・・・・・・・・・・・・・ 97
第 82 図 中世の出土遺物・・・・・・・・・・・・・・ 97
第 83 図 近世と時期不明の遺構配置図・・・・・・ 101
第 84 図 溝状遺構５号・６号と出土遺物・・・・・ 102
第 85 図 土坑 10 号～ 13 号と出土遺物・・・・・・ 103
第 86 図 石塔と土坑 11 号 ・・・・・・・・・・・・ 104
第 87 図 石塔周辺の出土遺物（１）・・・・・・・・ 105
第 88 図 石塔周辺の出土遺物（２）・・・・・・・・ 106
第 89 図 石塔周辺の出土遺物（３）・・・・・・・・ 107
第 90 図 石塔周辺の出土遺物（４）・・・・・・・・ 108
第 91 図 石塔周辺の出土遺物（５）・・・・・・・・ 109
第 92 図 杭列１号・２号・・・・・・・・・・・・・・ 112
第 93 図 暦年較正結果・・・・・・・・・・・・・・・ 113
第 94 図 暦年較正結果・・・・・・・・・・・・・・・ 115
第 95 図 成分分析結果・・・・・・・・・・・・・・・ 116
第 96 図 縄文時代早期集石・遺物分布図・・・・・ 117
第 97 図 宮崎市山内石塔群の例・・・・・・・・・・ 119
第 98 図 鶴喰遺跡 22 号土坑 ・・・・・・・・・・・ 120

表 目 次

第 １ 表 周辺の遺跡一覧表 ・・・・・・・・・・・・ ８
第 ２ 表 都城志布志道路に係る
鹿児島県内の遺跡・・・・ 10
第 ３ 表 旧石器時代石器観察表 ・・・・・・・・・・ 19
第 ４ 表 遺構番号振替表 ・・・・・・・・・・・・・ 44
第 ５ 表 縄文時代早期集石出土土器観察表 ・・・・ 73
第 ６ 表 縄文時代早期落とし穴出土石器観察表 ・・ 73
第 ７ 表 縄文時代早期土器観察表 ・・・・・・・・・ 74
第 ８ 表 縄文時代早期石器観察表 ・・・・・・・・・ 81
第 ９ 表 弥生時代土器観察表 ・・・・・・・・・・・ 81
第 10 表 古墳時代土器観察表 ・・・・・・・・・・・ 81
第 11 表 中世遺構出土土師器・須恵器・
陶器等観察表・・ 98
第 12 表 中世遺構出土青磁・白磁等観察表 ・・・・ 99
第 13 表 中世遺構出土石製品観察表 ・・・・・・ 100
第 14 表 中世遺構出土金属製品観察表 ・・・・・ 100
第 15 表 中世土師器・須恵器・陶器観察表 ・・・ 100
第 16 表 中世青磁・白磁観察表 ・・・・・・・・・ 100
第 17 表 近世石塔周辺出土陶磁器観察表 ・・・・ 110
第 18 表 近世石塔周辺出土石製品観察表 ・・・・ 111

第 19 表　近世石塔周辺出土金属製品観察表　・・・　111
第 20 表　放射性炭素年代測定結果　・・・・・・・・　113
第 21 表　測定試料および処理　・・・・・・・・・・　115
第 22 表　放射性炭素年代測定および
暦年較正の結果・・・・　116
第 23 表　ＦＰＭ定量結果　・・・・・・・・・・・・　116
第 24 表　炭化物年代測定結果と
遺構内土器型式・・・・　118
第 25 表　周辺遺跡の遺構と土器型式　・・・・・・　118

図 版 目 次

巻頭図版１　遺跡遠景
巻頭図版２　縄文時代早期の出土遺物
巻頭図版３　中世の出土遺物
本文中写真１　Ｉ－15 区 10 Ｔ北壁土層断面・・・・15
本文中写真２　旧石器時代の石器・・・・・・・・・19
図版１　遺跡遠景　旧石器時代・縄文時代早期の調査
図版２　縄文時代早期の集石
図版３　縄文時代早期の集石
図版４　縄文時代早期の集石
図版５　縄文時代早期の集石
図版６　縄文時代早期の土坑・落とし穴
図版７　中世の大型土坑１号
図版８　中世の大型土坑２号・土坑・硬化面
図版９　中世の溝状遺構
図版 10　近世の土坑・溝状遺構・杭列
図版 11　近世の石塔・土坑
図版 12　縄文時代早期の出土土器（１）
図版 13　縄文時代早期の出土土器（２）
図版 14　縄文時代早期の出土土器（３）
図版 15　縄文時代早期の出土土器（４）
図版 16　縄文時代早期の出土土器（５）
図版 17　縄文時代早期の出土土器（６）
図版 18　縄文時代早期の出土土器（７）
図版 19　縄文時代早期の出土土器（８）
図版 20　縄文時代早期の出土土器（９）
図版 21　縄文時代早期の出土土器（10）
図版 22　縄文時代早期の出土土器（11）
図版 23　縄文時代早期の出土石器
図版 24　中世の出土遺物（１）
図版 25　中世の出土遺物（２）
図版 26　中世の出土遺物（３）
図版 27　中世の出土遺物（４）
図版 28　中世の出土遺物（５）
図版 29　中世の出土遺物（６）
図版 30　石塔周辺の出土遺物（１）
図版 31　石塔周辺の出土遺物（２）
図版 32　石塔周辺の出土遺物（３）

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し，諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき，鹿児島県土木部道路建設課（以下，道路建設課）は，主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）改築事業に先立って，事業対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下，県文化財課）に照会した。

この計画に伴い県文化財課は，平成 18 年度に志布志市内の埋蔵文化財分布調査を実施し，事業区域内に船迫遺跡・高吉Ｂ遺跡・宇都上遺跡・稲荷迫遺跡・後迫（下原）遺跡・見帰遺跡等が所在することが判明した。そこで道路建設課・県文化財課・埋文センターの３者で協議した結果，対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために，当該地域において試掘調査を実施することとした。

第２節　試掘調査

１　調査の概要

宇都上遺跡の試掘調査は，県文化財課が埋文センターの協力を得て，平成 23 年度に３か所（第２図１～３Ｔ），平成 28 年度に３か所（第２図４～６Ｔ），平成 29 年度に９か所（第２図７～ 15 Ｔ），計 15 か所にトレンチを設定し実施した。その結果，弥生時代から縄文時代早期の遺物包含層を確認した。これらの試掘調査等の結果をふまえ，遺跡全体の表面積を 6,500 ㎡，延面積を縄文時代早期 6,500 ㎡，弥生時代 2,000 ㎡，計 8,500 ㎡と設定した。各年度の調査体制は，以下のとおりである。

２　調査体制

（１）平成 23 年度

調査日　平成 23 年 7 月 20 ～ 21 日
調査者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　第一調査係長　　東　和幸
　　文化財主事　　上床　真
　　鹿児島県教育庁文化財課
　　文化財主事　　川口　雅之
調査協力者　志布志市教育委員会生涯学習課
　　主　　査　　出口順一郎
　　主　　査　　相美伊久雄

（２）平成 28 年度

調査日　平成 29 年 3 月 17 日
調査者　鹿児島県教育庁文化財課
　　文化財主事　　森　幸一郎
調査協力者　志布志市教育委員会生涯学習課
　　主　　査　　相美伊久雄

（３）平成 29 年度

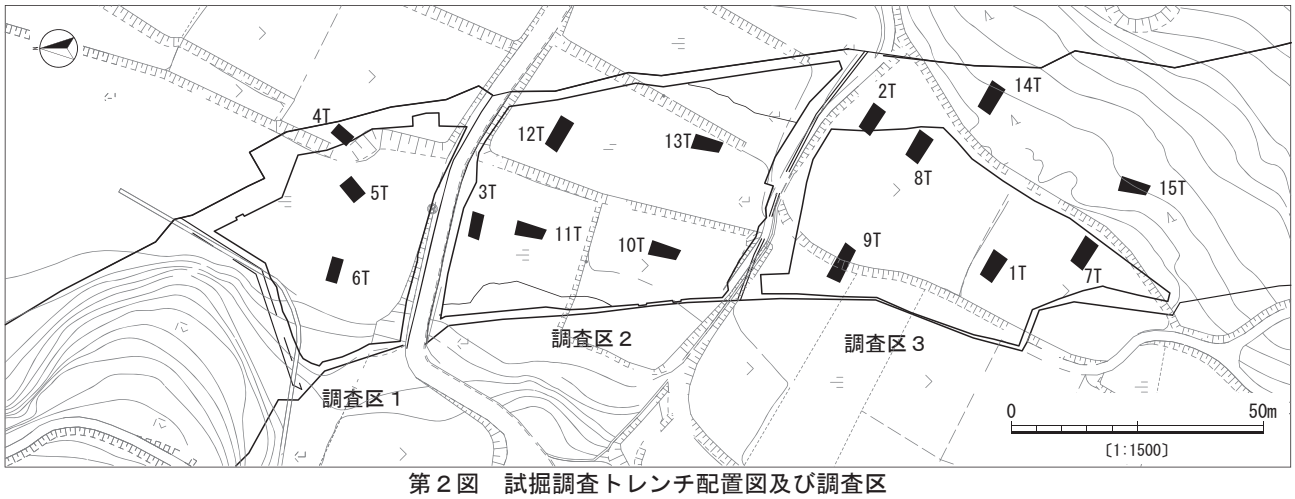
調査日　平成 29 年 10 月 19 日
調査者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　文化財主事　　今村　結記
　　鹿児島県教育庁文化財課
　　文化財主事　　森　幸一郎

第３節　本調査

１　調査の概要

試掘調査の結果をふまえ，遺跡の取り扱いについて県道路建設課，県文化財課，埋文センターの３者で協議し，遺跡の現地保存が困難であることから，本調査を実施することとなった。本調査は「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要綱」に基づき，新和技術コンサルタント株式会社へ発掘調査の業務委託を行い実施した。

調査期間は平成 30 年６月４日から平成 30 年 11 月 28 日までの６か月間で，調査体制は以下のとおりである。



第２図　試掘調査トレンチ配置図及び調査区

2　調査体制

事業主体　鹿児島県土木部道路建設課
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　所長　堂込　秀人
調査企画　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　次長兼調査課長　大久保浩二
　総務課長　髙田　浩
　第一調査係長　中村　和美
調査担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　文化財主事　永濵　功治（６～11月）
　文化財主事　藤島伸一郎（11月）
事務担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　総務係長　草水美穂子
現地指導　南九州縄文研究会会長　新東　晃一
　鹿児島県考古学会会長　本田　道輝
　鹿児島大学名誉教授　大木　公彦

3　発掘調査の民間委託

発掘調査の実施にあたり，埋文センターは「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要綱」に基づき，新和技術コンサルタント株式会社へ見帰遺跡とともに発掘調査業務委託を行った。なお，埋文センターの文化財主事１名が監督職員として常駐し，調査方法及び業務内容に係わる統括・指揮・調整を行った。委託内容等は以下のとおりである。

委託先　新和技術コンサルタント株式会社
委託名　宇都上遺跡・見帰遺跡の発掘調査業務委託
委託期間　平成30年５月21日～平成31年３月20日
　（見帰遺跡の調査期間（12～１月）を含む）
調査期間　平成30年６月４日～平成30年11月28日
委託内容　発掘調査業務　１式
　測量業務　１式
　土工業務　１式
担当者　主任技術者　井之上公裕
　主任調査員　新福　深
　調査員　賦句　博隆
　調査員　新納　弘恵
　技術者　鎌田　公平
　技術者　上川路直光

検査　中間検査　平成30年10月22日
　一部完成検査　平成30年12月７日
　完成検査　平成31年３月８日
　（完成検査は見帰遺跡含む）

第４節　調査の経過

1　発掘調査

発掘調査の経過については，調査区を１～３区（第５図参照）と分け，月ごとに集約し記載する。

６月
・発掘調査開始・オリエンテーション
・調査区１（Ｄ～Ｈ－３～７区）
　石塔調査，Ⅳ層上面遺構検出・調査・測量
・調査区２（Ｅ～Ｉ－７～14区）
　Ⅱ・Ⅲ層上面遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ

７月
・調査区１（Ｄ～Ｉ－３～８区）
　表土重機掘削，Ⅳ層上面遺構検出・調査・測量，Ⅳ層重機掘削，Ⅴ・Ⅵ層遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ，Ⅶ層上面遺構検出・調査・測量

８月
・調査区１（Ｄ～Ｉ－３～８区）
　Ⅳ層上面遺構検出・調査・測量，Ⅳ層重機掘削，Ⅴ・Ⅵ層遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ，Ⅶ層上面遺構検出・調査・測量，旧石器時代確認トレンチ平成30年度－１～４Ｔ設定，トレンチ内Ⅷ～Ｘ層調査・遺物取り上げ
・調査区２（Ｅ～Ｉ－７～13区）
　表土重機掘削，Ⅳ層上面遺構検出・調査・測量
・志布志市教育委員会相美伊久雄氏・志布志高等学校教職員遺跡見学

９月
・調査区１（Ｄ～Ｉ－３～８区）
　Ⅳ層重機掘削，Ⅴ・Ⅵ層遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ，Ⅶ層上面遺構検出・調査・測量
・調査区２（Ｅ～Ｉ－７～19区）
　表土重機掘削，Ⅳ層上面遺構検出・調査・測量，Ⅳ層重機掘削，Ⅴ・Ⅵ層遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ，Ⅶ層上面遺構検出・調査・測量，旧石器時代確認トレンチ（平成30年度－５・８・９Ｔ）設定，トレンチ内　Ⅷ～Ｘ層調査
・調査区３（Ｅ～Ｉ－14～22区）
　表土重機掘削，Ⅱ・Ⅲ層遺構検出・調査・測量，Ⅳ層上面遺構検出・調査・測量，Ⅳ層重機掘削，Ⅴ・Ⅵ層遺構検出・調査・測量，Ⅶ層上面遺構検出・調査・測量，旧石器時代確認トレンチ（平成30年度－６・７・10・11Ｔ）設定，トレンチ内Ⅷ～Ｘ層調査

10月
・調査区２（Ｅ～Ｉ－７～19区）
　表土重機掘削，Ⅳ層上面遺構検出・調査・測量，Ⅳ層重機掘削，Ⅴ・Ⅵ層遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ，Ⅶ層上面遺構検出・調査・測量
・中間検査

11 月
・調査区２（Ｅ～Ｉ－７～ 19 区）
Ⅳ層上面遺構検出・調査・測量，Ⅳ層重機掘削，Ⅴ・Ⅵ層遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ，Ⅶ層上面遺構検出・調査・測量
・航空写真撮影
・新東晃一南九州縄文研究会会長・本田道輝鹿児島県考古学会会長・大木公彦鹿児島大学名誉教授現地指導

２　整理作業

出土した遺物に関しては，現場内に整理作業所を設置し，６～ 11 月に遺物の洗浄・注記・一部接合を行った。

第５節　整理作業・報告書作成作業

１　作成体制

本報告書に伴う整理作業・報告書作成作業は，令和元年度に「鹿児島県埋蔵文化財整理作業及び報告書作成作業（民間委託）実施要綱」に基づき，株式会社パスコへ，見帰遺跡とともに整理作業及び報告書作成作業業務の委託を行った。整理作業・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおりである。

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	前迫　亮一
作成企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	次長兼総務課長	野間口　誠
	調査課長	中村　和美
	第二調査係長	三垣　恵一
作成担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	文化財主事	藤島伸一郎
事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	主幹兼総務係長	草水美穂子
作成指導	南九州縄文研究会会長	新東　晃一

２　委託内容

整理作業及び報告書作成作業業務の委託内容については，以下のとおりである。

委託先	株式会社パスコ鹿児島支店
委託名	宇都上遺跡・見帰遺跡の整理作業・報告書作成作業業務委託
委託期間	令和元年５月 13 日～令和２年３月 13 日（見帰遺跡の整理作業期間（11 ～２月）を含む）
作業期間	令和元年５月 27 日～令和元年 11 月 22 日
委託内容	整理作業業務　１式
	報告書作成作業業務　１式
	自然科学分析業務　１式（宇都上遺跡のみ）
	印刷・製本業務　１式（宇都上遺跡のみ）
担当者	主任調査員　池畑　耕一
	調査員　関口　昌和
	調査員　関口真由美
	調査員　鈴木　敏中

３　整理作業の経過

経過については，月ごとに集約して記載する。

５月
・遺物分類・図面整理，フローテーション
６月
・縄文土器・中世陶磁器・近世陶磁器分類・接合，弥生土器・古墳土師器・石塔・中世陶磁器実測・遺構図編集・トレース，土層断面図作成・トレース，年代測定委託，原稿執筆
７月
・縄文土器・近世陶器接合・復元，縄文土器・石塔・中世陶磁器・近世陶器実測・拓本，遺構図編集・トレース，原稿執筆，台帳作成
８月
・縄文土器実測・拓本・トレース，縄文土器・中世陶磁器接合・復元，遺構図編集，遺構・遺物レイアウト図作成，原稿執筆，台帳作成
９月
・縄文土器・土師器・中世陶磁器・近世陶磁器実測・拓本・トレース，中世陶磁器復元，縄文土器塗色，遺物レイアウト図作成，原稿執筆，台帳作成
・南九州縄文研究会会長新東晃一氏整理指導
10 月
・土器・陶磁器等トレース，遺構・遺物レイアウト図作成，原稿執筆，修正・観察表作成
・中間検査（16 日）
11 月
・遺物写真撮影，遺構・遺物レイアウト図作成，観察表・台帳作成，原稿執筆・修正，遺物収納
12 月
・報告書印刷・製本委託
２月
・報告書印刷，納入
３月
・完成検査

報告書作成指導委員会
６月 11 日，８月６日，10 月３日，11 月７日
調査課長ほか７名

報告書作成検討委員会
６月 14 日，８月 19 日，10 月９日，11 月 26 日
所長ほか５名

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理・地質的環境

宇都上遺跡は志布志市志布志町安楽に所在する。志布志市は，鹿児島県の東側にある大隅半島の南東部に位置する。北は曽於市，東から北東は宮崎県都城市･串間市，南は曽於郡大崎町，西は曽於市・大崎町と接し，南側は志布志湾に面している。志布志市は志布志・有明・松山の３町が合併して成立し,志布志町は東北部に位置する。

大隅半島の地形は，南北方向に走る山地，その間の丘陵，台地及び低地などで構成される。東側の山地は，志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へと延びる鰐塚山地である。西側の山地は北部の霧島火山の分脈から南部の高隈山地へと連なっている。

地質は大部分が高隈山周辺に分布している新世代古第三紀の日南層群を基盤とし，その上に鹿児島湾口にある阿多カルデラの火砕流，湾奥にある姶良カルデラの入戸火砕流などが堆積し，丘陵や台地が広く分布するシラス地形となっている。さらにその上は鬼界カルデラ・開聞岳・池田・霧島山系・桜島などの火山噴出物でおおわれている。

火砕流堆積物は,大小の河川で開析されて谷を形成し，河川は合流し，西側は鹿児島湾へ，東側は志布志湾に注いでいる。西側へ注ぐ河川は山地が海に迫っているため距離が短いが，東側へは長い川が多い。東側は北から安楽川・菱田川・持留川・肝属川などがある。下流には肝属平野などの平野が形成され，志布志湾岸には幅が１～1.5㎞の砂丘が約 16 ㎞に延びている。

志布志町は東側を鰐塚山地が囲み，そこから北・西と台地が延び，南側は志布志湾に面している。台地を河川が分断しているが，小河川は次第に合流し，北から前川･安楽川・菱田川となって志布志湾に注いでいる。志布志港は現在，関西との間に旅客フェリーが就航し，同時に東南アジアなどとの物流交易拠点港だが，古くは都城や大隅半島中央部など内陸部からの物産交流港だった。

宇都上遺跡は志布志湾から直線距離約 3.8 ㎞の安楽川左岸台地端部，標高約 60 ｍの河岸段丘に立地している。安楽川は北東側から流れてくるが，遺跡近くで北側から流れている高下谷川・尾野見川と合流し，深い峡谷となる。ここから，大きくＳ字状に蛇行しながら６㎞先の河口へ向かっている。遺跡のある大迫台地東端は急崖をなして低地へ落ち，低地と海の間は商店街になっている。現在の海岸線は埋め立てで沖へ延びているが，古くは台地が海岸線と接していた。台地は標高 70 ～ 80 ｍの平坦地形だが，安楽川に接する方は河岸段丘となっている。

台地中央を主要地方道志布志福山線が横切っており，かつて台地南西下の低地から高下川に沿って国鉄志布志線が走っていたが，昭和 62 年に廃線となっている。

第２節　歴史的環境

大隅半島北部の曽於市・志布志市は『縄文銀座』と呼ばれるほど縄文時代の遺跡が多い。それに反し，弥生時代以降になると遺跡数は減少する。これは山地や台地が広く，低地が少ないという地形が影響しているものと思われる。安楽川流域沿いには，稲荷迫遺跡･高吉Ｂ遺跡･中原（曲瀬）遺跡など多くの遺跡があり，本遺跡同様，旧石器時代～中世の遺構･遺物が確認されている。近年，都城・志布志道路や東九州自動車道路建設に先立つ調査で多くの遺構・遺物が発見されている。

旧石器時代

堆積が厚いこともあって，遺跡数は少ない。宇都上遺跡ではナイフ形石器文化期層で加工痕のある剥片が出土している。ナイフ形石器文化期では稲荷迫遺跡で剥片尖頭器が，高吉Ｂ遺跡では三稜尖頭器が出土し，それぞれ礫群１基が検出されている。見帰遺跡ではナイフ形石器･磨石・敲石が出土している。

細石刃文化期の石器は稲荷迫・中原（曲瀬）・見帰・次五遺跡などで出土している。次五遺跡では細石刃核を含むブロックが検出されているが，それぞれで石材の違いがみられる。次五遺跡・中原（曲瀬）遺跡の細石刃核は畦原タイプである。見帰遺跡では細石刃･磨石･敲石･台石が出土している。曲瀬遺跡のやや北にある下原遺跡でも礫群や細石刃核などが発見されている。

縄文時代

前川・安楽川沿いには連綿として縄文時代の遺跡が多く存在している。草創期の遺跡として，曲瀬遺跡では有舌尖頭器が採集され，安楽小牧Ｂ遺跡では隆帯文土器などが出土している。志布志町内ではほかにも隆帯文土器期の舟形石組遺構や炭化ドングリの入った貯蔵穴が検出された東黒土田遺跡や，集石炉の検出された鎌石橋遺跡などがある。

早期の遺跡は多く，宇都上遺跡周辺でも安楽川流域に宇都上遺跡のほかに下原・下原Ｂ・稲荷上・稲荷迫・柳・高吉Ｂ・蓑輪・小迫上・弓場ケ尾・島廻・曲瀬・大渡Ｂ・百堂穴・見帰など多くの遺跡がある。下原・稲荷迫・高吉Ｂ・弓場ケ尾遺跡などでは前半の集落跡が検出されている。下原遺跡では前平式・加栗山式・吉田式・石坂式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・苦浜式土器などとともに竪穴住居跡・集石遺構・土坑・埋設土器等が検出されている。ほかに磨製石鏃・打製石鏃・磨製石斧・打製石斧・磨石・敲石などの石器も出土している。稲荷迫遺跡では加栗山式・吉田式・石坂式土器などとともに集石遺構 64 基・連穴土坑３基・土坑２基などが検出されている。ほかに岩本式・倉園Ｂ式・手向山式・平栫式・塞ノ神Ａａ式などの土器と，打製石鏃・削器・石槍・磨製

石斧などの石器も出土している。高吉Ｂ遺跡では岩本式・前平式・石坂式土器とともに集石遺構 141 基・連穴土坑４基・土坑８基・土器埋設遺構１基などが検出されているが，連穴土坑の中から石坂式土器が出土しており，連穴土坑の下限を示すうえで重要である。見帰遺跡では石坂式・下剥峯式・押型文土器や，打製石鏃・磨石・敲石などの石器が出土した。弓場ケ尾遺跡では加栗山式・吉田式・石坂式土器などとともに竪穴状遺構２軒・集石遺構４基・土坑６基が検出され，打製石斧・石皿・磨石も出土している。稲荷上遺跡では塞ノ神Ａａ式・平栫式土器とともに集石遺構３基が検出されているが，耳栓状土製品・打製石斧も出土している。船迫遺跡では下剥峯式土器とともに打製石鏃・磨石・敲石などが出土している。炭床遺跡では塞ノ神Ａ式土器とともに集石遺構３基が検出されている。

前期から中期にかけては遺跡数が少なくなる。前期では，百堂穴や鳥居下・別府（石踊）・船磯遺跡などで轟式・曽畑式土器が出土している。中期も，高吉Ｂ・中原（曲瀬）・船磯・志布志城跡・高濱遺跡で深浦式土器などが出土している程度である。見帰遺跡では落とし穴と思われる土坑５基と打製石鏃が発見されている。

後期では，中原（曲瀬）遺跡で中期末から後期前半の阿高系土器・岩崎下層式・南福寺式・指宿式土器などが多く出土し，磨消縄文土器や，疑似縄文土器なども含まれている。特に瀬戸内の福田ＫⅡ式土器の完形品や中津式・彦崎ＫⅠ式・津雲Ａ式土器などの出土は文化の伝播・交流を考える上で貴重である。このほか松山式・市来式土器なども出土している。石器では打製石鏃や石槍・石匙などがみられないのに対し，石錘 465 点・土錘１点が出土しているのは，生業を考える上で興味深い。他に磨製石斧・打製石斧・敲石・磨石・石皿が出土している。円盤形土製品が 1081 点，円盤形石製品が 18 点出土しているのも用途が分からないが興味深い。勾玉・生殖器形・凹面形などの軽石製品も出土している。山角Ｂ遺跡では中岳Ⅱ式土器とともに集石遺構が検出され，西平式土器・打製石鏃も出土している。船迫遺跡では中岳Ⅱ式土器・打製石鏃・磨石・敲石・軽石製品などとともに落とし穴２基が検出されている。稲荷迫遺跡で土坑 11 基が検出され，市来式・丸尾式・北久根山式・中岳Ⅱ式土器などが出土している。宮脇遺跡では市来式土器，炭床遺跡では西平式土器・中岳式土器・打製石鏃，安良遺跡では中岳式土器が出土している。見帰遺跡では市来式・納曽式・辛川式・西平式・丸尾式・中岳Ⅱ式土器とともに磨石・敲石・石錘・円盤形土製品などが出土している。

晩期の遺跡も多いが，規模は小さい。稲荷上遺跡で上加世田式・入佐式・黒川式土器とともに土坑３基が発見されている。稲荷迫遺跡で上加世田式・入佐式・夜臼式土器などとともに打製石鏃・石槍・石匙・石錐・削器・掻器・楔形石器・穿孔具・砥石・磨製石斧・打製石斧・礫器・石皿・磨石・敲石・凹石・石錘など多種の石器が出土し，孔列文土器も多い。山角Ｂ・炭床遺跡では黒川式・刻目突帯文土器・打製石斧が出土し，山角Ｂ遺跡では磨製石斧・勾玉も出土している。小迫・飛渡遺跡では黒川式土器とともに孔列文土器が出土し，安良遺跡では入佐式・黒川式土器とともに磨製石斧・打製石斧・磨石が出土している。

弥生時代

安良・高吉Ｂ・柳遺跡などでは中期の竪穴建物跡が，船迫遺跡では中期の掘立柱建物跡が検出されている。

稲荷迫遺跡では入来Ⅰ・Ⅱ式土器期の土坑墓が２基検出され，前期の高橋式，中期の吉ケ崎式・山ノ口式土器などとともに，磨製石鏃・扁平片刃石斧などの石器や，前山Ⅱ式・須玖Ⅱ式土器など瀬戸内や北九州の影響を受けた土器も出土している。

高吉Ｂ遺跡では竪穴建物跡７軒，掘立柱建物跡５棟，土坑８基が検出されているが，竪穴建物跡群と，掘立柱建物跡群とは区域が分かれている。土坑の中には土器によって閉塞された横穴をもつものもある。土器の中には北九州・瀬戸内・東九州系のものも含まれている。土器のほかに丁子頭の土製勾玉・磨製石鏃・打製石鏃・磨石・敲石・石皿・砥石などの石器もある。

船迫遺跡では掘立柱建物跡４棟が検出され，山ノ口式土器，磨製石鏃・磨石・敲石などが出土している。稲荷上遺跡では入来式土器が，安良遺跡では山ノ口Ⅱ式土器が出土している。柳遺跡では長方形の焼失住居跡が検出され，山ノ口式土器や土製勾玉・軽石製品が出土している。出土状況がはっきりしないが，大正年間に土橋遺跡では中広形銅矛が採集されている。

古墳時代

志布志湾の北端から南に突き出たダグリ岬には墳長約 80 ｍで葺石のある前方後円墳，飯盛山古墳がある。墳丘の高さは，後円部が 11.5 ｍ，前方部が 4.5 ｍである。主体部は竪穴石室で，多くの円筒埴輪，壺形埴輪片が出土し，ガラス製勾玉・丸玉・小玉が採集されている。４世紀末から５世紀初頭に築かれている。

菱田川の河口近くにある小牧古墳群は，円墳４基で構成され，周辺から７世紀の須恵器が採集されている。六月坂横穴墓では横穴墓とともに７世紀代の土師器，須恵器などが出土し，安良遺跡では地下式横穴墓が検出されている。

この時期の集落遺跡は少ない。安良遺跡では７世紀頃の竪穴建物跡 13 軒と溝状遺構２条が検出され，住居内から須恵器や鉄鏃・刀子も出土し，多くの甕の底には木葉痕がある。稲荷迫遺跡では，中期中葉から後葉の竪穴建物跡４軒，土坑１基が検出され，勾玉・管玉も出土している。船迫・山角Ｂ・炭床遺跡では笹貫式土器が，宮

脇遺跡では辻堂原式・笹貫式土器と７世紀頃の須恵器が出土している。

古代

古代の志布志は日向国諸県郡に属していた。前川河口にある宝満寺跡は神亀年間（724 ～ 729）に創建された，西海の華と称されたほどの寺だったが，今は境内に五輪塔群が残っているだけである。山宮神社も和銅２年(709)に建てられたという。水迫横穴墓では須恵器の蔵骨器が出土している。

古代村落の様相ははっきりしていないが，安良遺跡では土師器・黒色土器・須恵器とともに墨書土器・焼塩土器も出土している。稲荷迫遺跡では土師器・焼塩土器・鞴の羽口などが，宮脇遺跡では木葉底の土師器甕や焼塩土器・須恵器が出土している。

中世

志布志は港町として栄え，『志布志津』と呼ばれた。

国指定史跡である志布志城跡は，前川の河口近くにあり，内城・松尾城・高城・新城からなる。それぞれの城はシラス台地の端部に立地し，いくつかの深い壕で区画された郭からなり，それぞれの郭では，建物跡・溝状遺構・土坑・土塁・門跡などが検出され，土師器・青磁・白磁・青花・東播系捏鉢・瓦質土器・備前焼擂鉢・天目碗・銭貨など主として 14 世紀半ばから 15 世紀の遺物が出土している。ベトナム・タイなど東南アジア産のものもあり，当時の広範な交易を物語っている。

山宮神社近くには 12 世紀後半に築城された志布志城の支城である安楽城跡がある。山宮神社境内では明治 23 年と 25 年に五輪塔が合わせて６基掘り出され，26 年には蔵骨器の納められた石室が発見された。蔵骨器は青白磁の四耳壺で，副葬品として菊花紐の山吹あるいは草花飛雀鏡１面，鉄刀１口，土師器皿約 10 個，青白磁合子３個，同小壺２個，鉄塊１などがある。石室はすでにないが，出土品の一部と出土状況の記録が山宮神社に保管されている。14 世紀に創建された大慈寺の境内には開山玉山和尚の墓（1351 年）がある。

集落跡としては，宇都上遺跡で常滑焼・備前焼などの国内産陶器，白磁・龍泉窯系青磁などの輸入陶磁器が出土している。安良遺跡では掘立柱建物跡・竪穴建物跡・土坑群などが検出され，土師器・瓦器埦・青磁・白磁・青白磁合子・東播系捏鉢・須恵質土器・瓦質土器・備前焼擂鉢・常滑焼甕・黄釉鉄絵盤・石鍋・柱状高台皿・炭化米塊・炭化種子などが出土している。志布志海岸には今でも砂鉄が薄く堆積しているが，これを原料とした製鉄遺跡が前川・安楽川沿いに存在している。前川河口にある宝満寺跡内にある宝満製鉄遺跡では土坑・排滓場が検出され，土師器・炉壁・鞴の羽口・製錬滓・台石・敲石などが出土している。

近世

志布志城跡の東側に地頭仮屋が置かれ，その周辺に武家屋敷が建ち並んで『麓』を形成していた。志布志湊の周辺は『志布志千軒町』と呼ばれ，南は大隅半島南部から琉球，北は大坂などとの流通が盛んであった。藩米などの集積・積出港で，前川河口には津口番所が置かれ，藩政末期には密貿易も行われていた。この周辺では陶磁器などが出土している。

宝満寺跡では石積遺構や基礎石・柱穴などが検出されているが，時期がはっきりしない。苗代川焼・龍門司焼などの薩摩焼，伊万里焼，土師質土器，琉球通宝や加治木銭・慶長通宝などの古銭，石製品，鉄製品などが出土している。船迫遺跡では道跡と思われる帯状硬化面が検出され，陶磁器とともに二分金も出土している。安良遺跡では薩摩焼・肥前陶磁器などが出土している。

前川，安楽川などの中小河川沿いには近世・近代の東谷や荒田遺跡など多くの製鉄関連遺跡が確認されていることからこれらの河川を利用して砂鉄を運搬し，製鉄作業が行われていたことが考えられる。安良遺跡でも近代の磁器とともに鞴の羽口・鉄滓・坩堝が出土している。

（参考・引用文献）

志布志町教育委員会

1980『弓場ヶ尾地区－蓑輪遺跡・柳遺跡』
志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書

1985『志布志の埋蔵文化財』

1985『中原遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（９）

1988『飛渡遺跡・島廻遺跡・白木原遺跡』
志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（13）

2003『宮脇遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（28）

2003・2004『宝満寺跡・宝満製鉄遺跡・牟田遺跡・弓場ケ尾遺跡』
志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（31）・(33)

2003『稲荷上遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（32）

2005『志布志城跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（34）

2005『弓場ケ尾遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（35）

志布志市教育委員会

2013『安良遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（７）

2013『(伝）六月坂横穴墓』
志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（10）

2013『山角Ｂ遺跡・炭床遺跡』
志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（11）

2018『志布志城跡（内城跡）１～９次調査』
志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（12）

2018『次五遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（13）

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2012『稲荷迫遺跡』
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（169）

2014『船迫遺跡・高吉Ｂ遺跡』
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（180）

鹿児島県教育委員会　（公財）埋蔵文化財調査センター

2019『見帰遺跡』
（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（23）



第３図　周辺の遺跡（１/25,000）

第１表　周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地（志布志市）	時代	地形	遺構・遺物等	備考
1	立山遺跡	有明町伊崎田字立山・野円・平・室太郎	古墳	台地		
2	下原Ｂ遺跡	志布志町内ノ倉字下原	旧石器，縄文早・晩，弥生中	丘陵	礫群，細石刃核，竪穴建物跡・土坑・集石・埋設土器，前平式・加栗山式・吉田式・石坂式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・苦浜式土器，打製石鏃・磨製石鏃・打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石	
3	稲荷上遺跡	志布志町安楽字稲荷上	縄文早・晩，弥生中，古墳	台地	集石・土坑，平栫式・塞之神 Aa 式・上加世田式・入佐式・黒川式土器，耳栓，打製石斧，入来式土器	志布志町埋文報（32）
4	稲荷迫遺跡	志布志町安楽字稲荷迫・牧	旧石器，縄文早・後・晩，弥生，古墳，古代	台地	礫群・剥片尖頭器・細石刃・細石刃核，竪穴建物跡・集石・連穴土坑・土坑・土坑墓，岩本式・加栗山式・吉田式・石坂式・平栫式・市来式・中岳Ⅱ式・上加世田式・孔列文土器，石槍，磨製石斧・穿孔具	鹿児島県埋文セ（169）
5	柳遺跡	志布志町安楽字柳	縄文早，弥生中	台地	集石，吉田式・石坂式・押型文・撚糸文土器，磨石・敲石，竪穴建物跡，山ノ口式土器，土製勾玉，軽石製品	志布志町埋文報
6	蓑輪遺跡	志布志町内ノ倉字蓑輪	縄文早，弥生中	台地	集石，吉田式土器，石鏃，山ノ口式土器	志布志町埋文報
7	札建遺跡	志布志町内ノ倉字札建	縄文晩，弥生中	台地	山ノ口式土器	志布志町埋文報
8	土橋遺跡	有明町野井倉字土橋・下原・土原・合所・下口・谷尻，有明町伊崎田字堺・西ヶ迫	縄文後，弥生中	台地	中広形銅矛	考雑 8-2
9	小迫下遺跡	志布志町安楽字小迫下・曲迫	縄文早・後・晩	台地		平成 16 年確認調査
10	宇都上遺跡	志布志町安楽字宇都上・高吉	旧石器，縄文早，弥生前・中，古墳，中世，近世	台地	前平式・志風頭式・加栗山式・小牧 3A 式・札ノ元Ⅶ類・石坂式・別府原式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・手向山式・塞ノ神Ａ式土器，打製石鏃・磨製石鏃・削器・磨製石斧・磨石，高橋式・入来式土器，土師器・土師質土器・東播系須恵器・備前焼・常滑焼・瀬戸焼・青磁・白磁・中国陶器・タイ産陶器・染付，砥石・軽石製品・石塔・鉄製品，薩摩焼・肥前系陶磁器・煙管	**本報告書**
11	高吉Ｂ遺跡	志布志町安楽字宇都上・茶馬場・雨堤	旧石器，縄文早・中・後・晩，弥生中，中世～近世	台地	礫群，三稜尖頭器，集石・土坑・落とし穴，前平式・石坂式・押型文・手向山式・苦浜式・深浦式・中岳Ⅱ式，打製石鏃・石匙，竪穴建物跡・掘立柱建物跡・土坑・横穴をもつ土坑，山ノ口式土器・土製勾玉，樹皮布叩石	鹿児島県埋文セ（180）
12	弓場ヶ尾遺跡	志布志町帖字弓場ヶ尾	縄文早，古墳	台地	竪穴状遺構・集石・土坑，加栗山式・吉田式・石坂式土器，磨石・石皿・打製石斧	志布志町埋文報（35）
13	稲荷免遺跡	志布志町帖字稲荷免		台地		
14	島廻遺跡	志布志町帖字島廻	縄文早，弥生中	台地	集石，前平式・吉田式・石坂式・平栫式土器，山ノ口式土器	志布志町埋文報（13）
15	渡迫遺跡	志布志町安楽字渡迫	古代	台地		平成 11 年農政分布調査
16	西迫遺跡	志布志町安楽字西迫	縄文晩	台地		平成 15 年農政分布調査
17	中原（曲瀬）遺跡	志布志町安楽字中原	旧石器，縄文早・中・後	台地	細石刃核，阿高式・南福寺式・指宿式・磨消縄文・松山式・市来式土器，石錘・磨製石斧・打製石斧，円盤形土製品	志布志町埋文報（9）
18	曲瀬遺跡	志布志町安楽字中原・西迫・中渡	縄文草創・後，弥生	台地	有舌尖頭器，指宿式・市来式土器，磨石，弥生土器	
19	小瀬Ａ遺跡	志布志町安楽字中原小瀬・西迫	縄文後	台地	市来式土器，打製石斧・磨製石斧	
20	小瀬Ｂ遺跡	志布志町安楽字小瀬・中原	縄文後，弥生	台地	指宿式・市来式土器・弥生土器，打製石斧	
21	大渡遺跡	志布志町安楽字大渡	縄文，弥生	台地		
22	大渡Ｂ遺跡	志布志町安楽字大渡	縄文早・後	丘陵	塞ノ神式・阿高式・出水式土器，凹石・石斧・石錘	
23	船迫遺跡	志布志町安楽字船迫・大渡	縄文早・後，弥生中，江戸	台地	落とし穴，下剥峯式・中岳Ⅱ式土器，石鏃・磨石・敲石，掘立柱建物跡・石集積，山ノ口式土器，磨製石鏃，道跡，二分金・陶磁器	鹿児島県埋文セ（180）
24	湯田堀遺跡	志布志町帖字湯田堀	縄文，古墳，中世	台地		平成 14 年確認調査
25	桃ノ木遺跡	志布志町帖字桃ノ木・五里ヶ迫	弥生中	丘陵		
26	飛渡遺跡	志布志町帖字飛渡	縄文晩，弥生中，古墳後	台地	黒川式・孔列文土器，石槍・石鏃・打製石斧・磨製石斧・横刃形石器・石錘・磨石，入来Ⅱ式土器	志布志町埋文報（13）
27	大久保Ｃ遺跡	志布志町安楽字大久保	弥生	台地		平成 11 年農政分布調査
28	上原遺跡	志布志町安楽字上原	弥生	台地		平成 11 年農政分布調査
29	山角Ｂ遺跡	志布志町安楽字山角，炭床	縄文後・晩，古墳後	台地	集石，西平式・中岳式・黒川式・突帯文土器，石鏃・打製石斧・磨製石斧・勾玉，笹貫式土器	志布志市埋文報（11）
30	山角Ａ遺跡	志布志町安楽字山角	縄文後	台地	西平式土器，打製石斧・石皿・磨石・敲石	
31	炭床遺跡	志布志町安楽字炭床	縄文早・後・晩，古墳後	台地	集石，塞ノ神Ａ式・西平式・中岳式・黒川式・突帯文土器，石鏃・打製石斧，笹貫式土器	志布志市埋文報（11）
32	大久保Ａ遺跡	志布志町安楽字大久保	縄文，弥生	丘陵		
33	大久保Ｂ遺跡	志布志町安楽字大久保・七本松	弥生	台地		
34	上重遺跡	志布志町安楽字上重	縄文後	台地		
35	百堂穴遺跡	志布志町安楽字岩戸	縄文前，弥生	洞穴	轟式土器，獣骨，磨製石鏃・磨製石斧	
36	見帰遺跡	志布志町志布志字見帰	旧石器，縄文早・後	台地	ナイフ形石器・細石刃・ハンマストーン・落とし穴，石坂式・下剥峯式・西平式土器，石鏃・磨石・円盤形土製品	埋文調査センター報（23）
37	道悦遺跡	志布志町帖字道悦	縄文後，弥生	丘陵	弥生土器，磨製石斧	

番号	遺跡名	所在地（志布志市）	時代	地形	遺構・遺物等	備考
38	油田遺跡	志布志町帖字油田・西中尾	縄文，弥生	台地		昭和 62 年確認調査
39	七本松Ｂ遺跡	志布志町安楽字七本松	弥生	台地		平成 11 年農政分布調査
40	七本松Ａ遺跡	志布志町安楽字七本松	弥生	台地		平成 11 年農政分布調査
41	高牧遺跡	志布志町安楽字高牧	弥生	台地		平成５年確認調査
42	二重堀遺跡	志布志町安楽字二重堀・七本松	弥生	台地	弥生土器，打製石斧	
43	安楽城跡	志布志町安楽字宮下	中世	台地	蔵骨墓	建久年間（1190 ～ 1198）築城
44	山宮神社	志布志町安楽字宮下	古代，中世	台地	蔵骨器・和鏡・直刀・青白磁四耳壺・合子他	銅鏡（唐草鴛鴦文様鏡）大正７年国指定
45	宮内遺跡	志布志町安楽字宮内・下原	弥生，古代	台地		
46	宮ノ上遺跡	志布志町安楽字宮之上	古代	台地		平成 12 年東九州道分布調査
47	尖堀遺跡	志布志町安楽字尖堀	古墳，古代，中世	台地		
48	宮脇遺跡	志布志町安楽字宮脇・岩下	縄文後・晩，古墳後，古代	台地	竪穴状遺構，指宿式・市来式・笹貫式土器，土師器・須恵器	志布志町埋文報（28）
49	水神松遺跡	志布志町安楽字水神松・三郎丸・小井出手	古墳	平地	壺・磨製石斧	
50	安良遺跡	志布志町安楽字勢園	縄文後・晩，弥生中，古墳後，古代～近代	台地	竪穴建物跡，小牧 3A 式・納曽式・西平式・中岳式・黒川式土器，打製石斧，山ノ口式・須玖式土器，溝，笹貫式土器・須恵器，土師器・焼塩土器・須恵器，掘立柱建物跡・土坑，土師器・青磁・白磁・備前焼・常滑焼，石鍋，炭化米塊	志布志市埋文報（7）
51	安楽小牧	志布志町安楽字小牧	縄文早	台地		
52	安楽小牧Ｂ	志布志町安楽字小牧	旧石器，縄文草創・早，弥生	台地	ナイフ形石器・細石刃・細石刃核，集石，隆帯文土器，吉田式・妙見式・天道ヶ尾式・塞ノ神Ａ式・塞ノ神Ｂ式・苦浜式土器，耳栓，打製石鏃・磨石・敲石・石皿・異形石器，弥生土器，石包丁	
53	小牧古墳群	志布志町安楽字小牧	古墳後	台地	円墳４基，土師器・須恵器，軽石加工品	
54	次五遺跡	有明町野井倉字次五、横堀	旧石器，縄文早，古代	台地	細石刃・畦原型細石刃核，落とし穴・連穴土坑・土坑・集石・磨石・集積，前平式・加栗山式・吉田式・札ノ元Ⅶ式・石坂式・中原Ⅴ式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・手向山式・塞ノ神Ｂ式土器，打製石鏃・磨製石鏃・石錘・局部磨製石斧	志布志市埋文報（13）
55	大原遺跡	志布志町安楽字権現原	古代	台地	土師器・須恵器	消滅
56	権現原遺跡	志布志町安楽字権現原	弥生・古代	台地	弥生土器・土師器	
57	八ヶ代遺跡	志布志町安楽字八ヶ代	弥生，古墳	台地		平成８年確認調査
58	鳥井下遺跡	志布志町安楽字鳥井下	縄文早・前	台地	縄文土器	
59	別府（石踊）遺跡	志布志町安楽字別府	縄文早・前・中・晩，弥生中	台地	集石，吉田式・石坂式・平栫式・塞ノ神式・轟式・曽畑式・岩崎式・黒川式土器，土偶？，石鏃・石斧・石匙・スクレイパー・磨石・敲石・石錘・異形石器	志布志町埋文報（1）
60	別府上遺跡	志布志町安楽字別府上	古代	台地	土師器	
61	水ヶ迫横穴墓	志布志町志布志字水ヶ迫	古代	丘陵	土師器・須恵器壺	昭和８年発見
62	六月坂横穴墓	志布志町志布志字水ヶ迫	古墳	丘陵	土師器・須恵器・坏蓋・坏身	明治 42 年発見か
63	船磯遺跡	志布志町安楽字船磯・水ヶ迫	縄文前・中	海岸	轟式土器	
64	外堀遺跡	志布志町志布志字外堀	縄文早	台地		
65	大西遺跡	志布志町志布志字大西	古代	海岸	縄文土器	
66	愛甲喜春墓	志布志町志布志二丁目	近世	沖積平野		昭和 36 年県指定
67	大慈寺跡（即心院）	志布志町志布志二丁目	中世～近代	沖積平野	仁王像	興国元年（1340）開山 昭和 46 年県指定
68	大慈寺開山堂墓地	志布志町志布志二丁目	中世～近代	沖積平野		大慈寺止々庵跡 大慈寺開山堂
69	志布志城（新城）跡	志布志町帖字宇都ノ上	縄文早・中，中世	台地	塞ノ神式土器，石鏃，壕・土塁・溝・柵列，青磁・白磁・染付・陶器（中国・ベトナム・渥美・備前焼）	志布志町埋文報（14）・(34)
70	志布志城（高城）跡	志布志町帖字高城	中世	台地	壕・土塁，青磁・白磁・染付・陶器（タイ・中国・常滑焼・備前焼）・金属製品・銭貨	志布志町埋文報（34）
71	志布志城（松尾城）跡	志布志町帖字松尾	中世	台地	青磁・白磁・染付・陶器（中国・瀬戸焼・楽焼・明三彩・天目茶碗・唐津焼），碁石，砥石，銅製品・鉄製品	平成 17 年国指定 志布志町埋文報（34）
72	志布志城（内城）跡	志布志町帖字内城	縄文，弥生，中世	台地	石錘，壕・土塁・虎口，土師器・青磁・白磁・染付・陶器（中国・タイ・瀬戸焼・備前焼・唐津焼），瓦質土器・金属製品・古銭・鉄滓，華南三彩	志布志町埋文報（34） 志布志市埋文報（1）・(8)・(12)
73	小渕遺跡	志布志町帖字小渕	縄文中・後	丘陵	岩崎下層式・岩崎上層式・指宿式・市来式・草野式土器，石斧・叩石・石皿・石錘	鹿考古（5）
74	高濱遺跡	志布志町帖字高濱	縄文中・後，近世	河川		
75	宝満寺跡	志布志町帖字宝満	古代・中世・近世・近代	河岸段丘	土師器，土坑・排滓場，炉壁，土師質土器・陶磁器・羽口，製錬滓，台石・敲石，古銭	志布志町埋文報（31）・(33)
76	向川原遺跡	志布志町帖字向川原	縄文早	丘陵	縄文土器	

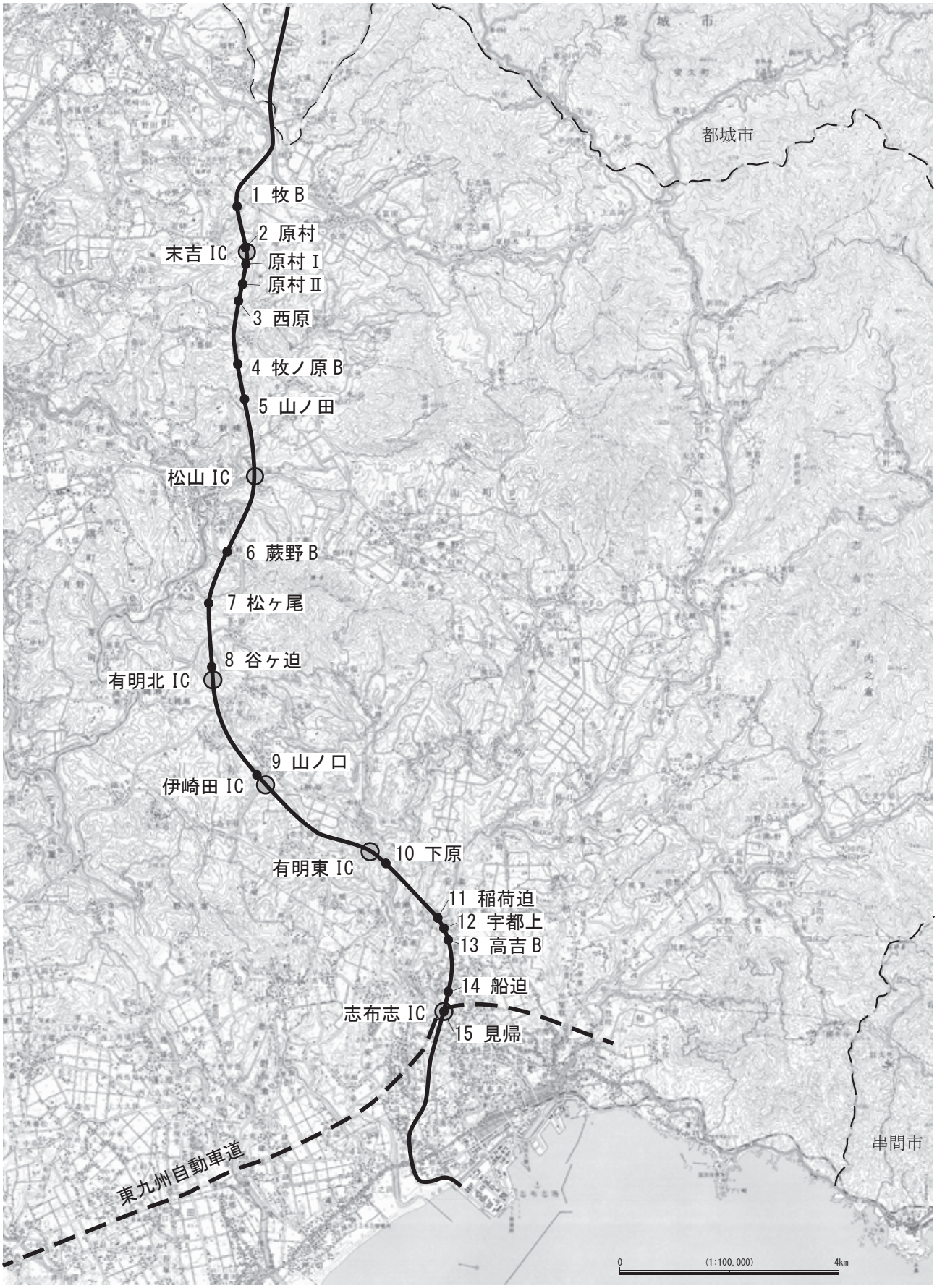
第３節　都城志布志道路建設に伴う県内の遺跡

都城志布志道路は鹿児島県及び宮崎県に連なる道路である。その鹿児島県部分では，平成 11 年度から 16 年度にかけて末吉 IC ～有明北 IC 間，平成 21 年度から令和元年度にかけてその他区間，計 15 遺跡の発掘調査が行われた。ここでは概要を下の表に示す。なお，今年度まで発掘調査や整理作業を行っている遺跡もあり，今後変更などが伴う可能性がある。詳細は各報告書を参考にされたい。

第２表　都城志布志道路に係る鹿児島県内の遺跡

番号	遺跡名		所在地	発掘調査	整理作業・報告書作成	遺跡の概要		
						時代・時期	主な遺構	主な遺物
1	牧Ｂ		曽於市末吉町岩崎牧	令和元年度	令和２年度整理作業予定	縄文早期	土坑６基，埋設土器１基	石坂式・下剥峯式・押型文土器・打製石鏃・磨石
						縄文中～晩期	竪穴建物跡１基，ピット１基	御領式・中岳Ⅱ式・入佐式土器，打製石鏃・打製石斧
						弥生早・中期	－	刻目突帯文土器，山ノ口式土器
						古代	土坑１基，ピット１基	土師器・黒色土器Ａ類
				縄文時代後期の土器を伴う竪穴建物跡を１基検出している。中央土坑には土器以外に拳大の軽石を多く含んでいる。現在調査中であり，今後遺構等増加する可能性がある。				
2	原村	原村Ⅲ	曽於市末吉町南之郷字原村	平成 29 年度 平成 30 年度	令和元年度 令和２年度 刊行予定	旧石器	－	角錐状石器・剥片
						縄文早期	竪穴建物跡２軒，集石 41 基，土坑 14 基，落とし穴２基，連穴土坑２基	岩本式・前平式・加栗山式・吉田式・石坂式・押型文・下剥峯式・辻タイプ・平栫式・塞ノ神式・苦浜式土器，打製石鏃・石槍・スクレイパー・局部磨製石斧・打製石斧・環状石斧・石皿・環状石製品・砥石・石核
						縄文前・中期	落とし穴５基，土坑２基	－
						縄文後期	竪穴建物跡２軒，土坑 13 基，溝状遺構１条	擬似磨消縄文土器・中岳Ⅱ式・御領式・上加世田式土器，打製石斧・磨石・線刻礫
						縄文晩期	－	入佐式・黒川式・刻目突帯文・組織痕土器，打製石鏃・打製石斧・磨製石製品
						弥生前・中期	土坑２基	高橋Ⅱ式・入来Ⅰ・Ⅱ式・山ノ口Ⅰ式・瀬戸内系土器，磨製石鏃・勾玉
						古墳	土坑１基	成川式土器，鉄鏃
						古代	土坑１基，製鉄関連遺構１基	須恵器，土師器，鞴の羽口，鉄滓，軽石
						中世	土坑２基，溝状遺構１条	白磁，青磁
						近世	土坑２基，溝状遺構 12 条	染付，薩摩焼，寛永通宝，キセル
		原村Ⅰ		平成 14 年度	平成 19 年度刊行埋セ報告書（124）	縄文早期	集石１基	石坂式・塞ノ神式土器
						縄文後～晩期	－	指宿式・夜臼式土器
						弥生～古墳	土坑５基	弥生土器
		原村Ⅱ		平成 14 年度	埋セ報告書（124）	縄文早期	－	前平式・平栫式土器
				平成 15 年度	平成 16 年度刊行末吉町報告書（25）	縄文早期	集石２基	押型文・平栫式・塞ノ神式土器
						近世	土坑墓３基	人骨３体，寛永通宝・永楽通宝
				現末吉 IC 付近に広がる遺跡である。調査区や調査年度により主に３区に分かれており，IC 北部分のⅢ区では，縄文時代早期から晩期にわたる多くの土坑や竪穴建物跡等の遺構及び遺物が発見されている。古墳時代の異形鉄鏃の出土や古代の製鉄遺構の検出も注目される。				
3	西原		曽於市末吉町南之郷字西原	平成 13 年度	平成 19 年度刊行埋セ報告書（124）	旧石器	－	三稜尖頭器・ナイフ形石器
						縄文早期	集石 17 基，大型土坑１基	押型文・塞ノ神式土器，異形石器
						縄文後期	竪穴建物跡１基，土坑 17 基	中岳式土器，管玉
						古代～中世	溝状遺構１条	土師器
				旧石器時代では，三稜尖頭器の製作跡と考えられるブロックが２か所検出されている。縄文時代後期では，１基の竪穴建物跡から中岳式土器や管玉が出土している。				
4	牧ノ原Ｂ		志布志市松山町新橋字牧ノ原	平成 14 年度	平成 19 年度刊行埋セ報告書（124）	旧石器	－	ナイフ形石器
						縄文前～中期	落とし穴１基	
						縄文後～晩期	－	中岳式土器
				旧石器時代では，ナイフ形石器が１点出土している。縄文前期～中期においては，御池パミスを埋土に含んだ落とし穴が検出されている。				
5	山ノ田	Ｂ地点	志布志市松山町新橋字山ノ田	平成 15 年度	平成 18 年度刊行埋セ報告書（109）	縄文早期	集石６基，土坑１基	吉田式・塞ノ神式土器，石鏃・石匙・磨石・剥片石器等
		Ａ地点		平成 13 年度	平成 17 年度刊行松山町報告書（16）	縄文早期	集石５基	下剥峯式・平栫式・塞ノ神式土器，石鏃
				縄文早期の集石が多く検出された遺跡である。遺物は縄文早期後半のものが多い。				
6	蕨野Ｂ		志布志市松山町新橋字蕨野	平成 15 年度 平成 16 年度	平成 18 年度刊行埋セ報告書（109）	旧石器	礫群５基，ブロック 15 基	ナイフ形石器・三稜尖頭器・台形石器・剥片石器等
						縄文早期	集石 38 基，ブロック 18 基，土坑２基	吉田式・石坂式・下剥峯式・塞ノ神式土器，打製石鏃・磨製石斧・打製石斧・磨石・叩石・礫器
						縄文中・後期	集石１基	阿高式・指宿式土器
						弥生中期	－	入来式土器
				旧松山町では本格的な旧石器時代の遺構・遺物が出土した遺跡である。縄文時代早期においても，計 50 基以上の集石やブロックが検出されている。				
7	松ヶ尾		志布志市有明町伊崎田字松ヶ尾		平成 18 年度刊行埋セ報告書（109）	縄文早期	集石９基	前平式・石坂式・塞ノ神式土器，打製石鏃・磨石
						縄文晩期	土坑１基	黒川式土器，打製石鏃・磨製石斧・打製石斧
						古代	掘立柱建物跡１棟，溝状遺構３条，道跡遺構１条	土師器，須恵器，焼塩土器
				縄文時代早期の集石が多く検出されている。古代の掘立柱建物跡も１棟検出されている。				
8	谷ヶ迫		志布志市有明町伊崎田字谷ヶ迫	平成 15 年度	平成 18 年度刊行埋セ報告書（109）	縄文後期	－	指宿式土器
						縄文晩期	－	黒川式・夜臼式土器，磨石
				縄文時代後期から晩期にかけての土器が出土している。				
9	山ノ口		志布志市有明町伊崎田字山ノ口	平成 25 年度 平成 26 年度 平成 27 年度	平成 26 年度 平成 27 年度 平成 28 年度 平成 29 年度刊行 埋セ報告書（188）	旧石器	－	剥片
						縄文早期	集石２基，ブロック２基	知覧式・下剥峯式・塞ノ神式・山形押型文土器，石鏃・石匙・スクレイパー
						縄文中期	－	春日式・大平式・阿高系土器
						縄文後期	土坑４基，帯状硬化面 11 条	指宿式・市来式・中岳Ⅱ式土器，石鏃・石匙・磨製石斧・打製石斧・磨石
						縄文晩期	－	精製浅鉢形土器
						弥生中期	－	入来式土器
						近世	帯状硬化面３条，溝状遺構５条	陶磁器
				科学分析の結果より，縄文時代後期と考えられる帯状硬化面が 11 条検出されている。				

番号	遺跡名		所在地	発掘調査	整理作業 報告書作成	遺跡の概要		
						時代・時期	主な遺構	主な遺物
10	下原	調査区1	志布志市 有明町 伊崎田 字下原	平成24年度 平成25年度 平成26年度 平成27年度	平成25年度 平成26年度 平成27年度 平成28年度 平成29年度 平成30年度刊行 埋セ報告書（198）	旧石器	礫群３基	細石刃・細石刃核・スクレイパー・剥片
						縄文早期	竪穴建物跡３軒，土坑９基， 集石17基，埋設土器遺構１基	前平式・吉田式・石坂式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・苦浜式土器，打製石鏃・打製石斧・磨石・敲石・石皿
						縄文前～晩期	－	曽畑式・凹線文・中岳Ⅱ式土器，打製石鏃・打製石斧・磨石・敲石・石皿
						弥生早～中期	掘立柱建物跡２棟	早期・前期土器，山ノ口式土器
						近世・近代	道路状遺構13条，道跡１条， 溝状遺構４条，帯状硬化面１条	薩摩焼，陶磁器類
		調査区2		平成27年度		縄文早期	集石17基，土器集中１か所	前平式・吉田式・倉園Ｂ式・押型文・下剥峯式・桑ノ丸式土器，打製石鏃・磨製石鏃・打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石
						縄文後～晩期	竪穴建物跡２軒，埋設土器遺構２基， 集石・土坑１基，溝状遺構７条， 硬化面１面	中岳Ⅱ式・入佐式・黒川式土器，打製石鏃・打製石斧・磨石・敲石・石刀
						弥生早～中期	竪穴建物跡３軒	早期・前期土器，山ノ口式土器
		調査区3		平成25年度 平成27年度		縄文早期	集石３基，ピット９基	吉田式・倉園Ｂ式・石坂式・下剥峯式・塞ノ神Ａ式土器，打製石鏃・磨石・敲石
						縄文前～晩期	溝状遺構２条，土坑２基，土器集中 １か所，炭化物集中１か所	野久尾式・中岳Ⅱ式土器，石鏃・打製石斧・磨石・敲石
						弥生中～後期	竪穴建物跡２軒，高床式建物跡１軒， ピット２基	中期末～後期土器
						近代	帯状硬化面２条	－
				縄文時代早期の多くの型式にわたる土器とともに集石が37基検出されている。縄文時代後期から弥生時代にかけての竪穴建物跡や掘立柱建物跡もみられ，長期にわたり生活の場所として使用されていたと考えられる。				
11	稲荷迫		志布志市 志布志町 安楽 字中島	平成21年度 平成22年度	平成22年度 平成23年度刊行 埋セ報告書（169）	旧石器	礫群１基	剥片尖頭器・細石刃・細石刃核
						縄文早期	集石64基，連穴土坑３基， 土坑２基	岩本式・前平式・吉田式・倉園Ｂ式・石坂式・手向山式・平椏式・塞ノ神式土器，打製石鏃・削器・石槍・二次加工剥片・石核・磨製石斧・礫器
						縄文後～晩期	土坑11基	市来式・丸尾式・北久根山式・中岳Ⅱ式・上加世田式・入佐式・黒川式土器，打製石鏃・石匙・削器・掻器・石錐・石槍・穿孔具・楔形石器・二次加工剥片・石核・石錘・打製石斧・磨製石斧・礫器・磨石・敲石・砥石・石皿・台石
						弥生早～中期	土坑墓２基	刻目突帯文土器・夜臼式・板付Ⅰ・Ⅱ式・入来Ⅰ・Ⅱ式・吉ヶ崎式・前山Ⅱ式・山ノ口式・須玖Ⅱ式土器，磨製石鏃・素材剥片・扁平磨製片刃石斧
						古墳	竪穴建物跡４軒，土坑１基	辻堂原式・笹貫式土器，勾玉・管玉
						古代	－	土師器，焼塩土器，鞴の羽口
						時期不明	土坑15基	－
				縄文時代早期においては，集石をはじめとする多くの遺構が検出している。縄文晩期から弥生時代にかけては北部九州系等の土器が出土しており，他地域との交流が窺える。古墳時代は成川式土器を伴う建物跡が４軒検出されており，編年の指標となる。				
12	宇都上		志布志市 志布志町 安楽字 宇都上・ 高吉	平成30年度	令和元年度刊行 埋セ報告書（204）	旧石器	－	剥片
						縄文早期	集石33基，土坑７基，落とし穴１基	前平式・加栗山式・小牧３Ａ式・札ノ元Ⅶ類・別府原式・石坂式・下剥峯式・桑ノ丸式・楕円押型文・手向山式・塞ノ神式土器，局部磨製石鏃・磨製石斧・削器・磨石・石核・剥片
						弥生，古墳	－	高橋式・入来式土器，成川式土器
						中世	大型土坑２基，土坑２基，溝状遺構 ４条，硬化面１条	土師器，土師質土器，青磁，白磁，染付，中国製陶器，タイ製陶器，常滑焼，瀬戸壺，備前焼，東播系須恵器，軽石製品，砥石，大型石製品（五輪塔・板碑・石臼等），鉄製品
						近世	石塔１基，溝状遺構２条，土坑４基	染付（肥前系），薩摩焼（苗代川・龍門司系），鉄製品，煙管，石硯
				縄文時代早期前葉及び中世を主体とした遺跡である。縄文時代は谷部を挟み多数の集石が，中世においては大型の土坑から多くの陶磁器や石製品が出土している。詳しくは本報告書を参照されたい。				
13	高吉Ｂ		志布志市 志布志町 安楽字 高吉	平成22年度 平成23年度	平成23年度 平成24年度 平成25年度刊行 埋セ報告書（180）	旧石器	礫群１基	三稜尖頭器・剥片
						縄文早期	集石141基，土坑８基，土器埋設遺 構１基，連穴土坑４基	前平式・石坂式・押型文・手向山式・平椏式・塞ノ神式・苦浜式土器，打製石鏃・局部磨製石鏃・削器・掻器・異形石器・打製石斧・石匙・磨石・石皿
						縄文前～晩期	落とし穴状遺構６基，土坑４基	深浦式土器
						弥生中期	竪穴建物跡７軒，掘立柱建物跡５棟， 土坑７基，横穴をもつ土坑１基， 石集積１基	山ノ口式・中溝式・須玖式・凹線文土器，土製勾玉・磨製石鏃・砥石・凹石・台石・樹皮布敲石
						中世～近世	溝状遺構１条，古道７条，土坑墓２ 基，石集積１基	土師器，陶磁器
				縄文時代早期では，141基の集石や４基の連穴土坑などの遺構や多様な型式の土器が出土している。連穴土坑のブリッジ部から完形に近い石坂式土器が出土しており，注目される。弥生時代中期では，竪穴建物跡７軒や掘立柱建物跡５棟などの遺構が検出されている。特に横穴を土器片で塞いだ土坑は他に例がない。				
14	船迫		志布志市 志布志町 安楽 字船迫	平成22年度	平成23年度 平成24年度 平成25年度刊行 埋セ報告書（180）	縄文早期	－	下剥峯式土器，石鏃
						縄文後期	落とし穴状遺構２基	中岳Ⅱ式土器，石鏃・磨石・敲石
						弥生中期	掘立柱建物跡４棟，集石１基	山ノ口式土器，磨製石鏃・磨石・敲石
						近世	帯状硬化面	二分金，銭貨，陶磁器
				弥生時代中期を主体とした遺跡で，掘立柱建物跡４棟等の遺構や山ノ口式土器が出土している。近世においては，道跡と思われる硬化面から，二分金が出土している。				
15	見帰		志布志市 志布志町 志布志 字見帰	平成25年度 平成30年度	令和元年度 令和２年度 報告書刊行予定	旧石器	－	打面調整剥片・敲石・磨石
						縄文早期	土坑10基，集石１基	石坂式・下剥峯式土器，石鏃・磨石・石皿
						縄文中期	土坑１基，落とし穴３基	石鏃
						縄文後期	－	西平式・丸尾式・中岳Ⅱ式土器，石鏃・石匙・打製石斧・磨石・敲石
						時期不明	土坑２基，溝状遺構２条	－
				縄文時代中期では，落とし穴３基が検出されており，東九州道部分の調査でも同様の遺構が出土しており，狩猟場としての利用が考えられる。				



第４図　都城志布志道路建設に伴う県内の遺跡

第３章　調査の方法と層序

第１節　調査の方法

本節では，発掘調査の方法，遺構の認定と検出方法，整理作業・報告書作成作業の方法について記す。

１　発掘調査の方法

宇都上遺跡の発掘調査は，平成 23・28・29 年度に試掘調査，平成 30 年度に本調査を実施した。なお工期の関係で確認調査は実施していない。本調査は，表面積 4,998 ㎡，延面積 7,483 ㎡を対象に実施した。

本遺跡の調査区割り（グリッド）は，世界測地系座標における X=-165700.000, Y=8050 をＡ－１区北西点（０・０）とし，区割りは 10 ｍおきにグリッドを設定し，北から南に向かって１・２・３・・・，西から東に向かってＡ・Ｂ・Ｃ・・・，と設定した。また調査の工程上，道路区画や地形で遺跡を大きく３分割し（第５図），北から調査区１～３と分け，１から順に調査を行った。排土の移動や引き渡し等に考慮し，調査区１の調査時は２・３を排土場とするなど，排土の扱いに考慮しつつ進めた。

発掘調査において用地境界は安全上の措置として約１～２ｍ程度内側に控えて調査範囲を設定し，調査深度が２ｍを超える場合は更に２ｍ程度の段（控え）を設けて下層を掘削した。

表土及び無遺物層は重機で慎重に掘削し，その後，人力による掘り下げ作業を実施した。また，旧石器時代包含層の広がりを確認するため，11 か所においてトレンチ調査（位置は第 10 図参照）を実施した。包含層中の遺物の多くは縄文時代早期の土器であり，トータルステーションで座標位置を測量後，取り上げた。遺構内遺物は図面上に記載し，遺構番号及び遺構内遺物番号を付けて取り上げた。遺構の検出時や埋土半掘・完掘時などには写真撮影を行った。また調査終盤の 11 月には，調査区内の縄文時代早期における集石遺構を中心に空中写真撮影を行った。

２　遺構の認定と検出方法

調査開始時において，調査区内は西側へゆるやかに傾斜する平坦な畑となっており，現代における耕地整理の影響を強く受けている。そのため，旧地形が高い場所では上部が削平されている遺構もみられた。それらの遺構は検出できた層から記録し，内部に入っていた遺物で時期判定を行った。

遺構の認定については，検出面の層位，埋土の色調，埋土半掘による確認を行い，調査担当者間で検討の上で認定した。主な遺構の認定は以下のとおりである。

縄文時代早期の集石遺構については，Ⅴ層からⅦ層上面において，礫の集中箇所でその規模等も考慮し認定した。また掘り込みについては，埋土の色調や礫の深さを考慮し決定した。土坑及び落とし穴については，Ⅶ層上面を精査した後，土色の異なる箇所を半掘し，形状や深さを確認して認定を行った。溝状遺構については，検出面及び埋土，底面の形状を考慮し認定した。

なお，遺構は検出状況の写真撮影後，掘り下げ，実測等を行った。実測は，遺構の大きさに応じて縮尺 10 分の１もしくは 20 分の１で実施した。土坑や溝状遺構等は，埋土断面や完掘状況の写真も撮影した。

集石内には炭化物が含まれたものがあり，埋土ごと取り上げ，科学分析を行った。土坑内埋土は，土坑墓の可能性があるものは埋土を採取し，ふるいかけを行った。

３　整理作業・報告書作成作業の方法

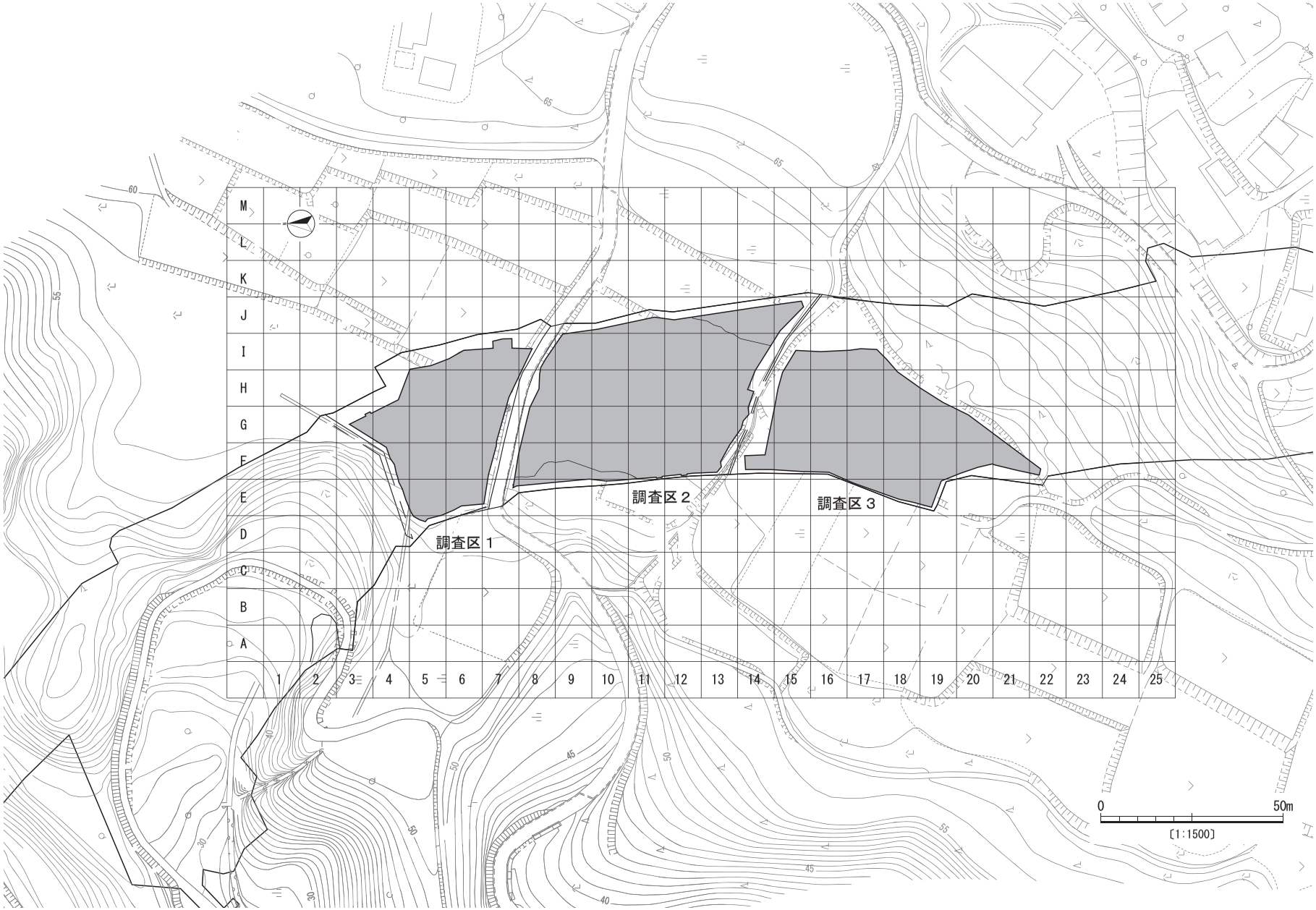
注記は，注記記号「ＵＴＵ」を頭に，包含層資料は続けて「区」「層」「遺物番号もしくは一括」の順に記入した。遺構内資料は注記記号及び「区」の後に遺構記号を用いて遺構番号を記し，その後に「遺物番号もしくは一括」を記入した。遺物の選別は，層や遺構ごとに，時代や型式別で分類し，数や分布状況の把握に努めた。接合はすべて行い，時代や型式ごとに掲載遺物を決定し，実測・トレースを行った。集石遺構や土坑内で取り上げた埋土はフローテーションを実施し，採取できた炭化物はＡＭＳ年代測定を行い，年代推定の参考とした。

第２節　層序

層位は平成 28 年度の試掘調査で確認した層位を元に作成した（第６図）。本遺跡で確認された遺物包含層は，近世～中世（Ⅰ～Ⅱ層）と縄文時代早期（Ⅴａ～Ⅵ層）である。また，時期決定の目安となる主な火山灰層の特色は以下のとおりである。

Ⅲｂ層では，黒色土中に黄褐色の御池火山灰層のパミスが認められた。基本的に御池火山灰のパミスは少量であるが，場所によっては数㎝の堆積がみられた。Ⅳａ層の池田降下軽石は，黒色土中に軽石が点在する程度の量である。その直下には，Ⅳｂ及びⅣｃ層のアカホヤ火山灰があり，30 ㎝程度の層を形成する。層の下位には１㎝程度の豆粒状の軽石層が認められる。Ⅶ層は薩摩火山灰層で，15 ㎝程度の層厚であるが，谷部分では色調が薄くなり，明確に層が認められない部分もある。そこでは薩摩火山灰層上位の縄文時代早期該当の黒色土と下位の縄文時代草創期・旧石器時代該当の黒色土との境界が明瞭ではない。旧石器時代該当層には赤橙色のパミスが点在する部分がある。

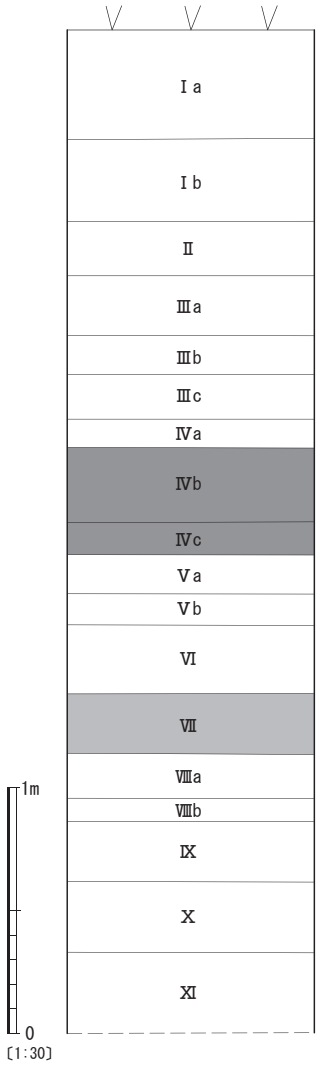
なお，Ｈ・Ｉ－９・10 区を中心とした谷最深部のⅦ層以下は，流水等の影響を受けやすく，各層土が混在し分類できないため。ＴⅠ～ＴⅢ層の層位を別に設定した。ＴⅠは黒色粘質土で，黄褐色パミスを多く含む層である。ＴⅡは暗褐色粘質土で，黄褐色パミスはＴⅠに比べ少ない。ＴⅢは黒色粘質土で，極微細な石英を少量含む。



第５図　グリッド配置及び調査範囲図

基本層序

Ⅰa層：黒褐色土（10YR3/1）　表土
Ⅰb層：黒褐色土（10YR3/1）　旧表土
Ⅱ層　：黒色土（10YR2/2）　黄橙色パミスを含む。
　　しまり弱く，粘性強い。層厚20cm程。
Ⅲa層：黒色土（10YR2/1）　しまり有り，粘性有り。層厚25cm程。
Ⅲb層：黒褐色火山灰（10YR3/2）　御池火山灰を含む。
　　しまり有り，粘性有り。層厚15cm程。
Ⅲc層：黒色土（10YR2/1）　しまり有り，粘性強い。層厚20cm程。
Ⅳa層：黒褐色土（10YR3/2）　池田降下軽石を含む。
　　しまり弱く，粘性強い。層厚10cm程。
Ⅳb層：明黄褐色土（10YR6/8）　アカホヤ火山灰層。
　　しまり強く，粘性有り。層厚30cm程。
Ⅳc層：黄褐色土（10YR5/8）　アカホヤ一次堆積層。
　　豆粒状軽石含む。しまり弱く，粘性弱い。層厚15cm程。
Ⅴa層：黒色土（10YR2/1）　白色パミスを含む。しまり弱く，粘性有り。
　　層厚15cm程。縄文時代早期の遺物包含層。
Ⅴb層：黒褐色土（10YR2/3）　しまり有り，粘性有り。層厚15cm程。
　　縄文時代早期の遺物包含層。
Ⅵ層　：黒褐色土（10YR2/3）　黄橙色パミスを含む。
　　しまり有り，粘性有り。層厚30cm程。縄文時代早期の遺物包含層。
Ⅶ層　：明黄褐色土（10YR6/8）　薩摩火山灰層。Ｐ14を含む。
　　しまり強く，粘性弱い。層厚25cm程。一部みられない部分あり。
Ⅷa層：黒褐色粘質土（7.5YR2/2）　所謂チョコ層。
　　しまり弱く，粘性強い。層厚20cm程。
Ⅷb層：黒褐色土（7.5YR3/2）　しまり弱く，粘性有り。層厚10cm程。
Ⅸ層　：褐色土（7.5YR4/3）　しまり弱く，粘性弱い。層厚25cm程。
　　旧石器時代の遺物包含層。
Ⅹ層　：暗褐色土（7.5YR3/4）　二次シラス。
　　しまり強く，粘性弱い。層厚30cm程。
Ⅺ層　：橙色土（7.5YR6/6）　黄橙色軽石を含む。
　　しまり弱く，粘性弱い。層厚30cm以上。



第６図　基本土層柱状図

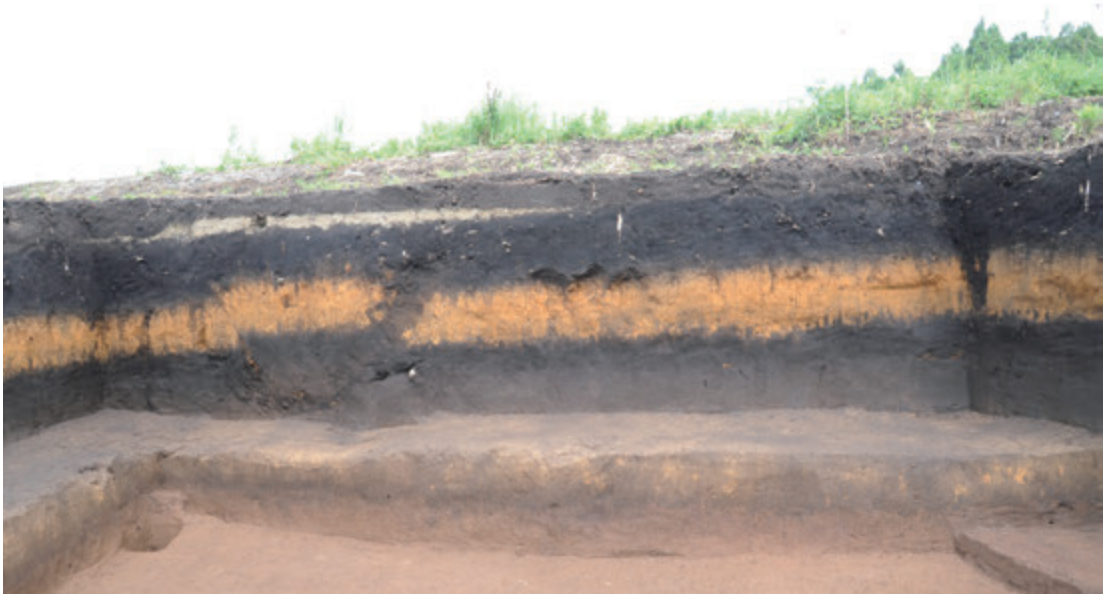
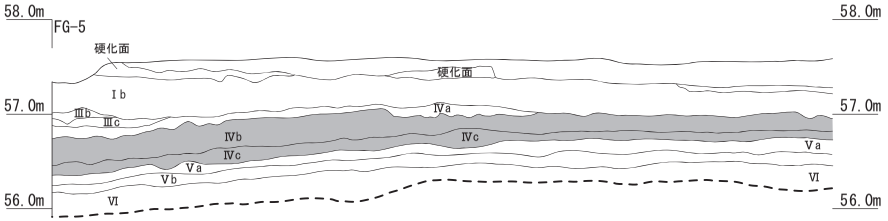
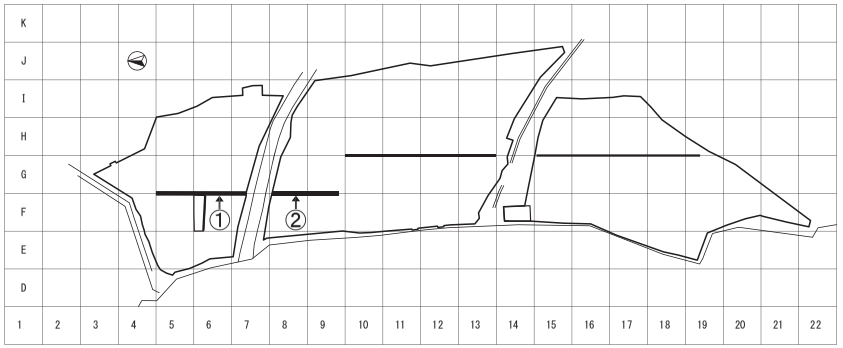


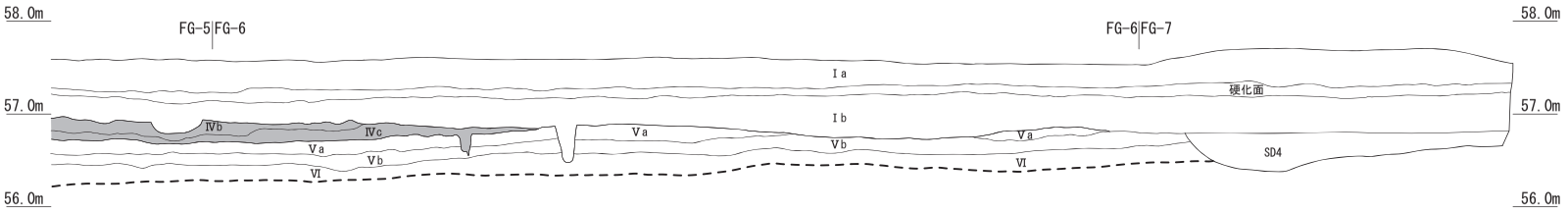
写真１　Ⅰ－15区10Ｔ北壁土層断面

土層①

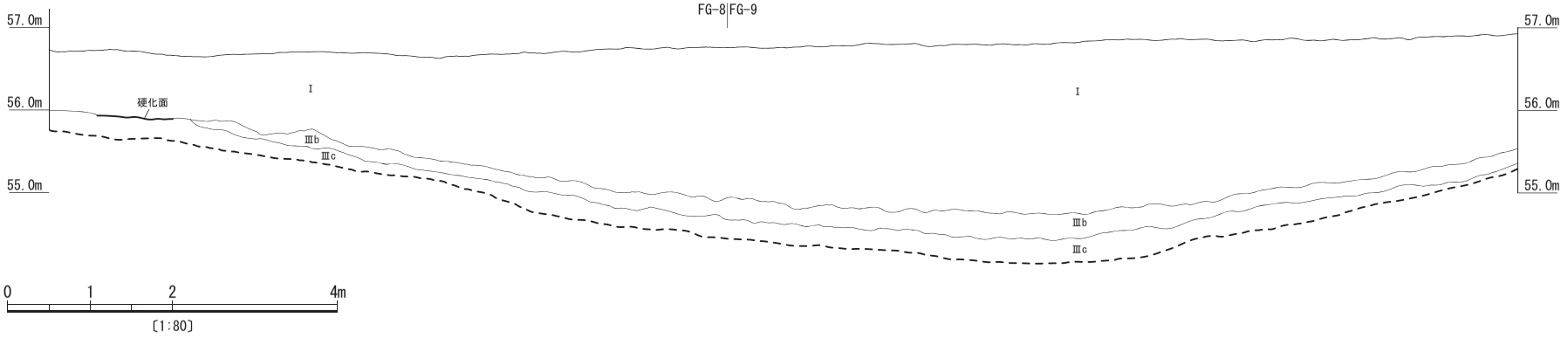




土層位置図

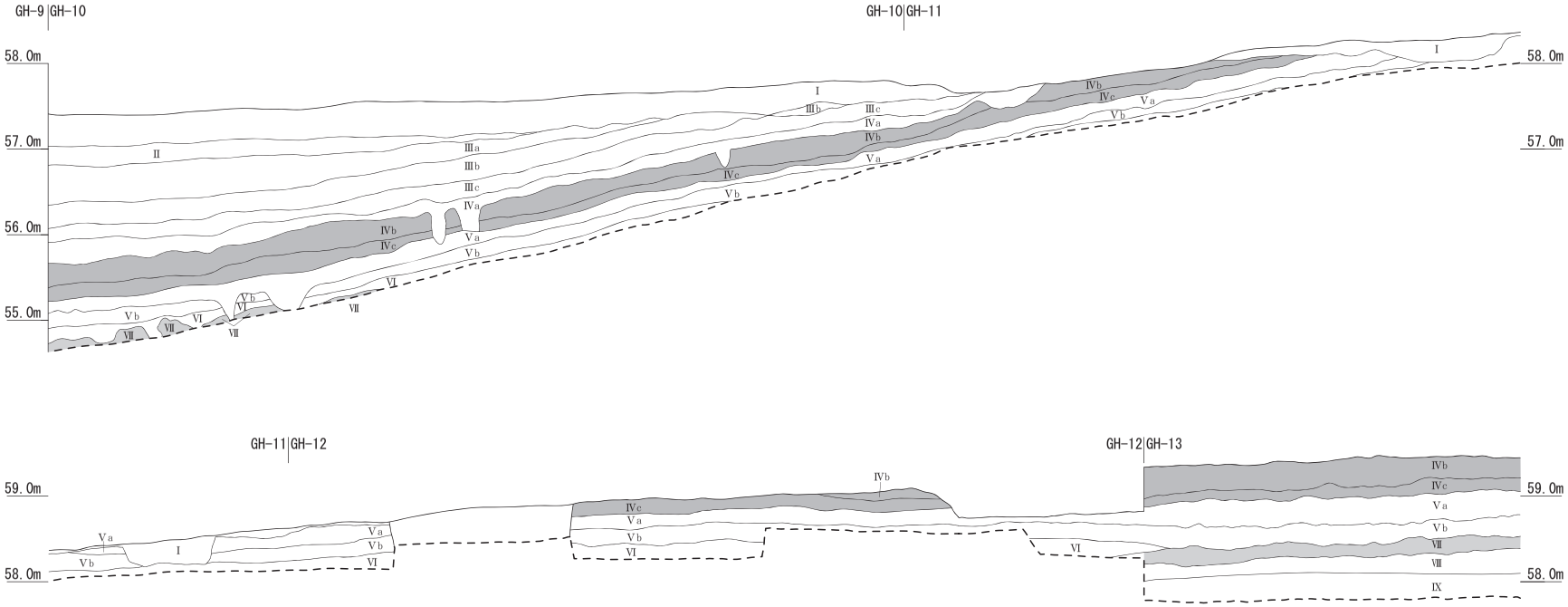


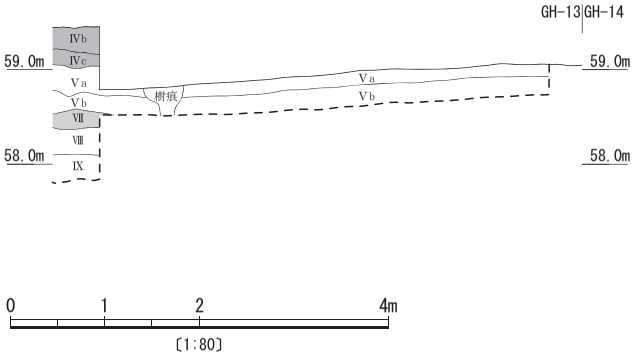
土層②

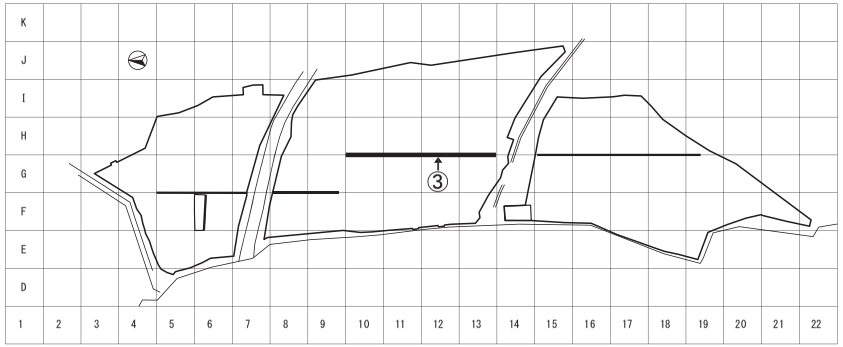


第７図　土層断面図（１）

土層③

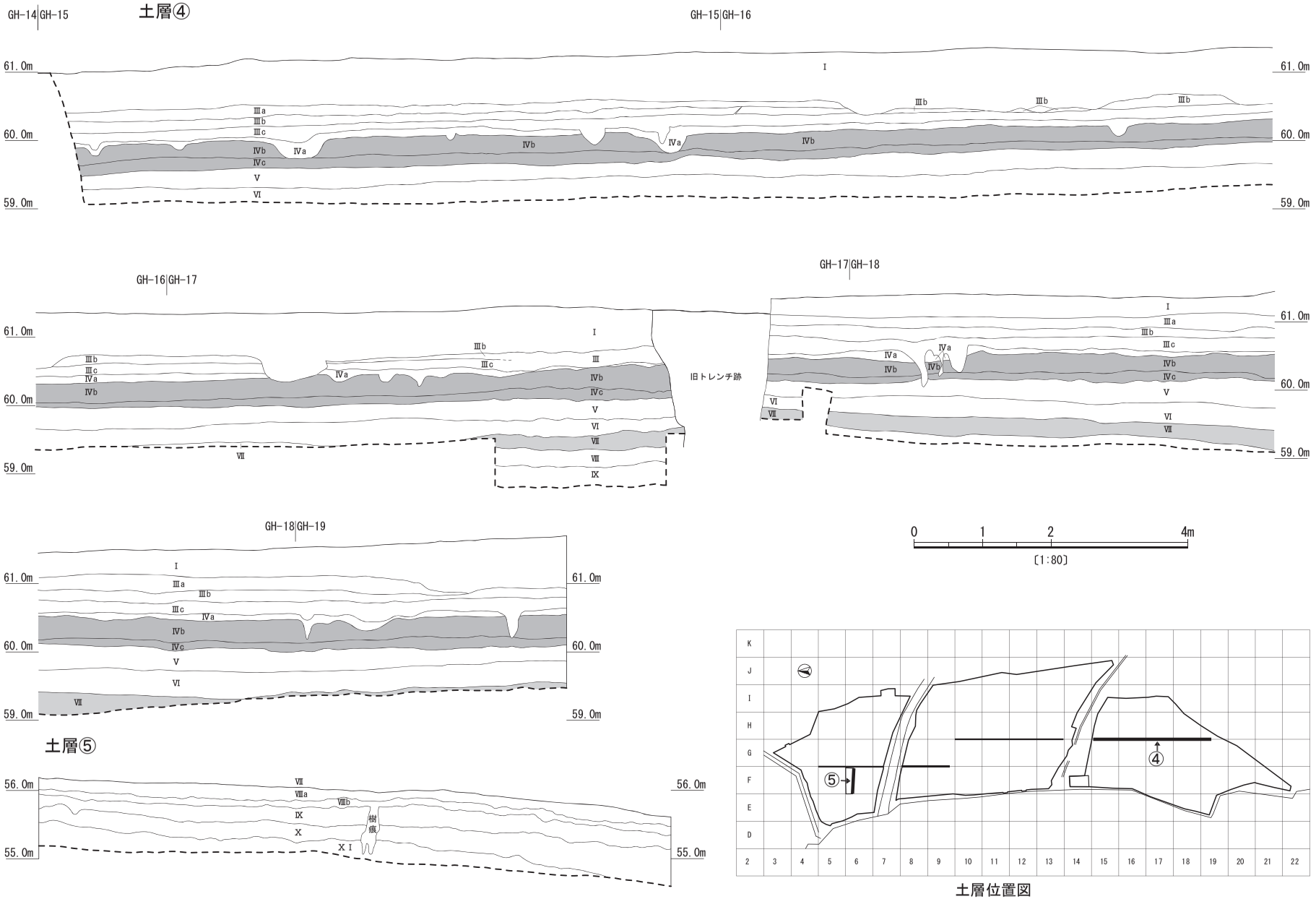






土層位置図

第８図　土層断面図（２）


土層④
GH-14
GH-15
GH-16
GH-17
GH-18
GH-19
61.0m
60.0m
59.0m
旧トレンチ跡
0
1
2
4m
〔1:80〕
土層⑤
56.0m
55.0m
樹痕
土層位置図

第９図　土層断面図（３）

第４章　調査の成果

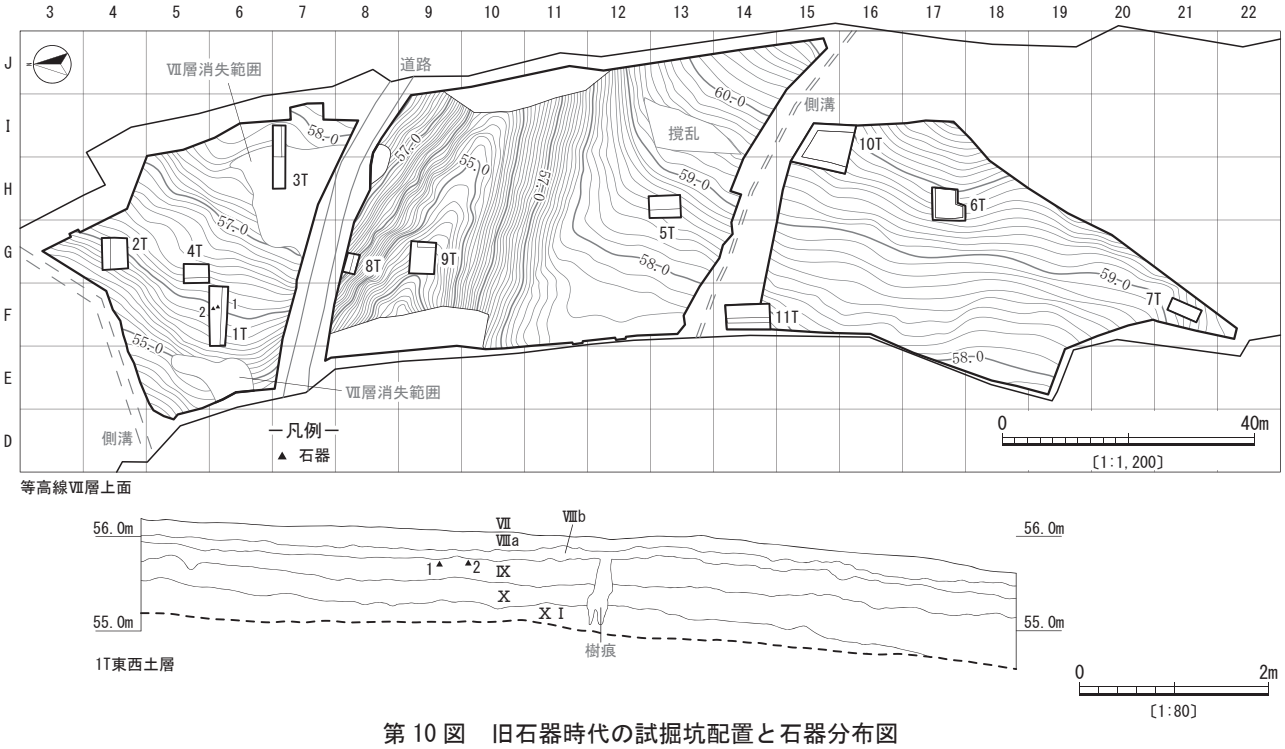
第１節　旧石器時代の調査

１　調査の概要

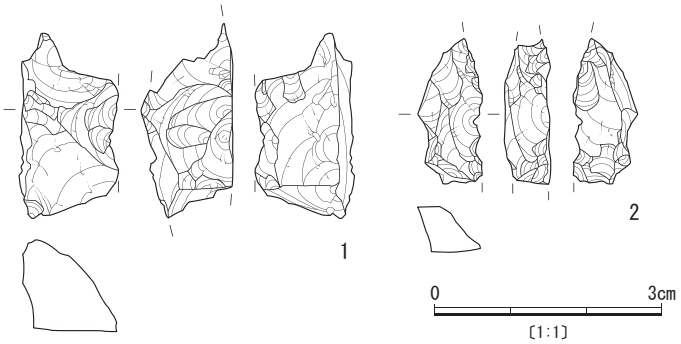
旧石器時代の調査は，各地区に及んで11箇所の試掘坑（１～11Ｔ）をランダムに設け，Ⅷ・Ⅸ層を調査対象として人力掘削を行った。その結果，Ｆ－６区の緩斜面の１Ｔから，わずか２点の黒曜石小片が検出されたにすぎず，それらはⅨ層中より出土し，約１ｍの近距離で５㎝の高低差をもって認められた（第10図）。

２　出土石器（第11図１・２）

１・２は加工痕のある剥片で，定形石器の加工時の破片である可能性をもつ。右側縁に，素材剥片の腹面側からの幾らかのリタッチ痕を留めており，１は破砕して上下と左側面に折れ面，２も左側面の折れ面により形状を失っている。石材は，やや脆く大小の斑晶を含み，三船産とみられる黒曜石である。



第10図　旧石器時代の試掘坑配置と石器分布図



第11図　旧石器時代の石器

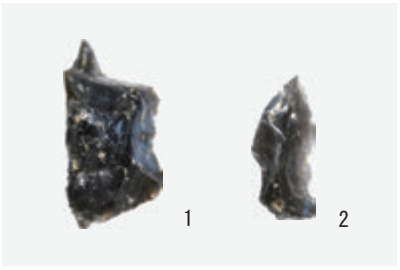


写真２　旧石器時代の石器

第３表　旧石器時代石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	器種	長さ（㎝）	幅（㎝）	厚さ（㎝）	重量（ｇ）	石材	備考
11	1	F6	Ⅸ	122	加工痕のある剥片	(2.42)	(1.30)	1.20	(3.3)	黒曜石	
	2	F6	Ⅸ	121	加工痕のある剥片	(1.90)	(0.86)	(0.60)	(0.8)	黒曜石	

第２節　縄文時代早期の調査

１　調査の概要

調査は，池田降下軽石を含む層からアカホヤ火山灰までのⅣ層を重機掘削で除去したのち，包含層であるⅤ・Ⅵ層を鋤簾・山鍬等を用い人力掘削で掘り下げた。

遺物は，集中して出土した地点はみられず，ほぼ散在した状態であった。大型の破片等はトータルステーションで出土地点の記録を行い，小破片はグリッド毎に一括して取り上げた。遺構は，個々に検出等の記録写真撮影を行い，主軸を設定し実測を行った。

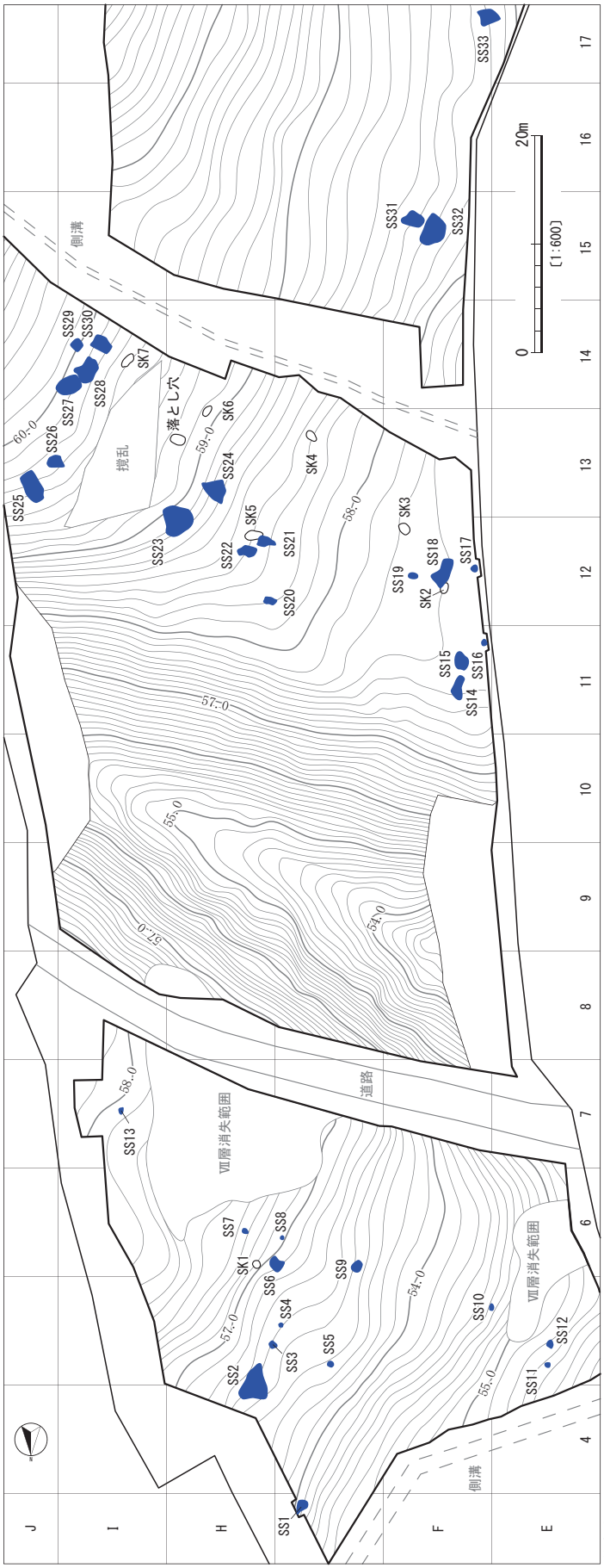
縄文時代早期の遺構として，集石遺構33基と土坑７基，落とし穴１基が検出された。遺構は安楽川へ下る谷部の谷頭部分の南北側に広がる。

礫は散在してみられ，比較的まとまった部分を集石遺構とした。分布は北側の３～７区と，８～10区付近の谷部を挟んだ11～17区に大別され，谷部に近い緩傾斜部分にみられる。石材はほぼ砂岩で，遺跡西側の安楽川河畔でみられることから，ここから持ち込んだものと考えられる。

土坑は薩摩火山灰層（Ⅶ層）上面を精査し検出した。12～14区に帯状に広がり，集石遺構の南側に沿うように分布している。

Ｈ－13区で土坑として検出された１基は，他の土坑より明らかに深く，床面に逆茂木痕がみられたため，落とし穴とした。列状に並ぶことを想定し，周囲をくまなく調査したが検出されず，１基に留まったが，Ｉ－13区付近の撹乱部分に存在した可能性がある。

遺跡内ではＥ－５・６区やＧ～Ｉ－６～８区などのように，Ⅶ層まで破壊されている部分や先述した撹乱を受けている部分があり，遺構が隣接する区域であることから，そこにも集石等の遺構があった可能性が高い。なお，撹乱等を受けた部分は右図を参照されたい。



第12図　縄文時代早期の遺構配置図

２　遺構

（１）集石遺構（33 基）

集石１号（第 13 図）

Ｇ－３区のＶｂ層上面で検出された。礫は約 90 × 150 ㎝の範囲に広がっており，集中部は約 90 × 60 ㎝の範囲に楕円状にまとまる。構成礫は 43 個で，１点のみ凝灰岩で,他は砂岩である。焼けたものが若干認められ,破砕礫が多い。７割程度が 200g 以下の小型の礫であり,平均の重さは 133g である。礫周辺の土は，炭化物を含む粘性が少ない黒褐色の土である。炭化物を４点，礫の下部で採取し，AMS 年代測定を行ったところ，２σ暦年代範囲で 8720calBC-8540calBC（92.2%）の結果が得られた。土器は西側で１点出土した。

３は深鉢の胴部で，縦方向に貝殻刺突文がみられる。

集石２号（第 14 図）

Ｈ－４・５区のＶｂ層上面で検出された。南北軸より東側に円形の撹乱を受けており，その部分の礫数は不明である。礫は約 260 × 350 ㎝の範囲に三角形状に広がっており，特に礫が集中する部分はみられない。集石３・４号に近く，関連する可能性がある。構成礫は 87 個で,２点のみ凝灰岩で，他は砂岩である。円礫が破砕したものが多い。平均の重さは 32g で，また 100g 以下の礫は 68 個と，かなり小型の礫が多い。礫下に掘り込みはみられなかった。土器が２点，北東側で出土した。

４と５は深鉢の胴部であり，貝殻条痕文の上に縦方向に貝殻刺突文がみられ，形状や厚さから同一個体の可能性がある。

集石３号（第 15 図）

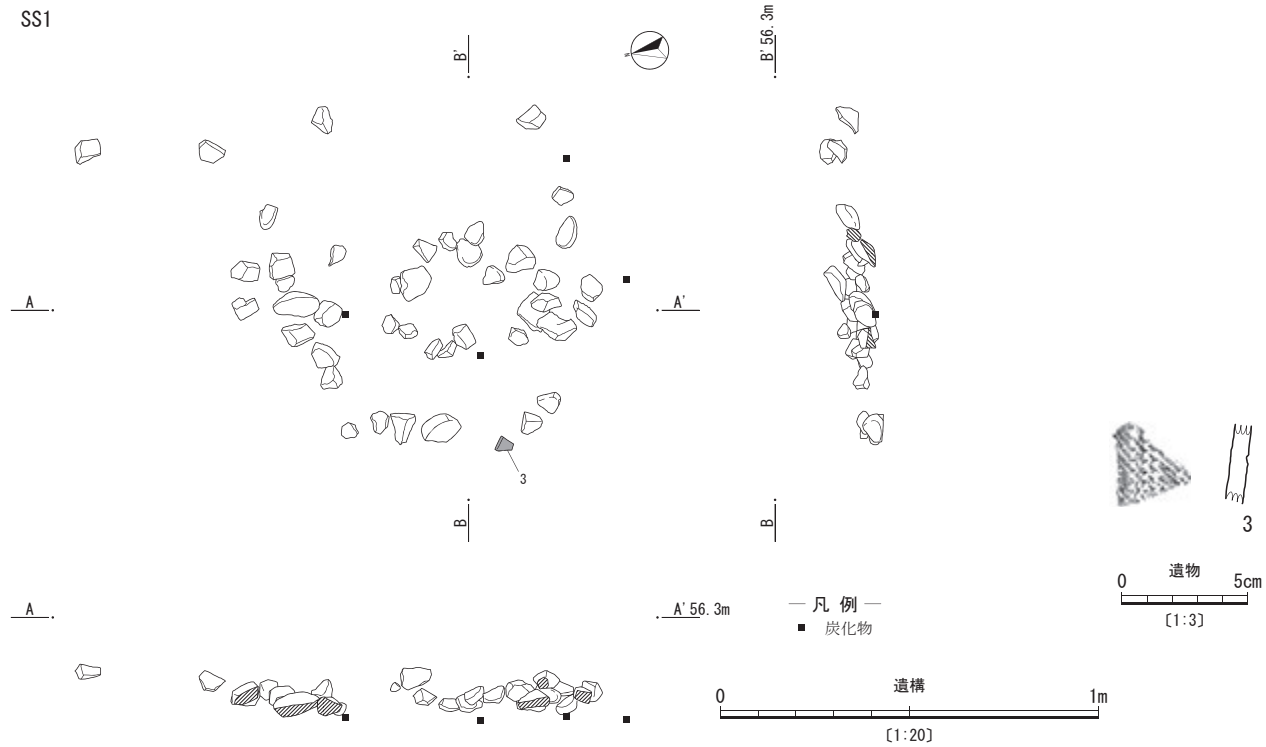
Ｇ・Ｈ－５区のＶｂ層上面で検出された。礫は約 60 × 70 ㎝の範囲に集中しており，構成礫は 47 個で，２点のみ凝灰岩で，他は砂岩である。円礫とその破砕礫から構成されている。平均の重さは 209g で，100g 以上の礫は 37 個と，他と比較し大型の礫が多い。礫下にシミ状の黒色土がみられたが，明瞭な掘り込みは確認されなかった。礫の下部から炭化物５点を採取し，AMS 年代測定を行ったところ，２σ暦年代範囲で 8622calBC-8422calBC（87.7%）の結果が得られた。土器は南側に１点出土し，周辺の２点と接合した。

６は加栗山式土器の深鉢の胴部である。貝殻条痕の上に斜方向の貝殻刺突文を等間隔に施し，上部の残存部分に楔形突帯の一部がみられ,内面は明瞭なケズリである。

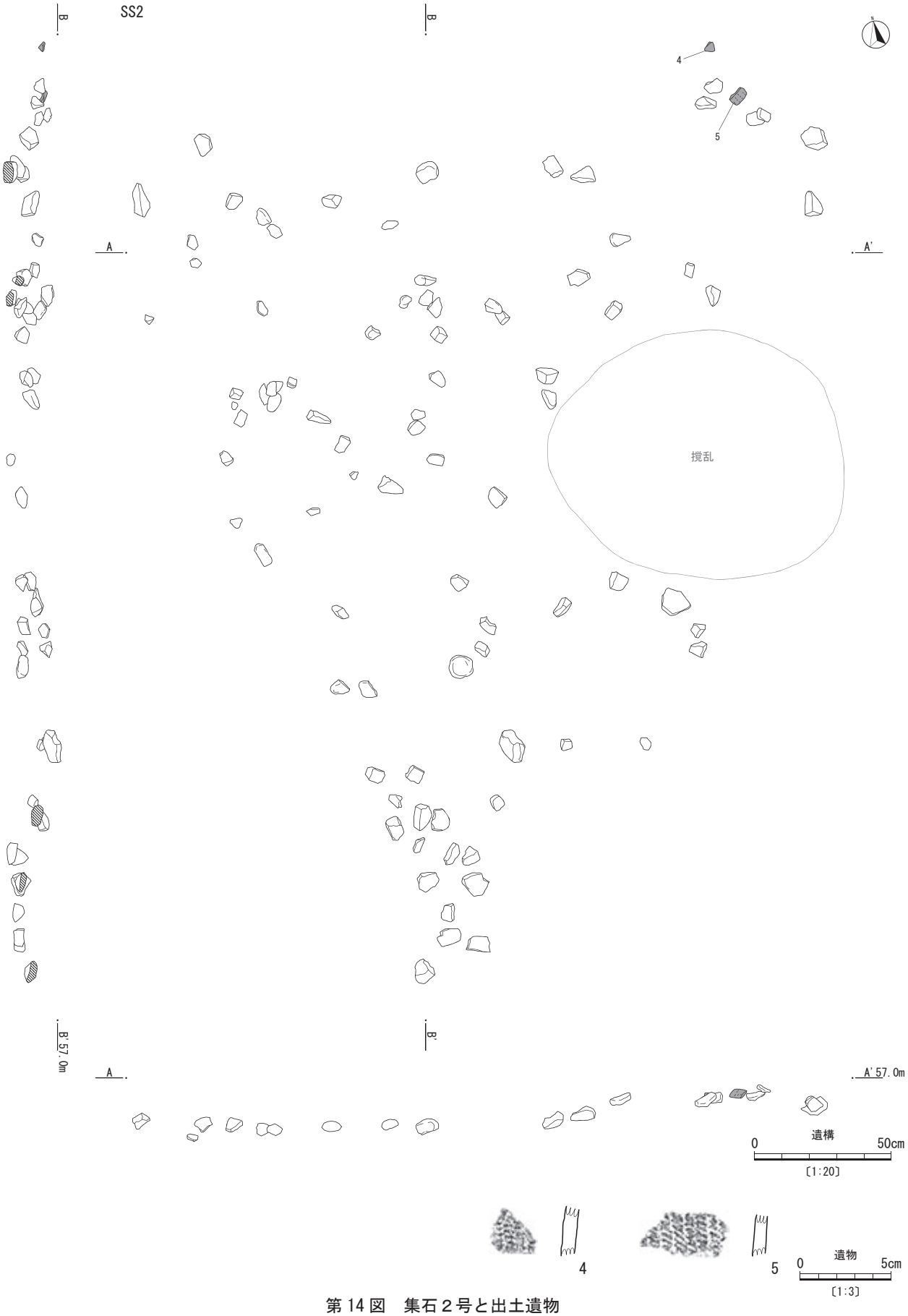
７・８は６と同一個体と思われる深鉢の胴部で，７は１列２段の楔形突帯が，８は底部付近に斜位の刻み目がみられる。

集石４号（第 15 図）

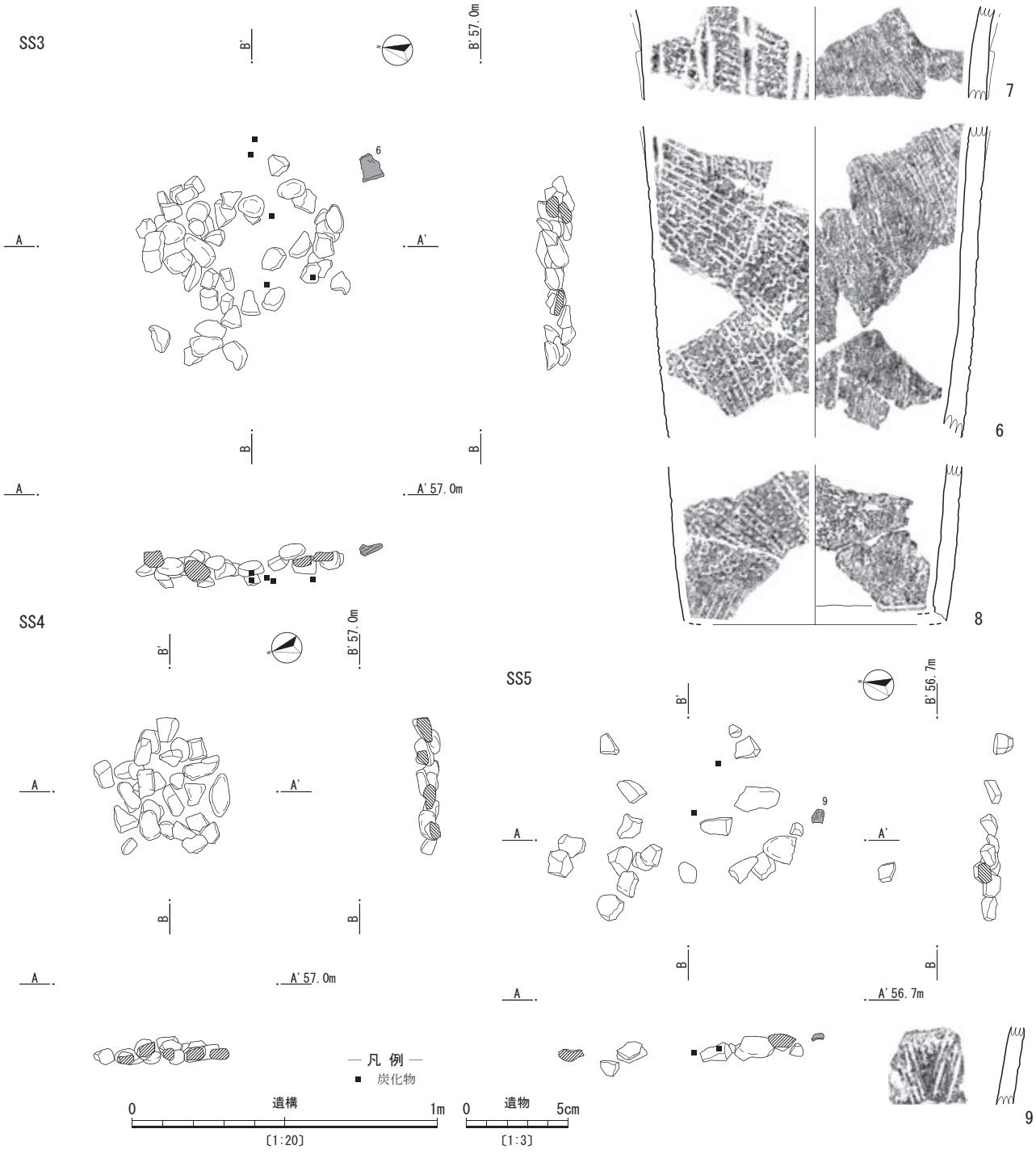
Ｇ－５区のＶｂ層上面で検出された。礫は約 50 × 50 ㎝の範囲にまとまる。構成礫は 25 個で，３点のみ凝灰岩で，他は砂岩である。角が丸い亜角礫がほとんどで,焼けた礫や破砕したものは少ない。平均の重さは 191g であり，やや大型の礫が多い。礫下に掘り込みはみられず，炭化物も出土していない。



第 13 図　集石１号と出土遺物



第 14 図　集石２号と出土遺物



第 15 図　集石３号～５号と出土遺物

集石５号（第 15 図）

Ｇ－５区のＶｂ層上面で検出された。礫は約 90 × 70 ㎝の範囲にややまとまっている。構成礫は 20 個で，すべて砂岩である。平均の重さは 310g であり，大型の磨石状の礫が破砕したものがほとんどである。礫下には掘り込みではないが，炭化物を含んだ染みこみの範囲が認められる。炭化物を２点，礫間から採取し，AMS 年代測定を行ったところ，２σ暦年代範囲で 8924calBC-8737calBC（55.3%）及び 9125calBC-8998calBC（40.1%）の結果が得られた。土器は南側に１点出土した。

９は深鉢の胴部で，斜方向の貝殻条痕文がみられる。

集石６号（第 16 図）

Ｇ・Ｈ－６区のⅥ層上面で検出された。礫は約 130 × 120 ㎝の範囲に広がっており，集中部は約 70 × 70 ㎝の範囲でまとまっている。構成礫は 61 個で，１点のみ凝灰岩で，他は砂岩である。平均の重さは 229g であり，拳大の礫が多く，直径 10 ㎝を超える礫も確認される。全体的に赤色化した破砕礫が多く，被熱の影響が考えら

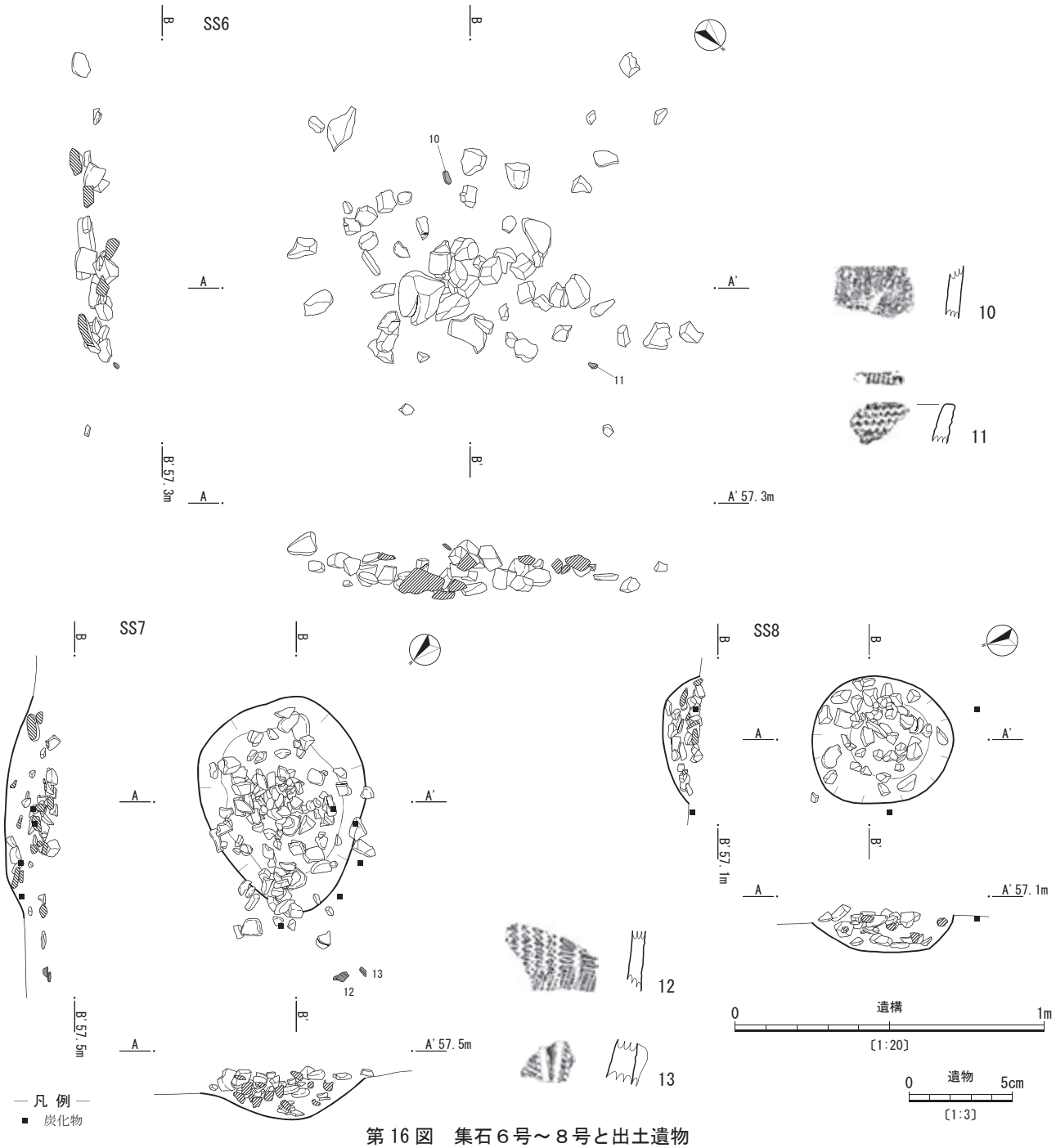
れる。礫下に掘り込みはみられず，炭化物も検出されなかった。土器は集中部の外側に２点出土した。

10 は深鉢の胴部で，摩耗しているが縦位の貝殻刺突文が薄く残っている。11 は深鉢の口縁部で，横位の貝殻刺突文が３条みられ，口唇部は刻み目が入る。

集石７号（第 16 図）

Ｈ－６区のⅥ層上面で検出された。礫は約 90 × 50 ㎝の範囲に集中している。構成礫は 132 個で，すべて砂岩である。平均の重さは 241g であり，大小様々な大きさがみられる。全体的に被熱を受けたと考えられ，割れ口がはっきりしたものが多い。礫集中部分の下に 70 × 60 ㎝程度の掘り込みがみられ，埋土は白色粒・褐色粒を多く含む黒色土であり，微細な炭化物が含まれていた。炭化物を５点採取し，AMS 年代測定を行ったところ，周辺土器との年代に乖離がみられたため，２回目の測定を行っている。詳しくは第５章を参照されたい。土器は集中部の東側に２点出土した。

12・13 は深鉢の胴部である。12 は下部に縦位の刻み目がみられることから，底部付近と考えられる。13 はシャープさを欠いた楔形突帯の一部が残る。



第 16 図　集石６号～８号と出土遺物

集石８号（第 16 図）

Ｇ－６区のⅥ層上面で検出された。礫は約 60 × 70 ㎝の範囲に集中している。構成礫は 46 個で，すべて砂岩である。平均の重さは 58g であり，100g 以下の小礫が多く，大型の礫が多い近隣の集石６号と対照的である。赤色化した礫も含まれており，破砕礫が多いことから，被熱の影響が考えられる。礫集中部分の下に 50 × 40 ㎝程度の掘り込みがみられ，埋土は黄色粒・白色粒を多く含む黒色土であった。炭化物を２点，礫周辺から採取し，AMS 年代測定を行ったところ，２σ暦年代範囲で 8833calBC-8621calBC（95.4%）の結果が得られた。近隣に土器は出土していない。

集石９号（第 17 図）

Ｇ－６区のⅥ層上面で検出された。礫は約 110 × 100 ㎝の範囲に広がっており，約 70 × 60 ㎝の範囲に方形状にまとまる部分がみられる。構成礫は 39 個で，８点が砂岩で，他はすべて凝灰岩であり，他の集石と比較して石材の違いが大きい。平均の重さは 95g であり，150g 以下の小礫がほとんどである。赤色化した礫や，掘り込みや炭化物は確認されなかった。土器は集中部の南側に１点出土した。

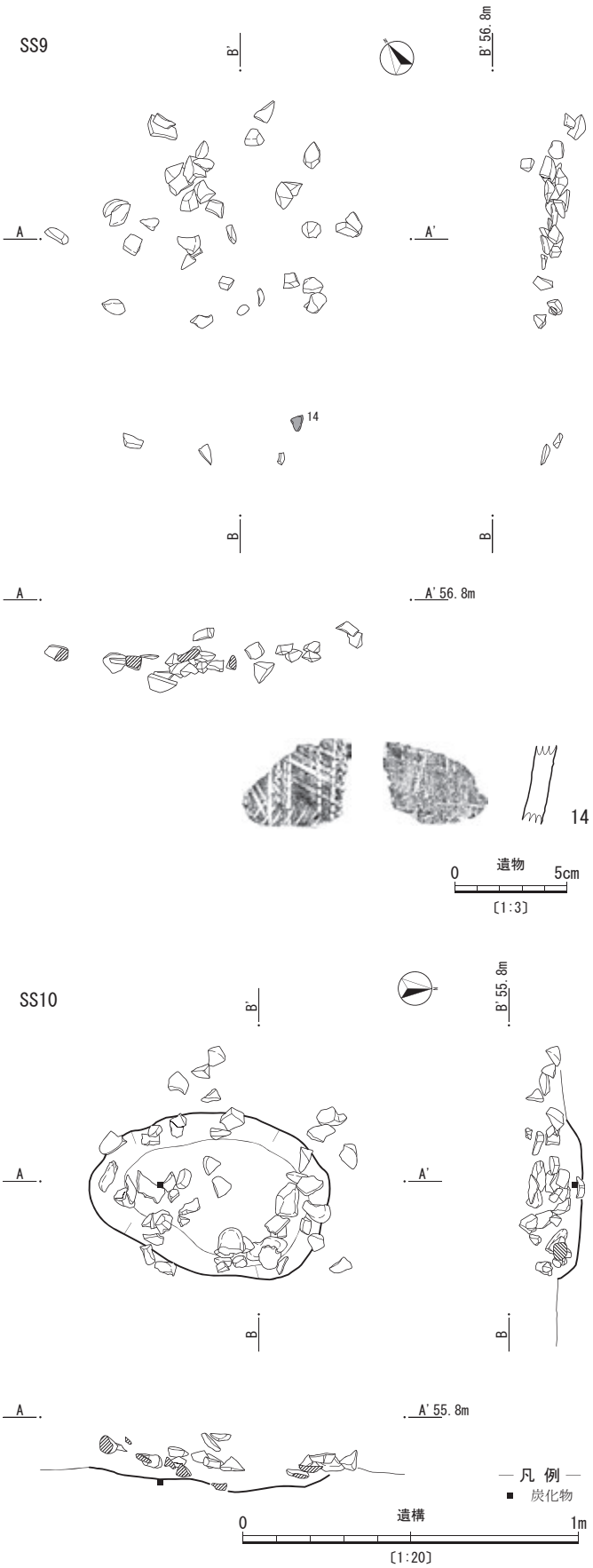
14 は深鉢の胴部で，斜め方向の貝殻条痕文の上に縦位の貝殻刺突文が施されている。下側に斜めの刻みがあることから，底部付近と考えられる。

集石 10 号（第 17 図）

Ｅ・Ｆ－５区のⅥ層上面で検出された。礫は約 70 × 70 ㎝の範囲に方形状にまとまっている。構成礫は 49 個で，すべて砂岩である。平均の重さは 116g であり，200g 以下の破砕礫がほとんどである。礫集中部の下に約 70 × 50 ㎝の楕円状の掘り込みがみられ，埋土は微細な白色粒・褐色粒を含む黒褐色土である。炭化物を１点，掘り込みの床面付近から採取し，AMS 年代測定を行ったところ，２σ暦年代範囲で 8308calBC-8246calBC（25.1%）の結果が得られた。土器は出土していない。

集石 11 号（第 18 図）

Ｅ－５区のⅥ層上面で検出された。２段にわたる掘り込みがあり，ほぼその範囲から礫が出土し，特に２段目に集中する。１段目を含めた掘り込みの範囲は約 60 × 60 ㎝，２段目は約 45 × 40 ㎝を測り，形状は円形に近い。埋土は微細な白色粒・黄色粒を含む黒色土で，Ⅴｂ層土が主体と考えられる。構成礫は 46 個で，すべて砂岩である。平均の重さは 119g であり，200g 以下の赤色化した破砕礫がほとんどである。炭化物や遺物は出土していない。



第 17 図　集石９号・10 号と出土遺物

集石 12 号（第 18 図）

Ｅ－５区のⅥ層上面で検出された。礫は約 60 × 70 ㎝の範囲に菱形状にまとまっている。構成礫は 54 個で，すべて砂岩の破砕礫であり，７割程度が赤色化している。平均の重さは 86g であり，ほぼ 200g 以下の小礫で構成される。掘り込みや炭化物はみられない。土器は集中部の北側に１点出土した。

15 は深鉢の胴部で，横方向の貝殻条痕文が施されている。

集石 13 号（第 18 図）

Ｉ－７区のＶｂ層上面で検出された。礫は約 70 × 40 ㎝の範囲にあり，南側にやや集中する部分がある。構成礫は 18 個で，２点が凝灰岩で，他はすべて砂岩である。ほぼ破砕しており，平均で 57g と，小さめの礫が主体である。赤色化しているものも少量みられる。炭化物や遺物は出土していない。

集石 14 号（第 19 図）

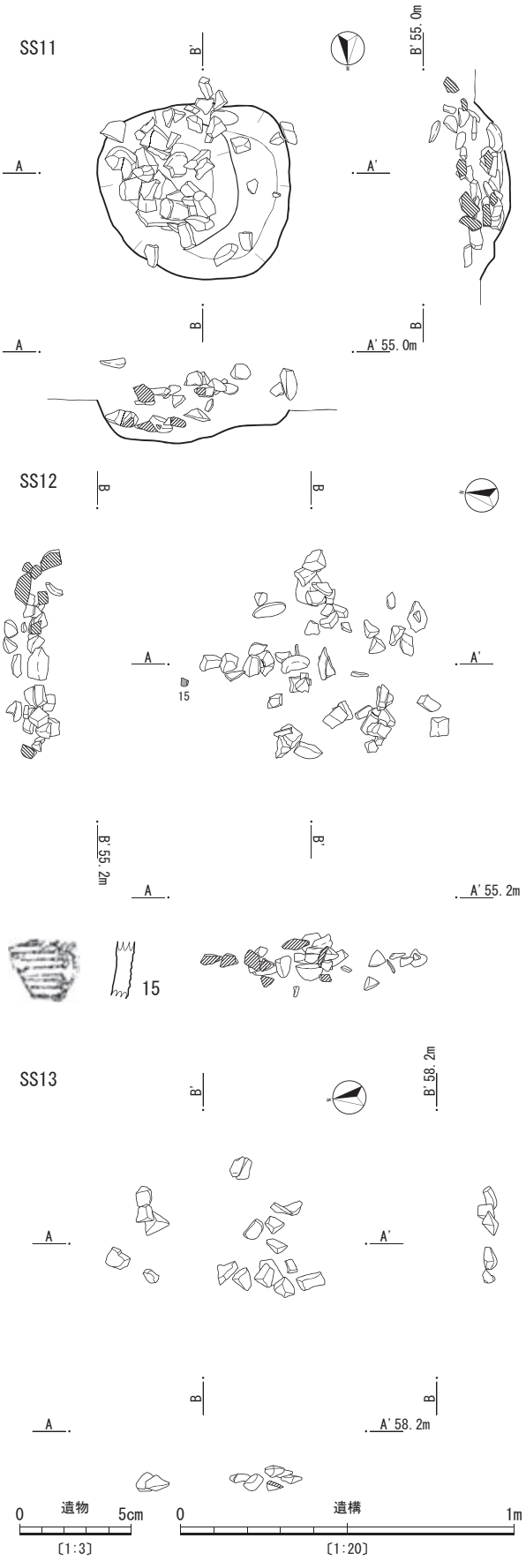
Ｆ－ 11 区のⅥ層上面で検出された。礫は約 220 × 120 ㎝の範囲に南北方向に広がっており，集中部は約 60 × 50 ㎝の範囲にまとまり，下に円形の掘り込みがみられる。掘り込みの埋土は，微細な白色粒・黄色粒を含む黒色土で，Ｖｂ層土が主体である。構成礫は 91 個で，すべて砂岩である。亜角礫や円礫が破砕したものがほとんどであり，平均で 95g と，小さめの礫が主体である。赤色化しているものはみられず，炭化物は出土していない。土器は広がった状態で６点出土した。

16 は深鉢の胴部で，斜方向の貝殻条痕が施される。17 は円筒形の深鉢で，口縁部を縦筋の入った山形の工具で押圧し，胴部外面全体及び胴部内面上部に貝殻条痕を施している。外面の条痕は上は横方向で，下側は斜め方向となる。17 については，この集石上部だけでなく，隣接する集石 15 号の礫集中部及びこれら２つの集石周辺に広がっていた。土器が接合していることから，集石 14・15 号はほぼ同時期と考えられる。

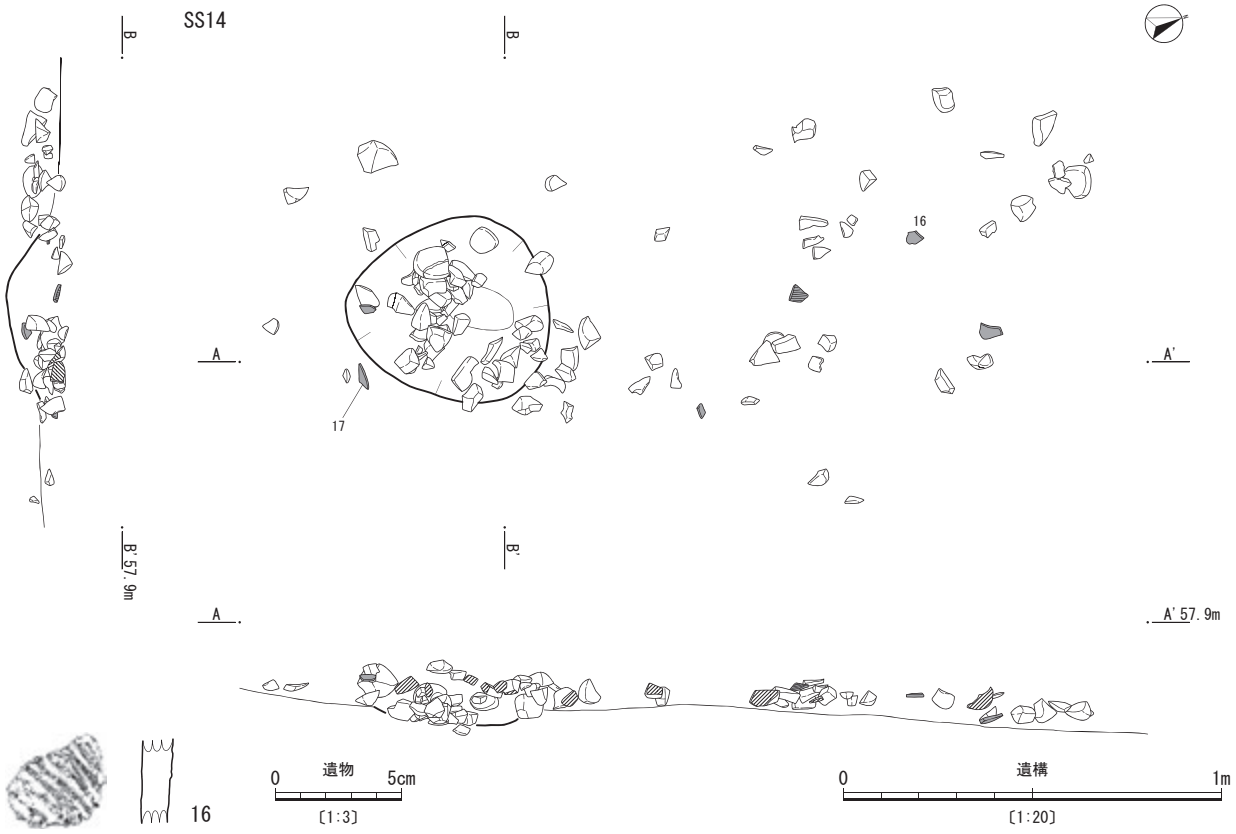
集石 15 号（第 20 図）

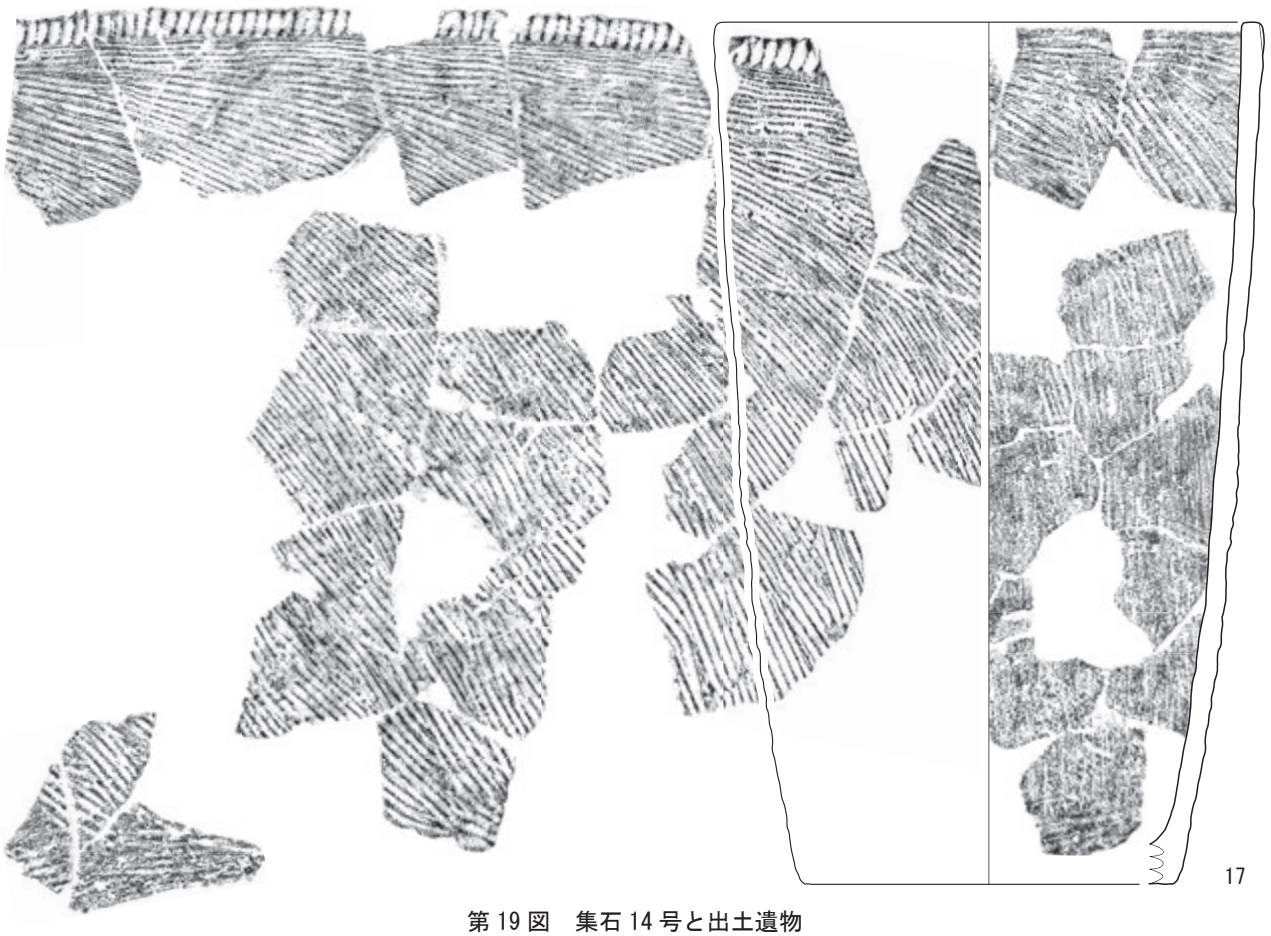
Ｆ－ 11 区のⅥ層上面で検出された。礫は約 110 × 100 ㎝の範囲に南北方向に広がっており，集中部は約 50 × 50 ㎝程度の範囲にまとまるが，掘り込みはみられない。構成礫は 41 個で，１点が頁岩で，他はすべて砂岩である。亜角礫や円礫が破砕したものがほとんどで，平均で 192g と他の集石より大きめの礫が多い。赤色化しているものはみられず，炭化物は出土しなかった。土器は中心から周辺まで広がった状態で 11 点出土しており，17 の一部を含む。

18･19 は深鉢の胴部で，斜方向の貝殻条痕が施される。



第 18 図　集石 11 号～ 13 号と出土遺物



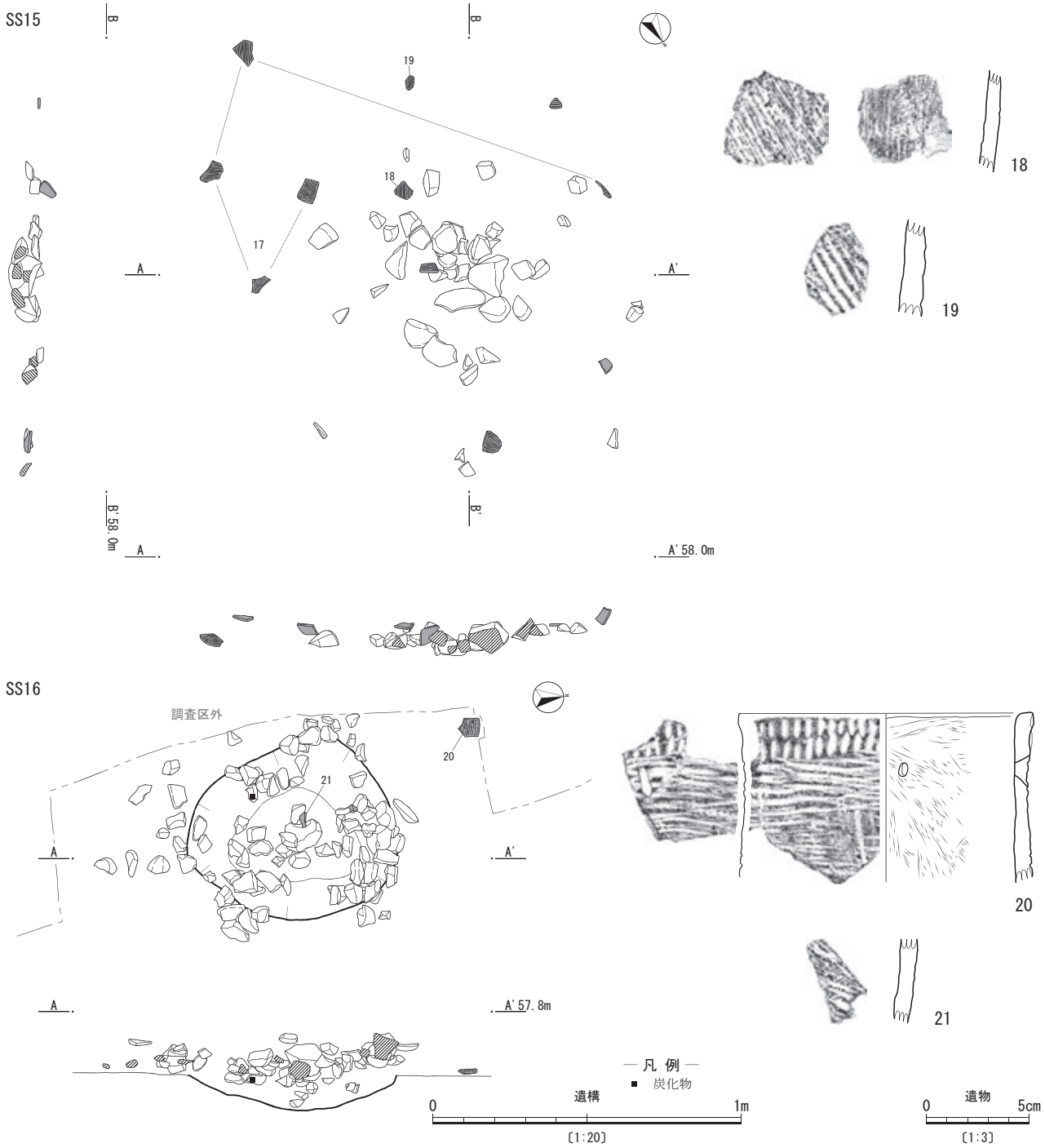


第 19 図　集石 14 号と出土遺物

集石 16 号（第 20 図）

Ｆ－ 11 区のⅥ層上面で検出された。調査区西側の壁際にあたり，用地外に広がる可能性が高い。礫は約 100 × 70 ㎝の範囲にまとまっており，集中部の下に約 70 × 60 ㎝程度の円形の掘り込みがみられ，埋土は微細な白色粒・褐色粒を含む黒褐色土である。構成礫は 88 個で，すべて砂岩の破砕礫である。平均で 146g と大小様々な礫で構成されており，一部は被熱し，赤色化した礫も含んでいる。炭化物は礫の下部より１点出土しており，AMS 年代測定を行ったところ，２σ暦年代範囲で 8719calBC-8554calBC（95.4%）の結果が得られた。土器は北側に１点，中心部分の上部に１点出土している。

20 は前平式土器の深鉢の口縁～胴部で，口縁部外面に２列の楕円形の押圧，その下に横方向の貝殻条痕がみられる。また１か所に外面 12 ㎜，内面６㎜程度の穿孔が施されており，外側から垂直方向に削ったと考えられる。21 は深鉢の胴部で，斜方向の貝殻条痕がみられる。



第 20 図　集石 15 号・16 号と出土遺物

集石 17 号（第 21 図）

Ｆ－12 区のⅥ層上面で検出された。集石 16 号と同様，調査区西側の壁際にあり，用地外に広がる可能性が高い。礫は約 50 × 50 ㎝の範囲に集中しており，その下に約 70 × 70 ㎝程度の楕円形の掘り込みがみられ，埋土は１㎜程度の白色粒・黄褐色粒や微細な炭化物を多く含む黒色土である。構成礫は 66 個で，６点が砂岩，他が凝灰岩と他の集石と比較すると石材構成の違いが大きい。平均で 66g と小型で破砕した礫が主体であり，一部は被熱している。炭化物は７点散在して出土しており，AMS 年代測定を行ったところ，２σ暦年代範囲で 8809calBC-8638calBC（95.4%）の結果が得られた。土器は礫の上部付近で４点出土している。

22 ～ 24 は深鉢である。22 は胴部で，斜方向の貝殻条痕がみられる。23・24 は底部で，底面に編布痕が施される。

集石 18 号（第 22 図）

Ｆ－12 区のＶｂ層上面で検出された。礫は約 290 × 190 ㎝の範囲に散在しており，礫が集中する部分はみられないため，集石 17 号などの礫を広げた部分にあたる可能性がある。構成礫は 36 個で，２点が凝灰岩，１点が軽石で，他は砂岩である。円礫が破砕したものが多くみられる。平均の重さは 320g で，300g 以上の礫が 12 個と多い。礫下に掘り込みはみられず，炭化物も確認されなかった。土器は散在した状態で７点出土している。

25 ～ 27 は前平式土器の深鉢胴部であり，外面に貝殻条痕が施される。28 は下剥峯式土器の深鉢で口縁部が内弯し，外面には横方向の貝殻刺突文がみられる。

集石 19 号（第 23 図）

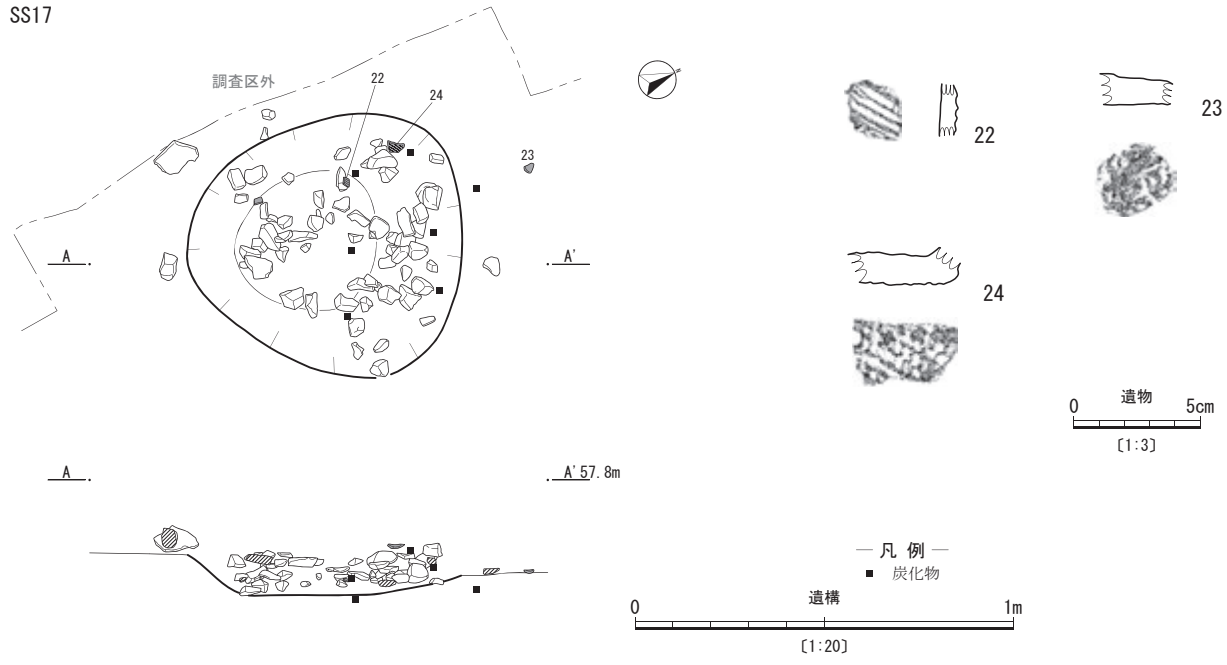
Ｆ－12 区のⅦ層上面で検出された。礫は約 90 × 70 ㎝の範囲にまとまっており，ほとんどが破砕礫である。その下に約 120 × 80 ㎝程度の楕円状の掘り込みがみられ，埋土は黄色粒や白色粒を多量に含む黒色土であり，Ｖ層土が主体と考えられる。構成礫は 91 個で，凝灰岩が 18 点で，他はすべて砂岩である。平均の重さは 92g であり，100g 以下の破砕礫がほとんどである。炭化物は図化していないが中心付近で１点出土しており，AMS 年代測定を行ったところ，２σ暦年代範囲で 8772calBC-8624calBC（95.4%）の結果が得られた。土器は出土していない。

集石 20 号（第 23 図）

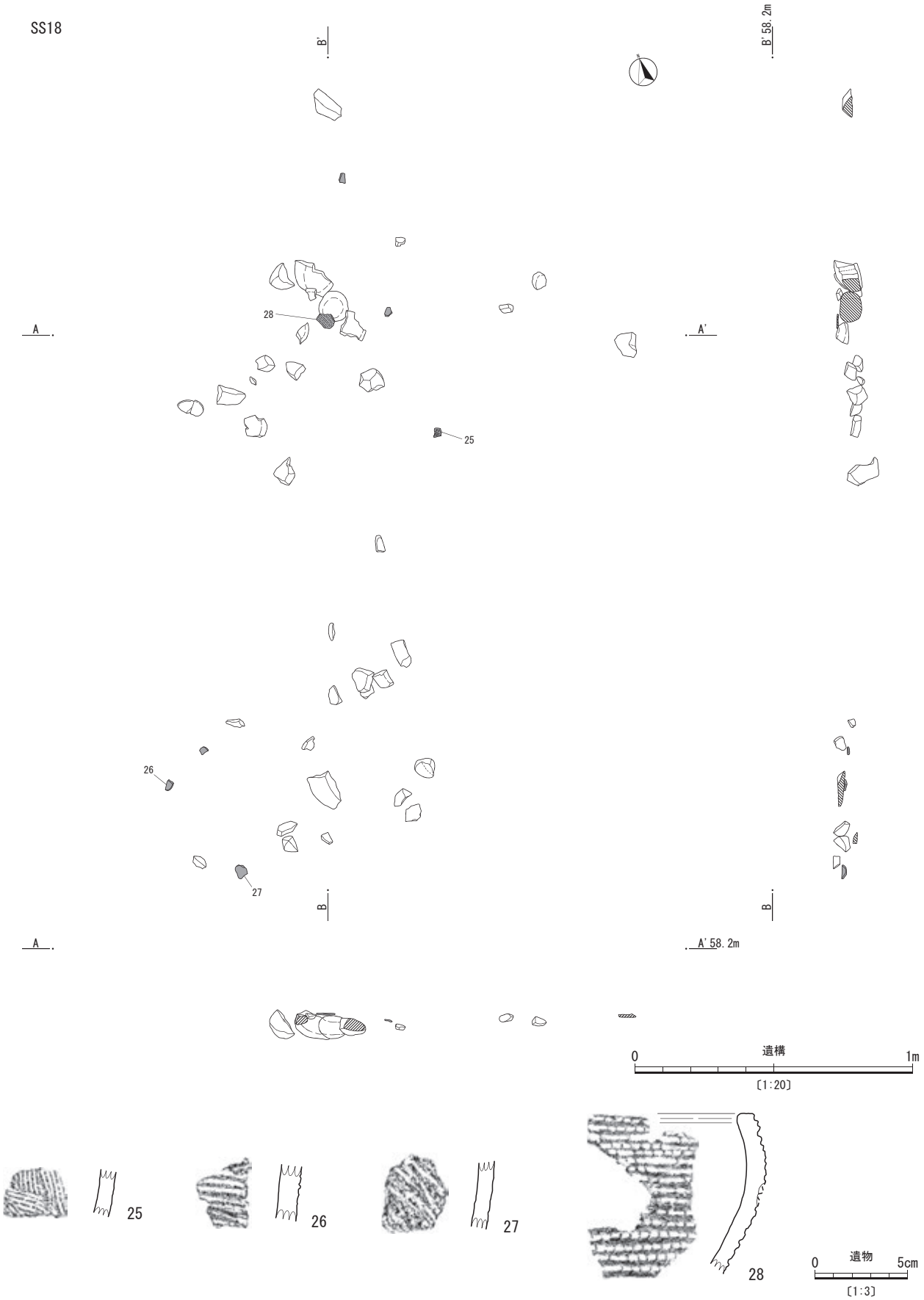
Ｈ－12 区のＶｂ層上面で検出された。礫は約 140 × 150 ㎝の範囲に広がり，集中部では約 50 × 30 ㎝程度のまとまりがある。ほとんどが角礫が破砕したものであり，構成礫は 46 個で，すべて砂岩である。赤色化したものは一部みられる。平均の重さは 78g であり，100g 以下の破砕礫が多い。炭化物や遺物は出土していない。

集石 21 号（第 23 図）

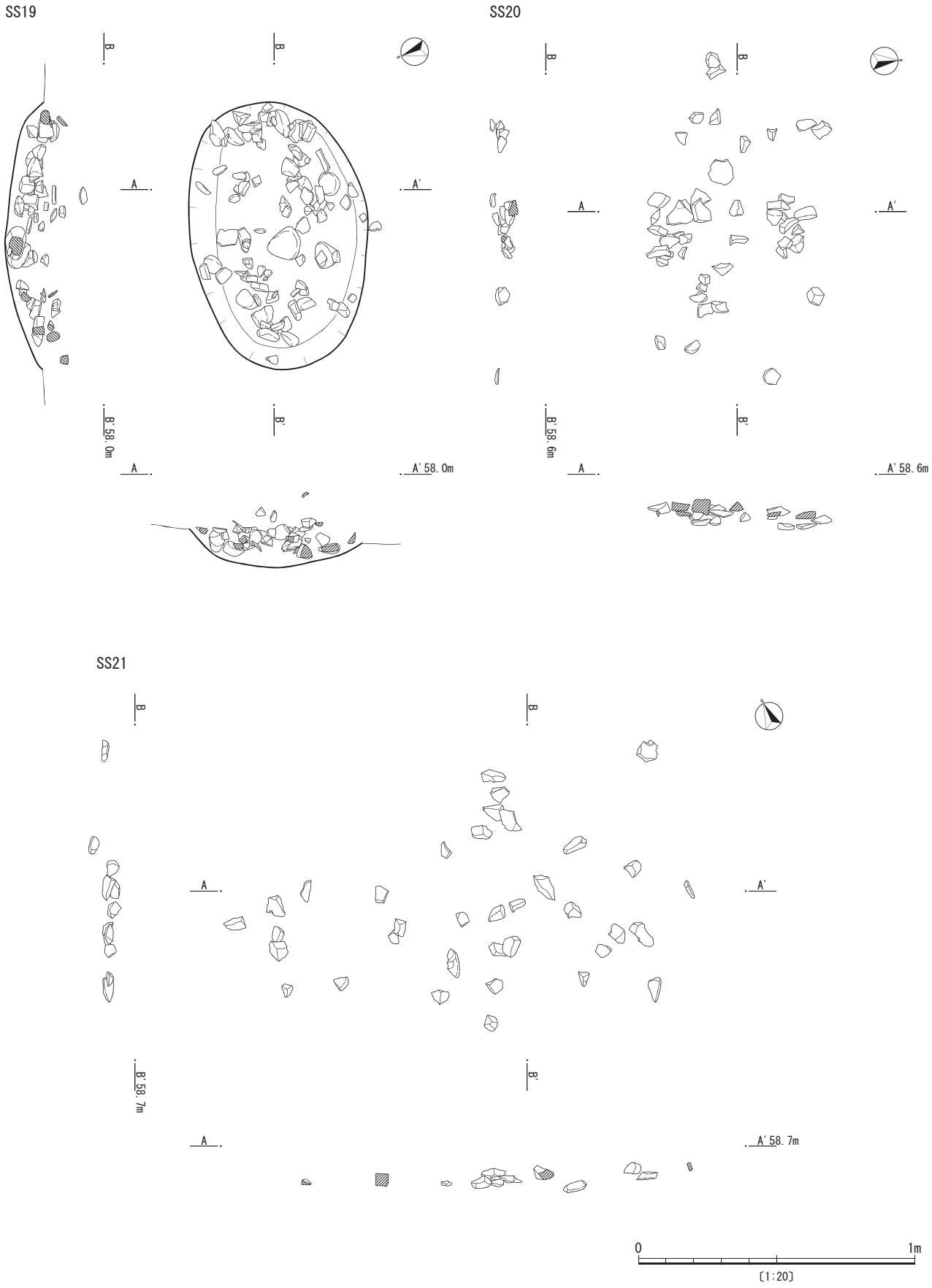
Ｈ－12 区のＶｂ層上面で検出された。礫は約 170 × 100 ㎝の範囲に広がり，集中部はみられない。構成礫は 36 個で，すべて砂岩である。平均の重さは 111g であり，小型の角礫が破砕したものが多い。炭化物や遺物は出土していない。



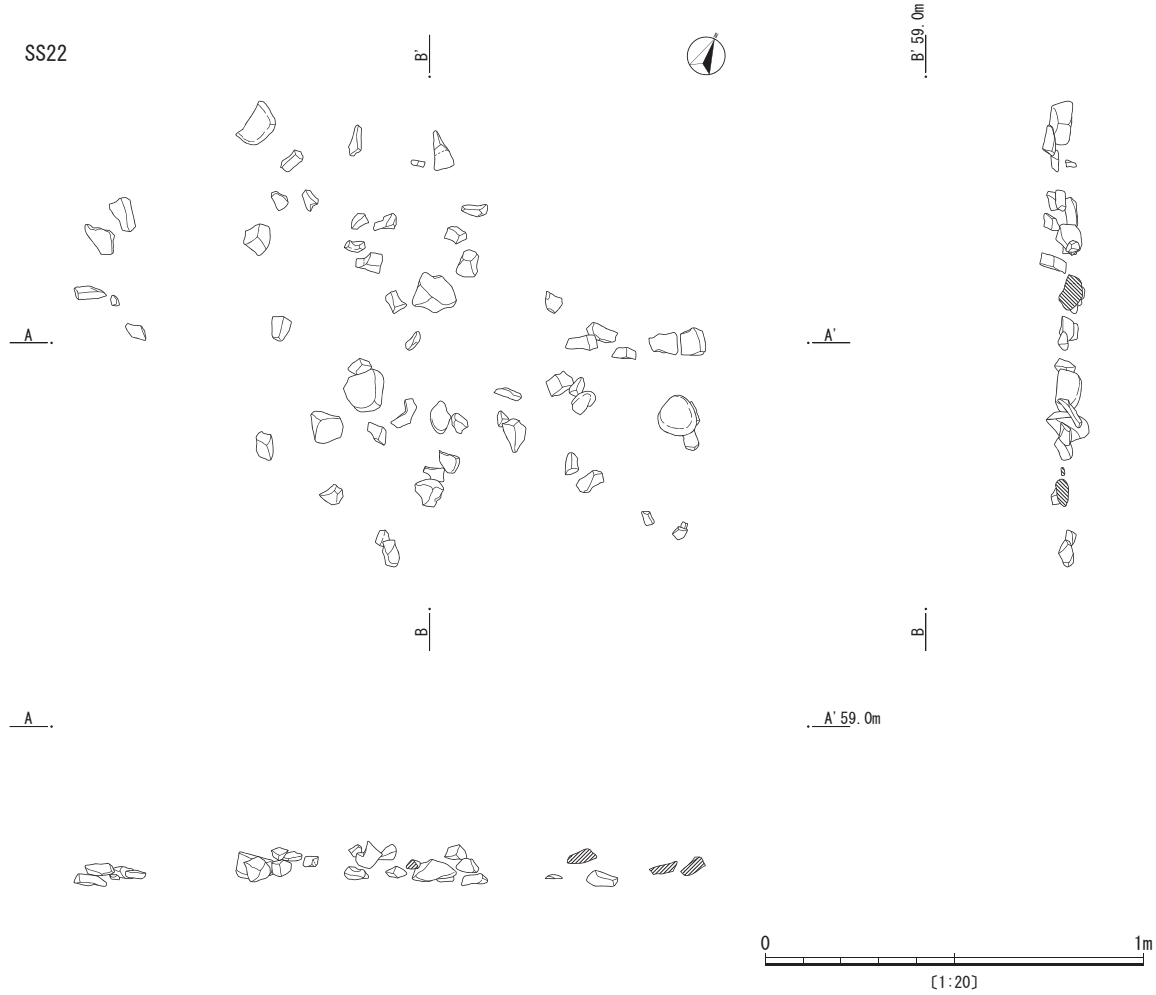
第 21 図　集石 17 号と出土遺物



第 22 図　集石 18 号と出土遺物



第 23 図　集石 19 号～ 21 号



第 24 図　集石 22 号

集石 22 号（第 24 図）

Ｈ－ 12 区のＶｂ層上面で検出された。礫は約 170 × 100 ㎝の範囲に広がっており，密度はあるが特に集中する部分はない。構成礫は 57 個で，１点が凝灰岩で，他はすべて砂岩である。平均の重さは 157g であり，掘り込みはみられず，小型の破砕礫は高さもほぼ均等である。炭化物や遺物は出土していない。

集石 23 号（第 25 図）

Ｈ・Ｉ－ 12・13 区のＶｂ層上面で検出された。礫はほぼ 300 ㎝四方に円形に散在しており，すべての集石の中で一番広がりがあるが，特に集中している部分はない。構成礫は 124 個で，すべて砂岩である。平均の重さは 98g であり，多くが 100g 以下で，小型の破砕礫を主体とする。掘り込みはみられない。炭化物は出土しておらず，土器は３点出土している。

29 は深鉢の胴部で，外面に貝殻条痕文，内部にケズリの痕がみられる。

集石 24 号（第 26 図）

Ｈ－ 13 区のＶｂ層上面で検出された。礫は約 250 × 180 ㎝の範囲に広がっており，特に集中している部分はない。構成礫は 55 個で，凝灰岩が３点で，他はすべて砂岩である。平均の重さは 129g であり，円礫が破砕した小型のものが主体である。掘り込みはみられなかった。炭化物は出土しておらず，土器は１点出土している。

30 は深鉢の胴部で，外面に斜方向の貝殻条痕文がみられる。

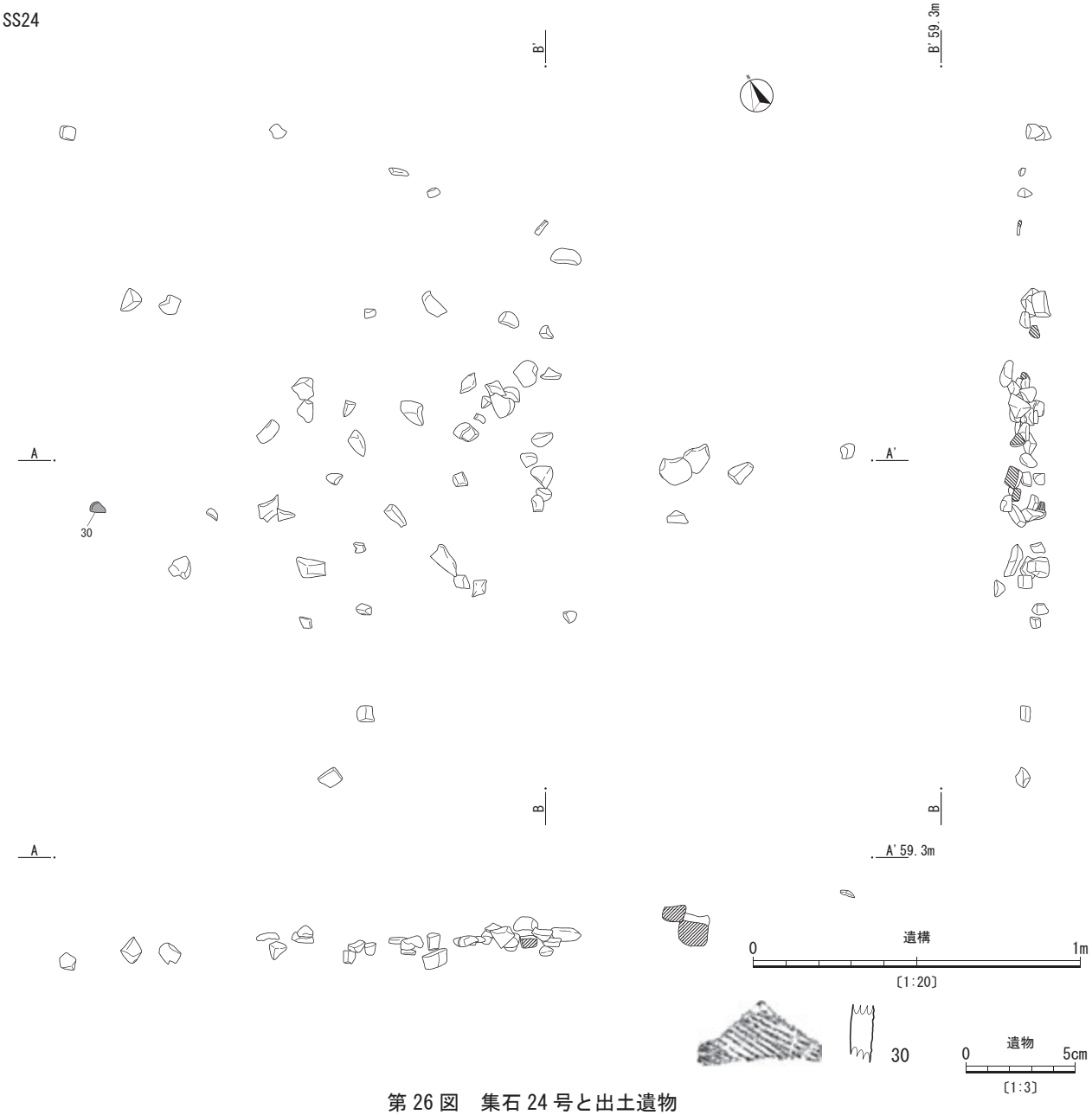
集石 25 号（第 27 図）

Ｊ－ 13 区のＶｂ層上面で検出された。礫は約 280 × 170 ㎝の範囲に広がっており，特に集中している部分はない。構成礫は 72 個で，凝灰岩が２点，花崗岩が１点で，他はすべて砂岩である。平均の重さは 77g であり，100g 以下の小型のものが主体である。赤色化し，被熱したと考えらえる礫が半数以上を占める。炭化物は中心付近より１点出土している。

31 は深鉢の胴部で，外面に斜方向の貝殻条痕文がみられる。



第 25 図　集石 23 号と出土遺物



第 26 図　集石 24 号と出土遺物

集石 26 号（第 28 図）

Ｉ・Ｊ－13 区のＶｂ層上面で検出された。礫は約 150 × 140 ㎝の範囲に広がっており，特に中心部の約 60 × 30 ㎝に集中している。構成礫は 30 個で，頁岩が２点，凝灰岩が１点で，他はすべて砂岩である。角礫が破砕したものがほとんどで，赤色化したものも一部見受けられるが，明瞭な炭化物はみられない。平均の重さは 90g であり，100g 以下で小型のものが７割を占める。石材の構成比率や大きさ等が似ており，近いことから，集石 25 号と関連があると考えられる。土器等の遺物は出土していない。

集石 27 号（第 28 図）

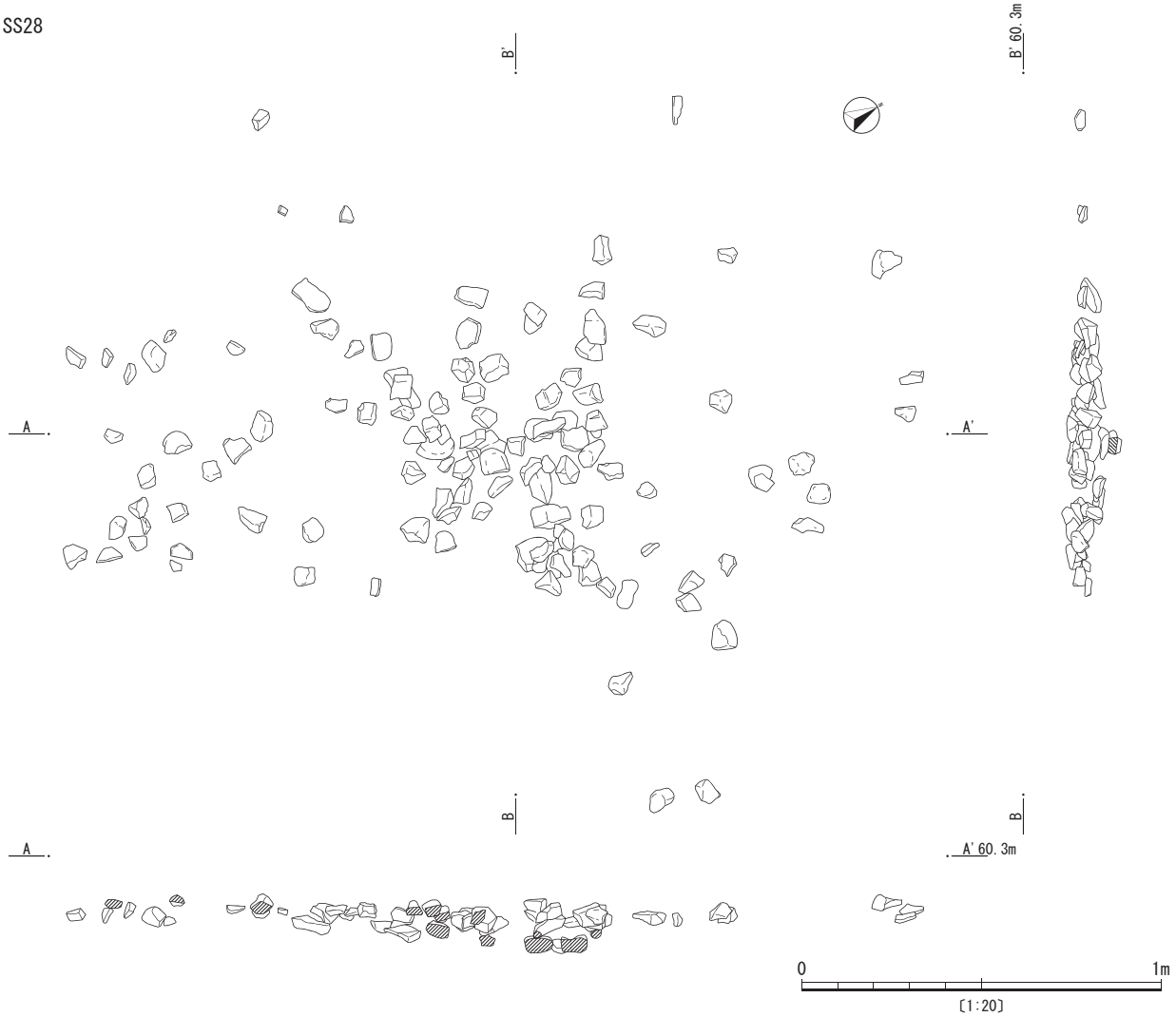
Ｉ・Ｊ－14 区のＶｂ層上面で検出された。礫は約 250 × 200 ㎝の範囲に広がっており，特に中心部の約 60 × 60 ㎝に集中している。中心部付近はわずかに凹むが，掘り込みはみられない。構成礫は 115 個で，頁岩が１点，凝灰岩が２点，安山岩が１点で，他はすべて砂岩である。角礫の破砕したものがほとんどで，赤色化したものや，ススの可能性のあるものが付着したものも一部見受けられるが，明瞭な炭化物は出土しなかった。平均の重さは 60g であり，100g 以下の小型のものが８割を占める。西側に集石 28 号が近接しており，石材の構成や大きさ等が似ており，関連があると考えられる。土器等の遺物は出土していない。



第 27 図　集石 25 号と出土遺物



第 28 図　集石 26 号・27 号



第 29 図　集石 28 号

集石 28 号（第 29 図）

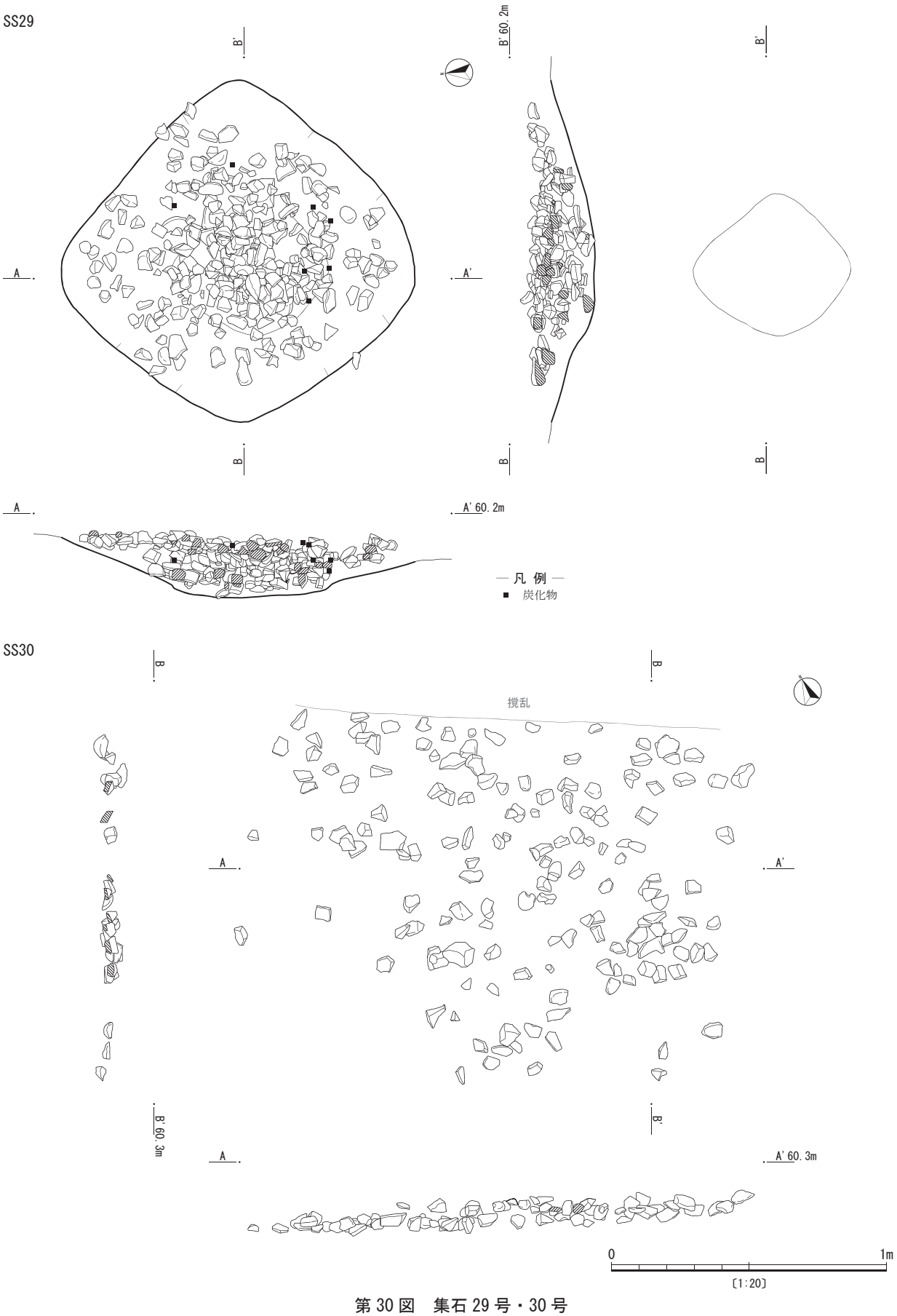
Ⅰ－14 区のⅤｂ層上面で検出された。礫は約 230 × 160 ㎝の範囲に広がっており，特に中心部の約 50 × 50 ㎝に集中しているが，掘り込みはみられない。構成礫は 119 個で，頁岩が２点，凝灰岩が２点，安山岩が１点で，他はすべて砂岩である。角礫の破砕したものがほとんどで,約半数は赤色化している。炭化物は出土していない。平均の重さは 84g であり，150g 以下の小型のものが８割を占める。東側に集石 27 号が近接しており，石材の構成比率や大きさ等が似ており，関連があると考えられる。土器等の遺物は出土していない。

集石 29 号（第 30 図）

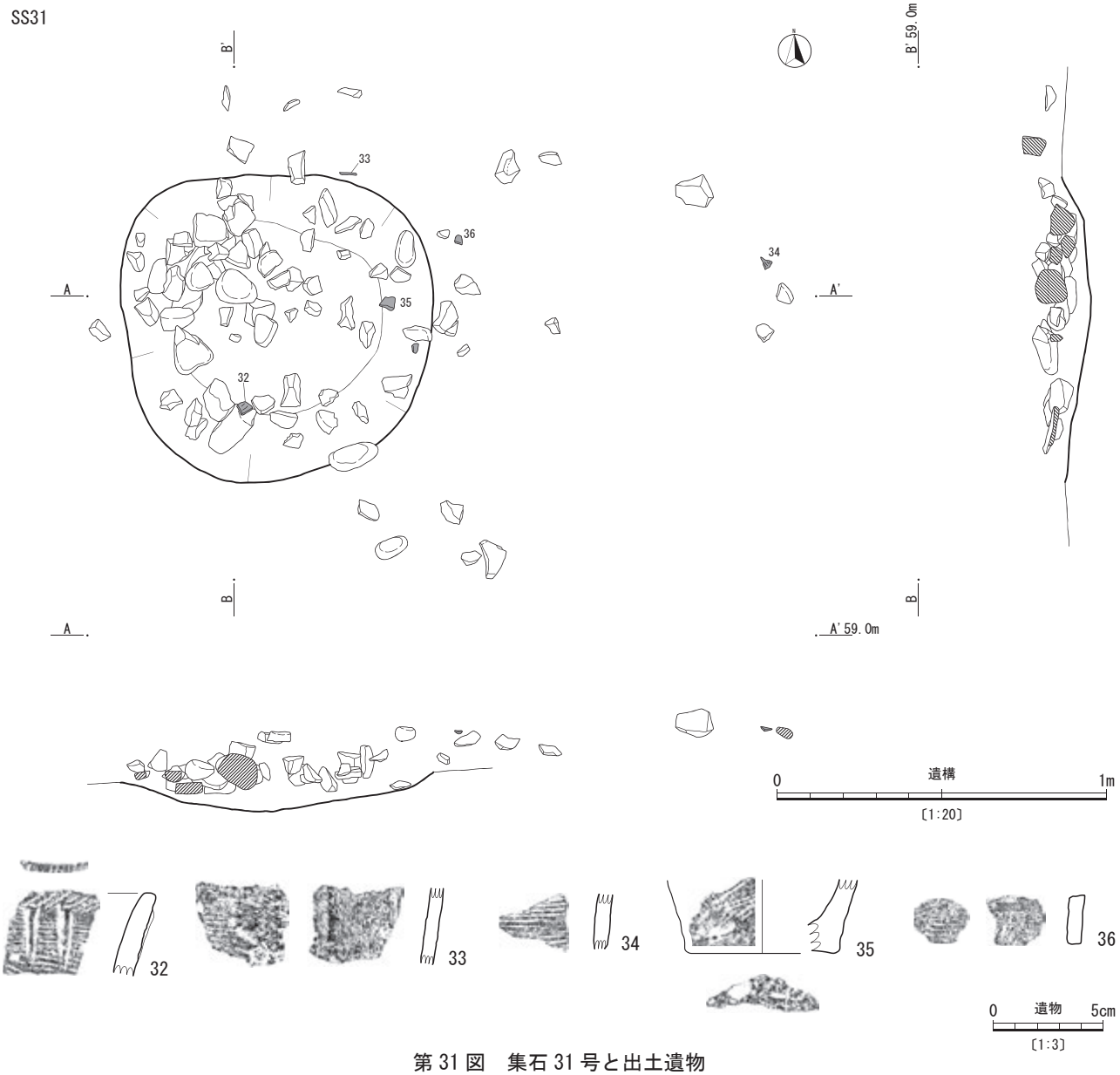
Ⅰ－14 区のⅤｂ層上面で検出された。礫は約 110 × 100 ㎝の範囲に密にまとまっている。平面形や掘り込みは方形状となる。掘り込みの規模は検出面で 100 × 100 ㎝，床面で 50 × 50 ㎝であり，埋土は炭化物を含んだ，少量の黄色粒・白色粒を含む粘性の強い黒色土である。構成礫は 292 個で，凝灰岩が２点，安山岩が２点，他はすべて砂岩である。平均の重さは 51g であり，100g 以下の破砕礫が９割を占める。炭化物は７点，礫間等より出土し，AMS 年代測定を行ったところ，２σ暦年代範囲で 7589calBC-7526calBC（95.4%）の結果が得られた。土器は出土していない。

集石 30 号（第 30 図）

Ⅰ－14 区のⅤｂ層上面で検出された。東西方向に約 200 ㎝，南北方向には約 130 ㎝広がっているが，北側は撹乱を受けていたため，本来は更に広がりがあったものと推測される。礫が他の集石と比較して密である。掘り込みは検出されていない。構成礫は 153 個で，凝灰岩が１点，安山岩が２点で，他はすべて砂岩である。平均の重さは 54g であり，角礫が破砕した小型のものがほとんどで，約７割は赤色化している。東側にある集石 27 ～ 29 号と近接しており，この付近は構成礫の数が多い集石が集中する。炭化物や遺物は出土していない。



第 30 図　集石 29 号・30 号



第 31 図　集石 31 号と出土遺物

集石 31 号（第 31 図）

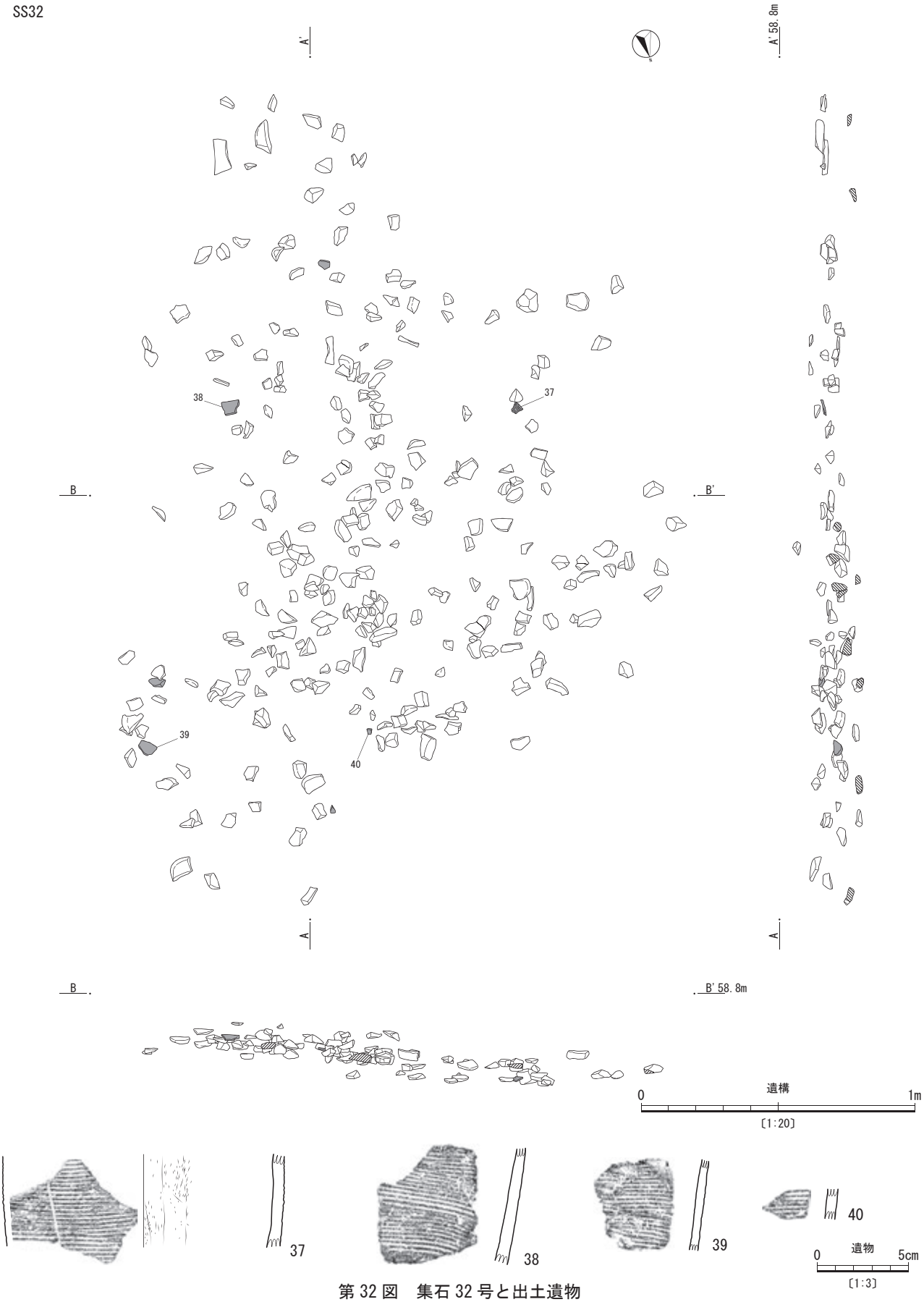
Ｆ－ 15 区のＶｂ層上面で検出された。礫は約 180 × 140 ㎝の範囲に広がっている。礫の集中部には約 80 × 80 ㎝の隅丸方形を呈する掘り込みがみられ，埋土は白色粒・黄色粒や微細な炭化物を含む黒色土である。構成礫は 81 個で，すべて砂岩である。平均の重さは 190g であり，円礫や亜角礫が破砕したものが主体を占める。明瞭な炭化物は確認されなかったが，土器が６点出土している。

32 ～ 35 は深鉢である。32 は口縁部で，口唇部や口縁上端に貝殻刺突による刻み目が入り，その下に楔形突帯がみられる。33･34 は胴部で，横方向の貝殻条痕が入る。35 は底部で，外面は横方向にナデ，その上から貝殻条痕を施している。36 は胴部片を再利用した円盤形土製品である。

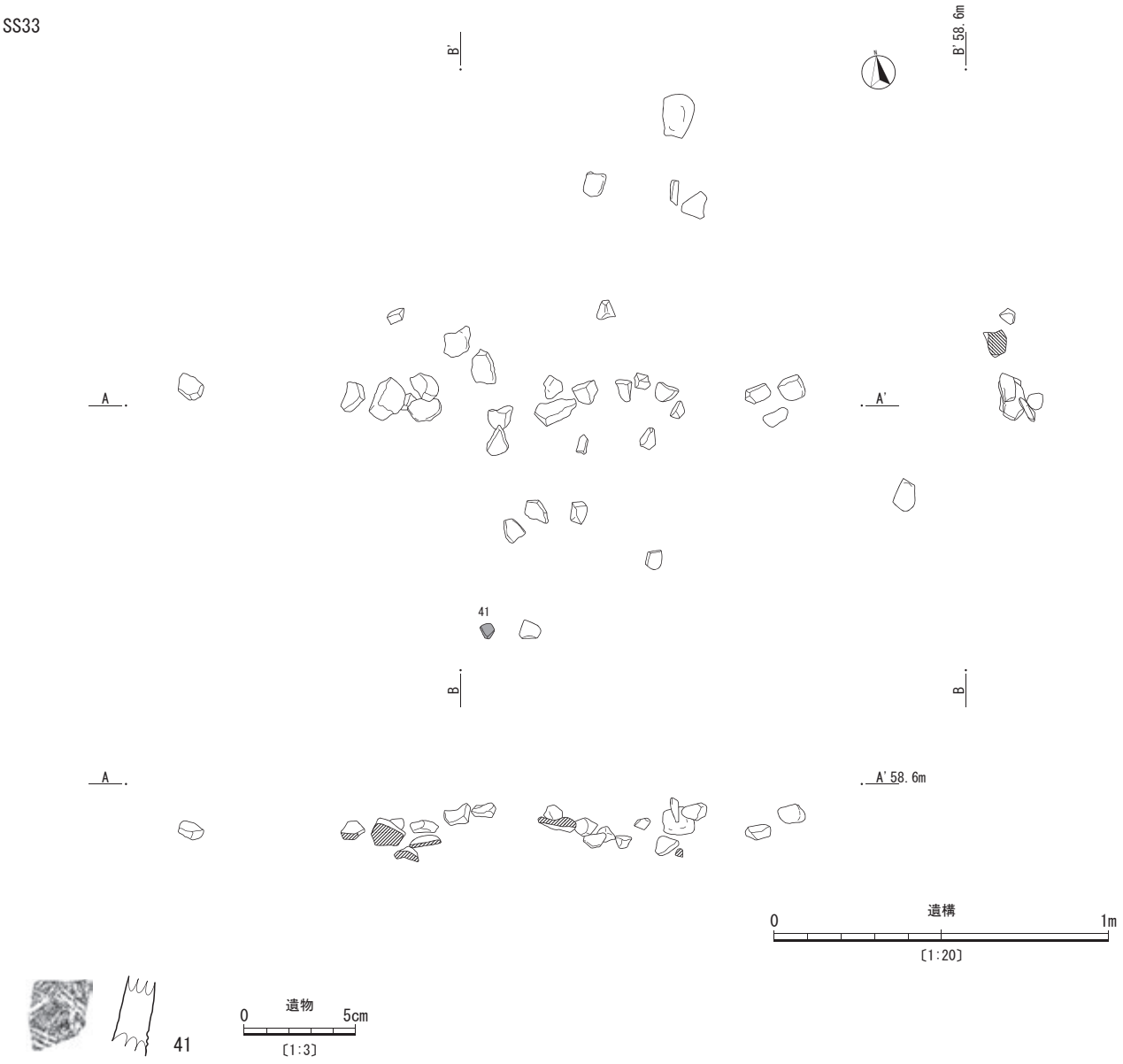
集石 32 号（第 32 図）

Ｆ－ 15 区のＶｂ層上面で検出された。礫は約 300 × 200 ㎝の範囲に広がっている。礫が密になっている部分があるが，掘り込みはみられない。構成礫は 254 個で，すべて砂岩である。平均の重さは 68g であり，200g 以下の破砕礫がほとんどである。微細な炭化物は点在するが，明瞭なものは出土していない。集石 31 号に近接しており，関連があるものと考えられる。土器は７点出土している。

37 ～ 40 はすべて深鉢の胴部であり，横方向の細かい貝殻条痕が施され，同一個体の可能性がある。



第 32 図　集石 32 号と出土遺物



第 33 図　集石 33 号と出土遺物

集石 33 号（第 33 図）

Ｅ・Ｆ－ 17 区のＶｂ層上面で検出された。礫は約 200 × 140 ㎝の範囲に散在している。掘り込みはみられない。構成礫は 34 個で，すべて砂岩である。平均の重さは 136g であり，やや大きめの角礫もみられる。他の集石と距離があるが，調査区西側境に近く，調査区外に関連する礫が広がる可能性がある。炭化物の出土はなく，土器が１点出土している。

41 は深鉢の胴部で，斜方向の貝殻条痕が施される。

（２）土坑（７基）

土坑１号（第 34 図）

Ｈ－６区のⅦ層上面で検出された。唯一調査区北側の集石群近くに位置する。検出面における平面形は約 75 × 65 ㎝の正円に近い楕円形を呈する。深さは検出面より 35 ㎝程度で，床面は約 55 × 40 ㎝の楕円形となる。埋土は色調等からⅥ層土主体と考えられる。遺物は出土していない。

土坑２号（第 34 図）

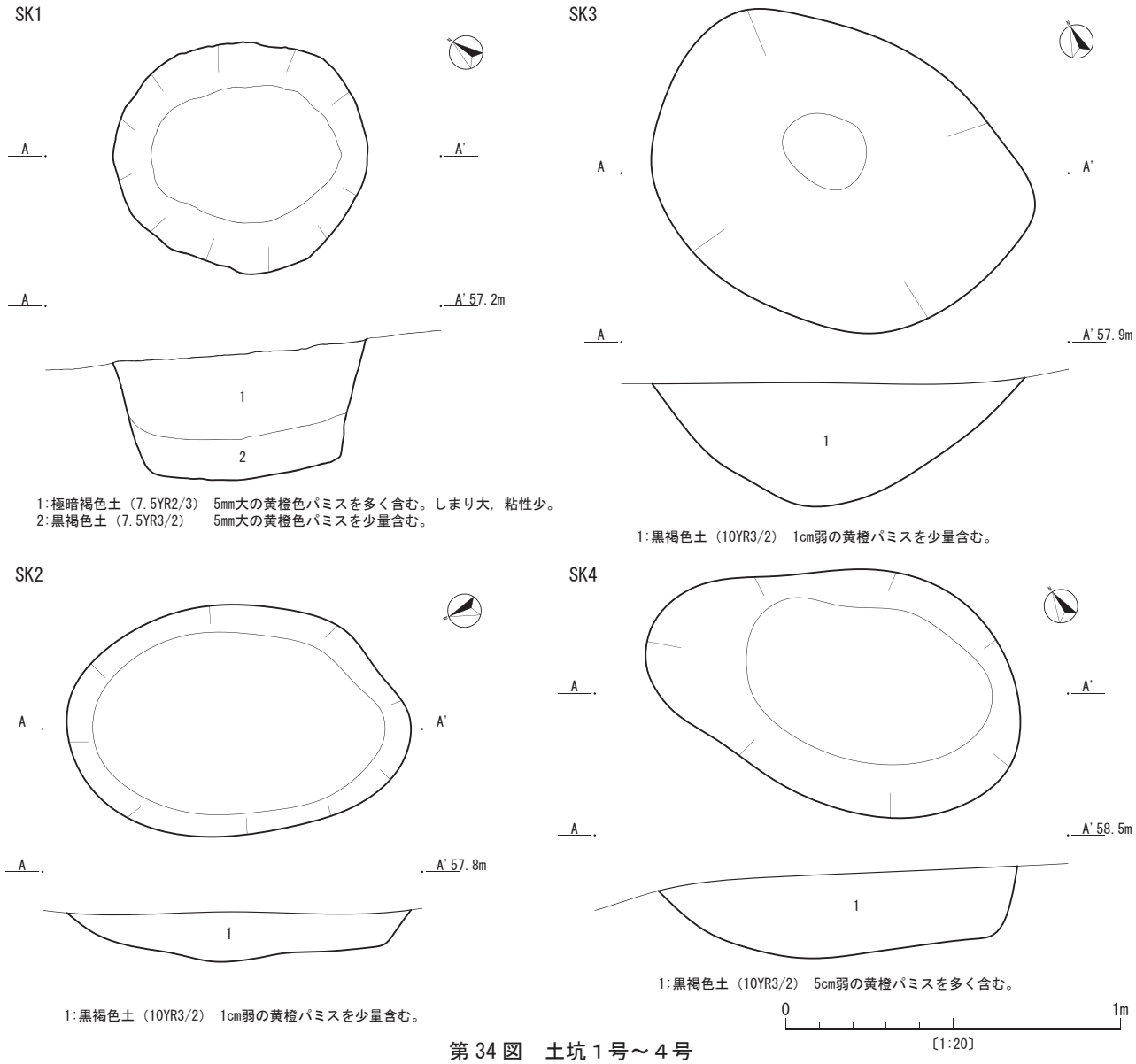
Ｆ－ 12 区のⅦ層上面で検出された。集石 18 号の下位に位置しており，関連が考えられるが，礫等は出土していない。検出面における平面形は約 100 × 70 ㎝の楕円形を呈する。検出面からの深さは 15 ㎝程度で，床面はやや凹凸のある楕円形となる。埋土は色調等からⅥ層土主体と考えられる。

土坑３号（第 34 図）

Ｆ－ 12 区のⅦ層上面で検出された。検出面における平面形は約 110 × 90 ㎝の隅丸方形を呈する。深さは検出面より 35 ㎝程度である。掘り込みの角度は緩く，床面は約20 × 20 ㎝程度で他の土坑と比較し極めて小さい。埋土は色調等からⅥ層土主体と考えられる。遺物は出土していない。

土坑４号（第 34 図）

Ｇ－ 13 区のⅦ層上面で検出された。検出面における平面形は約 115 × 75 ㎝の楕円に近い不整形を呈する。深さは検出面より 25 ㎝程度で，床面は約 75 × 45 ㎝の楕円形となる。埋土は色調等からⅥ層土主体と考えられる。遺物は出土していない。



第 34 図　土坑１号～４号

土坑５号（第 35 図）

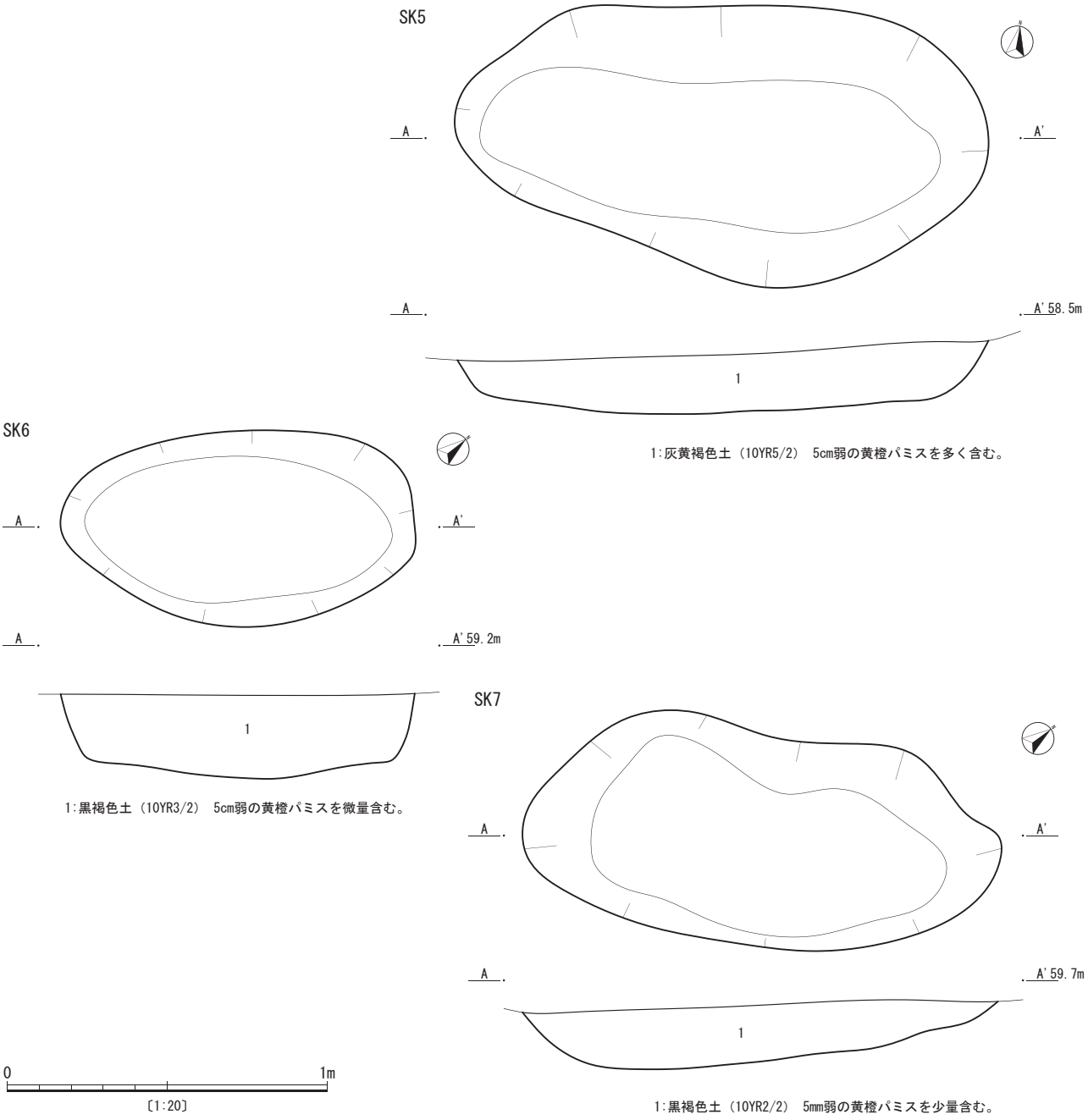
Ｈ－ 12 区のⅦ層上面で検出された。検出面における平面形は約 165 × 85 ㎝の楕円に近い不整形を呈する。深さは検出面から 15 ㎝程度で，床面は平坦で約 125 × 45 ㎝の楕円に近い不整形となる。埋土は他の土坑の埋土より黒色が弱く，どの層由来の土かは不明である。遺物は出土していない。

土坑６号（第 35 図）

Ｈ－ 13・14 区のⅦ層上面で検出された。検出面における平面形は約 110 × 60 ㎝の楕円形を呈する。深さは検出面から 25 ㎝程度で，床面はやや凹凸がある約 95 × 45 ㎝の楕円形となる。埋土は色調等からⅥ層土主体と考えられる。遺物は出土していない。

土坑７号（第 35 図）

Ｉ－ 14 区のⅦ層上面で検出された。検出面における平面形は約 150 × 70 ㎝の不整形を呈する。深さは検出面より 20 ㎝程度で，床面は平坦であるが，西側に向かってやや深くなる。埋土は色調等からⅥ層土主体と考えられる。遺物は出土していない。

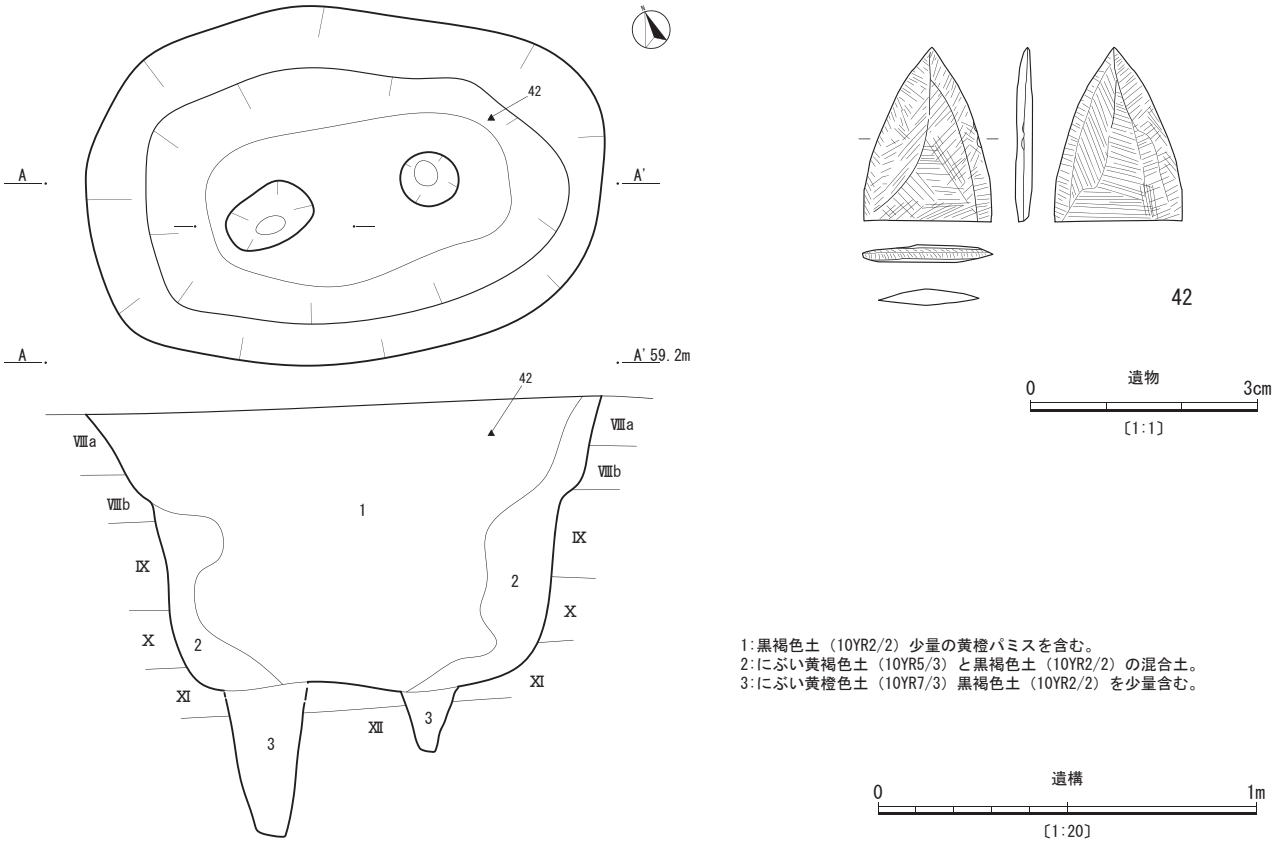


第 35 図　土坑５号～７号

（３）落とし穴（１基）

Ｈ－ 13 区のⅧａ層上面で検出された。検出面における平面形は約 135 × 95 ㎝の隅丸方形を呈する。検出面からの深さ約 25 ㎝付近で段が付き，その下位は床面までほぼ垂直に掘り込まれている。床面はⅪ層で，約 80 × 40 ㎝の隅丸方形を呈し，平坦である。２つの明瞭な逆茂木痕がみられる。西側の逆茂木痕の深さは 40 ㎝程度，東側は 15 ㎝程度である。埋土に関しては，２及び３から，１の順に堆積したものと推定され，他の土坑と比較し黒色が強いことからⅤ層土と考えられる。埋土１中，検出面から 10 ㎝程度の深さで磨製石鏃が出土している。

42 は磨製石鏃である。石材は頁岩で，厚さは２㎜程度である。全体を磨き薄く仕上げている。鏃の中心から先端及び基部両端を結ぶ線を基準に，左右の側面をやや弧状となるように研磨し，二等辺三角形状に仕上げている。抉りはみられない。



第 36 図　落とし穴と出土遺物

第４表　遺構番号振替表

縄文時代早期							
集石						土坑	
掲載番号	調査番号	掲載番号	調査番号	掲載番号	調査番号	掲載番号	調査番号
SS1	SS8	SS12	SS3	SS23	SS24	SK1	SK6
SS2	SS11	SS13	SS9	SS24	SS21	SK2	SK9
SS3	SS13	SS14	SS31	SS25	SS22	SK3	SK8
SS4	SS12	SS15	SS30	SS26	SS20	SK4	SK13
SS5	SS10	SS16	SS29	SS27	SS16-2	SK5	SK12
SS6	SS7	SS17	SS32	SS28	SS16-1	SK6	SK14
SS7	SS1	SS18	SS27	SS29	SS14	SK7	SK11
SS8	SS6	SS19	SS28	SS30	SS15	落とし穴	SK10
SS9	SS5	SS20	SS26	SS31	SS17		
SS10	SS2	SS21	SS25	SS32	SS19		
SS11	SS4	SS22	SS23	SS33	SS18		

中世	
大型土坑・土坑	
掲載番号	調査番号
大型土坑 1	SX1
大型土坑 2	SH1
SK8	SX2
SK9	SK7
近世	
土坑	
掲載番号	調査番号
SK10	SK3
SK11	SK2
SK12	SK5
SK13	SK4

３　包含層出土の土器

（１）概要

包含層のＶａ層・Ｖｂ層・Ⅵ層で出土している早期土器は 1201 点あり，うち 371 点を図化した。前葉から後葉まで多種あるが，主体となるのは円筒形を呈し，貝殻の条痕や押圧文が胴部にみられる前平式土器と志風頭式土器・加栗山式土器・小牧３Ａ式土器・札ノ元Ⅶ類土器など前葉の土器である。型式分類のできなかった破片が 170 点あり，この大半は前平式土器で，一部札ノ元Ⅶ類土器が含まれていると思われる。

前平式土器は円筒形土器で，胴部に貝殻条痕を施している。条痕は斜位（Ⅰ類）と，横位（Ⅱ類），縦位と横位の２種あるもの（Ⅲ類）とがある。口縁端断面はⅠ類が三角形，Ⅱ類・Ⅲ類は矩形あるいは円形を呈している。口縁端近くに押圧文が付されるが，Ⅰ類には１段のものが多く，Ⅱ類になるとほとんど２段である。

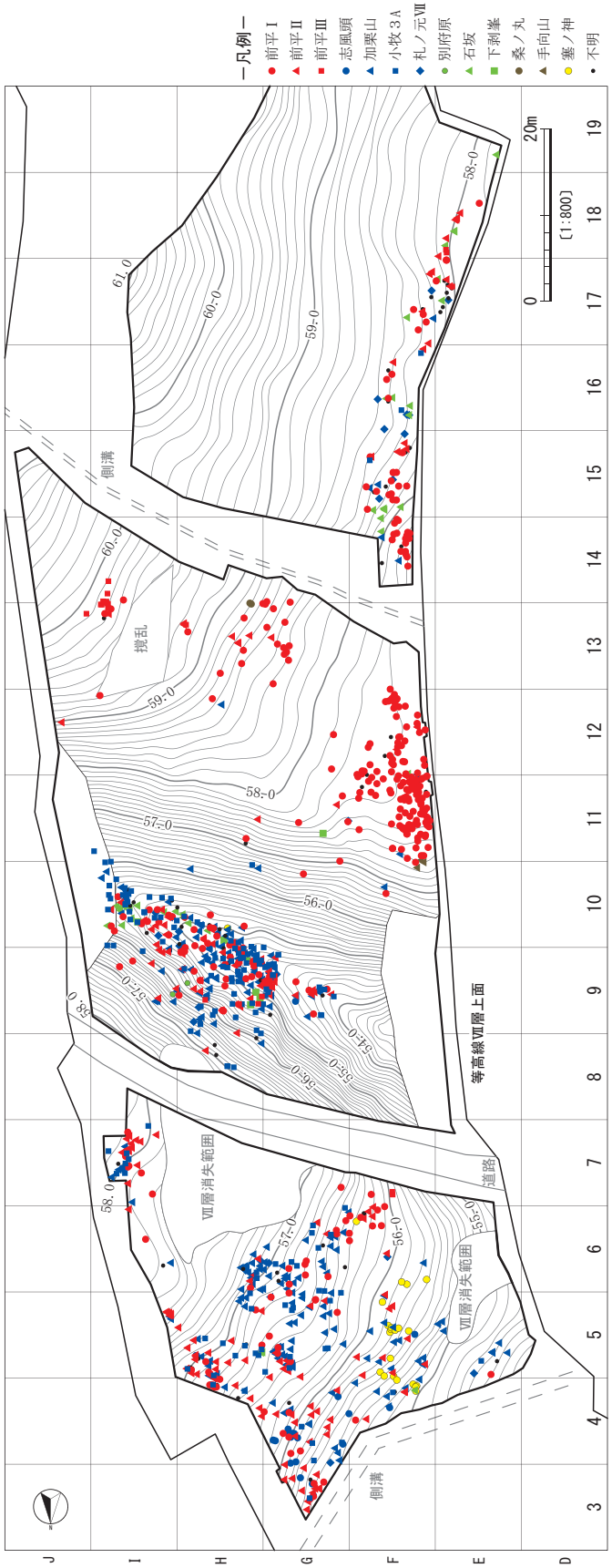
志風頭式土器は胴部に貝殻条痕の後，縦あるいは斜方向沈線文や二枚貝貝殻（以下，貝殻を省いて二枚貝と略す）押圧文を施した角筒土器である。

加栗山式土器には円筒土器と角筒土器とがある。胴部に貝殻条痕のあと，二枚貝腹縁押圧文を縦方向に施したもので，口縁部に楔形突帯が貼り付けられている。小牧３Ａ式土器は楔形突帯を貼り付けるなど加栗山式土器と似ているが，角筒土器はなく，胴部の条痕を消したあと貝殻押圧文が付されない。札ノ元Ⅶ類土器は，小牧３Ａ式土器と似ているが，条痕が浅い。貼付突帯は短かったり，細く，周辺は調整をしないものも多い。

他に中葉から後葉の別府原式土器，石坂式土器，下剥峯式土器，桑ノ丸式土器，押型文土器，手向山式土器，塞ノ神Ａａ式土器，塞ノ神Ａｂ式土器などが少量ずつ出土している。

別府原式土器は口縁端が丸みをおび，条痕は蛇行ぎみの横方向である。貼付突帯はない。石坂式土器は胴部条痕が綾杉状を呈するものである。下剥峯式土器と桑ノ丸式土器は分厚い作りで，下剥峯式土器は貝殻を連続して横方向に押し，桑ノ丸式土器は斜方向の短い条痕が施される。

前平式土器Ⅰ類はＦ・Ｇ－６・７区にもやや集中しているが，Ｇ・Ｈ－ 13 区と，Ｆ－ 11 ～ 15 区など南半に多く出土している。Ⅱ類は谷部にもあるが，７区以北に集中し，Ⅲ類はⅠ－ 13・14 区付近に集中している。志風頭式土器は北側のＦ・Ｇ－３・４区に多い。加栗山式土器はＥ～Ｈ－４～６区の北側に多く出土しており，前平式土器に次いで多い。小牧３Ａ式土器は谷頭に多い。



第 37 図　縄文時代早期の土器分布図

（２）出土土器

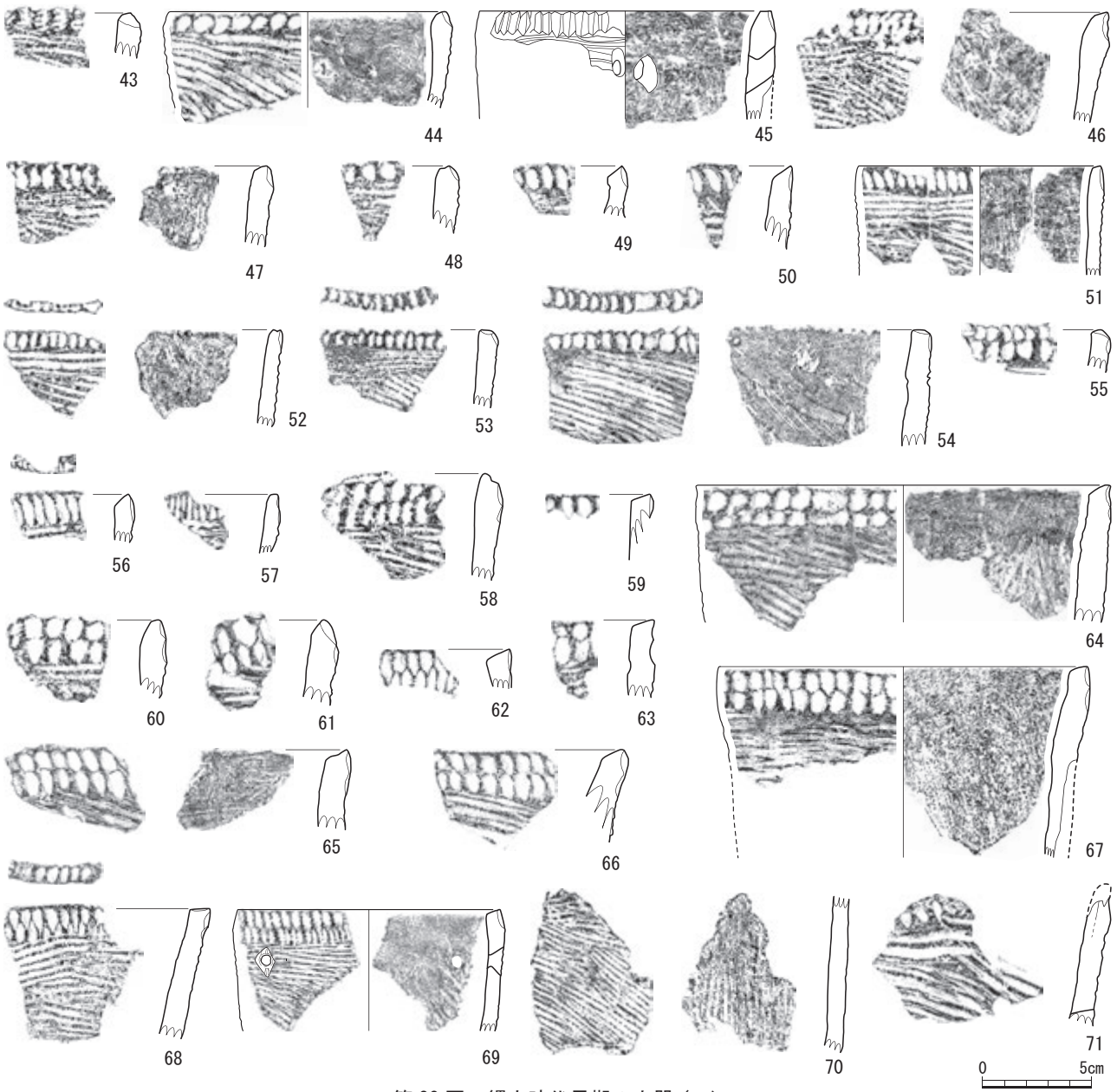
①　前平式土器（第 38 図～第 46 図）

胴部に二枚貝腹縁条痕がある円筒形の土器である。口縁部は，外面から貝殻によって押圧しているが，そのまま内面が直立して三角形断面をなすものと，内面を三角形状にナデて頂部が尖っているもの，内面を直にして平坦な口唇部を作り，そのままにしたものと，口唇部に押圧のあるものとがある。胴部条痕は斜方向のものと，横方向のものとがあるが，条痕幅の狭いものもある。底は安定した平底である。内面調整は縦方向のケズリが多いが，ミガキに近い丁寧なもの，ナデ調整のものもある。

Ⅰ類（第 38 図～第 41 図 43 ～ 110）

外面条痕が斜位となるものである。口縁端は三角形状を呈するものが多いが，矩形を呈し，口唇部に押圧文のあるものもある。口縁部は口唇部に貝殻腹縁を押圧するもの，外面から内側に押圧し，断面三角形を呈するもの，押圧が一段のものと二段のもの，外面に押圧したあと口唇部を平らにし，そこに刻みを施すものとがある。図化した 80 点の他に 210 点の破片が出土している。

17 は集石 14 号でも出土しているため，実測図は第 19 図に掲載した。口径 21.8 ㎝，底径 14.8 ㎝，高さ 34.2 ㎝の直に近い円筒形をしている。口縁端は平坦で，胴部は右下がりの傾斜の強い条痕だが，底部近くはそのあと横にナデている。条痕のあと口縁部に縦方向の貝殻押圧が１段みられる。内面は斜位の貝殻条痕のあとケズリに



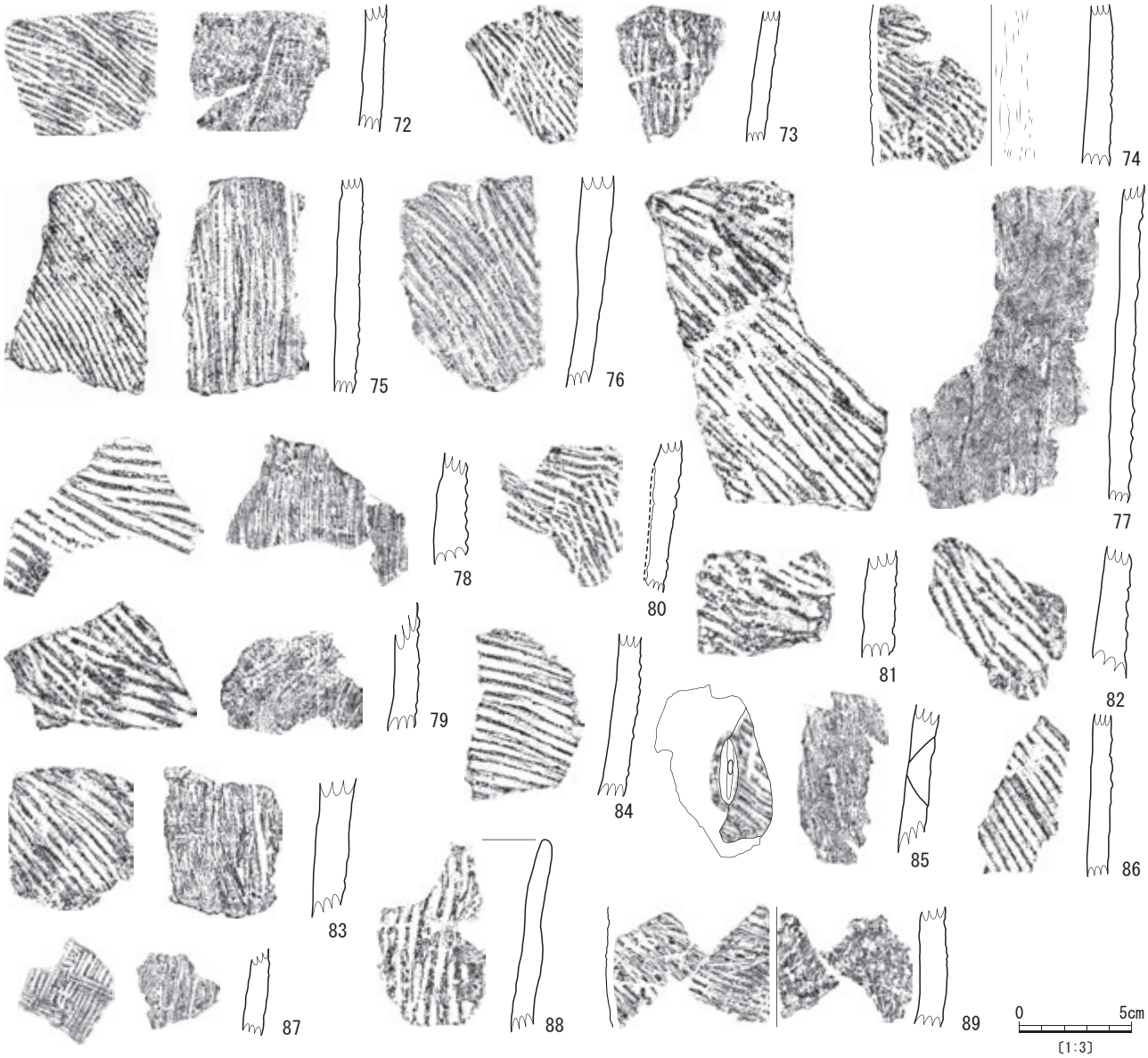
第 38 図　縄文時代早期の土器（１）

よって仕上げ，口縁近くでは部分的に貝殻条痕が残り，胴部の一部にも条痕がみられる。胴部から底部へは丸みをもって移り，底は丁寧にナデている。

43 は内面横ナデ，外面横条痕のあと口唇部に二枚貝腹縁押圧を施すものである。

44 ～ 56 は外面に条痕を施したあと，口縁端に一段押圧文を施している。小型のものが多い。押圧文は木の実様の丸いものを押したものと，二枚貝腹縁を押したもの（46・47），枝状の細いものを押したものとがある。口径は 44 が 12.8 ㎝，45 が 13.0 ㎝，51 が 11.0 ㎝と小型である。口縁端断面は三角形に近いが，51 や 52 のようにやや矩形を呈するものもある。条痕は概して粗い調整である。胴部内面は縦方向のケズリだが，口縁近くは横ナデ調整をしている。45 は内面口縁端近くを横方向に丁寧にナデ，口縁端を断面三角形にしている。外面は広く剥脱し，口縁端近くに補修孔がある。外面から擦切孔を穿っているが，分厚いためか，内面からも擦切孔を穿っており，すれ違いの孔となっている。胎土にやや多くの茶石が含まれている。49・50・56 の口縁内面は強くナデているために断面が三角形状を呈している。52 ～ 56 は口縁端断面が矩形となり，口唇部に刻みが施されている。52・56 の押圧は浅いが，53 ～ 55 は深くしっかりしている。53 は口縁端外面に二枚貝押圧文，口唇部に刻みが施されている。54・55 は外面口縁端近くと口唇部に木の実様の丸いものの押圧文が施される。54 の内面は斜方向のケズリで調整しているが，口縁近くは横方向に丁寧にナデている。

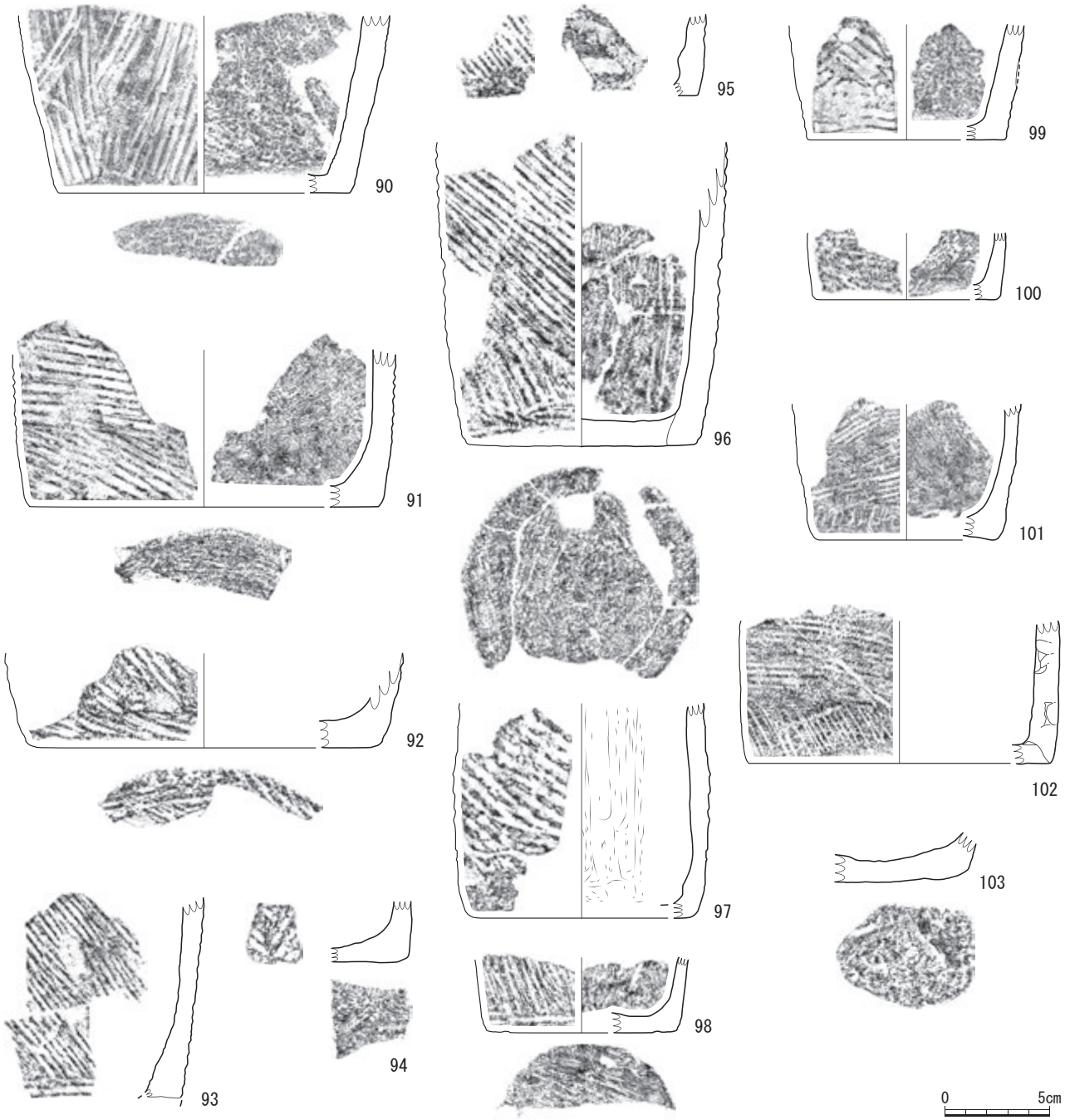
57 ～ 71 は口縁端の押圧文が 2 段になるものである。押圧文は木の実様の丸いものと，巻貝殻頂のもの，二枚貝腹縁のものとがある。口縁端内面は丁寧にナデて，口



第 39 図　縄文時代早期の土器（２）

縁端部の断面を三角形に作っている。64 の口径は 19.0 ㎝，67 の口径は 17.0 ㎝と中型である。67 の焼成度は良いが，外面剥脱が目立つ。68 は外面押圧が２段になっているが，押圧は上段から下段へとし，そのあと条痕を施しているため下段の押圧文下部は消えている所がある。破片の右下部に擦切技法による補修孔がある。69 は口縁端近くでやや内弯する器形で，外面には細い右下がり，横方向の条痕が施されている。口縁端近くには縦方向の貝殻押圧が２段に施され，そのあと口唇部は丁寧にナデている。内面は横あるいは斜方向の丁寧なナデ整形である。口縁付近に補修孔がある。外面から擦切りによって孔をあけ，そのあと円形に整えている。70・71 は口縁端が欠けている。

胴部（72 ～ 89）の外面は多くが右下がり条痕である。78・84 のように横位に近いものと，75・76 のように縦位に近いものもある。72 ～ 76・86 などは幅狭で浅いが，77 ～ 85 は幅広で深い条痕である。特に 77 は深い。内面は浅い縦方向のケズリ調整が多いが，74・76 のように深い段となるものもある。74・76 は硬質で，74 は直径が 10.5 ㎝ほどである。87 は左下がりの細い条痕のあと，部分的に右下がり条痕がみられる。88 は白色石や長石・雲母などを多く含む硬質の土器で縦方向条痕であ

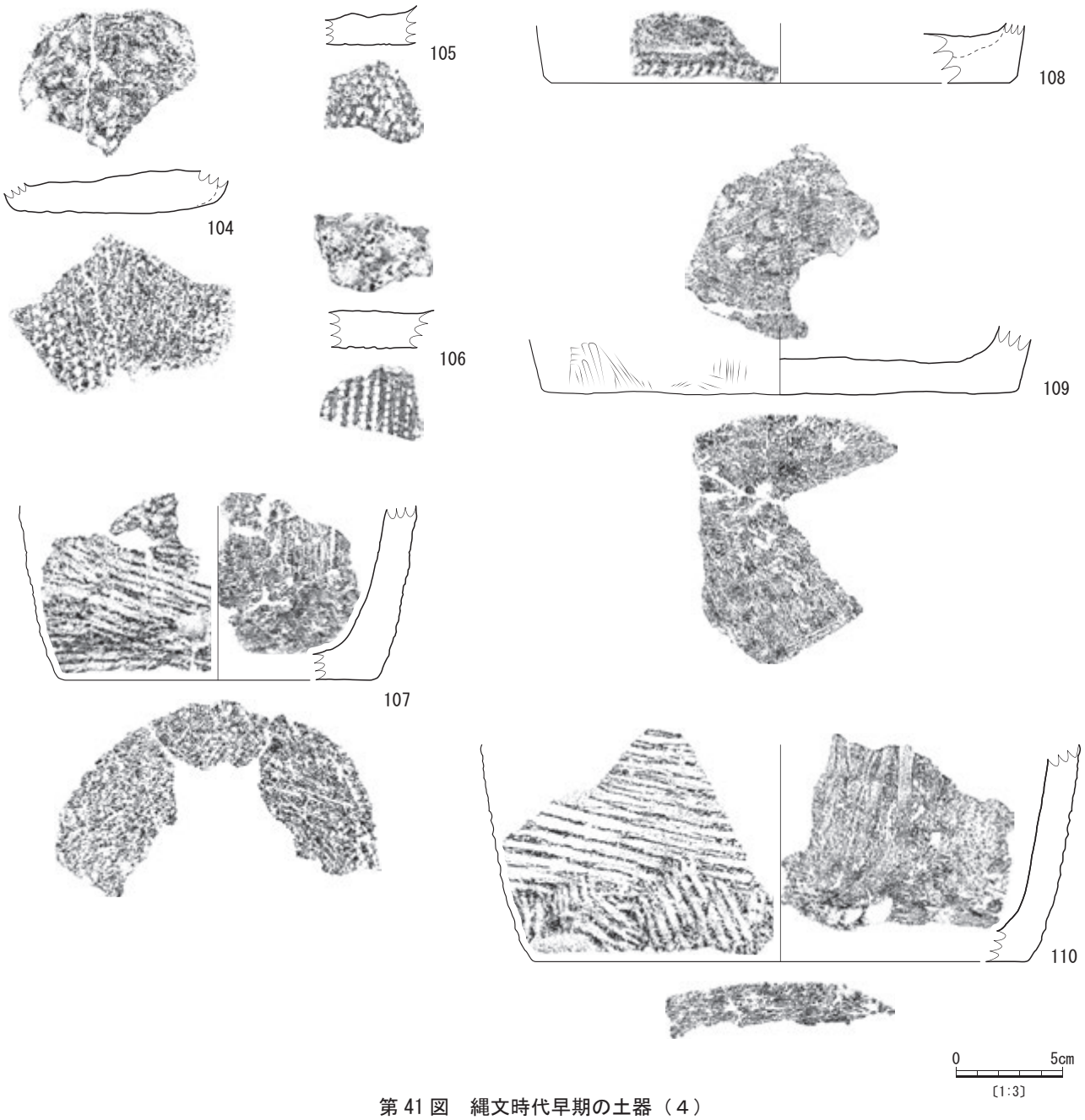


第 40 図　縄文時代早期の土器（３）

る。内面は一部剥脱しているが，オコゲが付着している。89 は底に近い破片で，直径が 14.5 ㎝ほどである。

90 ～ 110 は底部あるいは底部近くの破片である。底部は安定した平底で，胴部からやや丸みをおびて移っている。底径は 8.5 ～ 17.0 ㎝と大小様々である。90 ～ 94 は底部まで条痕が施され，92 の底は網代状圧痕のあと条痕様のナデである。95 ～ 102 は底部近くを横方向にナデている。95 の胴部外面は幅の広い条痕であるが，底近くは丁寧にナデている。96 の胴部外面は深い右下がり条痕だが，底部近くは横方向の条痕となる。円盤状の底部と，筒状の胴部を貼り付ける製作法である。胴内面の剥脱が目立ち，内面にはオコゲが付着している。底はハケ目状ナデである。97 は幅広の条痕である。98 は内外とも磨滅している。外面は幅狭の条痕で，底近くに横方向の２条条痕がある。底には圧痕があるが，丁寧にナデ消している。101 の胴部外面は浅くて幅の狭い右上がり条痕で，底近くに縦方向の刻み目がある。102 は右下がりの細沈線が施されている。103 の外底は網目状圧痕で，白粉が付着している。104・105 の内底には指頭状圧痕があり，底は格子状圧痕のあと繊維状ハケナデで仕上げた分厚い底である。106 の外底には格子状圧痕が付いている。

107 ～ 110 は大型の円筒土器である。107 は底径 15.0 ㎝の胴部下半から底部の破片で，外面は底近くまで斜方



第 41 図　縄文時代早期の土器（４）

向だが，底近くは横方向の幅広条痕である。底部は貝殻で調整したあと，丁寧にナデている。ややすれている。胴部内面は縦方向のケズリで，底は丸くナデている。白色石粒が多く含まれている。108 は内外摩耗した破片で，分厚い底である。外面の底近くは横方向となり，底との角に貝殻押圧が施されている。109 の底部は底径 22.4 ㎝で丁寧にナデて仕上げ，内面には指頭圧痕がみえる。110 も 107 と似た内部整形，胎土だが，外面の底部近くは縦あるいは右下がりの短い条痕を施している。底径は 23.4 ㎝である。

Ⅱ類（第 42 図～第 45 図 111 ～ 175）

外面条痕が横方向となる類である。口縁端断面形は矩形を呈し，多くの口唇部には押圧文が施されている。底近くは右下がりの条痕となる。210 点出土している。

111 は大型のもので口縁端断面がやや内傾している。口縁端近くの押圧は木の実様のもので２段に押され，口唇部には棒状のもので押している。112 ～ 115 は口唇部に刻み目がない。112・113 は１段の口縁押圧である。112 の内面は丁寧なナデ整形だが，そのあと口縁部近くをケズって口唇部を幅狭くしている。茶石を多く含む胎土である。113 は薄い矩形となっており，114 は口唇部が薄くなっている。114・115 は２段の押圧である。

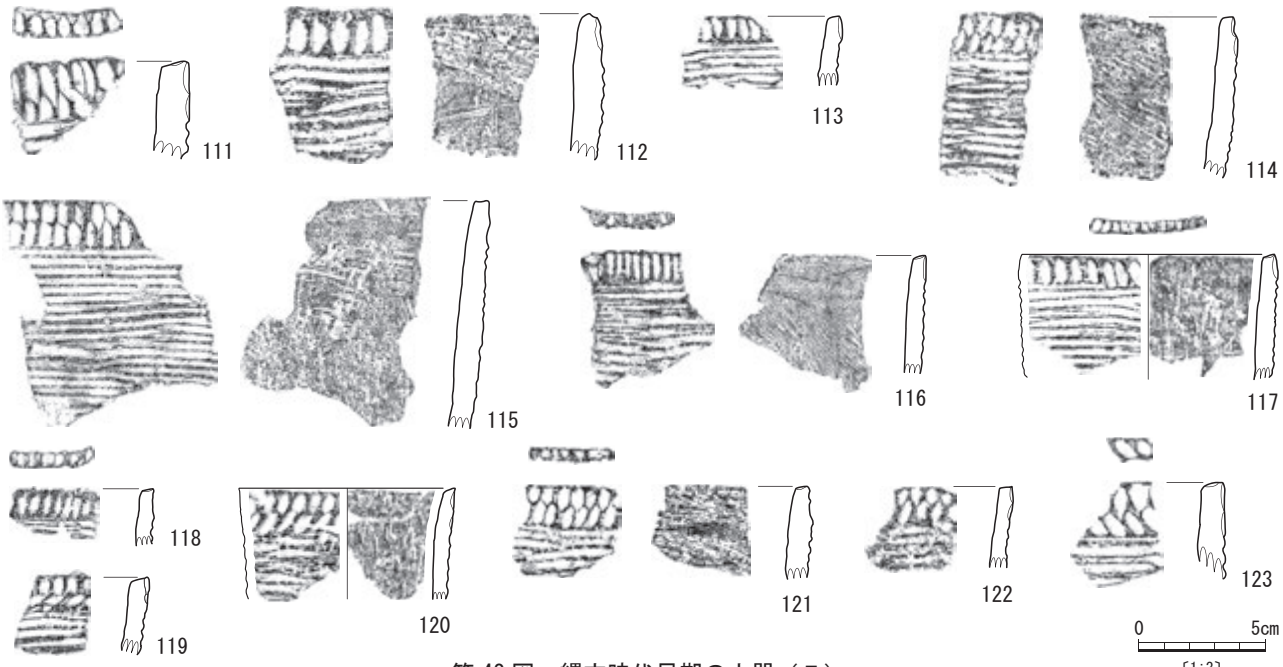
116 ～ 118 は口縁端に１段の押圧のあるもので，119 ～ 136 は口縁端近くに２段の押圧がある。口唇部に押圧文が施されている。口唇部の押圧文はほとんどが直に押して浅い。119 ～ 122 の押圧は上段が直，下段が左下がりであるが，123 の押圧は上段が直，下段が右下がりになっている。

124 は口径 20.2 ㎝で口縁近くに２段の幅広押圧が巡っている。幅広条痕のあと上段から下段の順に押圧を施しているが，下段に比べて上段のほうが幅広である。内面は縦方向のケズリだが，口縁近くは斜方向から横方向へ移っていく。ケズリの施文具は幅７～９㎝程で，外面にススが付着している。125 は焼成度の良い破片だが，内面・外面とも一部剥離している。口縁の押圧は下段から上段の順に押して，口縁部端の調整をしている。128 は小型の土器で内面が剥脱しており，口縁下部に擦切技法による補修孔がある。133 は口縁部から胴部の破片で，焼成度が良く，外面の厚さ半分ほどが広く剥脱している。口縁断面は矩形を呈し，口唇部と外面には木の実状の押圧痕がある。口唇部の圧痕は斜位に施され，外面は剥脱のため１段しか残っていないが，２段になると思われる。内面は幅５～８㎜ほどの施文具で縦方向に丁寧なケズリがみられるが，口縁近くのナデがないため，部分的に段となる所もある。

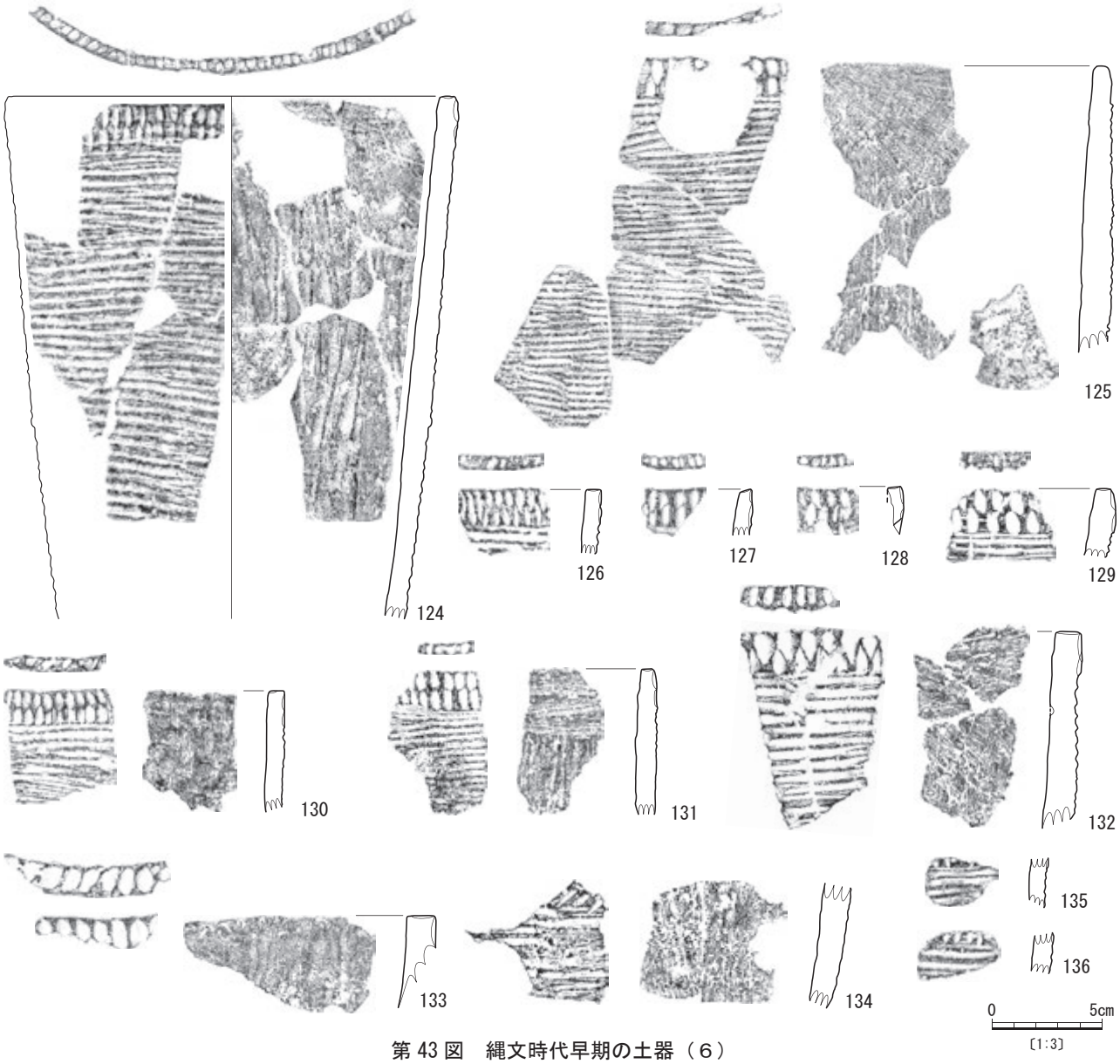
134 ～ 136 は口縁端が欠損している。134 は内外とも表面が剥離している。

137 ～ 160 は胴部で，条痕幅の狭いものと広いもの，深さの浅いものと深いものとがある。内面調整は多くが縦方向のケズリだが，152 などのように幅の狭い筋状となるものもある。137 の内面はにぶい橙色を呈しているが，まだらに赤色っぽい筋がみられる。160 は胴下部から底部の破片で，外面条痕は横方向だが，底部近くは右下がり条痕となる。上から下への条痕仕上げである。

底部（161 ～ 175）は安定した平底で，丁寧にナデられている。底径は 8.0 ㎝のものから 14.4 ㎝のものまである。胴部の横方向条痕が底まで至るものと，底近くは斜方向になるものとがある。161 は小型の薄いもので，



第 42 図　縄文時代早期の土器（５）

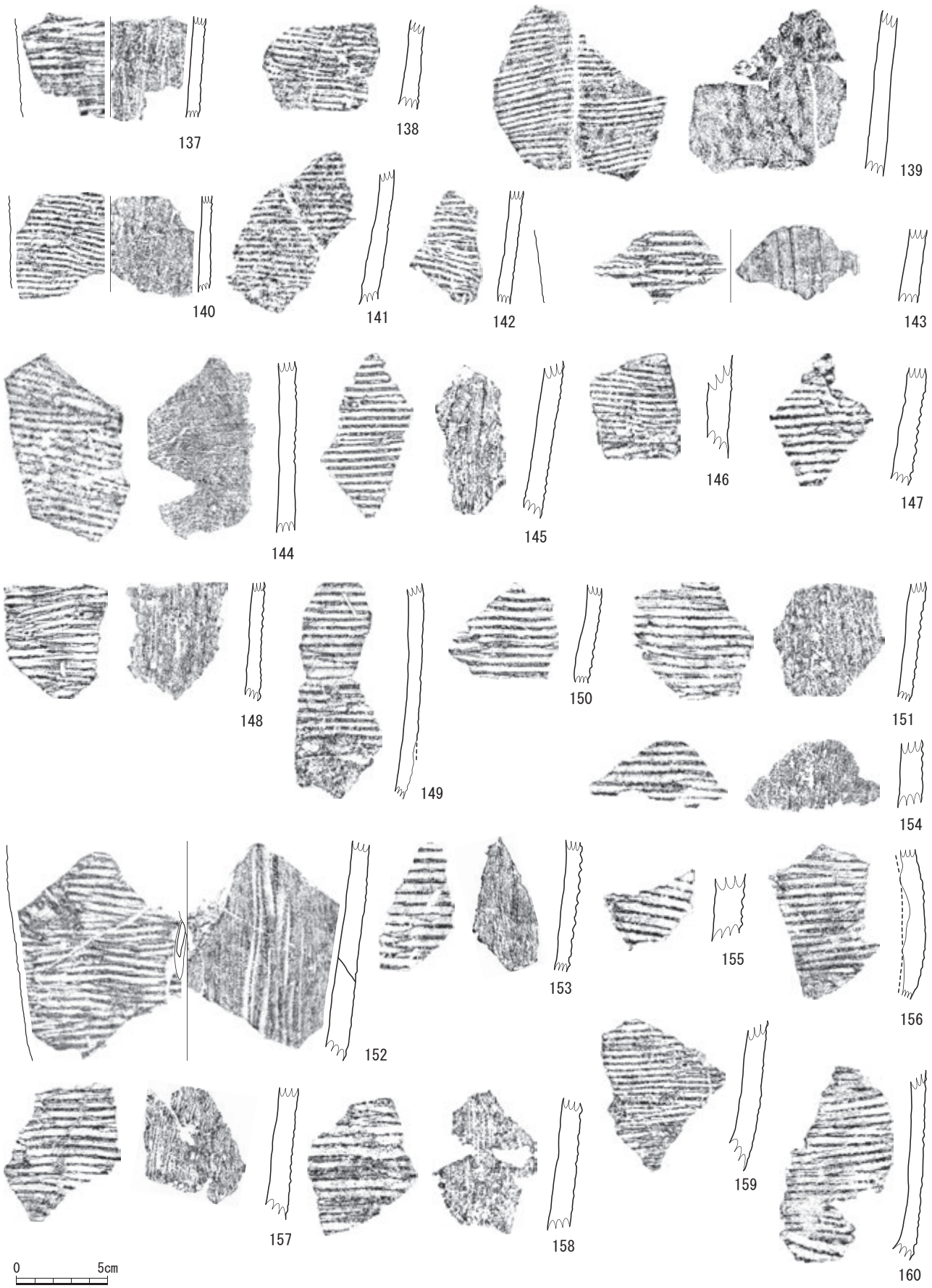


第 43 図　縄文時代早期の土器（６）

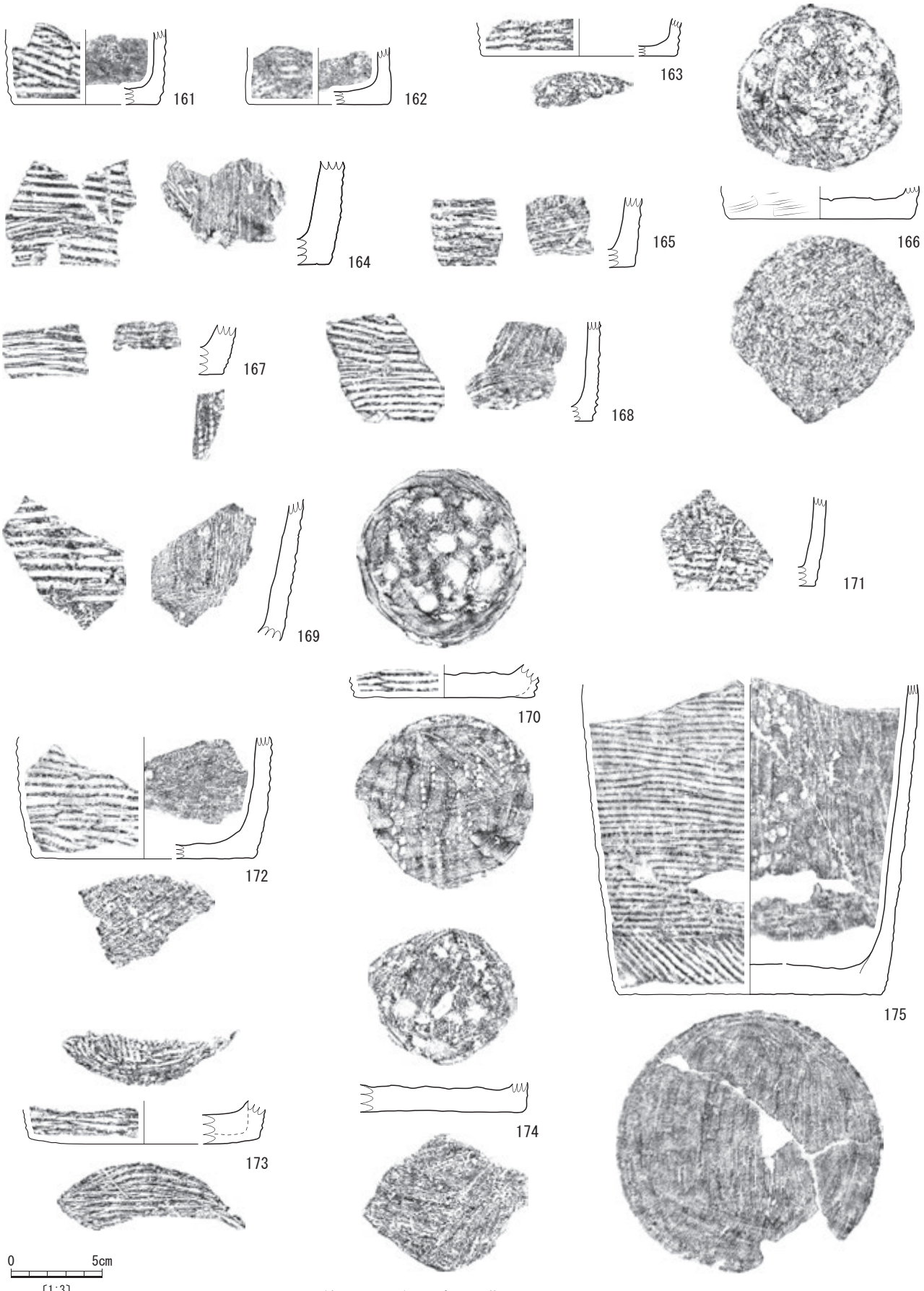
横方向条痕だが，一部分は底近くに斜方向条痕がみられる。162 の外面は底近くを条痕のあとナデている。165・168 の底には白粉がある。166 の底は敷物痕を丁寧にナデ消しており，内底は押圧したあとナデて消している。169 は底部近くをナデている。170 は円盤状底部のまわりに円筒状の胴部を貼り付けている。外底には圧痕があり，そのあとナデ消している。内底には指頭状押圧痕があるが，その中には繊維様圧痕らしきものもみえる。172 の外面底近くは右下がり条痕となっている。内面にはオコゲが付着している。173 は分厚い底で，外底・内底とも条痕様ナデである。174 の内底にも押圧痕がある。作りは 170 と同じである。175 の底径は 14.4 ㎝とやや大型である。筒状の胴部と円盤状の底部を貼り付けており，底部内面は広く剥脱している。底部近く外面は斜位条痕となる。

Ⅲ類（第 46 図 176 ～ 178）

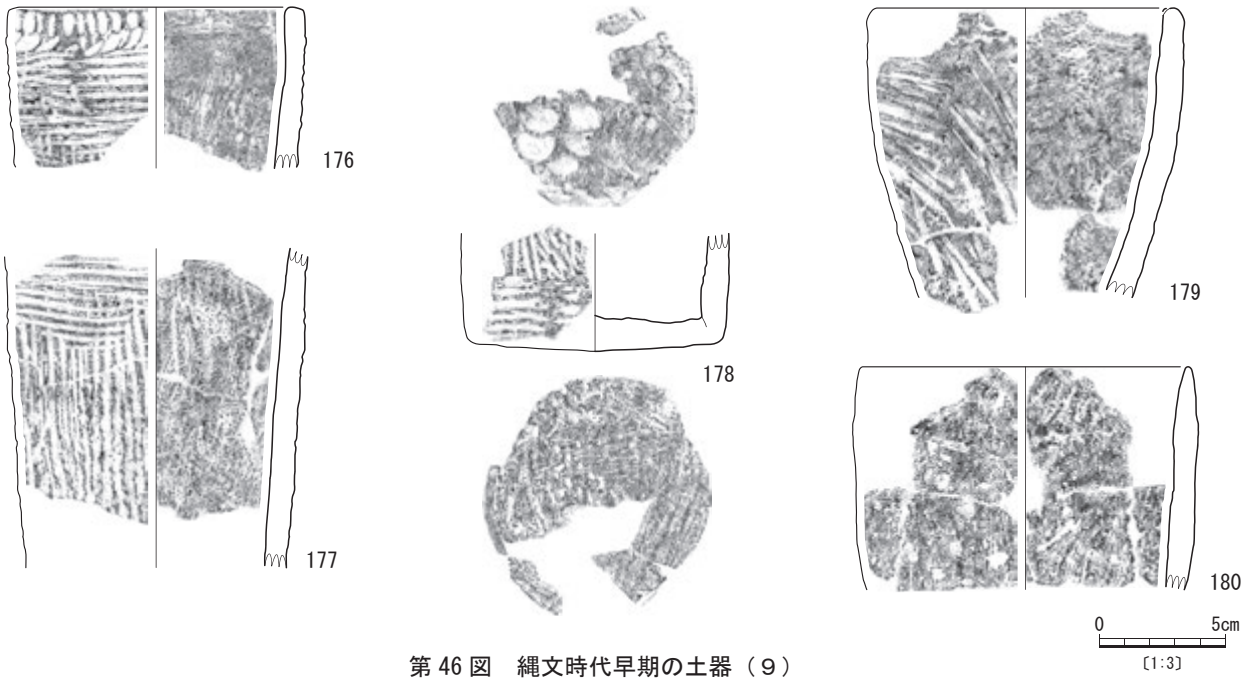
胴部条痕の上方が横方向，下方が縦方向となるものである。接合はできないが，器形・大きさ・色調・胎土などから同一個体と思われる。口径 11.6 ㎝，底径 9.5 ～ 10.0 ㎝と小型のもので，高さは 20 ㎝前後かと思われる。口縁端の断面は矩形を呈しているが，口唇部の平坦整形はしていない。口縁端近くに２段の木の実様の押圧文が施されているが，上段が縦方向，下段が右上がり方向である。上段から下段へ，下段は右から左へ押している。口縁端から６㎝ほどは横方向，その下は縦方向条痕だが，底部近くは再び横方向の条痕である。底部外面は格子状圧痕を繊維状のものでナデ，白粉が付着している。外面上部にはススが付着している。内面は丁寧な縦方向のケズリ様ナデだが，口縁近くは丁寧なナデ仕上げである。円盤状底部に筒状の胴部を接合する作りで，接合部がや



第 44 図　縄文時代早期の土器（７）



第 45 図　縄文時代早期の土器（８）



第 46 図　縄文時代早期の土器（９）

やくぼんで，ここにオコゲが付着している。底部内面全体に指状の押圧痕がみられる。底部を作る時にナデてから指で仕上げたものと思われる。

鉢形土器（第 46 図 179・180）

口縁が内傾し，低い器形である。88 も同様のものの可能性がある。179 は口径 12.0 ㎝で，口縁端は丸みをおびている。外面は右下がり条痕だが，横あるいは縦に近い角度のものもある。口縁端近くに横向きの二枚貝押圧文が１条ある。180 は口径 13.0 ㎝の筒状となり，口縁端は細くなっている。内外とも粗い縦ナデ・ケズリ仕上げだが，内側がやや丁寧である。雑な作りである。

②　志風頭式土器（第 47 図 181 ～ 192）

地文が横あるいは斜方向の貝殻条痕文で，その上に沈線文や二枚貝押圧文を施す二重施文の土器で，いずれも角筒土器である。口唇部には刻みがある。多くの外面にススが付着している。

181 ～ 185 は口縁端近くに二枚貝押圧文を施すものである。181･182 は同一個体である。丸みをおびた土器で，地文は斜方向貝殻条痕である。口縁端近くに縦方向の貝殻押圧をしたあと，その下に二枚貝腹縁による押圧文を施している。胴部は角部に巻貝殻頂の押圧があり，その間には２条の二枚貝腹縁によるＸ字状などの斜方向押圧文と，貝殻押圧文がある。183 は角部の破片で，口縁端近くに斜方向の，角近くに縦方向の二枚貝押圧がある。184 も斜方向条痕を地文とする破片で，口縁端近くに縦方向の貝殻押圧を施したあと，その下に横方向の細い貝殻押圧が施されている。角には縦方向に竹管様押圧が連続して施され，角から斜方向に二重の二枚貝押圧が施されている。185 は口縁端近くに横方向の二枚貝腹縁押圧を３段に施している。地文は右下がり方向の貝殻条痕で，その上に縦方向の鋸歯状沈線文を引いている。内面は縦方向のケズリだが，口縁端近くは横方向にケズっている。

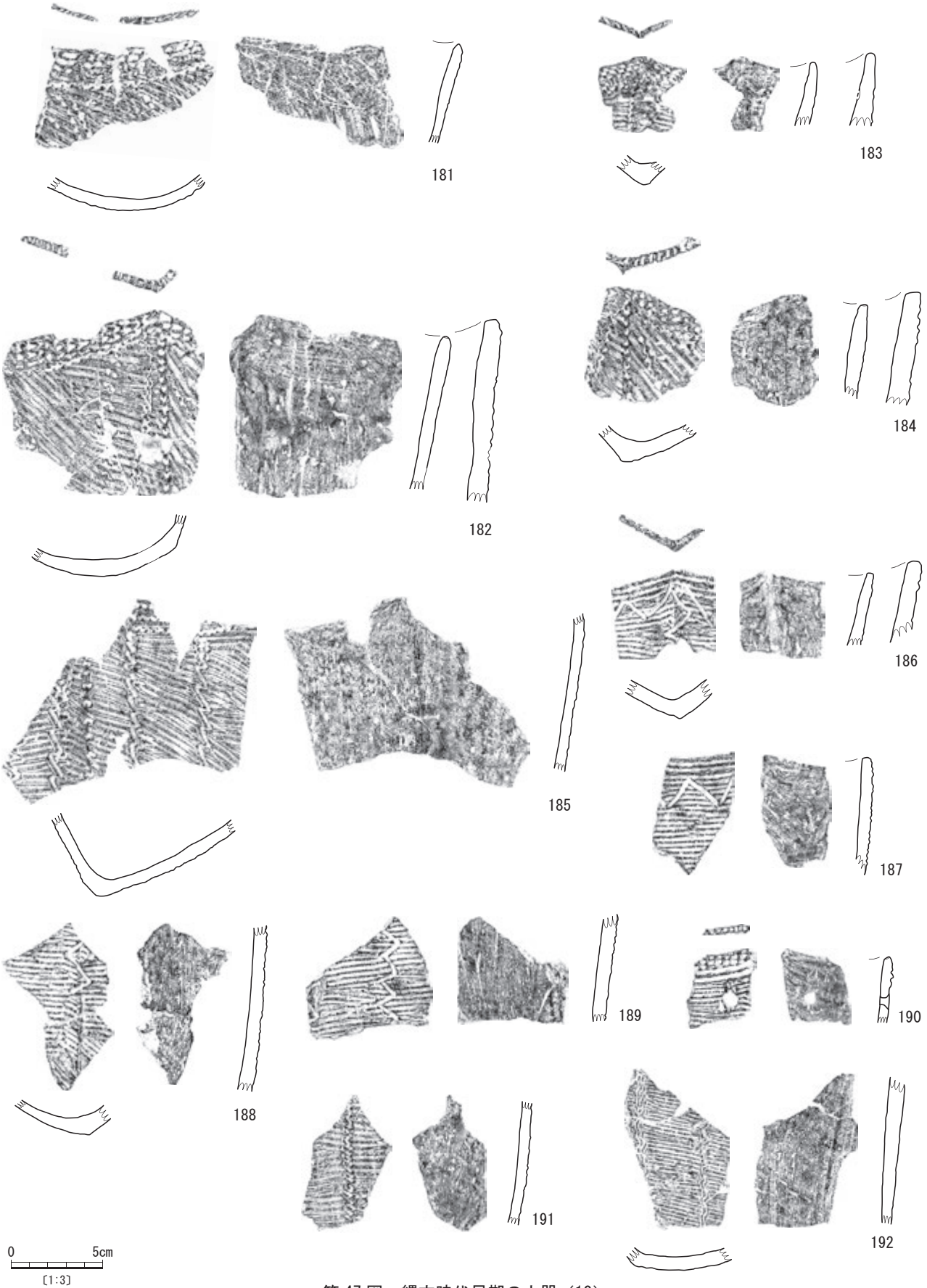
186 ～ 189 は横方向の貝殻条痕のあと，口縁端近くに１条の横方向鋸歯文を引き，角と中央付近に１条の縦方向鋸歯文を引いている。188 の縦方向鋸歯文は上半のみである。内面は丁寧な縦方向ケズリで，口縁近くはそのあとナデている。187 はやや丸みをおびているが，角となる 186 と 188 は矩形を呈する。187 の口唇部はナデているが，186 の口唇部には浅い刻みがみられる。

190 の口縁端近くは縦方向二枚貝押圧のあと，２条の横方向沈線を引いている。口縁下に直径３㎜の円形補修孔がある。

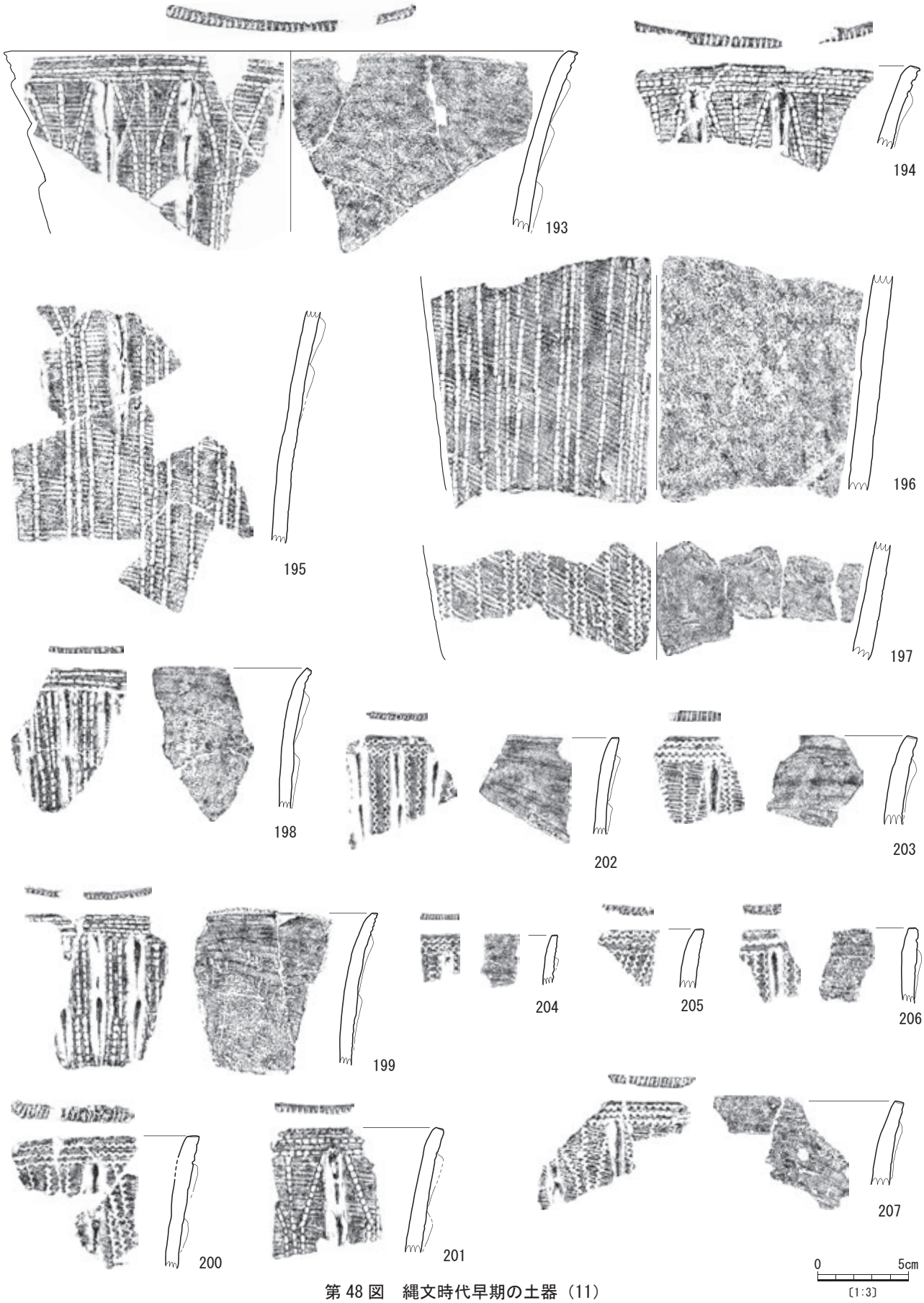
191・192 はやや丸みをおびた胴部である。191 は横方向条痕の上に二枚貝腹縁をくっつけて２列に押している。192 は細い斜方向条痕の上に角と中央に３列の櫛描状沈線が縦方向に描かれている。

③　加栗山式土器（第 48 図～第 53 図 193 ～ 275）

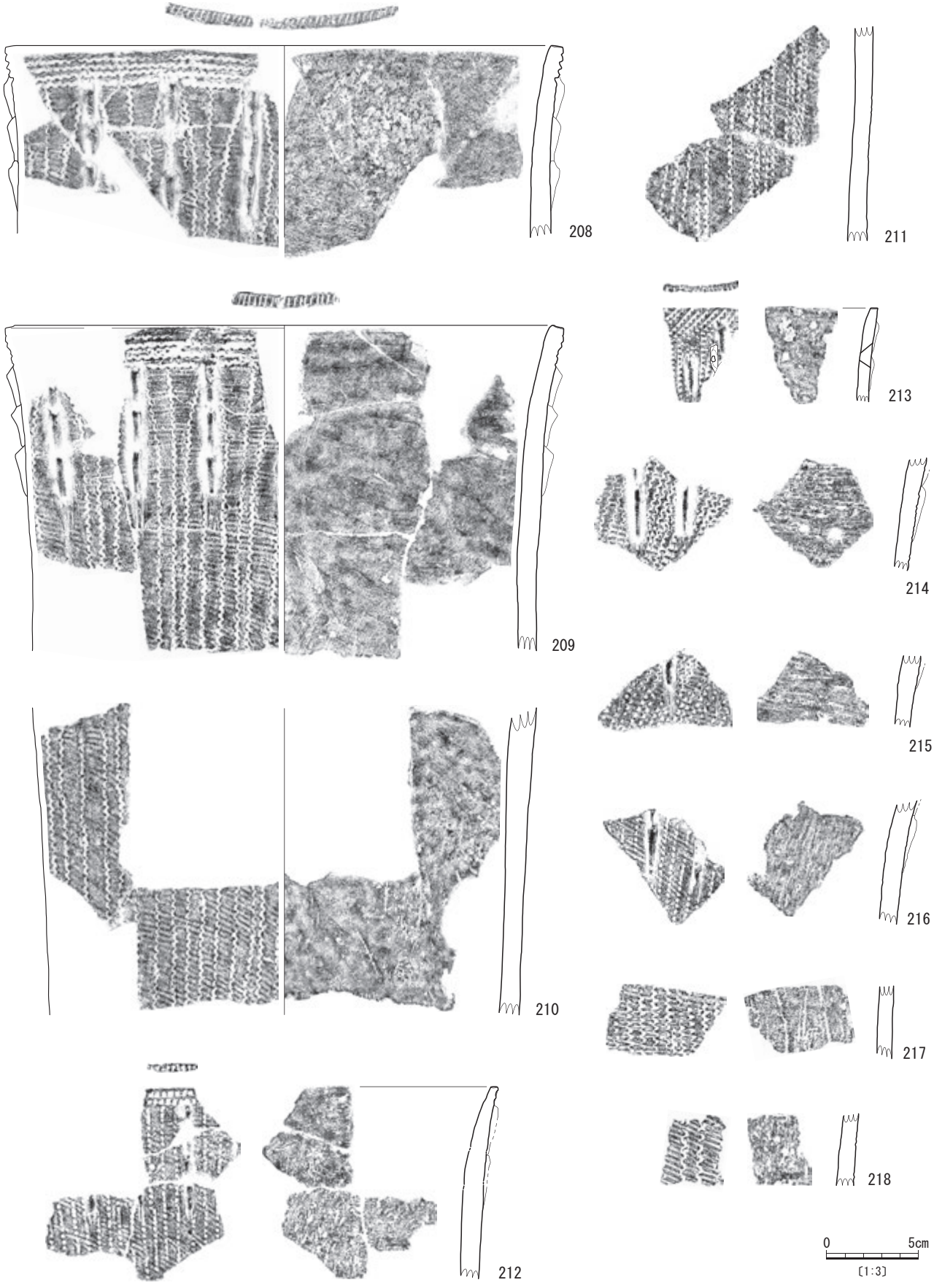
安定した平底からやや外傾して立ち上がり，口縁部はまっすぐ伸びるものと，外反するものとがある。円筒形のものが多いが，角筒形のものもある。胴部は斜方向，あるいは横方向の貝殻条痕で，そのあと二枚貝腹縁押圧を縦方向に連続して施している。口縁部には楔形の突帯を２～３段ほど貼り付けており，楔形突帯間の貝殻押圧はＹ字状となるものもある。口唇部には刻みがある。底近くの外面には縦あるいは斜方向の沈線が施され，底部の調整は丁寧である。内面調整は縦あるいは斜位のケズ



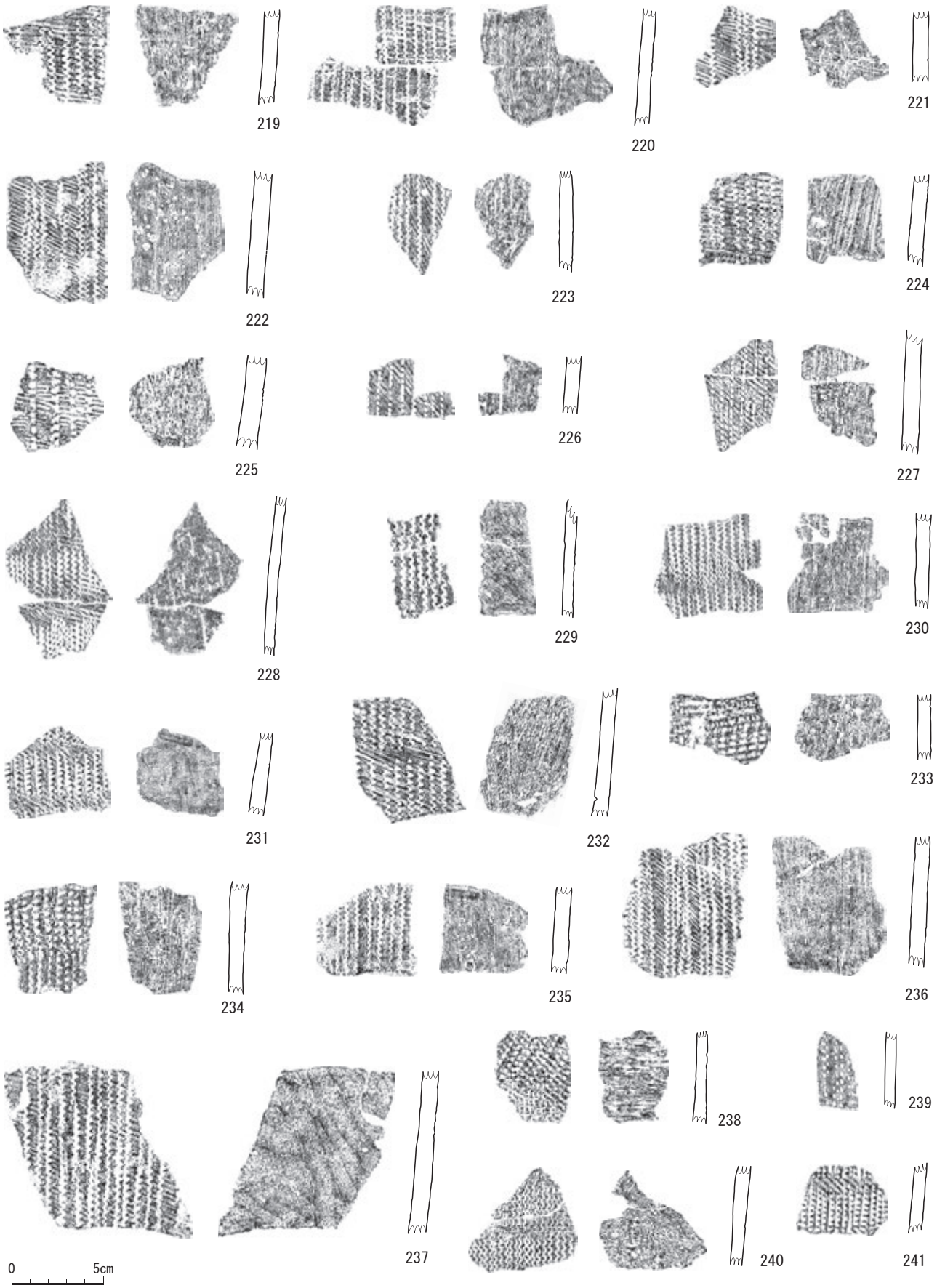
第 47 図　縄文時代早期の土器（10）



第 48 図　縄文時代早期の土器（11）



第 49 図　縄文時代早期の土器（12）



第 50 図　縄文時代早期の土器（13）

リだが，丁寧にナデたものもある。口縁近くは横ナデとなっている。

193 ～ 196 は接合できないが，器形・文様・大きさ・色・胎土などから同一個体と思われる。口径は 31.6 ㎝で，外へ開きながら立ち上がっている。口縁端には３段の横方向二枚貝腹縁押圧文が施され，そのあと３段の短い楔形突帯の貼付文が付される。上端の楔の上は貝殻で押して，両側面はナデている。腹縁押圧文は寝かせて押しており，口縁部近くはＹ字状を呈しているが，胴部はまっすぐ押している。

197 は大型の胴部で，縦方向押圧が直に押されている。

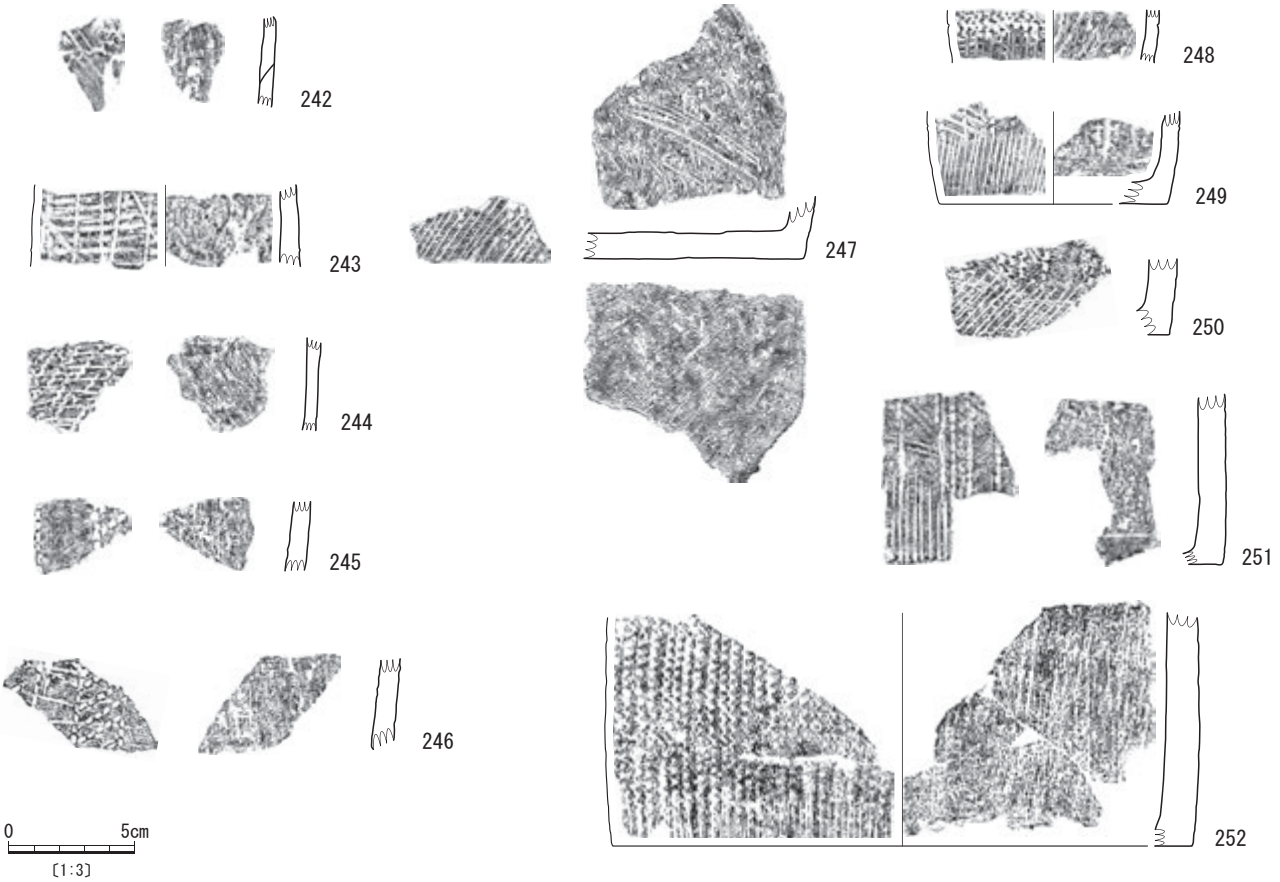
198 ～ 207 は口縁端近くに３段の二枚貝腹縁押圧文のある口縁部破片である。198・199 のようにやや外反するものと，200 ～ 207 のようにまっすぐ外へ開きながら伸びるものとがある。楔形突帯は長いものと，短いものがある。楔形突帯の側面はナデているものが多いが，200 や 202・206 はナデていない。楔形突帯間の狭いものは縦方向貝殻押圧がまっすぐ押されているが，201・203・207 は上の方がＹ字状に押されている。貝殻腹縁押圧は直に押すものと，198・199・201 のようにやや寝かせて押すものがある。内面は横ナデ調整である。204 は小型の深鉢で，器厚も薄い。205 は小破片のため楔形貼付文の有無が定かでないが，胴部押圧は左下がりの斜方向で，口唇内面がやや丸みをおびている。

208 ～ 211 は接合できないが，器形・文様・大きさ・色・胎土などからみて同一個体と思われる。口径は 30.4 ㎝で，やや外反ぎみに立ち上がっている。口縁端近くに４段の横方向二枚貝腹縁押圧文が施され，そのあと３段の短め楔形貼付文が付されるが，貼付文の側面はナデられ，上端は二枚貝を押している。楔形突帯を貼り付けたあと，楔形突帯間に３列，楔の下に１列の二枚貝腹縁を直に押しているが，楔形突帯間押圧の口縁端近くはやや外へ開いている。この押圧のあと楔形突帯の側面調整をしている。

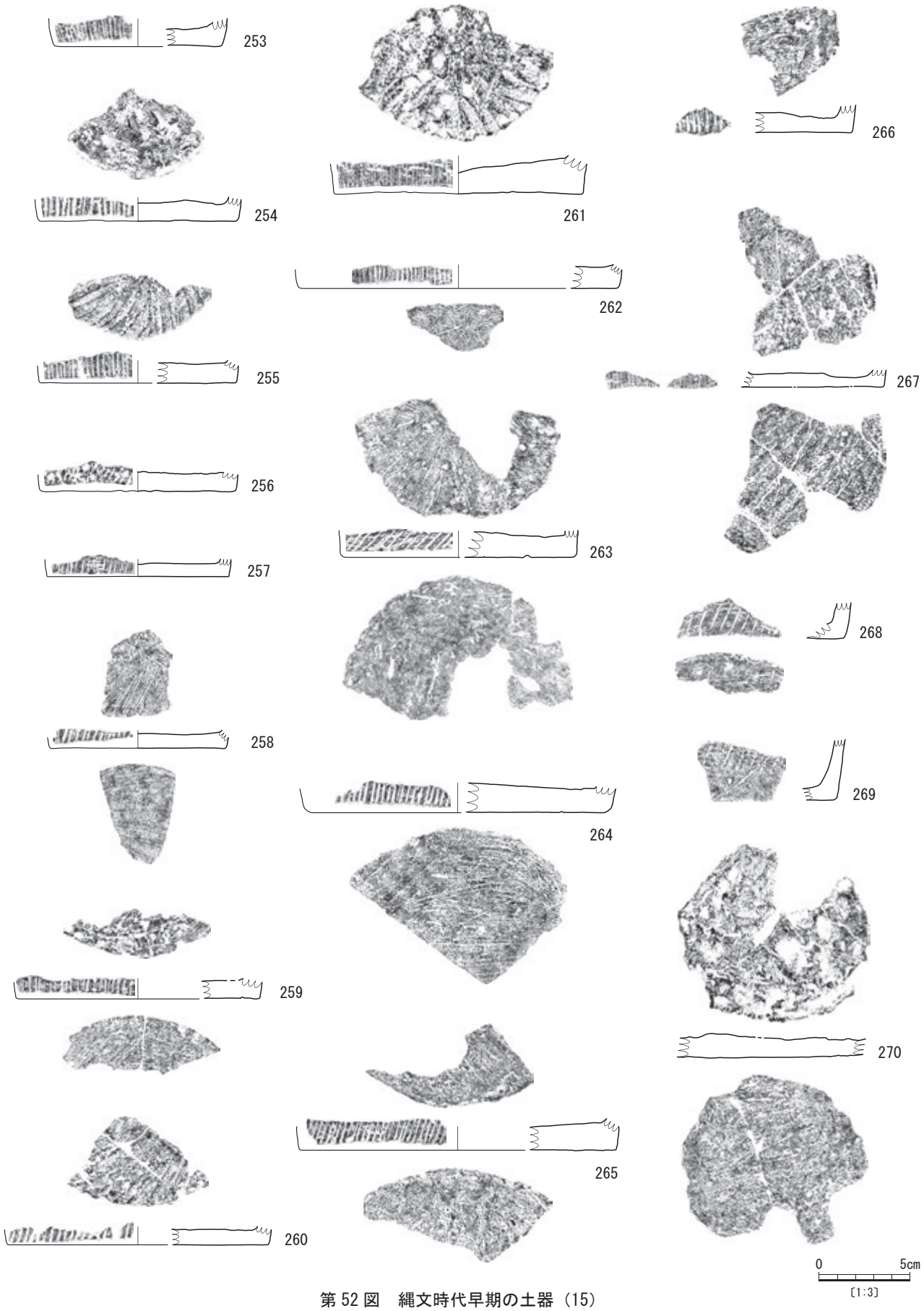
212 はやや外反する口縁部だが，胴部の厚さに比べて口縁端は薄くなっていく。口縁端近くに二枚貝腹縁を寝かせて横方向に２段押圧している。斜方向条痕のあと，短い楔形突帯を３段貼り付け，突帯間に３列，突帯下に１列，二枚貝腹縁を寝かせて縦方向に押圧している。

213 は小型の土器で，口縁端近くに左下がり方向の二枚貝腹縁押圧文があり，その下には縦方向に二枚貝腹縁押圧が密に付され，そのあと短い楔形突帯が幅狭く，割と雑に貼り付けてある。口縁近くに擦切りによる補修孔がある。

214 ～ 216 は楔形貼付文のある胴部上半の破片である。214 は二枚貝腹縁を斜方向に密に押し，そのあと楔形突



第 51 図　縄文時代早期の土器（14）



第 52 図　縄文時代早期の土器（15）

帯を貼り付けている。215も斜方向条痕のあと，二枚貝腹縁の押圧を施しているが，口縁近くは直に，その下は寝かせて押し，そのあと突帯のまわりをナデている。216は斜方向条痕のあと，長めの楔形突帯を貼り付け，そのあと突帯間に３列，突帯下に１列の二枚貝腹縁を押している。そのあと楔形突帯のまわりをナデている。

217 ～ 246は胴部破片で，斜方向条痕のあと，二枚貝腹縁を直に押したものと,寝かせて押したものとがある。縦方向に並行して等間隔に近く押すものと，１列と３列に交互に押すもの（221 ～ 223）などがある。218は大型の貝殻を深く押している。228・231・232・241は押圧が途切れている。228・231の原体は長さが2.5 ～ 3.0㎝程である。228は2.5㎝の間に８ほどの肋がある。225 ～ 227は寝かせて，231は斜方向に押している。234は内外とも摩耗している。238の押圧は上の方が寝かせ，下の方が直と向きを変えている。242は薄手の土器で，擦切りによる補修孔が穿たれている。243は横方向条痕のあと，斜格子の沈線が引かれている。径10.5㎝程と小型である。244は薄手の土器で，横方向条痕のあと斜方向の二枚貝腹縁押圧がみられる。245・246は縦方向押圧で区画し，そのあと左下がり押圧を施す部分と丁寧にナデた無文部を交互にしている。

247 ～ 252は底近くの破片である。縦あるいは斜方向の二枚貝腹縁押圧のあと，底近くに斜方向・縦方向の沈線が引かれる。胴内面は縦方向の丁寧なケズリで仕上げており，底も丁寧にナデている。248は胴部外面の押圧が密な小型土器である。249も底径9.0㎝と小型である。252は底径23.0㎝と大型で,密な二枚貝腹縁押圧のあと，縦方向の沈線が施されている。

253 ～ 270は平坦な底部である。底径は9.2 ～ 11.0㎝の小型のもの（253 ～ 258）と，13.0 ～ 17.6㎝の大きなもの（259 ～ 265）とがある。立ち上がり部分には沈線が引かれているが，直立するものと，斜位のものとがある。269はナデて押圧文を消したままにしている。底部は丁寧にナデたものが多く，254・263・266などは一部にミガキも見える。264・270は繊維状ハケナデである。内底部は254・261・270のように指様圧痕を残しているものもあるが，多くは丁寧にナデている。262は白石を多く含むなど胎土・色調が異質である。

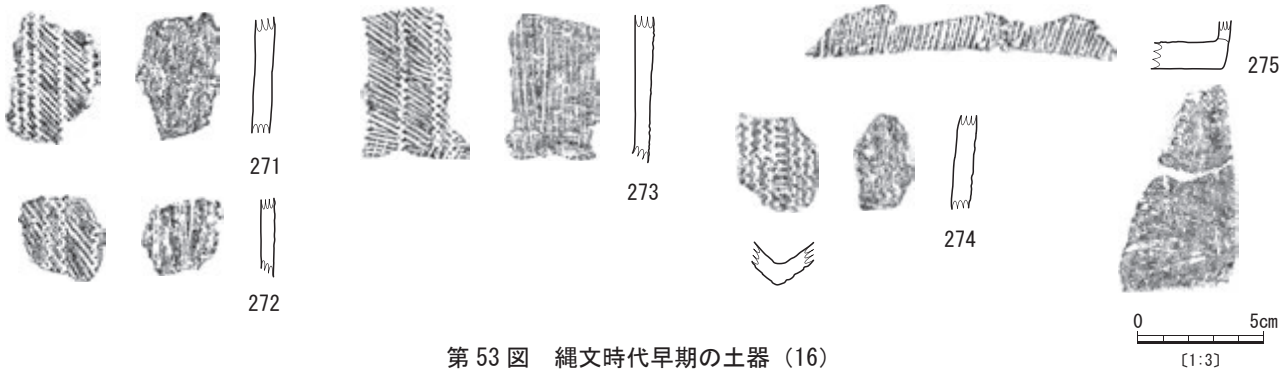
271 ～ 275は角筒土器である。胴部（271 ～ 273）は右下がり条痕のあと，二枚貝腹縁を縦方向に押圧している。272はやや丸みをおびている。273は下に左下がり沈線が施された底部近くの破片で，274は角に横方向の細沈線が施された角の破片である。275の底近くは縦に近い左下がり沈線が施される。底は丁寧にナデられ，白粉が付着している。

④　小牧３Ａ式土器（第54図・第55図276 ～ 313）

安定した平底からやや外傾しながら立ち上がり，外反しながら口縁端部に至る器形をしている。口縁部には二枚貝腹縁押圧文が横方向に巡り，その下に楔形の突帯文が貼り付けられている。口唇部には刻みが，胴部には縦方向の二枚貝腹縁押圧文が密に施されている。内面は縦方向のケズリだが，口縁付近は横方向である。図化していない破片が他に121点ある。

276 ～ 299は口縁部付近の破片である。276は口縁端近くに３段の浅い横方向貝殻押圧が，胴部には縦方向の二枚貝腹縁押圧文が付されるが，押圧文は直に深く押すものと，浅く押すものが交互にされる。その幅は1.5 ～ 3.0㎝ほどで，上方から下へ押されている。そのあと長い楔形突帯が貼り付けられ，上端は押圧され，側辺はナデられている。内面は下半が縦方向，上半が横方向の丁寧なナデ整形である。277・278の外面は丁寧にナデたあと，やや広めの貝殻腹縁押圧が施され，そのあと楔形突帯が貼り付けられている。突帯の側面は丁寧にナデ，上も貝殻で押している。279 ～ 281の突帯は細く，頂部は二枚貝，あるいは巻貝殻頂部で突き刺している。279の押圧文は細く密である。280の口径は17.4㎝と小さい。

282 ～ 285は接合できないが，二枚貝押圧が似ており，内面が明赤褐色とにぶい黄橙色の縞状になっていることから同一個体と思われる。口縁端近くには３段の横方向押圧文があり，胴部には角のはっきりした矩形押圧文が縦方向に付されている。その上に２段以上の楔形突帯が貼り付けられ，頂部は刺突されている。口縁直径は22.2㎝で，口縁部周辺にはススが付着している。底部近くは右上がり沈線が施されている。

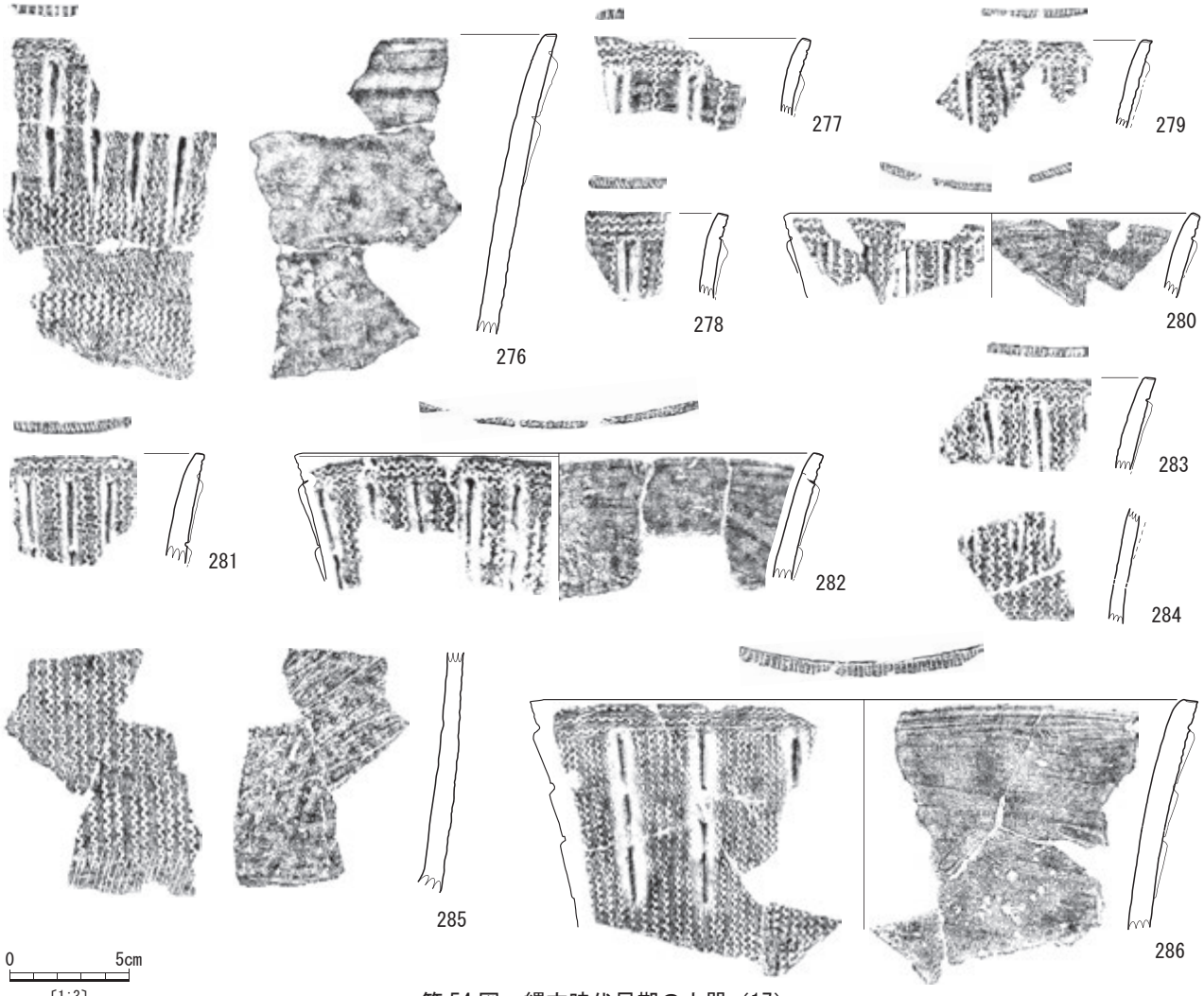


第53図　縄文時代早期の土器（16）

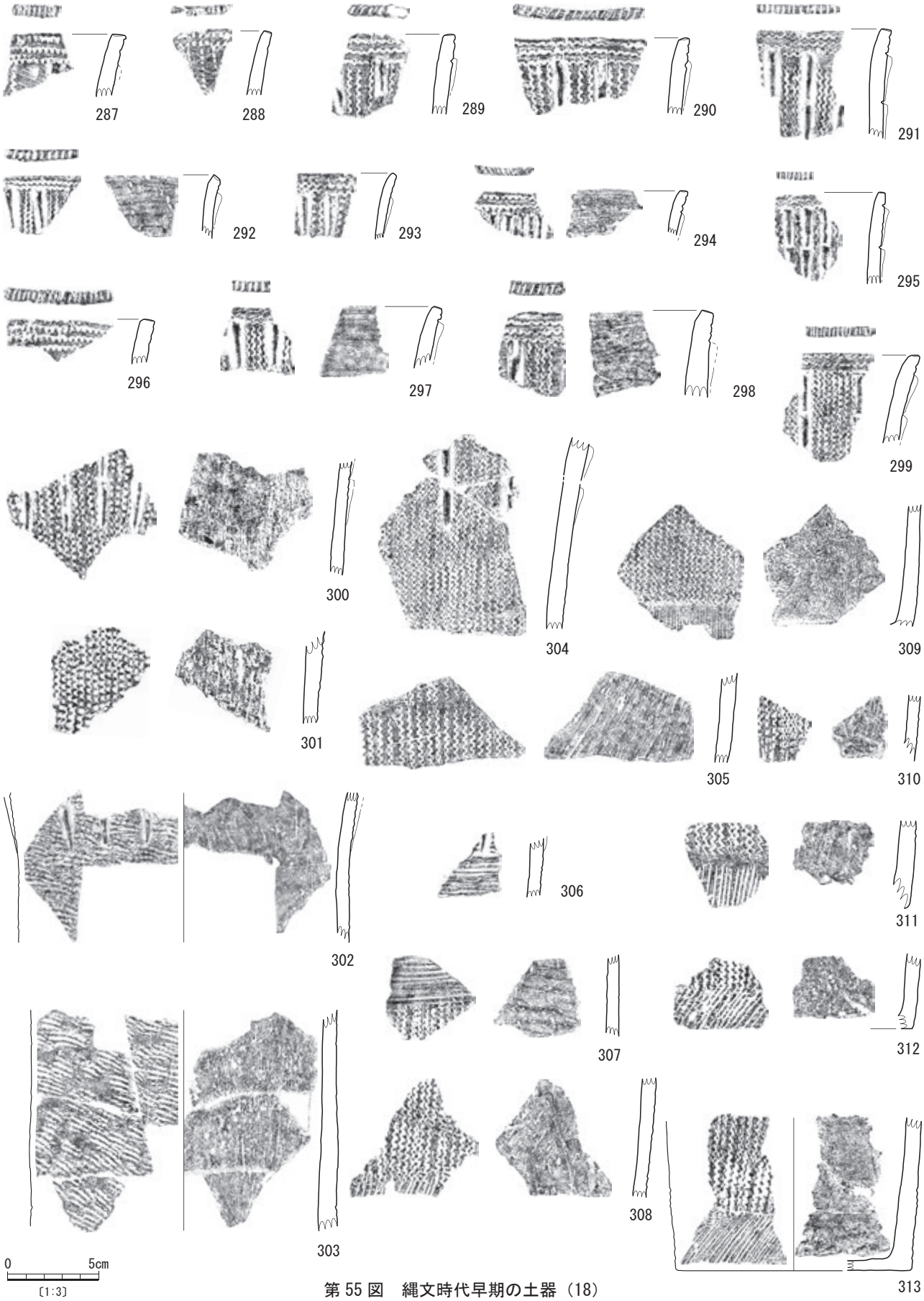
286 は口径 28.0 ㎝と大きな土器で，３段の楔形突帯が貼り付けてある。楔形突帯の頂部は押されているが，周囲の調整はない。外面にはススが付着している。内面調整は丁寧で，口縁近くはミガキに近い。

287・288 は寝かせた押圧である。288 は小破片のために貼付突帯の様相が不明で，口縁端押圧は２段である。289・290 の口縁端押圧は直に押してあり，楔形突帯は長いが，突帯周辺の調整はない。291 の外面押圧は直で浅い。貼付突帯の上端は丁寧に押しているため，重なる突帯の下端は楔形をしていない。口唇部や内面調整は丁寧である。292 ～ 295 の貼付突帯は細かったり，短く，密に付いている。頂部は押している。292 の押圧はくっきりしているが，293 ～ 295 は押圧のあとナデており，押圧文がはっきりしない。296 は口縁端の破片で，貼付突帯の様相は不明である。横方向の３段押圧は下から押し上げるように押している。297 ～ 299 は分厚い破片で，大型のものかと思われる。いずれも内面調整は丁寧である。297 の貼付突帯は太めで，上を押している。押圧は浅めで，特に下の方は細かい。298 は橙色がかった色を呈して，突帯のまわりは丁寧にナデている。299 の突帯は器厚の割に細く，突帯内の貝殻押圧はぎっしりと詰まっている。

300 ～ 307 は胴部である。300 と 301 はにぶい黄橙色を呈する硬質の破片で，同一個体と思われる。300 は上部の破片で,直に押した貝殻押圧が密にみられる。スマートな楔形突帯が貼り付けてあり，上を押している。301 はやや下の破片と思われ，押圧が寝かせて押している。内面は縦方向のケズリだが，上の方はそのあと丁寧にナデている。302 は径が 18 ㎝ほどで，貝殻押圧が横方向に押してある。突帯は鋭い楔形を呈し，両側縁は丁寧にナデている。303 は弧状の貝殻押圧が横あるいは右下がり方向に押され，直径が 17 ㎝ほどである。304 は外へ開く器形をした大型の土器である。楔形突帯は短く，楔形突帯間には押圧がある。305 は内面が明赤褐色とにぶい黄橙色の縞状になっていることから 282 ～ 285 などと同一個体の可能性がある。外面にはススが付着している。306・307 は外面が黒色がかった色を呈し，縦方向の密な細かい貝殻押圧を施した後，浅い横位貝殻条痕で押圧



第 54 図　縄文時代早期の土器（17）



第 55 図　縄文時代早期の土器（18）

文を部分的に消している。細い楔形突帯を貼り付けている。

308 ～ 312 は底近くの破片で，いずれも密に貝殻押圧を施し，端部近くには縦方向，あるいは斜方向の沈線が引かれている。311 は底近くの押圧文をナデ消した後，沈線を施している。

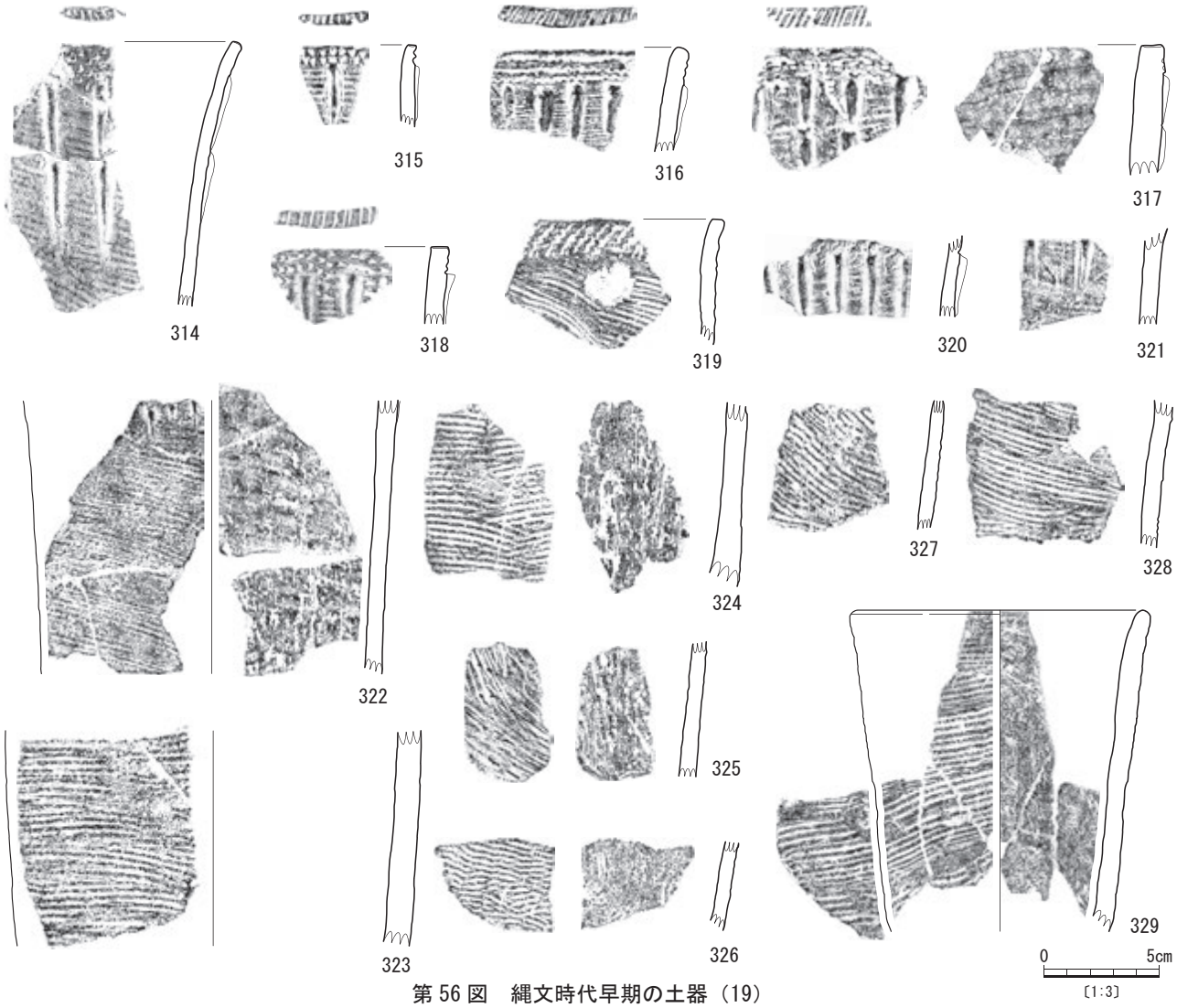
313 は底径が 13.0 ㎝で，底近くの貝殻押圧は深く押しているが，浅くナデ消した部分と，そのまま残したところがあり，文様に段がある。底近くの斜方向沈線は押圧文を完全にナデ消した後，下から上へ丁寧に引いている。底は丁寧にナデており，底の厚さは薄い。

⑤　札ノ元Ⅶ類土器（第 56 図 314 ～ 328）

底部からやや外へ開きながらまっすぐ伸び，口縁部はやや外反するか，そのまま伸びる。口縁部に横方向の二枚貝腹縁押圧文が２～３条施されるが，斜方向あるいは二枚貝背部の押圧を施すものもある。胴部は斜位，あるいは横位の貝殻条痕が施してある。条痕幅が狭く，浅いものである。口縁部下には押圧文，条痕のあと楔形，あるいは長楕円形の突帯が２段ほど貼り付けてある。口唇部には刻みが施されている。内面調整は縦ケズリだが，口縁近くは横方向にナデている。29 点出土している。

314 ～ 318 は口縁部で，314 は外反しているが，315 ～ 318 はまっすぐ伸びている。胴部の条痕は 314 が斜方向，他は横方向で浅い。口縁部の押圧は 314 が斜位，315・316・318 が横位だが，315 は２段，316 は３段，318 は４段である。317 は二枚貝背部を押している。突帯文は概して短く，密に貼り付けてあるが，314 はやや長い楔形を呈している。317・318 は頂部を押しており，314・315・318 は側辺をナデているが，316 は貼り付けたままで調整をしていない。317 は分厚い。

319 は口縁部近くに新しい欠損のある破片である。口縁部近くでやや内反し，端部近くでは外反する器形をし，口唇部は丸みをおびた矩形を呈し，刻みはない。口唇部の一部に貝殻押圧らしき痕跡がみられる。外面の条痕は弧状を呈した所もあるが，やや右下がりである。口



第 56 図　縄文時代早期の土器（19）

縁端近くに連続する左下がりの貝殻腹縁押圧が施されている。内面はミガキに近い丁寧な横ナデ調整である。

320 ～ 322 は口縁近くである。320 は口縁端近くに斜位の二枚貝腹縁押圧があり，その下の条痕はナデ消された後，やや長い楔形突帯を密に貼り付け，頂部には巻貝殻頂の刺突がある。上方の側辺は軽くナデている。321・322 は楔形突帯を貼り付けており，321 は両側辺をナデている。条痕はともに浅い。322 の径は 15 ㎝ほどである。

323 ～ 328 は胴部で，右下がり斜位のものが多いが，弧状のもの，横位に近いものもある。焼成度は甘いものが多いが，324・325 は硬質である。323 は径 17 ㎝ほどとやや大型である。324 の内面ケズリはやや深い。328 は上半に近い破片で，上端近くの条痕がナデてある。

⑥　別府原式土器（第 56 図 329）

１点のみの出土である。筒状だが口縁近くでわずかに外反する器形で，口縁端は丸みをおびている。口径 13.0 ㎝で高さは 14.5 ㎝ほどの小型品である。外面はやや蛇行する８条ほどの横方向条痕で，底近くはナデ消している。内面は縦・斜め方向のケズリ整形だが，口縁近くは横方向のナデとなる。外面にはススが付着している。

⑦　石坂式土器（第 57 図 330 ～ 348）

図化していない破片９点を含めてＥ・Ｆ－ 14 ～ 18 区周辺で 28 点出土している。やや外へ開きながらまっすぐ伸びる口縁部と，口縁部へやや開きながらまっすぐ伸びる胴部から成る。

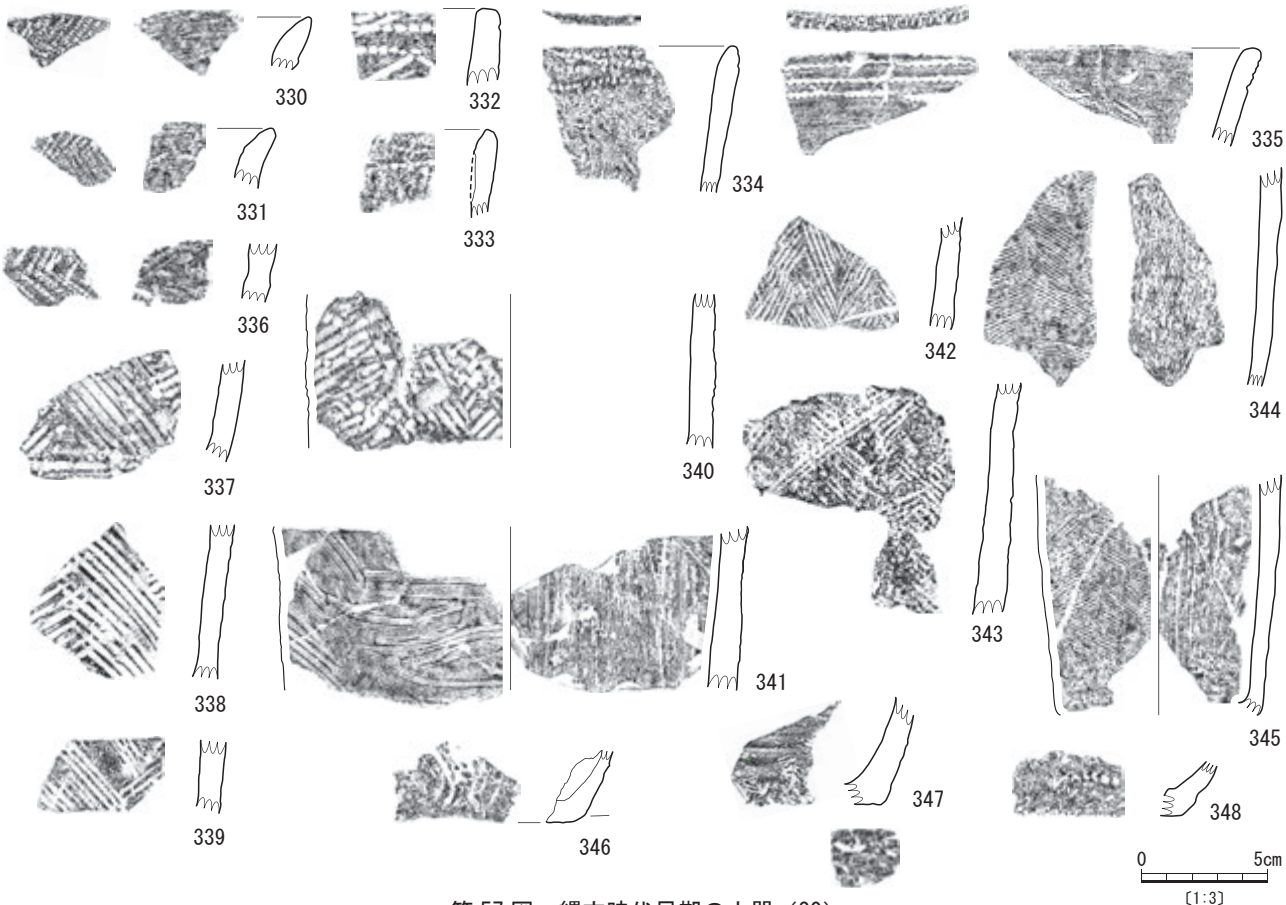
330・331 は端部近くが外反し，細くなっている口縁端で，外面に綾杉状の貝殻押圧文がある。

332 は直立して立ち上がる口縁部で，口唇部は平坦である。外面はナデたあと，斜方向の条痕を施し，そのあと２段に横方向の二枚貝押圧を施す。内面は丁寧なナデ整形である。

333・334 はやや外へ開きながらまっすぐ伸びる口縁部で，口縁端近くに二枚貝押圧文が横あるいは斜位に施され，その下に綾杉状の条痕文が施されている。口唇部には刻みが施されている。内面は縦方向ケズリだが，口縁近くは丁寧にナデている。ともに磨滅が目立つ。

335 は口径の大きな破片である。外面は丁寧な横ナデ調整で，口縁端近くに３段の二枚貝腹縁の浅い押圧文がみられる。口唇部はやや丸みをおびており，刻みが施されている。内面は横方向の丁寧なナデ仕上げである。

336 ～ 343 は外面が綾杉状条痕の胴部である。条痕幅は 337・338 などが広いのに対して，342 は狭い。内



第 57 図　縄文時代早期の土器（20）

面は 338 などが繊維状の丁寧な斜ナデであるのに対し，342 などは縦方向ケズリのあと，一部ナデ仕上げがみられる。338 の外にススが，342 の内にオコゲが残っている。

344・345 は接合できないが，同一個体の底近くの胴部破片である。図化しなかった５点の破片も含めⅠ－10 区（１点のみH－10 区）で出土している。底径は 8.0 ㎝で，やや外へ開きながらまっすぐ伸びる胴部の最大径は 9.8 ㎝，残存高 9.5 ㎝の小型深鉢である。外面は縦方向のナデ整形のあと櫛目状細沈線条痕を綾杉状に施している。底部近くには施されていない。内面は丁寧な縦ケズリである。

346 ～ 348 は丸みをおびた底部で，外面には斜条痕や巻貝殻頂刺突文がある。346 の内側には赤土が付着している。

⑧　下剥峯式土器（第 58 図 349 ～ 354）

分厚い作りで外へまっすぐ伸びる器形である。谷頭やＦ・Ｇ－ 11 区で８点出土しており，349 ～ 351 は同一個体と思われる。口唇部は平坦で，外面には横方向の二枚貝腹縁押圧を連続して押している。底部近くは横方向の条痕で仕上げている。内面は下半が縦方向のケズリ，上半は丁寧な横方向のケズリである。

352 ～ 354 はやや丸みをおびた器形をし，集石 18 号で出土している 28 と同一個体と思われる。外面は二枚貝の貝殻腹縁押圧が横方向に繰り返され，内面はミガキ調整である。焼成良好で，胎土に白色石が多く含まれる。

⑨　桑ノ丸式土器（第 58 図 355・356）

分厚い作りで，口唇部はやや内傾しているが，平坦である。Ｈ－ 13 区で２点出土しているが，同一個体である。外面には右下がり・左下がり方向の短い条痕が施され，内面はミガキ調整である。胎土には白色石や石英などやや大きな石粒が多く含まれ，粗い。にぶい橙色を呈し，焼成良好である。

⑩　押型文土器（第 58 図 357）

Ｇ－３区で出土した。小粒な穀粒押型文で，内面は丁寧にナデている。外面は明赤褐色を呈しているが，内面はにぶい橙色である。石英・長石のほか，白色・黄白色・灰色・茶色の細石粒を多く含む砂質土を用いている。

⑪　手向山式土器（第 58 図 358 ～ 360）

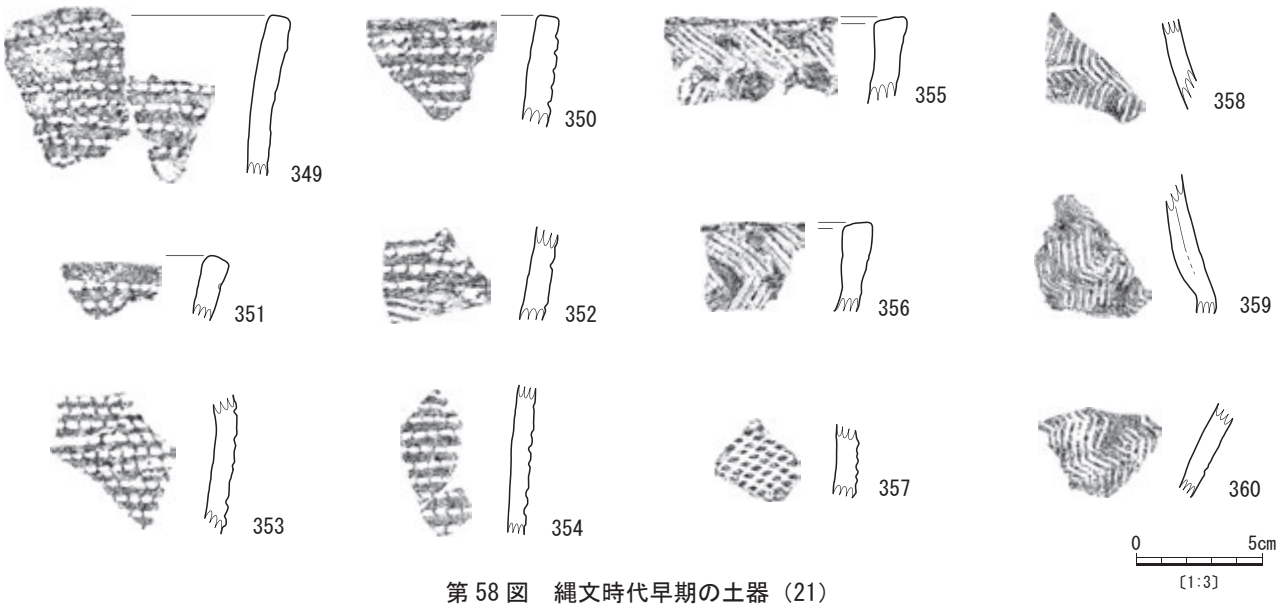
底から外傾して立ち上がり，やや丸みをおびて内傾している器形である。Ｆ－ 10・12 区で３点出土し，同一個体と思われる。外面には山形押型文を横方向に転がしており，内面はナデ調整である。358 は上半部破片で外面にススが付着している。359 は屈曲部で，丸みをおびている。上半の内面には粘土を貼り付けて分厚くしている。屈曲部内面の下半にはオコゲが付着しているが，胴下半の破片である 360 にも内面にオコゲが付着している。

⑫　塞ノ神Ａ式土器（第 59 図 361 ～ 373）

Ｆ－４～６区付近で 36 点出土している。

361 は口縁端近くと，３㎝ほど下に横方向の連続押圧文があり，その間に横あるいは斜方向の５条ほどの凹線が引かれている。口唇部には上から押圧文が施され，内面は丁寧にナデられている。

362 ～ 369 は同一個体と思われる破片で，同じような文様の施されている小破片が他に９点出土している。筒状の胴部から頸部で外傾し，ラッパ状に開く口縁部へ至る器形をしている。口縁部外面には２～３条の凹線が横



第 58 図　縄文時代早期の土器（21）

方向に３段引かれ，胴部外面は縦位に網目状撚糸文が施されている。口縁外面は上から２条・２条・３条の横線が少しずつ離れて３段あり，363 は上と２段目の途中に爪形の押圧文が施されている。丸みをおびた口唇部には内外から押圧文が矢羽根状に施されている。胴部には丁寧なナデ調整のあと縦位に 1.2 ㎝幅ほどの網目状撚糸文が施されている。網目状撚糸文を施したあと，口縁部の横線を引いている。内面はミガキに近い丁寧な横ナデ調整である。362 ～ 369 は塞ノ神Ａａ式土器である。

370･371 は薄手の無文土器で，壺形の土器と思われる。370 は平たい底からすぼまる口縁へ向かう胴屈曲部破片である。371 は底に近く，底径は 13 ㎝ほどである。内面は貝殻条痕のあとナデ調整し，外面は粗い横ナデ調整である。焼成良好で硬質となっている。

372 は幅３㎝足らずの縦位沈線間に斜方向縄文を施した胴部で，外にはススが付着している。373 にも縄文がみられるが，沈線区画はみられない。この２点は塞ノ神Ａｂ式土器である。

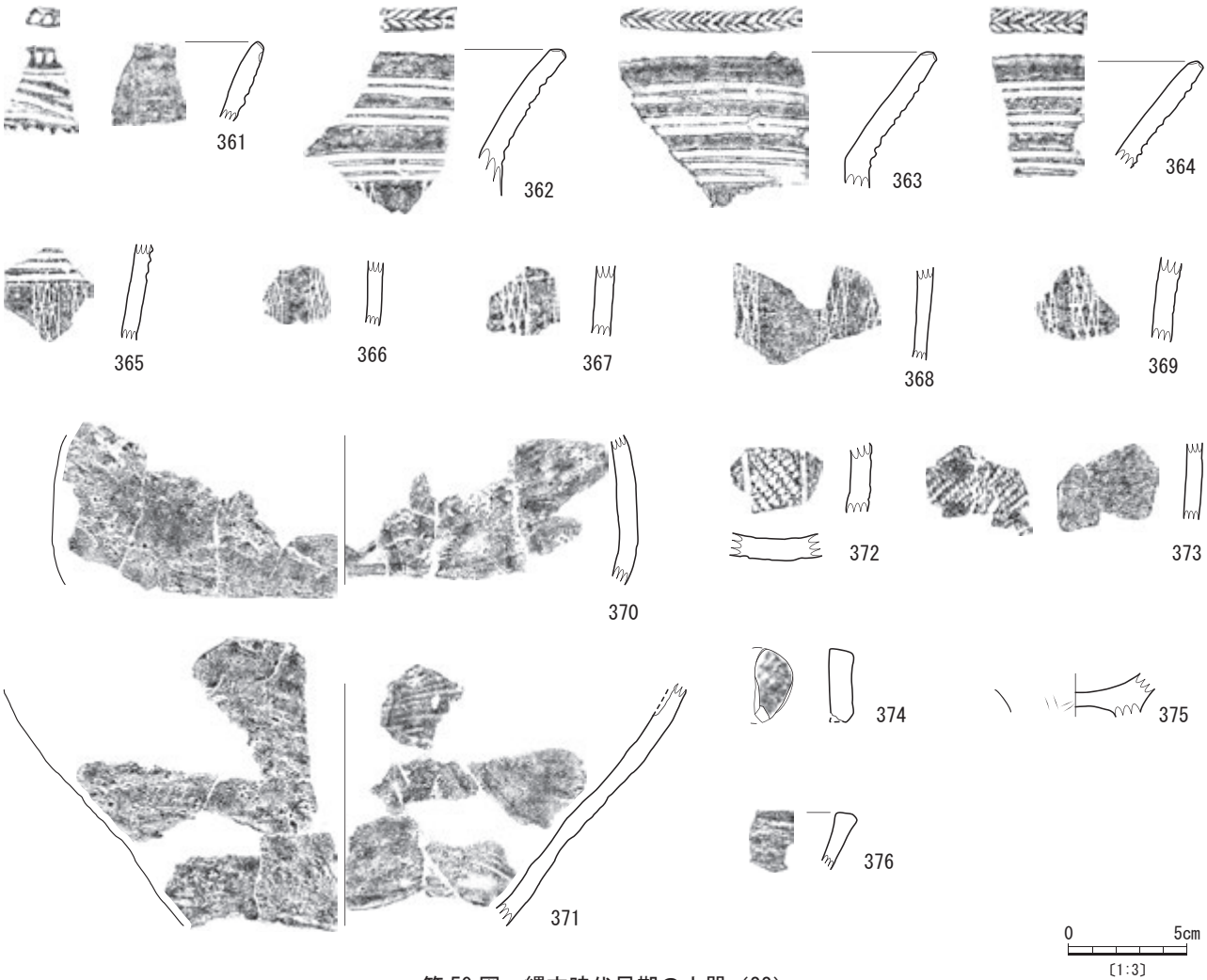
⑬　土製品（第 59 図 374）

Ｆ－16 区Ｖａ層で出土した円盤形の土製品である。直径 3.2 ㎝，厚さ 1.0 ㎝で，半分ほど残っている。周囲を丁寧に打ち欠いて円形にしている。文様等がはっきりしないため詳細不明だが，内外面の調整，胎土，焼成度などからして早期の土製品と思われる。

⑭　時期不明の土器（第 59 図 375・376）

375 は台付き深鉢の体部と脚台の接合部分で，直径は 5.4 ㎝ほどである。鉢部と脚台はのちに貼り付けている。内外とも貝殻でナデているようである。白石・黄白石・灰石などの細石粒を多く含み，脚台付きの深鉢という器種から縄文時代後期の市来式土器と思われる。Ｆ－６区付近の溝状遺構２号で出土している。

376 は玉縁状を呈する鉢の口縁部である。内外ともミガキに近い丁寧なナデ仕上げをしている。Ⅵ層で出土しているが，器形・調整など縄文時代晩期の土器の可能性もあることからここで扱った。



第 59 図　縄文時代早期の土器（22）

4　包含層出土の石器

（1）概要

当該期の遺構外出土石器は合計 45 点で，その殆どが包含層のⅤb・Ⅵ層から出土したものである。

分布状況は，調査区 1 から調査区 2 にかけて，緩斜面及び谷部に点在するものの，調査区 1 では集石の分布域にまとまりがみられる。調査区 3 からの出土はない（第 60 図）。

器種別の内訳は，包含層以外の出土石器を含めて，石鏃 6 点，削器 1 点，石核 2 点，小型石斧 1 点，剥片・砕片類 13 点，磨石・敲石類 20 点，石皿破片 2 点である。

剥片・砕片と石皿片を除き，ほか完形品をはじめ破片を合わせて，28 点を図化した。また，石材鑑定は肉眼観察による。以下，個々の特徴について述べる。実測図の並びは調査区での分布状況に関係なく，順不同である。

（2）出土石器

石鏃（第 61 図 377 ～ 382）

6 点図化した。377・378 は局部磨製石鏃，379 ～ 382 は打製石鏃である。377 は上半部に肩をもち五角形を呈する。器体の表裏に広く縦方向の研磨を施して厚みを減じており，周縁部にのみ浅い調整剥離を加えている。頁岩製である。378 は側縁を弧状として，抉入が深く発達した基部が形作られている。調整剥離は精密であり，裏面の中央稜線に横方向の研磨痕を残している。頁岩製である。379 は比較的深い平坦剥離によって丁寧に形作られており，抉入の浅い窄まった基部を有する。短い脚部の一方を欠損している。玉髄製である。380 は肥厚した器体に粗い調整剥離を留めた未成品とみられ，加工時に一方の脚部を破損した可能性がある。チャート製である。381 は薄身にして抉入の深い基部が形作られ，一方の脚部を欠損している。チャート製である。382 は薄手の剥片を用いて調整剥離を行っており，裏面中央に素材面を残している。脚部を欠損する。石材は透明感のある黒曜石である。

削器（第 61 図 383）

1 点図化した。383 は厚みのある剥片を素材とし，側縁及び基部に表裏両面から粗い調整剥離を施して，略二等辺三角形に整形されている。先端部に短く残置した素材縁辺に微小剥離痕が生じている。チャート製である。なお，一方で石鏃未成品といった可能性が残る。

石核（第 61 図 384・385）

2 点図化した。類似した 384・385 は斑晶の含有が目立つ黒曜石製のものである。打面転移を頻繁に行い，極限まで不定形剥片を剥離した多面体を呈する残核である。

石斧（第 61 図 386）

1 点図化した。386 は長さ 5.3 ㎝と小型短冊形の局部磨製石斧である。器体の裏面に素材面を大きく残して整形剥離は最小限であり，主に刃部を磨製として，表裏両面から非常に丁寧な研磨が施されている。刃こぼれもなく，鋭く整った刃縁を呈する。頁岩製である。

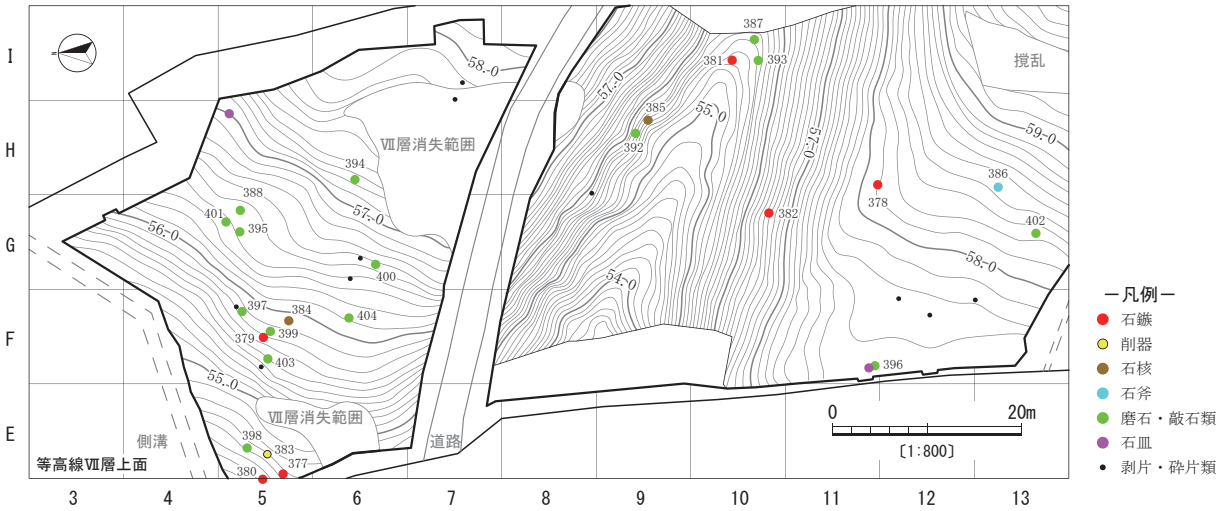
剥片・砕片類

図化は割愛した。13 点あり，大きさ 1 ～ 4 ㎝の不定形で，2 ㎝以下のものが多い。石材は，黒曜石 9 点の他，玉髄 2 点，チャートと頁岩が各 1 点である。

磨石・敲石類（第 62 図～第 64 図 387 ～ 404）

20 点中 18 点図化した。これらには，磨り痕・敲打痕・凹痕にみる各機能を併せ持ったものが存在することから，磨石・敲石・凹石を一括して扱った。以下に分類する。石材については，すべて砂岩を用いている。なお，被熱して赤化したものは，集石礫への利用がうかがわれる。

1 類：磨り面のみで，片面か両面，全面に及ぶもの
2 類：磨り面と敲打痕をもつもの
3 類：磨り面と表裏中央に凹痕をもつもの
4 類：磨り面と敲打痕，表裏中央に凹痕をもつもの

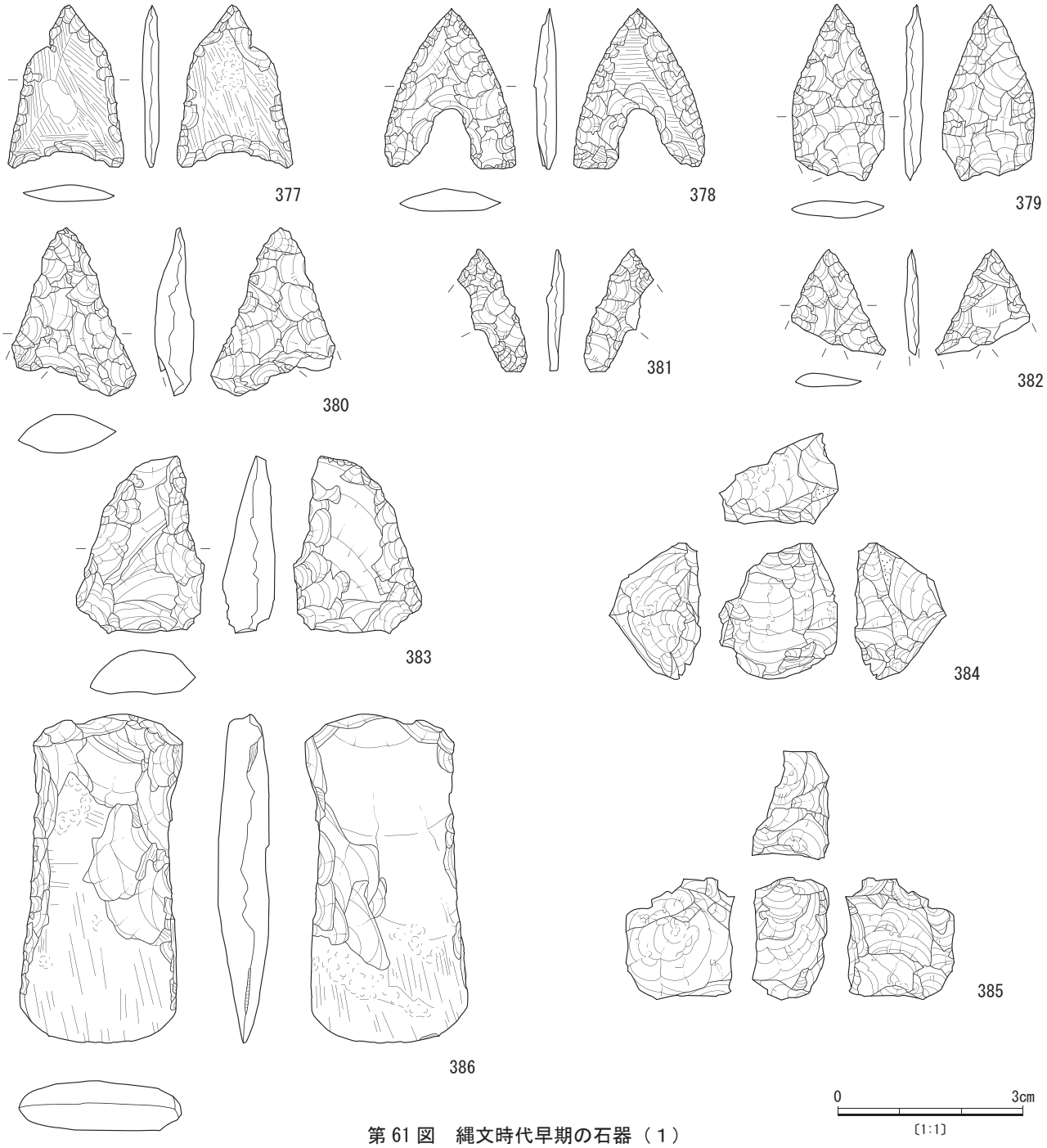


第 60 図　縄文時代早期の石器分布図

1類は，387・388の2点である。どちらも被熱赤化がみられるが，387は滑らかに光沢をおびた磨り面を有する。387は下半を，388は裏面を欠損する。2類は，389～397の9点であり主体をなす。このうち，389は裏面に広く作業面の再生とみられる敲打痕を有する。また特に，389・392では側面に筋状に窪んだ顕著な敲打痕が生じている。389・392・393・395・397には被熱赤化がみられ，391～397は器体の一端ないし半分ほどを欠損している。3類は，398・399の2点である。どちらも側面がやや平らとなり，石鏃形を呈して特徴的である。398には被熱赤化がみられ，399は下半を欠損している。4類は，400の1点のみである。400は自然礫の歪な形状を留めて，中央の凹痕がより顕著である。その他，401～404は小破片である。いずれも被熱赤化しており，401には敲打による剥離が生じている。

石皿

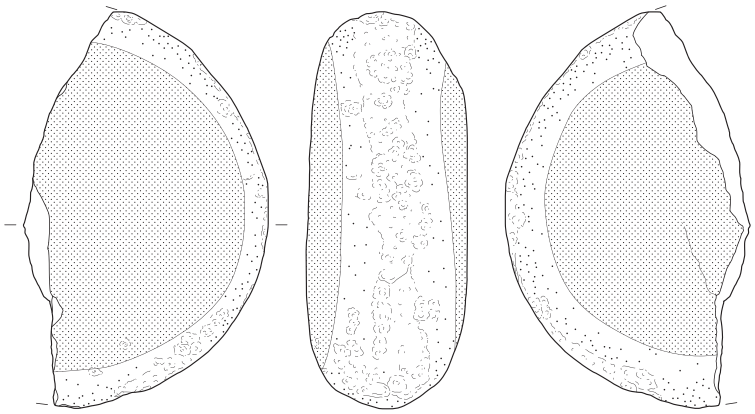
図化は小片のため割愛した。2点とも扁平石皿の表面とみられ，被熱赤化した剥片である。花崗岩製である。



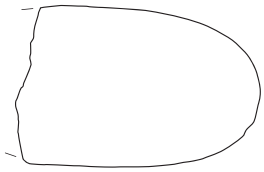
第61図　縄文時代早期の石器（1）

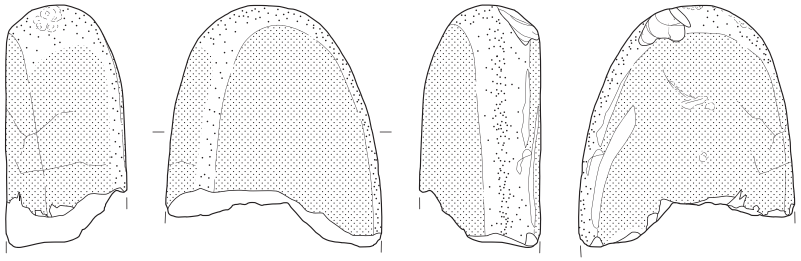


第 62 図　縄文時代早期の石器（２）

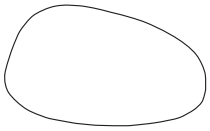


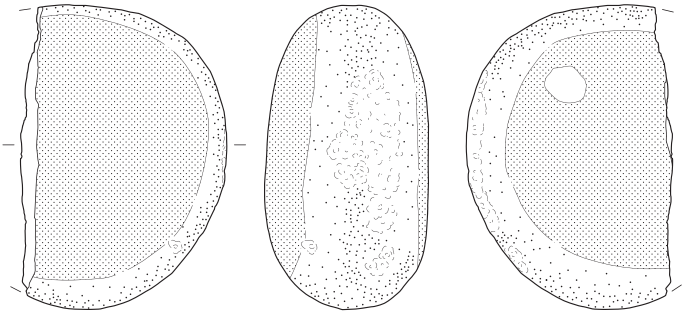
393



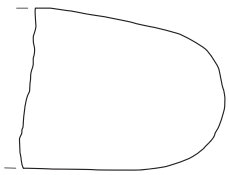


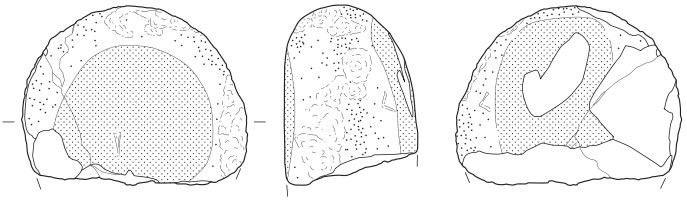
394



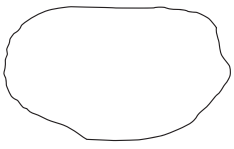


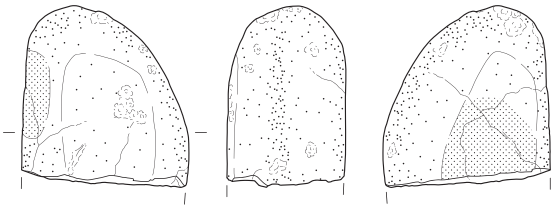
395



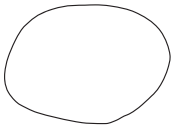


396





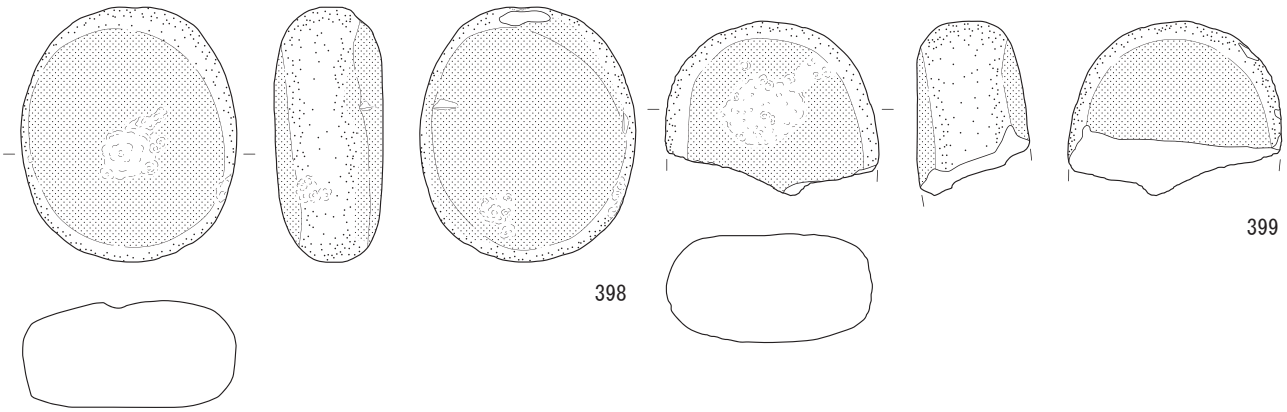
397

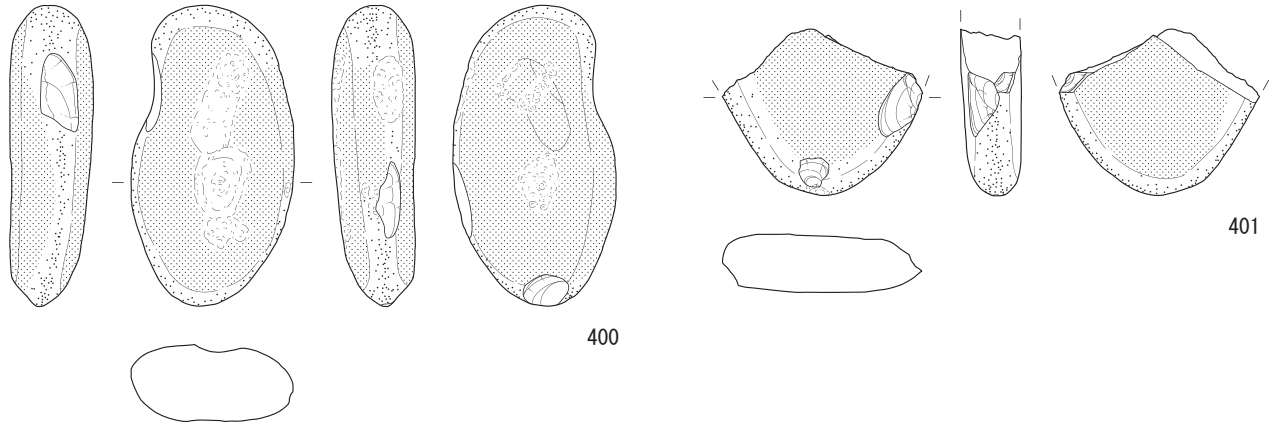


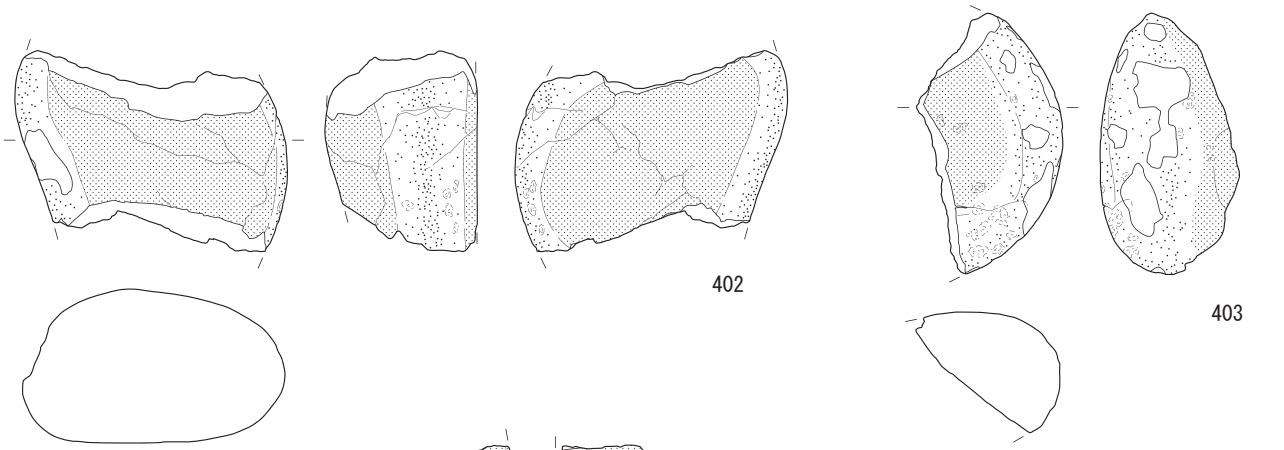
0 10cm

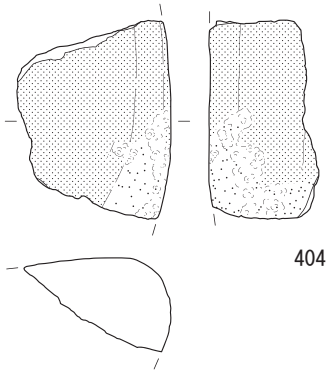
〔1:3〕

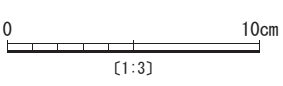
第 63 図　縄文時代早期の石器（３）











第 64 図　縄文時代早期の石器（４）

第５表　縄文時代早期集石出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構番号	出土区	層位	取上番号	型式	部位	外面（調整・文様）	口径 底径 器高（cm）	調整（無記入は内面）	色調		胎土							焼成	備考
											外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石	長石	灰石	
13	3	SS1	G3	－	1	加栗山	胴部	斜条痕・二枚貝押圧	－	丁寧な縦ケズリ	橙	橙	○	○			○				良好	
14	4	SS2	H4･5	－	2	加栗山	胴部	斜条痕・二枚貝押圧	－	丁寧なケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○	○		普通	
	5	SS2	H4･5	－	1	加栗山	胴部	斜条痕・二枚貝押圧	－	縦ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○			○	○	○			普通	
15	6	SS3	G4～6,H5	Ⅴb，Ⅵ	1	加栗山	胴部	斜条痕・二枚貝押圧，楔形突帯	－	丁寧な縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙		○	○		○	○		○	良好	
	7	－	F･G6	Ⅴb	70他	加栗山	胴部	斜条痕・二枚貝押圧，楔形突帯	－	丁寧な縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙			○		○	○	○		良好	
	8	－	G6	Ⅴb，Ⅵ	169他	加栗山	胴部	斜条痕・二枚貝押圧，底部上斜沈線	－ 13.0 －	丁寧な縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙			○		○	○		○	普通	
	9	SS5	G5	－	1	加栗山	胴部	斜条痕	－	縦ケズリ	橙	橙	○		○		○		○		普通	
16	10	SS6	G･H6	－	2	加栗山	胴部	縦貝殻押圧	－	丁寧な縦ケズリ	にぶい褐	にぶい褐	○	○			○		○		普通	
	11	SS6	G･H6	－	1	加栗山	口縁部	口唇刻み　口縁に３段二枚貝横押圧	－	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○	○			普通	
	12	SS7	H6	－	1	加栗山	胴部	横条痕・二枚貝押圧，底部上縦沈線	－	丁寧な縦ケズリ	暗赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		○		○		良好	ススス
	13	SS7	H6	－	2	加栗山	胴部	斜条痕・二枚貝押圧・楔形突帯	－	縦ケズリ	明赤褐	明赤褐	○		○		○				良好	
17	14	SS9	G6	－	1	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧，底部上縦沈線	－	丁寧な縦ケズリ	明赤褐	明赤褐	○	○	○	○	○				良好	
18	15	SS12	E5	－	1	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	縦ケズリ	赤黒	赤黒	○				○		○		良好	
19	16	SS14 SS15	F11	－	6	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	斜ナデ	赤	赤	○		○		○		○		普通	粗い土
	17	－	F11～13	Ⅴab，Ⅵ，撹乱	2他	前平Ⅰ	完形	口縁に１段の押圧 斜条痕	21.8 14.8 34.2	下半縦ケズリ 上条痕	赤	赤		○	○		○		○		良好	
20	18	SS15	F11	－	7	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	縦ケズリ	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○	○		○		○		良好	
	19	SS15	F11	－	11	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	縦ナデ	赤橙	にぶい橙	○	○			○		○		普通	部分的に下部はコゲ
	20	SS16	F10	Ⅴa	1他	前平Ⅱ	口縁～胴部	口縁に２段の楕円形押圧　横条痕	14.2 － －	横・斜ナデ	橙	にぶい橙			○	○	○		○		良好	ススス，補修孔
	21	SS16	F11	－	2	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	縦ナデ	赤橙	灰黄褐	○	○			○	○			普通	
21	22	SS17	F12	－	2	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	縦ケズリ	赤褐	赤褐	○	○	○		○				良好	
	23	SS17	F12	－	4	前平Ⅰ	底部	－	－	外底：ナデ 内底：丁寧なナデ	暗赤褐	赤褐	○		○		○		○		良好	
	24	SS17	F12	－	3	前平Ⅰ	底部	－	－	外底：編布痕	赤	赤	○		○		○		○		良好	
22	25	SS18	F12	－	1	前平Ⅰ	胴部	縦・斜条痕	－	丁寧な縦ナデ	にぶい褐	にぶい褐			○		○	○		○	良好	
	26	SS18	F12	－	4	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	縦ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○				○		○		普通	
	27	SS18	F12	－	5	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	縦ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			○	○	○		普通	
	28	SS18	F12	－	2他	下剥峯	口縁～胴部	横二枚貝腹縁押圧	－	丁寧な横・斜ナデ	灰白	灰白	○	○			○		○		良好	
25	29	SS23	H･I 12･13	－	2	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	縦ケズリ	橙	橙	○	○	○		○	○	○		良好	
26	30	SS24	H13	－	1	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	斜ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○			○		○	○	普通	
27	31	SS25	H13	－	1他	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○				○			○	良好	
31	32	SS31	F15	－	6	札ノ元Ⅶ	口縁部	口唇刻み　口縁に斜二枚貝押圧　横条痕・楔形突帯	－	縦ナデ 口縁は横ナデ	明赤褐	明赤褐	○		○	○		○	○		良好	
	33	SS31	F15	－	3	札ノ元Ⅶ	胴部	横条痕	－	縦ケズリ	橙	橙	○						○		普通	
	34	SS31	F15	－	1	札ノ元Ⅶ	胴部	横条痕	－	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙		○	○		○		○		普通	
	35	SS31	F15	－	4	札ノ元Ⅶ	底部	斜条痕	－ 7.0 －	横ナデ	明赤褐	赤灰	○				○		○		普通	底に白粉
	36	SS31	F15	－	2	円盤形土製品	完形	－	2.8×2.2	丁寧な縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙		○			○		○	○	普通	
32	37	SS32	F15	－	7他	札ノ元Ⅶ	胴部	横条痕	－	縦ナデ	赤橙	赤橙	○		○		○		○		普通	
	38	SS32	F15	－	2	札ノ元Ⅶ	胴部	横条痕	－	ナデ	橙	橙	○	○			○		○		普通	摩耗目立つ
	39	SS32	F15	－	6	札ノ元Ⅶ	胴部	横条痕	－	縦ナデ 口縁は横ナデ	橙	橙	○	○			○		○		普通	
	40	SS32	F15	－	4	札ノ元Ⅶ	胴部	横条痕	－	縦ナデ	橙	橙	○				○		○	○	普通	
33	41	SS33	E･F17	－	1	－	胴部	斜条痕	－	ナデ	橙	橙	○	○	○		○		○		普通	

第６表　縄文時代早期落とし穴出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名	層	取上番号	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
36	42	落とし穴	－	1	磨製石鏃	2.30	1.70	0.23	1.1	頁岩	

第７表　縄文時代早期土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	型式	部位	外面（調整・文様）	口径底径器高（cm）	調整（無記入は内面）	色調		胎土							焼成	備考
										外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石	長石	灰石	
38	43	F11	Ⅴb	4	前平Ⅰ	口縁部	口唇二枚貝押圧 横条痕	－	横ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○		○		○				普通	
	44	G6	Ⅴb	133	前平Ⅰ	口縁部	口縁１段押圧　斜条痕	(12.8) （口）	ケズリ 口縁横ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○				○	○			良好	
	45	F11･12	Ⅴb, Ⅵ	1000 他	前平Ⅰ	口縁部	口縁１段押圧　斜条痕	(13.0) （口）	ケズリ 口縁横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○	○			普通	補修孔
	46	F6	Ⅴb	46	前平Ⅰ	口縁部	口縁１段二枚貝腹縁押圧　斜条痕	－	斜ケズリ 口縁ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐	○		○		○	○			普通	
	47	F5	Ⅵ	39	前平Ⅰ	口縁部	口縁１段二枚貝腹縁押圧　斜条痕	－	縦ナデ	にぶい橙	褐	○	○	○		○	○			普通	
	48	G4	Ⅴb	278	前平Ⅰ	口縁部	口縁１段押圧　斜条痕	－	斜ケズリ	にぶい褐	にぶい褐	○				○	○			普通	
	49	I6	Ⅵ	360	前平Ⅰ	口縁部	口縁１段押圧　斜条痕	－	横ナデ	浅黄	浅黄	○				○	○			良好	
	50	F11	Ⅴa	800	前平Ⅰ	口縁部	口縁１段押圧　斜条痕	－	縦ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○	○			良好	
	51	H9･10	Ⅴb, Ⅵ	916 他	前平Ⅰ	口縁部	口縁１段押圧　斜条痕	(11.0) （口）	縦ケズリ 口縁横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○			良好	
	52	G4	Ⅴb	299	前平Ⅰ	口縁部	口縁１段押圧　斜条痕	－	縦横ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○				○	○			良好	
	53	G11	Ⅴb	756	前平Ⅰ	口縁部	口唇刻み　口縁１段押圧　斜条痕	－	縦ケズリ 口縁斜ナデ	にぶい黄橙	橙	○		○		○	○			普通	
	54	G3	Ⅴb	384	前平Ⅰ	口縁部	口縁１段押圧　斜条痕	－	斜ケズリ 口縁横ナデ	橙	橙	○		○		○	○	○		良好	
	55	F15	Ⅴb	－	前平Ⅰ	口縁部	口縁１段押圧　斜条痕	－	横ナデ	にぶい褐	褐	○		○		○	○			普通	
	56	G4	Ⅵ	－	前平Ⅰ	口縁部	口縁１段押圧　斜条痕	－	横ナデ	黒褐	にぶい褐	○	○			○	○	○		良好	
	57	H10	Ⅵ	871	前平Ⅰ	口縁部	口縁２段押圧　条痕	－	横ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	○				○	○			普通	
	58	F14	Ⅴb	501	前平Ⅰ	口縁部	口縁２段押圧　条痕	－	縦ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○				○	○			普通	
	59	I10	T1	646	前平Ⅰ	口縁部	口縁２段押圧　条痕	－	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		○				普通	
	60	G13	Ⅴb	1118	前平Ⅰ	口縁部	口縁２段押圧　条痕	－	不明	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○	○			普通	磨滅
	61	G12	Ⅵ	761	前平Ⅰ	口縁部	口縁２段押圧　条痕	－	縦ナデ　口縁横ナデ	にぶい赤褐	明赤褐	○				○	○			普通	
	62	F11	Ⅴb	1050	前平Ⅰ	口縁部	口縁２段押圧　条痕	－	横ナデ	橙	にぶい赤褐	○				○	○	○		普通	
	63	H13	Ⅴb	473	前平Ⅰ	口縁部	口縁２段押圧　条痕	－	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○	○			普通	摩耗
	64	F12	Ⅴb	765 他	前平Ⅰ	口縁部	口縁２段押圧　条痕	(19.0) （口）	縦ケズリ 口縁横ナデ後縦ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○			○	○			普通	
	65	G6	Ⅴb	134	前平Ⅰ	口縁部	口縁２段押圧　条痕	－	横ナデ後斜ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○	○		普通	
	66	G12	Ⅴb	760	前平Ⅰ	口縁部	口縁２段押圧　条痕	－	斜・横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○		○	○	○		普通	
	67	H10	Ⅴb, Ⅵ	922 他	前平Ⅰ	口縁～胴部	口縁２段押圧　条痕	(17.0) （口）	縦ケズリ 口縁横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		○	○			普通	
	68	I7	Ⅵ	444	前平Ⅰ	口縁～胴部	口縁２段押圧	－	丁寧な斜ナデ 口縁丁寧な横ナデ	浅黄橙～黒褐	灰黄褐	○		○		○		○		良好	補修孔
	69	G11	Ⅴb	759	前平Ⅰ	口縁～胴部	口縁２段押圧 斜・横条痕	(12.0) （口）	横ナデ，斜ケズリ	にぶい橙	にぶい黄橙	○				○	○			普通	補修孔
	70	F12	Ⅴb	486	前平Ⅰ	胴部	口縁２段押圧　条痕	－	丁寧な縦ナデ	にぶい橙	にぶい橙			○		○		○		良好	
	71	I10	Ⅵ	651	前平Ⅰ	胴部	口縁２段押圧　条痕	－	縦ケズリ	浅黄橙	にぶい橙	○	○		○	○		○		良好	補修孔
39	72	F15	Ⅴb	897	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	丁寧な縦ケズリ	橙	にぶい橙		○	○		○		○		普通	スス
	73	H･I10	Ⅵ, T1	663 他	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	縦ケズリ	橙	褐灰		○	○		○		○		良好	
	74	G4	Ⅴb	298	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	丁寧な縦ナデ	橙	褐灰	○		○		○		○		普通	
	75	G3	Ⅴb	393	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	粗い縦ケズリ	灰褐	赤褐		○	○		○		○		良好	
	76	F13	撹乱	－	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	斜ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		○		○		普通	全体磨滅
	77	F7, G5	Ⅴb, Ⅵ	9・154	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	粗いケズリ	橙	橙		○	○		○		○	○	良好	
	78	G13	Ⅴb	848 他	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	縦ケズリ	黒褐	にぶい橙		○	○		○		○		良好	スス
	79	G6	Ⅴb, 撹乱	176 他	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	縦ケズリ	橙	黒褐	○	○	○		○				普通	
	80	G7	Ⅴb	57	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	丁寧な縦ケズリ	橙	橙	○		○		○		○		良好	
	81	G13	Ⅴb	843	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○		○		○		○	○	普通	剥脱
	82	F12	Ⅴb	785	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○		○		○		○		普通	
	83	F12	Ⅵ	906	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	丁寧な縦ケズリ	明黄褐	明黄褐	○	○	○		○		○		普通	
	84	H9	Ⅵ	1225	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	斜ケズリ	橙	橙	○	○	○		○		○		普通	
	85	F11	Ⅴb	1059	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	丁寧な縦ケズリ	浅黄橙	褐灰		○	○		○		○		普通	補修孔
	86	I9	Ⅴb	698	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	丁寧な縦ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙			○		○		○		普通	
	87	I10	Ⅵ	1084	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	縦ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○	○	○				良好	
	88	H9	Ⅵ	1109 他	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	縦ケズリ後ナデ	灰黄	灰黄	○		○		○		○		良好	コゲ
	89	H4	Ⅴb	327 他	前平Ⅰ	胴部	斜条痕	－	丁寧な縦ケズリ	明赤褐	明赤褐	○	○	○		○		○		良好	
40	90	F16	Ⅴb	587	前平Ⅰ	胴～底部	斜条痕	(14.0) （底）	縦横ケズリ	にぶい褐	にぶい橙	○				○	○			普通	摩耗
	91	F4	Ⅴb	10	前平Ⅰ	胴～底部	斜条痕	(16.6) （底）	斜ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○		○		○	○			普通	
	92	F6	Ⅴb, Ⅵ	7・177	前平Ⅰ	底部	斜条痕	(17.0) （底）	外底：網代状圧痕後条痕様ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	○				○	○			普通	
	93	H5, I7	Ⅴb, Ⅵ	358 他	前平Ⅰ	胴～底部	斜条痕	－	縦ケズリ	にぶい橙	橙	○				○	○			普通	
	94	F17	Ⅴb	575	前平Ⅰ	底部	斜条痕　底部上横条痕	－	不明	にぶい橙	にぶい黄橙	○				○	○			普通	
	95	F12	Ⅴa	1035	前平Ⅰ	底部	斜条痕　底部上横条痕	－	斜ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			○	○			良好	調整粗く凹凸
	96	F11	Ⅴab, Ⅵ	797 他	前平Ⅰ	胴～底部	斜条痕　底部上横条痕	11.0 （底）	縦ケズリ 外底：ナデ	明赤褐	にぶい橙	○				○	○			普通	コゲ
	97	F15	Ⅴb, Ⅵ	604 他	前平Ⅰ	胴～底部	斜条痕　底部上横条痕	(10.6) （底）	丁寧な縦ケズリ	赤灰	にぶい黄橙	○		○		○		○		普通	
	98	G11	Ⅵ	1155	前平Ⅰ	底部	斜条痕　底部上横条痕	9.0 （底）	縦ケズリ 内底：ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○			普通	

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	型式	部位	外面（調整・文様）	口径 底径 器高 (cm)	調整（無記入は内面）	色調		胎土							焼成	備考
										外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石	長石	灰石		
40	99	F15	Ⅴb	602	前平Ⅰ	胴～底部	斜条痕　底部上横条痕	(9.4) (底)	ケズリ 内底：ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○				○	○			普通	
	100	H9	Ⅵ	1005	前平Ⅰ	底部	斜条痕　底部上横条痕	(9.0) (底)	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙～褐灰	○				○	○			普通	
	101	H9	Ⅵ	933	前平Ⅰ	胴～底部	斜条痕　底部上縦刻み	(8.5) (底)	縦ケズリ 内底：丁寧なナデ	にぶい橙	にぶい橙			○		○		○		普通	
	102	F15	Ⅴb	605	前平Ⅰ	胴～底部	底部上斜沈線	(14.4) (底)	縦ナデ 外底：格子状圧痕 内底：指頭状圧痕	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○			普通	
	103	F17	Ⅴb	579	前平Ⅰ	底部	－	－	外底：網目状圧痕	にぶい黄橙	灰褐	○				○	○			良好	底部白粉
41	104	F11	Ⅴb, Ⅵ	1057 他	前平Ⅰ	底部	－	－	外底：格子状圧痕後ハケナデ 内底：指頭状圧痕	にぶい褐	明赤褐	○	○			○	○			普通	
	105	I10	T1	642	前平Ⅰ	底部	－	－	外底：格子状圧痕後ハケナデ 内底：指頭状圧痕	にぶい黄橙	にぶい橙	○		○		○	○			普通	
	106	G4	Ⅴb	285	前平Ⅰ	底部	－	－	外底：格子状圧痕	黄灰	橙		○	○		○		○		良好	
	107	H5・9	Ⅴab, Ⅵ	403 他	前平Ⅰ	底部	斜・横条痕	15.0 (底)	縦ケズリ後内底との境に時計回りケズリ 外底：丁寧なナデ	明赤褐	明赤褐	○		○		○	○			良好	底部はやや楕円
	108	H9	Ⅵ	965	前平Ⅰ	底部	底部角に貝殻押圧	(21.4) (底)	外底：横条痕	浅黄橙	浅黄橙	○				○	○			普通	
	109	I7	Ⅵ	353 他	前平Ⅰ	底部	斜条痕	(22.4) (底)	外底：ケズリ 内底：指頭状圧痕	にぶい赤褐	にぶい橙		○			○	○			良好	
	110	I7	Ⅵ	356	前平Ⅰ	底部	斜条痕 底部上縦・斜条痕	(23.4) (底)	縦ケズリ	橙	にぶい橙	○				○	○			普通	
42	111	G3	Ⅴb	389	前平Ⅱ	口縁部	口唇棒状刻み　口縁２段押圧　横条痕	－	横→縦ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	○				○	○			良好	
	112	H6	Ⅵ	195	前平Ⅱ	口縁部	口縁１段押圧 横条痕	－	横ナデ 口縁横ケズリ	橙	橙	○		○		○	○			良好	
	113	I10	Ⅵ	1083	前平Ⅱ	口縁部	口縁２段押圧　横条痕	－	横後縦ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		○	○			普通	
	114	G6	Ⅴb	129	前平Ⅱ	口縁部	口縁２段押圧　横条痕	－	横～斜ケズリ	にぶい黄橙	にぶい橙			○		○	○			普通	
	115	H9	Ⅵ	856	前平Ⅱ	口縁部	口縁２段押圧　横条痕	－	縦ケズリ 口縁条痕後横ナデ	にぶい橙	にぶい褐	○	○	○		○		○		普通	
	116	G3	Ⅴb	398	前平Ⅱ	口縁部	口唇押圧　口縁に１段押圧　横条痕	－	斜～縦ケズリ 口縁横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○			普通	
	117	F5	Ⅴb	88	前平Ⅱ	口縁部	口唇押圧　口縁に１段押圧　横条痕	(10.0) (口)	縦ケズリ	にぶい橙	橙	○				○	○			良好	
	118	H10	T1	－	前平Ⅱ	口縁部	口唇押圧　口縁に１段押圧　横条痕	－	丁寧なナデ	にぶい橙	灰黄褐	○		○		○	○			普通	
	119	I13	Ⅴb	744	前平Ⅱ	口縁部	口縁２段押圧　横条痕	－	横ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○				○	○			良好	
	120	H5	Ⅴb	453 他	前平Ⅱ	口縁部	口縁２段押圧　横条痕	(8.6) (口)	丁寧なケズリ	にぶい赤褐	にぶい黄橙	○				○	○	○		普通	
	121	I7	Ⅵ	355	前平Ⅱ	口縁部	口唇押圧　口縁２段押圧　横条痕	－	横ナデ	浅黄～黒褐	にぶい黄褐	○				○	○	○		普通	
	122	G9	Ⅴb	476	前平Ⅱ	口縁部	口縁２段押圧　横条痕	－	－	浅黄橙	浅黄橙	○				○	○			普通	摩耗
	123	H10	Ⅵ	917	前平Ⅱ	口縁部	口唇押圧　口縁２段押圧　横条痕	－	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○	○			普通	
43	124	E5, G4・5	Ⅴab, Ⅵ, T1	61 他	前平Ⅱ	口縁～胴部	口唇押圧　口縁２段押圧　横条痕	(20.2) (口)	縦ケズリ 口縁横ナデ	赤橙	灰白・赤橙		○	○		○		○		普通	スス
	125	H10, I9・10	Ⅵ	649 他	前平Ⅱ	口縁～胴部	口縁２段押圧　横条痕	－	縦斜ケズリ 口縁一部ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		○		○		良好	剥落
	126	H10	Ⅴb	1102	前平Ⅱ	口縁部	口唇押圧　口縁２段押圧　横条痕	－	丁寧な横ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○				○	○			普通	
	127	F9	Ⅴb	－	前平Ⅱ	口縁部	口唇押圧　口縁２段押圧　横条痕	－	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		○	○			普通	
	128	H10	Ⅴb	1088	前平Ⅱ	口縁部	口唇押圧　口縁２段押圧　横条痕	－	－	にぶい黄褐	－			○		○	○			普通	補修孔
	129	I7	Ⅴb	343	前平Ⅱ	口縁部	口唇押圧　口縁２段押圧　横条痕	－	横ナデ→縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		○				普通	
	130	H9	Ⅵ	989	前平Ⅱ	口縁部	口唇押圧　口縁２段押圧　横条痕	－	横条痕→縦ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○				○	○			良好	
	131	H9	Ⅵ	533	前平Ⅱ	口縁部	口縁２段押圧　横条痕	－	縦ケズリ 口縁横ケズリ	にぶい黄橙	にぶい橙	○				○	○			普通	
	132	F4	Ⅴb	96・97	前平Ⅱ	口縁部	口唇押圧　口縁２段押圧　横条痕	－	斜→縦ケズリ 口縁横ケズリ	にぶい橙	橙	○		○		○	○	○		良好	
	133	I6	Ⅴb	－	前平Ⅱ	口縁部	口唇・口縁に木の実状押圧　横条痕	－	縦ナデとケズリ	にぶい黄橙	にぶい橙	○		○		○	○			良好	
	134	H13	Ⅴb	710	前平Ⅱ	胴部	口縁に押圧　横条痕	－	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙			○		○		○		良好	表面剥脱
	135	F6	Ⅴb	－	前平Ⅱ	胴部	口縁に押圧　横条痕	－	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○	○			普通	
	136	F4	Ⅴb	－	前平Ⅱ	胴部	口縁に押圧　横条痕	－	－	にぶい橙	にぶい橙			○		○	○			普通	摩耗
44	137	G5	Ⅴb, Ⅵ	152 他	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	丁寧な縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○		○		普通	
	138	I7	Ⅵ	350 他	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	縦ケズリ	赤灰	赤灰		○	○		○				普通	コゲ
	139	E18	Ⅴb	546 他	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	丁寧な縦ナデ	赤	橙		○	○		○		○		良好	
	140	G9	Ⅵ	485	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	丁寧な縦ケズリ	橙	褐灰	○		○		○		○		普通	
	141	G・H5	Ⅴb	264 他	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	横条痕→斜ケズリ	灰黄	にぶい黄橙		○	○		○		○		普通	コゲ
	142	I9	Ⅵ	721	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙			○		○		○		普通	
	143	G4	Ⅴb	280	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	縦ケズリ	赤	黒			○		○		○		良好	
	144	G4	Ⅴb	273 他	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	丁寧な横ケズリ	にぶい橙	褐灰			○		○		○	○	良好	
	145	G3	Ⅵ	388	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	丁寧な縦ケズリ	橙	灰赤		○	○				○	○	良好	
	146	I10	T1	665	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	縦ケズリ	赤橙	暗赤灰		○	○		○		○		良好	
	147	H5	Ⅴb	322	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	丁寧な縦ケズリ	橙	橙	○		○		○		○		普通	内面剥落
	148	H5	Ⅴ	－	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	丁寧な縦ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		○		○		良好	スス

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	型式	部位	外面（調整・文様）	口径底径器高（cm）	調整（無記入は内面）	色調		胎土							焼成	備考
										外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石	長石	灰石	
44	149	H5	Ⅴb	404他	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	縦ケズリ	赤	赤橙			○		○		○		良好	コゲ
	150	H5	Ⅴ	－	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	縦ケズリ	橙	橙	○				○		○		良好	コゲ
	151	H5	Ⅵ	419	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	縦ケズリ	にぶい橙	橙	○		○		○		○		良好	
	152	H5	Ⅵ	414	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙		○	○		○		○		普通	
	153	H5	Ⅴb	412	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	丁寧なケズリ	褐灰	にぶい黄褐	○		○		○		○		良好	
	154	G4	Ⅴb	296	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	縦ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		○		○		普通	
	155	G3	Ⅴb	394	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	丁寧な縦ケズリ	にぶい黄橙	浅黄橙	○		○		○		○		普通	
	156	F6	Ⅴb	48他	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	縦ケズリ	にぶい黄橙	浅黄橙			○		○		○		良好	剥落
	157	I6	Ⅵ	359	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	ケズリ	赤	赤		○	○		○		○		良好	ス ス
	158	I13	Ⅴb	737	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	丁寧な縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙		○	○		○		○		良好	
	159	I9	Ⅵ	693	前平Ⅱ	胴部	横条痕	－	縦ケズリ	橙	褐灰		○	○		○		○		良好	
	160	I5	Ⅴb	363他	前平Ⅱ	胴部	横条痕　底部上斜条痕	－	丁寧な縦ケズリ	明赤褐	赤黒			○		○		○		良好	コゲ
45	161	F6,H5	Ⅴb	52他	前平Ⅱ	底部	横・斜条痕	(8.0)(底)	横ナデ縦ケズリ	橙	にぶい赤褐	○				○	○			良好	
	162	H9	Ⅵ	992	前平Ⅱ	底部	横条痕後ナデ	(8.0)(底)	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい黄橙	○				○	○	○		普通	
	163	H10	Ⅴb	1107	前平Ⅱ	底部	横条痕	(10.6)(底)	ケズリ後ナデ 外底：貝殻押圧後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○	○			普通	
	164	G3,H4	Ⅴb	326他	前平Ⅱ	底部	横条痕	－	縦ケズリ	にぶい褐	にぶい褐	○		○		○	○			良好	
	165	G3	Ⅴb	301	前平Ⅱ	底部	横条痕	－	縦横ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○				○	○			普通	底に白粉
	166	F5	Ⅵ	37	前平Ⅱ	底部	横条痕	10.0(底)	ケズリ 外底：丁寧なナデ 内底：指頭状圧痕後ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	○				○	○			良好	
	167	F5	Ⅴb	77	前平Ⅱ	底部	横条痕	－	横ナデ 外底：貝殻圧痕後ナデ	にぶい橙	橙	○	○			○		○		良好	
	168	G4	Ⅴb	309	前平Ⅱ	底部	横・斜条痕	－	斜・縦ケズリ	にぶい褐	にぶい赤褐	○		○		○	○			良好	底に白粉
	169	H4	Ⅴb	271	前平Ⅱ	胴部	横条痕　底近くナデ	－	縦ケズリ	赤橙	赤			○		○		○		良好	
	170	G4	Ⅵ	442	前平Ⅱ	底部	横条痕	10.0(底)	外底：圧痕ナデ消し 内底：指頭状押圧痕	にぶい褐	にぶい橙	○				○	○			良好	
	171	F6	Ⅴb	71	前平Ⅱ	底部	横条痕	－	縦ケズリ	にぶい黄橙	浅黄橙	○				○	○			普通	
	172	I5	Ⅴb	361他	前平Ⅱ	胴～底部	横条痕　底部上斜条痕	(12.0)(底)	斜ケズリ 外底：ケズリ	橙	にぶい橙	○		○		○	○			普通	コゲ
	173	H11	Ⅵ	703	前平Ⅱ	底部	横条痕	(12.6)(底)	外底・内底 条痕様ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○	○			普通	
	174	I10	Ⅵ	669	前平Ⅱ	底部	横条痕	－	外底：ケズリ 内底：指頭状押圧痕	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○			○	○			良好	
	175	H9,I7～10	Ⅴb,Ⅵ,T1	345他	前平Ⅱ	胴～底部	横条痕，底部上斜条痕	14.4(底)	丁寧な縦ケズリ 外底：ナデ	にぶい橙	にぶい橙		○	○		○		○		良好	
46	176	I14	Ⅴb	747他	前平Ⅲ	口縁部	口縁2段押圧 上部横条痕 下部縦条痕 底部上横条痕	(11.6)～9.5～10.0	口縁は丁寧なナデ 縦ケズリ様ナデ 外底：格子状圧痕後ナデ 内底：指頭状圧痕	明赤褐	橙	○	○	○		○		○		普通	同一個体 底に白粉 推定高20cm
	177	I・J13 SS23	Ⅴb	733他	前平Ⅲ	胴部															
	178	I14	Ⅴb	1120他	前平Ⅲ	底部															
	179	E18	Ⅴb,Ⅵ	552他	前平	口縁～胴部	口縁1条の横二枚貝押圧　斜条痕	(12.0)(口)	縦ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙			○		○		○		普通	ス ス
	180	H9	Ⅴb,Ⅵ	66他	前平	口縁部	縦ケズリ	(13.0)(口)	粗い縦ナデ・ケズリ 口縁斜ナデ	赤	赤	○		○		○				良好	
47	181	G4	Ⅴb,Ⅵ	291他	志風頭	口縁部	口縁二枚貝押圧・斜条痕・角部巻貝押圧・2条の斜二枚貝押圧など	－	縦ケズリ 口縁横・斜ナデ	赤	赤	○	○	○		○		○		良好	ス ス 角筒土器 同一個体
	182	G4	Ⅴb,Ⅵ	286他	志風頭	口縁部															
	183	G3	Ⅴb	387他	志風頭	口縁部	口唇押圧　口縁に斜・角部に縦二枚貝押圧	－	縦ケズリ，押圧痕 口縁斜ケズリ	黒褐	橙	○	○			○		○		良好	角筒土器 ス ス
	184	G4	Ⅴb	297	志風頭	口縁部	口唇押圧　口縁に縦・横貝殻押圧　斜条痕後斜二枚貝押圧　角部に縦竹管様押圧	－	縦ケズリ 口縁横ケズリ	赤黒	暗赤褐		○	○		○		○		良好	角筒土器 ス ス
	185	F4,H5	Ⅴb,Ⅵ	118他	志風頭	口縁～胴部	口縁に3段の横二枚貝押圧　斜条痕・縦鋸歯状沈線	－	縦ケズリ 口縁横ケズリ	にぶい黄橙・褐灰	にぶい黄橙・褐灰			○		○		○		良好	角筒土器 ス ス
	186	G4	Ⅴb	163	志風頭	口縁部	口唇押圧　横条痕後口縁近く横鋸歯状・角部縦鋸歯状沈線	－	縦ケズリ後丁寧な横ナデ	橙	橙	○				○		○		良好	角筒土器 ス ス
	187	G4	Ⅴb	310	志風頭	口縁部	横条痕　口縁近く横鋸歯状沈線	－	斜ケズリ後丁寧な横ナデ　口唇ナデ	明赤褐	明赤褐		○	○		○		○	○	良好	角筒土器 ス ス
	188	G4,I6	Ⅴ	289他	志風頭	胴部	横条痕・縦鋸歯状沈線	－	丁寧なケズリ	橙	黒褐	○	○	○		○		○		普通	角筒土器
	189	G4	Ⅴb	288	志風頭	胴部	横条痕・縦鋸歯状沈線	－	丁寧な縦ケズリ	橙	橙	○		○		○		○		良好	角筒土器
	190	G4	Ⅴb	300	志風頭	口縁部	口唇押圧　横条痕後口縁に縦二枚貝押圧・2条横沈線	－	縦ケズリ 口縁横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		○		○		良好	角筒土器 ス ス 補修孔
	191	G3	Ⅴb	383	志風頭	胴部	横条痕後二枚貝を縦に2列に押圧	－	丁寧なケズリ	赤	赤	○	○	○		○		○		良好	角筒土器 コゲ ス ス
	192	G4	Ⅴb,Ⅵ	287他	志風頭	胴部	斜条痕後3列の縦櫛描状沈線	－	丁寧なケズリ	橙	橙	○	○	○		○		○		普通	
48	193	H9	Ⅵ	863他	加栗山	口縁部	口唇押圧　口縁に3段横二枚貝押圧　横・斜条痕・3段の楔形突帯・Y字状の腹縁押圧	(31.6)(口)	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○			良好	193～196は同一個体
	194	G・H9	Ⅵ	972他	加栗山	口縁部	口唇押圧　口縁に3段横二枚貝押圧　横・斜条痕・3段の楔形突帯・Y字状の腹縁押圧	－	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○			良好	

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	型式	部位	外面（調整・文様）	口径底径器高（cm）	調整（無記入は内面）	色調		胎土							焼成	備考
										外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石	長石	灰石	
48	195	F5,G6	Ⅴb	28他	加栗山	胴部	横・斜条痕・楔形突帯・Y字状の腹縁押圧	−	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○		○		○	○			良好	193～196は同一個体
	196	I10	Ⅵ	611他	加栗山	胴部	横・斜条痕・楔形突帯・Y字状の腹縁押圧	−	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○			良好	
	197	G・H9,I10	Ⅵ,T1	963他	加栗山	胴部	斜条痕・二枚貝縦押圧	−	縦ケズリ	にぶい橙	橙	○				○	○			良好	
	198	H9	Ⅵ	1188他	加栗山	口縁部	口唇押圧　口縁に3段の二枚貝押圧　楔形突帯・突帯間縦貝殻押圧	−	横ケズリ 口縁は横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○			良好	
	199	H6,I10	Ⅴb	183他	加栗山	口縁部	口唇押圧　口縁に3段の二枚貝押圧　楔形突帯・突帯間縦貝殻押圧	−	横ケズリ 口縁は横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○			良好	
	200	E5	Ⅴb	108他	加栗山	口縁部	口唇押圧　口縁に3段の二枚貝押圧　楔形突帯・突帯間斜貝殻押圧	−	−	にぶい褐	にぶい橙	○				○	○			普通	摩耗により不明
	201	H9	Ⅴb	1238	加栗山	口縁部	口唇押圧　口縁に3段の二枚貝押圧　斜条痕・楔形突帯・Y字状縦貝殻押圧	−	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○				○	○			良好	
	202	I10	T1	629	加栗山	口縁部	口唇押圧　口縁に3段の二枚貝押圧　楔形突帯・突帯間縦貝殻押圧	−	横～斜ナデ	にぶい褐	明赤褐	○				○	○			良好	
	203	H9	Ⅵ	967	加栗山	口縁部	口唇押圧　口縁に3段の二枚貝押圧 横条痕・楔形突帯・Y字状縦貝殻押圧	−	ケズリ後横ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			○	○			良好	
	204	H14	Ⅴb	334	加栗山	口縁部	口唇押圧　口縁に3段の二枚貝押圧　楔形突帯・縦貝殻押圧	−	横ナデ	にぶい褐	にぶい橙	○		○		○	○			良好	
	205	E5	撹乱	−	加栗山	口縁部	口唇押圧　口縁に3段の二枚貝押圧　斜二枚貝押圧	−	横ナデ	褐	橙	○				○	○			普通	
	206	G5	Ⅴb	155	加栗山	口縁部	口唇押圧　口縁に3段二枚貝押圧　楔形突帯・突帯間縦貝殻押圧	−	縦ケズリ 口縁横ナデ	橙	橙	○				○	○			普通	
	207	G5・6	Ⅳb,Ⅴb	197他	加栗山	口縁部	口唇押圧　口縁に3段二枚貝押圧　斜条痕・楔形突帯・Y字状縦貝殻押圧	−	横ケズリ	橙	橙	○				○	○			良好	
49	208	F4・5,H・I5	Ⅴb,Ⅵ	15他	加栗山	口縁部	口唇押圧　口縁に4段横二枚貝押圧，斜条痕→3段の楔形突帯・突帯間縦二枚貝押圧	(30.4)（口）	縦ケズリ後斜ナデ 口縁横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○		○		○	○			良好	208～211は同一個体
	209	F4・5	Ⅴb	17他	加栗山	口縁部				にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		○	○			良好	
	210	G・F5	Ⅴb	81他	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	縦ケズリ後斜ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○		○		○	○			良好	
	211	G6,H9	Ⅴb	139他	加栗山	胴部				にぶい黄橙	にぶい黄褐	○		○		○	○			良好	
	212	E5,G4,H・I5	Ⅴb,Ⅵ	62他	加栗山	口縁～胴部	口唇押圧　口縁に2段の横二枚貝押圧　斜条痕・3段の楔形突帯・突帯間に縦二枚貝押圧	−	縦ケズリ 口縁丁寧なナデ	明赤褐	明赤褐	○		○		○	○			良好	
	213	G5	Ⅴb	229	加栗山	口縁部	口唇に押圧　口縁に斜二枚貝押圧　縦二枚貝押圧・楔形突帯	−	横ナデ	にぶい橙	橙	○				○	○			普通	擦切による補修孔
	214	G6	Ⅴb	126	加栗山	胴部	斜条痕・斜二枚貝押圧・楔形突帯	−	横ケズリ	にぶい橙	明赤褐	○		○		○	○			良好	
	215	G6	Ⅵ	436	加栗山	胴部	斜条痕・斜二枚貝押圧・楔形突帯	−	横ケズリ	褐灰	にぶい橙			○		○	○			良好	
	216	G9	Ⅴb	483	加栗山	胴部	斜条痕・楔形突帯・縦二枚貝押圧	−	縦ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○		○	○			良好	
	217	G4	Ⅴb	279	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	縦ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○				○	○			良好	
	218	H9	Ⅵ	1226	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	縦ケズリ	にぶい褐	にぶい赤褐	○				○	○			良好	
50	219	I7	Ⅴb	430	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	縦ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○		○	○			良好	
	220	H9	Ⅴb,T1	52他	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	縦ケズリ	橙	橙	○		○		○	○			普通	
	221	G9	Ⅴb	480	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	横→縦ケズリ	橙	橙	○				○	○			良好	
	222	F4	Ⅴb	1169他	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	縦ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			○	○			良好	
	223	G4	Ⅴb	277	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	縦ケズリ	にぶい橙	橙	○				○	○			良好	
	224	H9	Ⅴb	518	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	縦ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○		○	○			良好	
	225	I7	Ⅴb	433	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	縦ケズリ	にぶい黄橙	にぶい橙	○				○	○			良好	
	226	G・H5	Ⅴb,Ⅵ	173他	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	縦ケズリ	褐	明赤褐	○		○		○	○			良好	
	227	H・I6	Ⅴb,Ⅵ	417他	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	縦ケズリ	明赤褐	明赤褐	○		○		○	○			良好	
	228	H10	Ⅵ	701他	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	縦ケズリ	にぶい赤褐	灰褐	○				○	○			良好	
	229	G・H9	Ⅵ	1169他	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	縦～斜ケズリ	にぶい褐	にぶい橙	○		○		○	○			良好	
	230	I9	T1	691	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	縦ケズリ	にぶい褐	にぶい褐	○		○		○	○			良好	
	231	I10	T1	1163	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	縦ケズリ	にぶい褐	にぶい赤褐	○	○			○	○			良好	
	232	H10	T1	1232	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	縦ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		○	○			良好	
	233	H6	Ⅴb	465	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい黄橙	○				○	○			普通	
	234	F6	Ⅵ	1	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい赤褐	○				○	○			良好	にぶい橙が縞状
	235	H9	Ⅵ	1227	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	縦ケズリ→縦ナデ	橙	橙	○		○		○	○			良好	
	236	G6,H9	Ⅴb,Ⅵ	120他	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	縦ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○				○	○			良好	
	237	E5	Ⅴb	112	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	丁寧な斜ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○			良好	ススス
	238	H5	Ⅴb	457	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	横ケズリ	にぶい褐	にぶい赤褐	○				○	○			良好	
	239	G6	Ⅴb	135	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	縦ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○			良好	
	240	I10	T2	659	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	縦ケズリ	にぶい橙	橙	○				○	○			普通	
	241	I7	Ⅴb	427	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	−	丁寧な横ナデ	灰褐	灰褐		○	○		○				良好	

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	型式	部位	外面（調整・文様）	口径 底径 器高（cm）	調整（無記入は内面）	色調		胎土								焼成	備考
										外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石	長石	灰石		
51	242	G6	Ⅴb	－	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	－	丁寧な縦ケズリ	にぶい橙	橙	○		○		○		○		良好	擦切による補修孔
	243	H9	Ⅵ	952他	加栗山	胴部	横条痕・斜格子沈線	－	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○		○		○		○		普通	
	244	G9	Ⅴb	－	加栗山	胴部	横条痕・斜二枚貝押圧	－	斜ケズリ	にぶい橙	褐灰	○				○	○			良好	
	245	G9	Ⅴb	486	加栗山	胴部	縦押圧で区画後左下がり斜押圧と無文部交互	－	縦ケズリ	にぶい橙	褐灰	○				○	○			良好	
	246	G9	Ⅴb	484	加栗山	胴部	縦押圧で区画後左下がり斜押圧と無文部交互	－	縦ケズリ	褐灰	にぶい赤褐	○		○		○	○			良好	
	247	H9	Ⅵ	1186	加栗山	底部	斜沈線	－	丁寧な縦ケズリ 外底：丁寧なナデ	橙	橙	○				○	○			良好	
	248	H10	Ⅵ	1114	加栗山	胴部	縦二枚貝押圧 底部上縦沈線	－	縦ケズリ	にぶい赤褐	明赤褐	○		○		○	○			普通	
	249	H9	Ⅵ	982	加栗山	底部	斜条痕・縦二枚貝押圧・底部上縦沈線	(9.0)（底）	縦ケズリ	にぶい黄橙	橙	○				○	○			良好	
	250	I7	Ⅴb	429	加栗山	底部	斜条痕・縦二枚貝押圧・底部上斜沈線	－	横ケズリ	橙	橙	○				○	○			普通	
	251	G6	Ⅴb	136他	加栗山	底部	斜条痕・縦二枚貝押圧・底部上縦沈線	－	丁寧なケズリ	橙	橙	○		○		○		○		良好	
	252	H9	Ⅵ	531他	加栗山	底部	斜条痕・縦二枚貝押圧・底部上縦沈線	(23.0)（底）	縦ケズリ	にぶい橙	明赤褐	○		○		○	○			良好	
52	253	I9	Ⅵ	720	加栗山	底部	縦沈線	9.2（底）	外底：丁寧なナデ 内底：ケズリ後ナデ	にぶい赤褐	橙	○				○	○			普通	
	254	F14	Ⅴb	499	加栗山	底部	縦沈線	(11.0)（底）	外底：丁寧なナデ 内底：指頭状圧痕	明赤褐	明赤褐	○	○			○	○			良好	
	255	I9	Ⅵ	719	加栗山	底部	縦沈線	10.8（底）	外底：ケズリ後ナデ 内底：放射状にケズリ	明赤褐	明赤褐	○	○			○	○			普通	
	256	H10	Ⅴa	1090	加栗山	底部	縦沈線	10.8（底）	－	明赤褐	明赤褐	○	○			○	○			普通	剥落
	257	G5	Ⅴb	219	加栗山	底部	縦沈線	10.0（底）	外底：丁寧なナデ 内底：ケズリ後ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○			良好	
	258	H10	Ⅵ	1017	加栗山	底部	斜沈線	(9.8)（底）	外底：ケズリ後ナデ 内底：ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○				○	○			良好	
	259	H10,I6	Ⅴ,T1	678他	加栗山	底部	縦沈線	13.4（底）	内外底：ケズリ後ナデ	橙	橙	○				○	○			良好	
	260	H5	Ⅴb	59	加栗山	底部	斜沈線	14.4（底）	外底：丁寧なナデ 内底：ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○			良好	
	261	H5	－	－	加栗山	底部	縦沈線	13.6（底）	内底：粗いケズリ後指頭状圧痕	明赤褐	明赤褐	○				○	○			良好	
	262	G6	Ⅴb	132	加栗山	底部	縦沈線	(17.6)（底）	外底：ケズリ後ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐	○				○	○			普通	
	263	F15	Ⅴb	889	加栗山	底部	斜沈線	13.0（底）	外底：ケズリ後ナデ 内底：放射状のケズリ	明赤褐	明赤褐	○	○			○	○			良好	
	264	I10	T1	622	加栗山	底部	斜沈線	16.8（底）	内外底：ケズリ後ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○			○	○			良好	
	265	I6	撹乱	－	加栗山	底部	斜沈線	(17.4)（底）	外底：ケズリ後ナデ 内底：ケズリ	にぶい赤褐	明赤褐	○				○	○			良好	
	266	F14	Ⅴb	507	加栗山	底部	縦沈線	－	外底：丁寧なナデ 内底：ケズリ	橙	橙	○				○	○			良好	
	267	H6	Ⅴb	187	加栗山	底部	縦沈線	－	外底：ナデ	浅黄橙	浅黄橙	○				○	○			普通	
	268	F17	Ⅴb	574	加栗山	底部	斜沈線	－	外底：ナデ	灰褐	明赤褐	○				○	○			普通	
	269	F4	Ⅴb	92	加栗山	底部	斜貝殻押圧・底部上無文	－	ナデ	橙	橙	○				○	○			良好	
	270	G6	Ⅴb	174	加栗山	底部	－	－	外底：ケズリ 内底：ケズリ後指頭状圧痕	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○	○			普通	
53	271	G6	Ⅴb	216	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	－	縦ケズリ	にぶい褐	明赤褐	○				○	○			良好	角筒土器
	272	G6	Ⅴb	217	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧	－	縦ケズリ	にぶい褐	にぶい赤褐	○		○		○	○			良好	角筒土器
	273	G4	Ⅴb	162	加栗山	胴部	斜条痕・縦二枚貝押圧底部上斜沈線	－	縦ケズリ	にぶい褐	にぶい赤褐	○				○	○			良好	角筒土器
	274	G9	Ⅵ	1208	加栗山	胴部	縦二枚貝押圧文　角は横細沈線	－	縦ケズリ	橙	橙	○		○		○				良好	角筒土器
	275	H6	Ⅴb, Ⅵ	406他	加栗山	底部	斜沈線	－	外底：丁寧なケズリ 内底：ナデ	赤	赤	○		○		○		○		良好	角筒土器底部白粉
54	276	F4, G･H5	Ⅴb	94他	小牧3A	口縁部	口唇刻み　口縁に3段の横二枚貝押圧　縦二枚貝押圧・楔形突帯	－	縦ナデ 口縁丁寧な横ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○		○	○			良好	
	277	H9	Ⅵ	988	小牧3A	口縁部	口唇刻み　口縁に3段の横二枚貝押圧　縦二枚貝押圧・楔形突帯	－	内外面：丁寧な横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○	○			良好	
	278	I7	Ⅴb	425	小牧3A	口縁部	口唇刻み　口縁に3段の横二枚貝押圧　貝殻押圧・楔形突帯	－	内外面：丁寧な横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○	○			良好	
	279	G･H5	Ⅴb	266他	小牧3A	口縁部	口唇刻み　口縁に2段の横二枚貝押圧　縦二枚貝押圧・細い楔形突帯	－	横ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○				○	○			普通	
	280	I7･9	Ⅴb, Ⅵ	346他	小牧3A	口縁部	口唇刻み　口縁に2段の横二枚貝押圧　縦二枚貝押圧・細い楔形突帯	17.4（口）	横ナデ	にぶい褐	明赤褐	○				○	○			普通	
	281	I10	Ⅵ	655	小牧3A	口縁部	口唇刻み　口縁に2段の横二枚貝押圧　縦二枚貝押圧・楔形突帯	－	口縁横ナデ 胴部縦ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○			良好	
	282	H9･10	Ⅴb, Ⅵ	523他	小牧3A	口縁部	口唇刻み　口縁に3段横二枚貝押圧　縦矩形押圧・楔形突帯	22.2（口）	横ナデ	明赤褐	明赤褐とにぶい黄橙	○				○	○			良好	282～285は同一個体，口縁ススス

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	型式	部位	外面（調整・文様）	口径底径器高（cm）	調整（無記入は内面）	色調		胎土							焼成	備考
										外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石	長石	灰石	
54	283	H9	Ⅵ	857 他	小牧３Ａ	口縁部	口唇刻み　口縁に３段横二枚貝押圧　縦矩形押圧・楔形突帯	－	横ナデ	橙	にぶい橙と浅黄橙	○				○	○			良好	282 ～ 285 は同一個体，283：口縁ススあり
	284	H9･10	Ⅴａ，Ⅵ	862 他	小牧３Ａ	胴部	縦矩形押圧・楔形突帯	－	縦ケズリ	にぶい橙	明赤褐と浅黄橙	○				○	○			良好	
	285	H9	Ⅵ	958 他	小牧３Ａ	胴部	縦矩形押圧　底部上斜沈線	－	斜ケズリ	にぶい橙	にぶい黄橙	○				○	○			良好	
	286	G･H9，I10	Ⅴｂ，Ⅵ，T1	670 他	小牧３Ａ	口縁～胴部	口唇刻み　口縁に３段横二枚貝押圧　縦矩形押圧・3 段の楔形突帯	(28.0)（口）	丁寧な横ナデ	橙	橙	○		○		○	○			良好	
55	287	I10	Ⅵ	624	小牧３Ａ	口縁部	口唇刻み　口縁に３段横二枚貝押圧　斜条痕・縦矩形押圧・楔形突帯	－	横ナデ	橙	橙	○		○		○	○			普通	
	288	H5	Ⅴｂ	324	小牧３Ａ	口縁部	口唇刻み　口縁に２段の二枚貝押圧　斜条痕・縦押圧	－	横ナデ	橙	橙	○				○	○			良好	
	289	H5	Ⅴｂ	449	小牧３Ａ	口縁部	口唇刻み　口縁に３段横二枚貝押圧　縦矩形押圧・楔形突帯	－	横ナデ	橙	橙	○				○	○			良好	
	290	I10	T1	641 他	小牧３Ａ	口縁部	口唇刻み　口縁に３段横二枚貝押圧　縦矩形押圧・楔形突帯	－	横ナデ	明赤褐	橙	○				○	○			良好	
	291	H5	Ⅴｂ	60	小牧３Ａ	口縁部	口唇刻み　口縁に３段横二枚貝押圧　縦矩形押圧・楔形突帯	－	横ナデ	明赤褐	明赤褐	○				○	○			良好	
	292	I10	Ⅵ	618	小牧３Ａ	口縁部	口唇刻み　口縁に２段横二枚貝押圧　縦矩形押圧・楔形突帯	－	丁寧な横ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○				○	○	○		良好	
	293	G6	Ⅴｂ	205	小牧３Ａ	口縁部	口縁に３段横二枚貝押圧　縦矩形押圧・楔形突帯	－	－	橙	にぶい橙	○		○		○	○			普通	摩耗
	294	G9	Ⅴｂ	493	小牧３Ａ	口縁部	口唇刻み　口縁２段横二枚貝押圧　縦矩形押圧・密な楔形突帯	－	横ナデ，ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			○	○			良好	
	295	G9	Ⅴｂ	477	小牧３Ａ	口縁部	口唇刻み　口縁に３段横二枚貝押圧　縦矩形押圧・密な楔形突帯	－	横ナデ	明赤褐	明赤褐	○		○		○	○			良好	
	296	H9	Ⅵ	951	小牧３Ａ	口縁部	口唇刻み　口縁に３段横二枚貝押圧	－	横ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	○				○	○			普通	
	297	G4	Ⅴｂ	374	小牧３Ａ	口縁部	口唇刻み　口縁に３段横二枚貝押圧　縦矩形押圧・太めの楔形突帯	－	横ナデ	橙	橙	○		○		○	○			良好	
	298	H9	T1	1006	小牧３Ａ	口縁部	口唇刻み　口縁に３段横二枚貝押圧　縦矩形押圧・楔形突帯	－	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○	○			良好	
	299	I10	Ⅵ	673	小牧３Ａ	口縁部	口唇刻み　口縁に３段横二枚貝押圧　縦矩形押圧・楔形突帯	－	横ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○		○	○			良好	
	300	G6	Ⅴｂ	148	小牧３Ａ	胴部	二枚貝押圧・楔形突帯	－	斜ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○	○			良好	同一個体
	301	I10	T1	1164	小牧３Ａ	胴部	二枚貝殻押圧	－	縦ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○	○			良好	
	302	I10	Ⅵ，T1	623 他	小牧３Ａ	胴部	横貝殻押圧・楔形突帯	－	丁寧な縦ケズリ	明赤褐	明赤褐	○		○		○				良好	ススあり
	303	G5，H･I10	Ⅴｂ，Ⅵ，T1	153 他	小牧３Ａ	胴部	弧状の横・斜貝殻押圧	－	縦ケズリ	赤	明赤褐	○	○	○		○		○		普通	ススあり
	304	H6･9，I10	Ⅴｂ，Ⅵ，T1	643 他	小牧３Ａ	胴部	縦二枚貝押圧・楔形突帯	－	横ナデ	橙	橙	○		○		○	○			良好	
	305	H4	Ⅴｂ	329	小牧３Ａ	胴部	縦二枚貝押圧	－	縦ケズリ	にぶい褐	明赤褐とにぶい黄橙色の縞状	○	○			○	○			良好	282 他と同一か
	306	F15	Ⅴｂ	892	小牧３Ａ	胴部	横条痕・細い楔形突帯	－	横ナデ	褐灰	橙	○				○	○			良好	
	307	F16	Ⅴｂ	584	小牧３Ａ	胴部	横条痕・密な貝殻縦押圧	－	横ナデ	黒褐	にぶい橙	○	○	○		○				良好	
	308	G5･6	Ⅴｂ	147 他	小牧３Ａ	胴部	密な縦貝殻押圧　底部上縦沈線	－	縦ケズリ	にぶい橙	にぶい赤橙	○				○	○			良好	
	309	G5	Ⅴｂ	151	小牧３Ａ	胴部	密な縦貝殻押圧　底部上縦沈線	－	縦ケズリ→ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○				○	○			良好	
	310	－	Ⅰ	－	小牧３Ａ	胴部	密な縦貝殻押圧　底部上縦沈線	－	縦ケズリ	にぶい赤褐	褐灰	○				○	○			良好	
	311	G6	Ⅴｂ	58	小牧３Ａ	胴部	密な縦貝殻押圧　底部上縦沈線	－	縦ケズリ	にぶい赤褐	褐灰	○				○	○			良好	
	312	H10	Ⅴｂ	1097	小牧３Ａ	底部	密な縦貝殻押圧　底部上斜沈線	－	縦ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○	○			良好	
	313	I7	Ⅴｂ，Ⅵ	352 他	小牧３Ａ	底部	縦貝殻押圧　底部上斜沈線	(13.0)（底）	縦ケズリ　外底：丁寧なナデ	橙	にぶい橙	○	○	○		○	○			良好	
56	314	H6，I10	Ⅴｂ，T1	54 他	札ノ元Ⅶ	口縁～胴部	口唇刻み　口縁に斜貝殻押圧　斜条痕・長い楔形突帯	－	斜ケズリ→横ナデ	橙	橙	○	○	○		○		○		良好	
	315	G9	Ⅵ	100	札ノ元Ⅶ	口縁部	口唇刻み　口縁に２段貝殻横押圧　横条痕・楔形突帯	－	横ナデ	赤	赤			○		○		○		普通	
	316	F6	Ⅴａ	599	札ノ元Ⅶ	口縁部	口唇刻み　口縁３段横押圧　横条痕・楔形突帯	－	丁寧な縦ケズリ　口縁横ナデ	赤	赤			○		○		○		普通	
	317	E16･17	Ⅴｂ	567 他	札ノ元Ⅶ	口縁部	口唇刻み　口縁二枚貝背部押圧　横条痕・短い楔形突帯	－	丁寧な横ナデ	赤橙	赤橙			○		○		○		良好	
	318	F16	Ⅴｂ	610	札ノ元Ⅶ	口縁部	口唇刻み　口縁に４段貝殻横押圧　横条痕・楔形突帯	－	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○	○			良好	

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	型式	部位	外面（調整・文様）	口径底径器高（cm）	調整（無記入は内面）	色調		胎土							焼成	備考
										外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石	長石	灰石	
56	319	G6	Ⅴb	119	札ノ元Ⅶ	口縁部	斜条痕	－	横→縦ナデ　口縁横ナデ	にぶい褐～灰褐	にぶい褐	○				○	○			良好	
	320	F6	Ⅴb	72	札ノ元Ⅶ	胴部	口縁斜二枚貝腹縁押圧横条痕・楔形突帯	－	横ケズリ→丁寧な斜ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○		○		良好	内は筋状に赤
	321	F17	Ⅴb	541	札ノ元Ⅶ	胴部	浅い横条痕・楔形突帯	－	丁寧な縦条痕	赤	赤		○	○		○		○		普通	
	322	H9	Ⅴb, Ⅵ	524 他	札ノ元Ⅶ	胴部	浅い横条痕・楔形突帯	－	縦ケズリ　口縁部分的にミガキ	赤	赤			○		○		○		普通	
	323	F14･15	Ⅴb	497 他	札ノ元Ⅶ	胴部	横条痕	－	丁寧な縦ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		○		○		普通	
	324	E5	Ⅴb	106	札ノ元Ⅶ	胴部	弧状の条痕	－	丁寧な縦ケズリ	暗赤灰	にぶい赤褐			○		○		○		良好	
	325	G4	Ⅴb	306	札ノ元Ⅶ	胴部	斜条痕	－	縦ケズリ	赤	赤			○				○		良好	
	326	H6	Ⅴb	185	札ノ元Ⅶ	胴部	細かい横・斜条痕	－	条痕→縦ケズリ　底近くナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		○		○		普通	
	327	G11	Ⅴb	757	札ノ元Ⅶ	胴部	斜条痕	－	丁寧な縦ケズリ　底近く横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○		○		○		○		普通	コゲ ススス
	328	H10	T1	679	札ノ元Ⅶ	胴部	斜条痕	－	丁寧な縦ケズリ	にぶい赤褐	明赤褐	○				○		○		良好	
	329	H9	Ⅴb, Ⅵ	938 他	別府原	口縁～胴部	８条の横条痕	(13.0)（口）	縦・斜ケズリ	橙	浅黄橙	○		○		○		○		普通	ススス
57	330	I10	Ⅵ	639 他	石坂	口縁部	綾杉状貝殻押圧	－	横ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐			○		○		○		普通	
	331	I10	T1	1065	石坂	口縁部	綾杉状貝殻押圧	－	横ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐			○		○		○		普通	
	332	E19	Ⅴb	542	石坂	口縁部	斜条痕・2段の横二枚貝押圧	－	丁寧な横ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○		○		○		○		普通	
	333	H5	Ⅴa	448	石坂	口縁部	口唇刻み　口縁横・斜二枚貝押圧　綾杉状条痕	－	ナデ	浅黄橙	浅黄橙			○		○		○		普通	内面は広く剥脱
	334	H5	Ⅴb	446	石坂	口縁部	口唇刻み　口縁横・斜二枚貝押圧　綾杉状条痕	－	縦ケズリ	にぶい橙	褐灰	○		○		○		○		普通	摩耗
	335	E18	Ⅴa	549 他	石坂	口縁部	口唇刻み　口縁３段の二枚貝腹縁押圧	－	丁寧な横ナデ	黒褐	にぶい黄橙			○		○		○		普通	
	336	I10	Ⅵ	631	石坂	胴部	綾杉状条痕	－	斜ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐			○		○		○		普通	
	337	F16	Ⅴb	590	石坂	胴部	綾杉状条痕	－	縦ナデ	赤灰	赤黒			○		○		○		普通	
	338	F15	Ⅴb	898	石坂	胴部	綾杉状条痕	－	丁寧な斜ナデ	にぶい黄橙	褐灰			○		○		○	○	良好	ススス
	339	I10	T1	626	石坂	胴部	綾杉状条痕	－	丁寧な斜ケズリ	橙	赤灰			○		○		○		良好	
	340	F16	Ⅴb	594 他	石坂	胴部	綾杉状条痕	－	丁寧な縦ナデ	赤灰	暗赤灰	○		○		○		○		普通	
	341	F14･15	Ⅴb	498 他	石坂	胴部	綾杉状条痕	－	縦ケズリ	橙	橙			○		○		○		良好	ススス，コゲ
	342	E18	Ⅴb	551	石坂	胴部	綾杉状条痕	－	縦ケズリ→丁寧なナデ	橙	褐灰			○		○		○		良好	
	343	E17	Ⅴa･b	557 他	石坂	胴部	綾杉状条痕	－	縦ケズリ	橙	黒褐	○		○		○		○		普通	
	344	I10	Ⅴb, Ⅵ, T1	662	石坂	胴部	櫛目状細沈線による綾杉状	－	縦ケズリ	橙	橙			○		○		○		普通	同一個体
	345	I･H10	Ⅴb, Ⅵ, T1	628 他	石坂	胴部	櫛目状細沈線による綾杉状	(8.0)（底）	縦ケズリ	橙	橙			○		○		○		普通	
	346	I10	T2	－	石坂	底部	斜条痕や巻貝殻頂突文	－	不明	にぶい黄橙	赤	○		○		○		○		普通	内面赤土貼付
	347	F17	Ⅴb, －	580	石坂	底部	－	－	ミガキ	明褐	黒	○				○	○			普通	
	348	F12	Ⅴa	793	石坂	底部	巻貝殻頂突文	－	斜ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○		○	○	普通	摩耗
58	349	H9	Ⅵ	1175 他	下剥峯	口縁～胴部	横二枚貝腹縁押圧	－	縦ケズリ　口縁丁寧な横ケズリ	明赤褐	明赤褐	○				○		○		普通	同一個体
	350	I10	T1	724	下剥峯	口縁部		－													
	351	H9	Ⅵ	1172	下剥峯	口縁部		－													
	352	H10	Ⅵ	924	下剥峯	胴部	横二枚貝腹縁押圧　底部上横条痕	－	ミガキ	明赤褐	明赤褐	○				○		○		普通	同一個体
	353	G11	Ⅴb	755	下剥峯	胴部	横二枚貝腹縁押圧	－	ミガキ	にぶい黄	黄灰	○		○		○		○		良好	
	354	F11	Ⅴb	1049 他	下剥峯	胴部	横二枚貝腹縁押圧	－	ミガキ	にぶい黄	黄灰	○		○		○		○		良好	
	355	H13	Ⅴb	842	桑ノ丸	口縁部	斜条痕	－	ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	○		○		○				良好	同一個体
	356	H13	Ⅴb	841	桑ノ丸	口縁部	斜条痕	－	ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	○		○		○				良好	
	357	G3	Ⅴb	－	押型文	胴部	小粒な殻粒押型	－	丁寧なナデ	明赤褐	にぶい橙	○	○	○		○		○	○	普通	
	358	F10	Ⅴa	753	手向山	胴部	横方向山形押型	－	丁寧なナデ	褐灰	褐灰			○		○		○		普通	ススス
	359	F10	Ⅴa	754	手向山	胴部	横方向山形押型	－	縦ナデ	明褐	明褐			○		○		○		普通	下半コゲ
	360	F12	Ⅴb	997	手向山	胴部	横方向山形押型	－	ナデ	橙	橙		○	○		○		○		普通	コゲ
59	361	F5	Ⅴb	30	塞ノ神Ａ	口縁部	口唇押圧　口縁に横押圧　５条ほどの横・斜凹線	－	丁寧な横ナデ	にぶい橙	にぶい橙			○		○		○		普通	
	362	F5	Ⅴb	14	塞ノ神Aa	口縁部	口唇矢羽根状押圧　口縁に３段の２～３条横凹線，1･2段目に爪形押圧　丁寧なナデ→縦に網目状撚糸文	－	ミガキに近い丁寧な横ナデ	明赤褐	にぶい黄橙	○		○		○		○		良好	
	363	F6	Ⅴb	3	塞ノ神Aa	口縁部		－													
	364	F6	Ⅴb	4	塞ノ神Aa	口縁部		－													
	365	F5	Ⅴb	84	塞ノ神Aa	胴部	横凹線　丁寧なナデ→縦に網目状撚糸文	－		明赤褐	にぶい黄橙	○		○		○		○		良好	同一個体
	366	F4	Ⅴb	－	塞ノ神Aa	胴部	縦に網目状撚糸文	－		明赤褐	にぶい黄橙	○		○		○		○		良好	
	367	F5	Ⅴb	82	塞ノ神Aa	胴部	縦に網目状撚糸文	－		明褐灰	明褐灰	○		○		○		○		良好	
	368	F4	Ⅴb	101 他	塞ノ神Aa	胴部	縦に網目状撚糸文	－		明赤褐	にぶい黄橙	○		○		○		○		良好	
	369	F6	Ⅴb	2	塞ノ神Aa	胴部	縦に網目状撚糸文	－		橙	橙	○				○		○		良好	
	370	F5	Ⅴb, Ⅵ	23 他	塞ノ神Ａ	胴部	粗い横ナデ	－	条痕後ナデ	橙	褐灰	○		○				○		良好	壺形土器
	371	G3	Ⅴb	25 他	塞ノ神Ａ	胴部	粗い横ナデ	－	条痕後ナデ	橙	褐灰	○		○				○		良好	壺形土器
	372	G3	Ⅴb	－	塞ノ神Ab	胴部	縦沈線間に斜縄文	－	縦ナデ	にぶい橙	にぶい橙		○	○		○		○		普通	ススス
	373	F5	Ⅴb	76	塞ノ神Ab	胴部	斜縄文	－	横ミガキ	橙	にぶい橙		○	○		○		○		良好	
	374	F16	Ⅴa	598	円盤形土製品	完形	無文	径3.2 厚1.0	丁寧なケズリ	明赤褐	明赤褐	○				○		○		普通	半欠け

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	型式	部位	外面（調整・文様）	口径底径器高（cm）	調整（無記入は内面）	色調 外面	色調 内面	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 黒石	胎土 長石	胎土 灰石	焼成	備考
59	375	SD2	－	－	不明	脚台の接合部	貝殻ナデ	－	指押さえ後上方向ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○	○		○		○	○	普通	台径 5.4 cm
	376	F5	Ⅴb	－	不明	口縁部	－	－	丁寧なナデ	褐灰	褐灰			○		○				普通	スス

第８表　縄文時代早期石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
61	377	E5	Ⅴb	114	局部磨製石鏃	2.60	1.86	0.25	1.3	頁岩	
	378	H11	Ⅴb	472	局部磨製石鏃	2.59	2.10	0.38	1.5	頁岩	
	379	F5	Ⅴb	31	打製石鏃	2.83	1.50	0.30	1.2	玉髄	
	380	D5	Ⅴb	117	打製石鏃	2.72	2.00	0.62	(3.2)	チャート	
	381	I10	Ⅵ	640	打製石鏃	1.95	(1.13)	0.28	(0.3)	チャート	
	382	G10	Ⅵ	909	打製石鏃	(2.20)	(1.50)	0.22	(0.4)	黒曜石	
	383	E5	Ⅴb	113	削器	2.85	2.05	0.85	4.7	チャート	
	384	F5	Ⅵ	89	石核	2.20	1.90	1.45	4.7	黒曜石	
	385	H9	Ⅵ	979	石核	1.22	1.95	1.75	4.4	黒曜石	
	386	H13	Ⅵ	475	局部磨製石斧	5.30	2.60	0.80	14.9	頁岩	
62	387	I10	Ⅵ	619	磨石・敲石類	(10.90)	9.60	4.95	(691.6)	硬砂岩	
	388	G5	Ⅴb	245	磨石・敲石類	10.50	6.40	(3.60)	(338.0)	砂岩	
	389	SD6	①	18	磨石・敲石類	13.00	10.92	4.70	1014.1	砂岩	
	390	F8	Ⅰ	－	磨石・敲石類	11.10	7.30	5.00	571.9	砂岩	
	391	E5	撹乱	－	磨石・敲石類	(11.65)	7.85	4.85	(612.7)	砂岩	
	392	H9	Ⅵ	540	磨石・敲石類	(9.40)	7.50	4.35	(342.5)	砂岩	
63	393	I10	Ⅵ	637	磨石・敲石類	(15.66)	(9.70)	6.40	(1249.4)	砂岩	
	394	H6	Ⅴb	56	磨石・敲石類	(9.58)	(8.58)	(4.80)	(442.7)	砂岩	
	395	G5	Ⅴb	251	磨石・敲石類	12.00	(8.20)	6.50	(874.0)	砂岩	
	396	F11	Ⅴa	798	磨石・敲石類	(7.10)	8.95	5.30	(404.7)	砂岩	
	397	F5	Ⅴb	16	磨石・敲石類	(7.20)	6.60	(4.70)	(317.9)	砂岩	
64	398	E5	Ⅴb	111	磨石・敲石類	10.10	8.50	4.30	522.2	砂岩	
	399	F5	Ⅴb	24	磨石・敲石類	(6.90)	(8.45)	(4.45)	(310.2)	砂岩	
	400	G6	Ⅴb	128	磨石・敲石類	11.90	6.42	3.30	328.2	砂岩	
	401	G5	Ⅴb	263	磨石・敲石類	(6.60)	(7.90)	(2.40)	(154.1)	砂岩	
	402	G13	Ⅵ	1242	磨石・敲石類	(7.90)	10.80	6.05	(595.2)	砂岩	
	403	F5	Ⅴb	34	磨石・敲石類	(10.30)	(5.80)	(5.50)	(287.9)	砂岩	
	404	F6	Ⅵ	51	磨石・敲石類	(7.90)	(6.08)	(4.35)	(225.2)	砂岩	

第９表　弥生時代土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	型式	器種	部位	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 黒石	胎土 灰石	焼成	備考
65	405	－	Ⅰ	－	高橋	甕	口縁部	丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	黄灰	浅黄			○		○	○		良好	スス
	406	SD6	①	13	高橋	甕	肩部	横ナデ	横ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○		○	○	○		○	良好	
	407	－	Ⅰ	－	入来Ⅱ	甕	口縁部	ヘラナデ	ヘラナデ	橙	橙	○		○	○	○		○	普通	磨滅
	408	－	Ⅰ	－	入来Ⅱ	甕	脚台部	ハケ縦ナデ後ヘラナデ	－	にぶい橙	赤	○	○	○	○	○		○	普通	内面磨滅
	409	大型土坑１	③	14	入来Ⅱ	甕	脚台部	縦斜ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい橙	赤	○	○	○	○	○		○	普通	磨滅　粗い土

第 10 表　古墳時代土器観察表

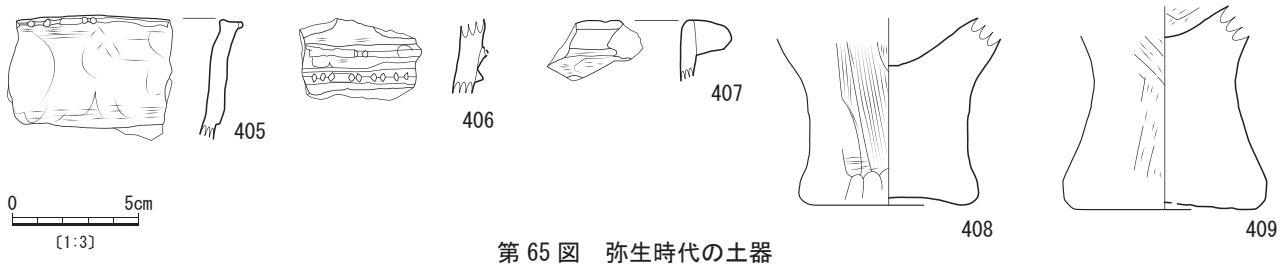
挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	型式	器種	部位	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 石英	胎土 黒石	胎土 長石	胎土 灰石	焼成	備考
66	410	F8	Ⅰ	－	辻堂原	甕	口縁部	口縁はハケ横ナデ ハケ斜ナデ	ヘラ横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	○	○		○		○	○	良好	スス
	411	F8	Ⅰ	－	辻堂原	甕	口縁部	ヘラ縦・斜ナデ	ヘラ縦ナデ	浅黄橙	浅黄橙		○				○	○	良好	スス
	412	F13	Ⅰ	－	辻堂原	壺	底部	丁寧なヘラ縦ナデ	縦ナデ	にぶい橙	浅黄		○	○	○		○	○	普通	コゲ
	413	F8	Ⅰ	－	辻堂原	高坏	口縁部	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○		○		○	○	良好	
	414	F8	Ⅰ	－	辻堂原	高坏	口縁部	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	橙	橙		○	○	○		○	○	良好	
	415	F8	Ⅰ	－	辻堂原	高坏	坏底～脚部	ヘラ縦ナデ	坏内：丁寧なヘラナデ　脚内：ヘラ横ナデ　脚裾：丁寧なナデ	灰白	褐灰		○	○			○			普通	
	416	－	Ⅰ	－	辻堂原	高坏	坏底～脚部	ヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ　脚内：指押しとヘラ縦ナデ	浅黄橙	浅黄橙			○	○	○	○	○	普通	

第３節　弥生時代の調査

土器が５点出土している（第 65 図）。近世の溝状遺構６号と中世の大型土坑１号で各１点出土しているが，ほかの３点は表土で出土している。いずれも甕形土器で，前期後葉の高橋式土器（405・406）２点，中期中葉の入来Ⅱ式土器（407 ～ 409）３点である。

405 はやや外傾してまっすぐ立ち上がる器形で，口縁端が内外に張り出している。内面は削り出して張り出しているが，外側は貼り付けた低い三角突帯に浅い刻み目が施されている。口縁端は欠損が目立つ。肩部外面は段状となり，下半が薄い。内外ともヘラによる丁寧な横方向のナデ仕上げである。外面にはススが付着している。406 は２条の三角貼付突帯がある。上側の突帯は不明だが，下側には細かいヘラ刻みが密にみられる。内外とも横方向のナデ仕上げである。白色石・雲母を多く含み，５㎜ほどの灰色石もある。

407 は全体的に欠損，磨滅が目立つ。逆Ｌ字状に近い口縁部だが，やや外に向かって傾いている。口唇部の凹線は不明である。内外ともヘラナデ調整である。408・409 は脚台で，ともに端部の欠けが目立つが，脚台端直径は 408 が 7.2 ㎝，409 が 8.0 ㎝である。端部は丸みをおび，あげ底である。調整は 408 の外面が縦方向のハケナデのあとヘラナデである。409 は内外・底ともヘラナデ調整で，外は縦・斜め方向である。外は鈍い橙色を呈しているが，赤っぽい部分もある。胎土は粗く，５㎜大の石粒も多い。



第 65 図　弥生時代の土器

第４節　古墳時代の調査

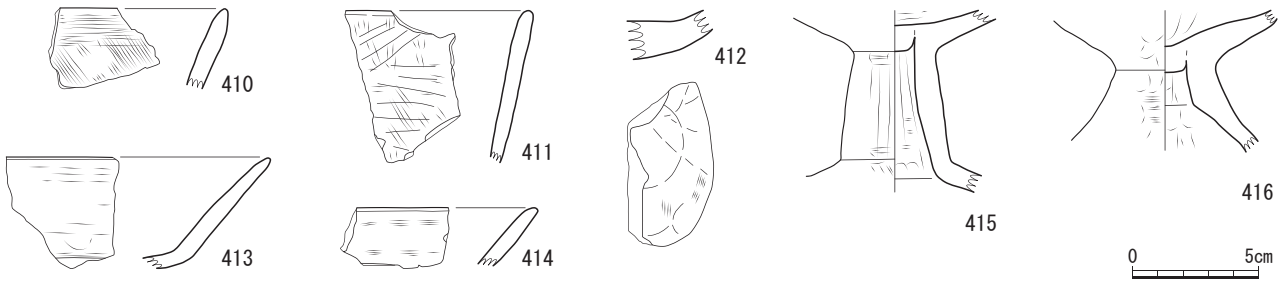
表土から土器が 57 点出土している。南へ下降する谷部のＦ－８区で特に多く出土している。甕形土器 39 点（口縁部７点，胴部 32 点），壺形土器６点，高坏形土器９点，鉢形土器２点，坩形土器１点である。ほとんどが小破片で，図化できたのは７点である（第 66 図）。

甕形土器（410・411）は口縁部が外傾してまっすぐ伸びるもので，胴部には上下からつまんだ貼付突帯のあるものがある。口縁端は丸みをもっている。410 は摩耗が目立つが，外面調整は端部が横方向，その下が斜め方向のハケナデである。内面調整は横方向のヘラナデである。411 の調整は内外ともヘラナデで，外面が縦・斜め，内面が縦方向である。410・411 ともススが付着している。

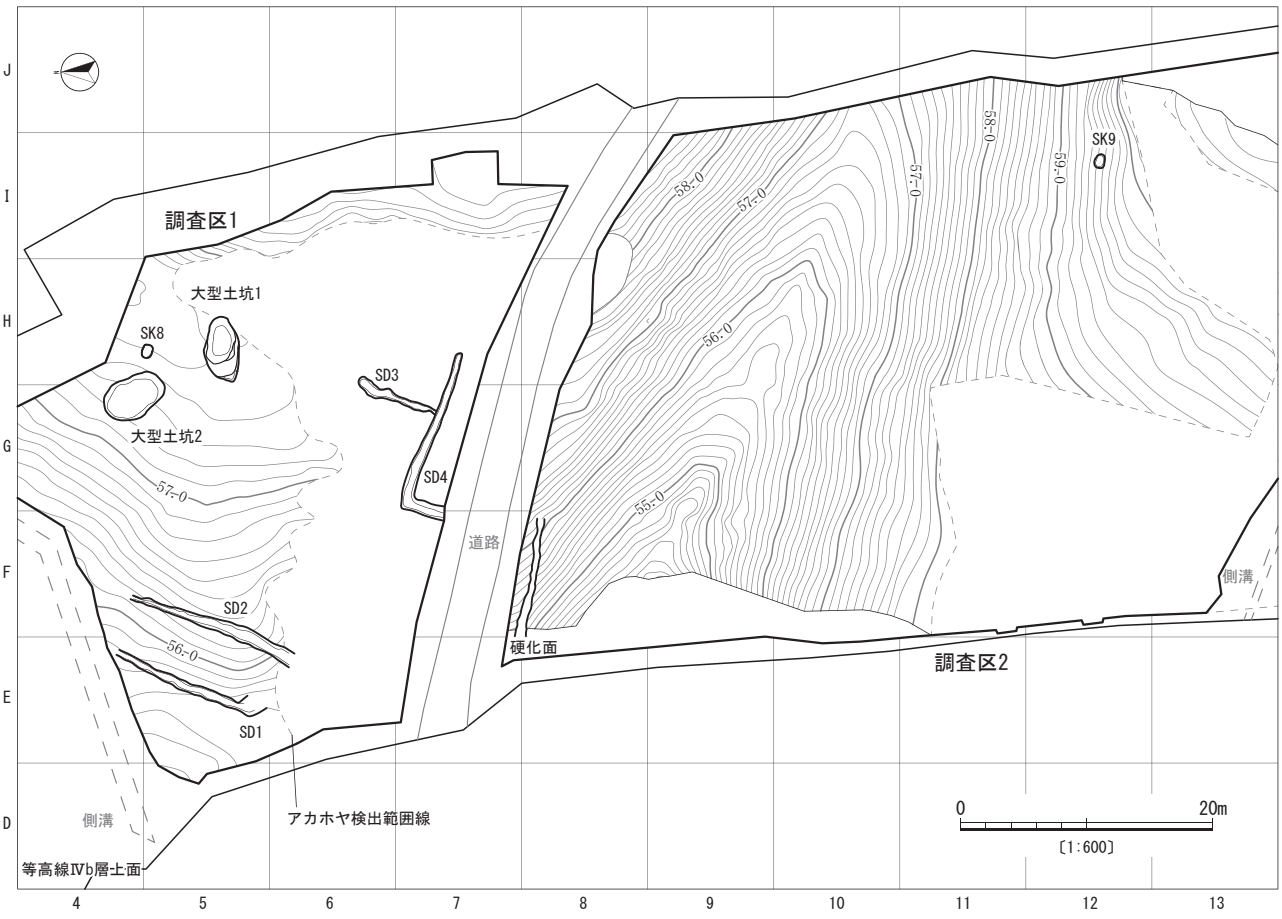
壺形土器の底部（412）は安定した丸底で，外面調整は丁寧である。内面はやや赤っぽい。

高坏形土器（413 ～ 416）は平らな底部と外へまっすぐ広がる口縁部から成る坏部と，短い筒部と外へ広がる裾部から成る脚部である。413 は底部から口縁部の破片で，接合できないが同一個体と考えられる口縁部が他に１点ある。内外とも丁寧な横方向ヘラナデである。414 も 413 と同じような口縁部で，ミガキに近い丁寧な横ナデ調整をしている。415 は坏部の底と，脚の筒部と裾部である。筒部は下の方へやや広がる形を呈し，裾部は大きく広がる。坏部と脚部のつなぎは団子状の粘土をはめ込んでいる。筒部外面は縦方向，坏部内面は丁寧なヘラナデで仕上げ，脚部の内面は横方向，裾部はミガキに近いヘラナデである。416 も 415 と似た器形だが，坏部底の中央部はやや凹んでいる。脚部の筒部は短く，坏部の接合部から緩やかに裾部へ広がっている。坏部と脚部のつなぎは 415 と同じである。内外ともヘラナデだが，外面は横方向，内面は縦方向である。５㎜大の灰白色石も含んでいる。

これらは辻堂原式土器に該当すると思われる。



第 66 図　古墳時代の土器



第 67 図　中世の遺構配置図

第５節　中世の調査

１　調査の概要

中世の遺構や遺物は，北側の調査区１に集中している。調査区１の表土下は畑地造成等による撹乱を受けており，第 67 図における破線以南はアカホヤ火山灰（Ⅳｂ層）より上位が削平されているなど，残存状況が悪い。遺物も土坑や溝の中から出土したものや表土一括がほとんどであり，上面の削平がなければかなり多くの遺物が出土したものと考えられる。

遺構は大型土坑２基，土坑２基，溝状遺構４条，硬化面１条が検出されている。大型土坑２基と礫を伴う土坑８号はＨ・Ｇ－４・５区付近に近接している。大型土坑１・２号間で遺物が接合したことや，土坑８号内の礫と大型土坑１号内の礫が類似することから，これらの遺構は何らかの関連が考えられる。

溝状遺構１・２号はＥ・Ｆ－４～６区で並行に並んだ状態で，溝状遺構３・４号はＦ～Ｈ－６～７区で交差した状態で検出されており，出土遺物から中世の遺構としたが，近世以後の可能性もある。谷部以南では土坑９号の１基のみ検出されている。

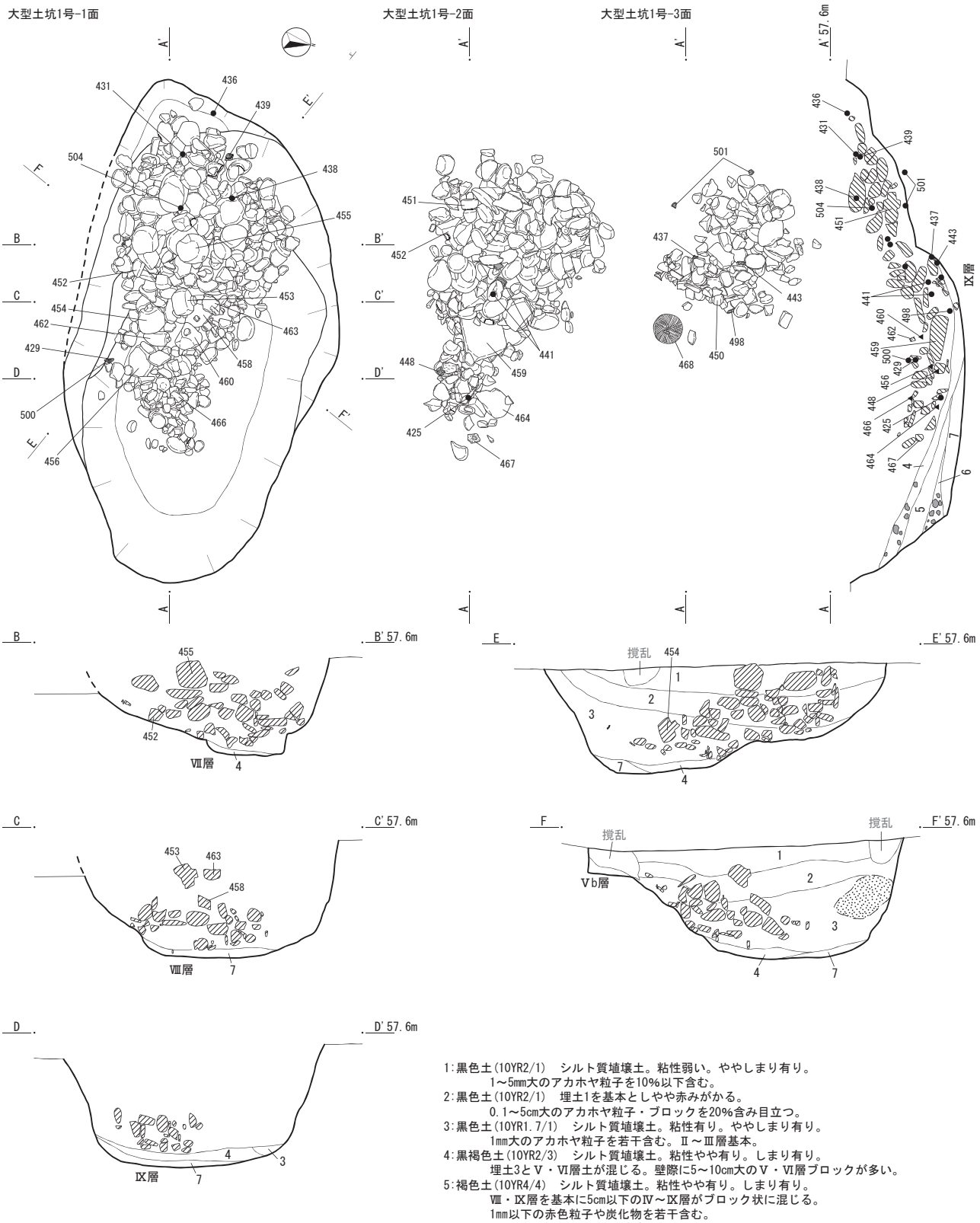
２　遺構

(1) 大型土坑

大型土坑１号（第 68 図）

Ｈ－５区のⅣｂ～Ⅴ層上面で検出された。検出面より上部は削平を受けている。埋土にⅡ・Ⅲ層土が入っていることから，Ⅱ～Ⅲ層付近から掘り込まれたものと考えられる。平面は長軸約 5.2 ｍ，短軸約３ｍの楕円形で，検出面からの深さは約１ｍで，西側にやや緩やかな段をもつ。底面は平坦で，Ⅷ～Ⅸ層まで掘り込まれている。

土坑内からは人頭大など，大型のものを含む大量の礫が出土した。石材は砂岩が多く凝灰岩や軽石も含まれ，ほぼすべてが円礫であり，遺跡の西側下方にある安楽川の河床礫と構成が同じであることから，出土礫は安楽川から運ばれたものと考えられる。遺物は礫に混じった状態で石塔・板碑や石臼，陶磁器等が出土している。埋土内の礫・遺物は埋土１～３に含まれ，埋土４～７には含まれない（ただし埋土４には一部食い込む）。埋土１～３中の礫は西側に多く，中央部の深い部分に流れ込むように入っている。また埋土４～７は遺構の掘削層と一致することから，この遺構を掘り上げた土と考えられ，位置は東側に偏る。よってこの遺構の掘削後，東側から掘削土である埋土４～７が入り，その後，西側から礫や埋土１～３が入ったと考えられる。なお礫は集中していることから，人為的に一度に入れられ，その後埋土１～３



1:黒色土(10YR2/1)　シルト質埴壌土。粘性弱い。ややしまり有り。
　1～5mm大のアカホヤ粒子を10%以下含む。
2:黒色土(10YR2/1)　埋土1を基本としやや赤みがかる。
　0.1～5cm大のアカホヤ粒子・ブロックを20%含み目立つ。
3:黒色土(10YR1.7/1)　シルト質埴壌土。粘性有り。ややしまり有り。
　1mm大のアカホヤ粒子を若干含む。Ⅱ～Ⅲ層基本。
4:黒褐色土(10YR2/3)　シルト質埴壌土。粘性やや有り。しまり有り。
　埋土3とⅤ・Ⅵ層土が混じる。壁際に5～10cm大のⅤ・Ⅵ層ブロックが多い。
5:褐色土(10YR4/4)　シルト質埴壌土。粘性やや有り。しまり有り。
　Ⅷ・Ⅸ層を基本に5cm以下のⅣ～Ⅸ層がブロック状に混じる。
　1mm以下の赤色粒子や炭化物を若干含む。
6:黒褐色土(10YR2/3)　シルト質埴壌土。粘性やや有り。しまり有り。
　20cm以下のアカホヤ・サツマブロックを若干，硬質のⅤ・Ⅵ層ブロックを30～40%含む。
7:暗褐色土(10YR3/3)　シルト質埴壌土。粘性やや有り。しまり有り。
　Ⅵ～Ⅷ層の混合土。Ⅷ・Ⅸ層土がブロック状に20～30%混じる。

第68図　大型土坑1号

が入り，礫間まで入り込んだと考えられる。

大型土坑２号（第 69 図）

Ｇ・Ｈ－４・５区のⅣｂ層上面で検出された。検出面より上位は削平を受けている。遺構の東側と西側の壁面付近は撹乱を受けており，平面は長軸約６ｍ，短軸約２ｍの楕円形で検出面からの深さは約 40 ㎝である。柱穴や焼土等はみられない。床面は平坦であり，Ⅴ層まで掘り込まれている。遺物は青磁や須恵器，鉄製品が出土している。埋土はアカホヤ火山灰ブロックを含む黒色土である。アカホヤ火山灰ブロックは床面付近に多く含まれ，上位は黒色土が主体である。埋土はほぼ水平に分層できるため，掘り上げて地表面に置かれた掘削土が，地表面の黒色土が主体となり自然流入したと推定される。遺物も床面付近は無く，土の流入に伴い入り込んだと考えられる。

大型土坑内出土遺物

２基の大型土坑からは多くの遺物が出土しており，互いに接合できた遺物もあることから，①大型土坑１号の出土遺物②大型土坑２号の出土遺物③大型土坑１・２号出土の接合遺物と３つに分けて記載する。

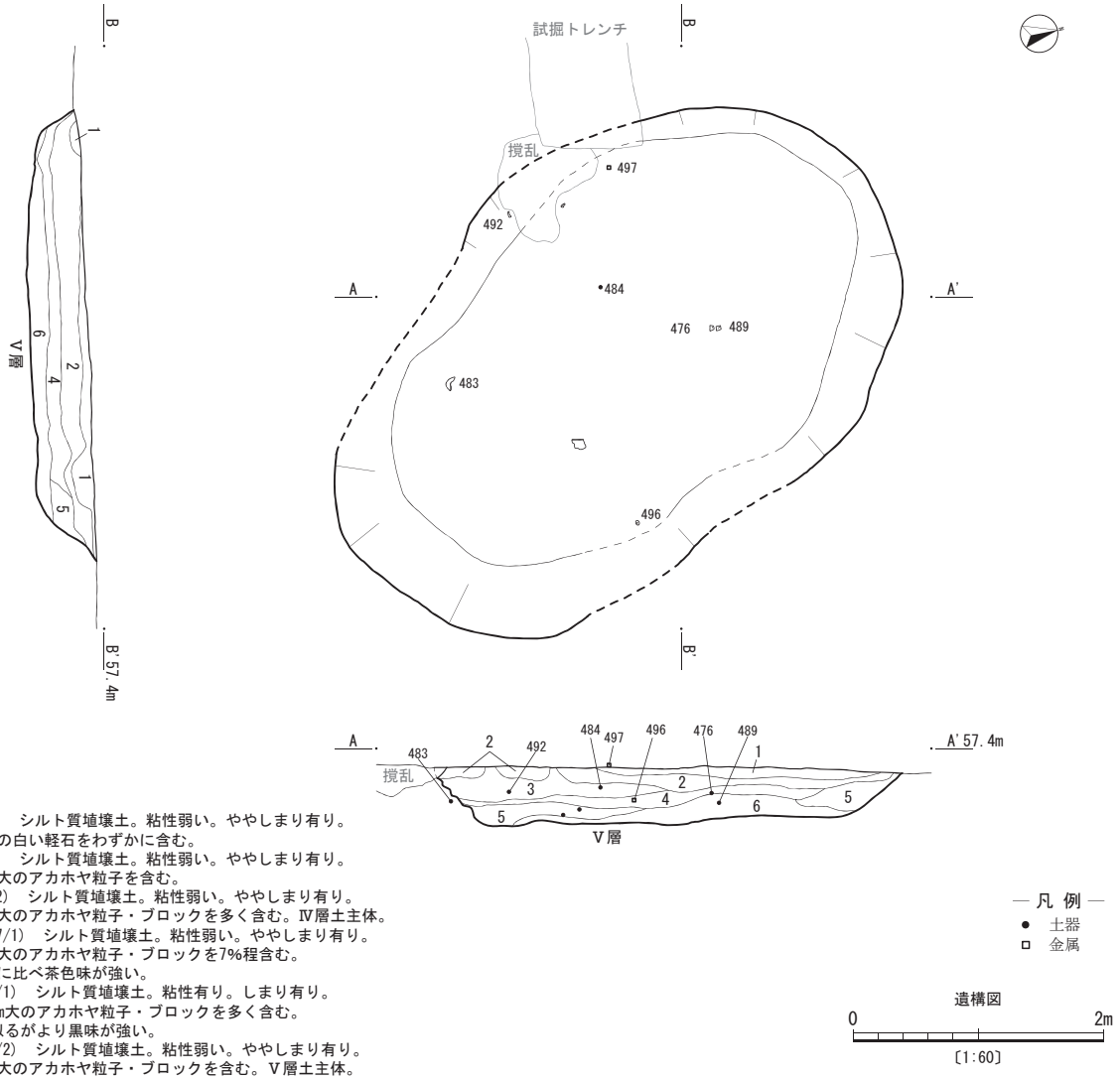
大型土坑１号の出土遺物

（第 70 図～第 73 図 417 ～ 468）

417・418 は土師器で，皿か坏の口縁部である。417 は口縁先端に向け細くなり，垂直に立ち上がる。418 は幅３㎜程度と極めて薄く，やや外反する。

419 は土師質土器の鉢である。底部から胴部へほぼ直角に立ち上がり，内面及び底面に回転ナデの痕跡が残る。420 は瓦質の羽釜である。胎土は灰白色で，鍔の貼り付け跡が明瞭である。鍔から下にススはみられない。

421 は東播系須恵器の捏鉢である。胎土は灰黄色で，口唇付近で内弯する。



1:黒色土(10YR1/2)　シルト質埴壌土。粘性弱い。ややしまり有り。
　　1～2mm大の白い軽石をわずかに含む。
2:黒色土(10YR2/1)　シルト質埴壌土。粘性弱い。ややしまり有り。
　　1mm～1cm大のアカホヤ粒子を含む。
3:黒色土(7.5YR1/2)　シルト質埴壌土。粘性弱い。ややしまり有り。
　　1mm～8cm大のアカホヤ粒子・ブロックを多く含む。Ⅳ層土主体。
4:黒色土(7.5YR1.7/1)　シルト質埴壌土。粘性弱い。ややしまり有り。
　　1mm～2cm大のアカホヤ粒子・ブロックを7%程含む。
　　埋土1・2に比べ茶色味が強い。
5:黒色土(10YR1.7/1)　シルト質埴壌土。粘性有り。しまり有り。
　　1mm～10cm大のアカホヤ粒子・ブロックを多く含む。
　　埋土3に似るがより黒味が強い。
6:黒褐色土(10YR2/2)　シルト質埴壌土。粘性弱い。ややしまり有り。
　　1mm～5cm大のアカホヤ粒子・ブロックを含む。Ⅴ層土主体。

第 69 図　大型土坑２号

422・423 は中世須恵器甕の胴部である。422 は矢羽根状，423 は斜格子状のタタキが外面に残る。

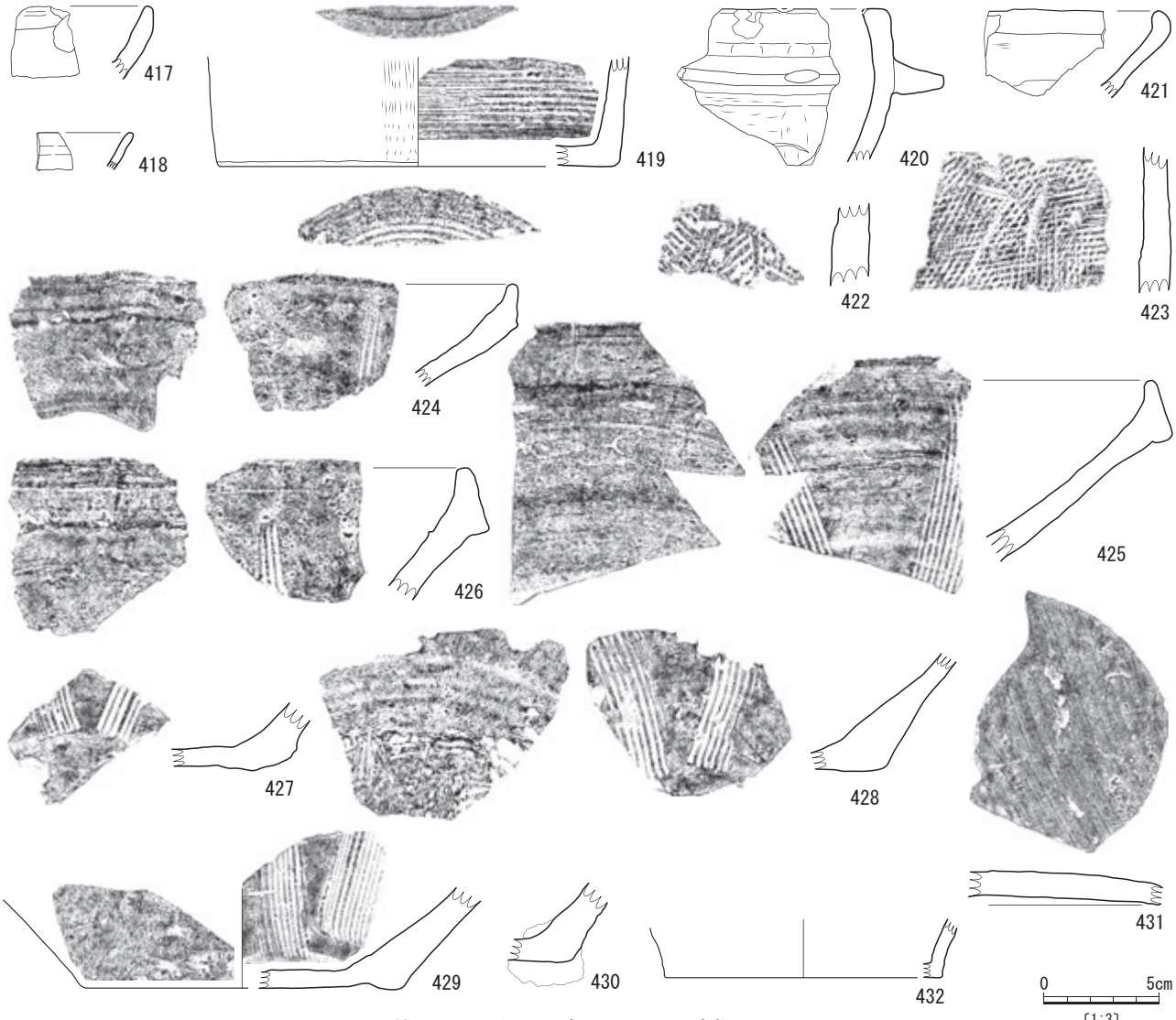
424 ～ 431 は備前焼である。424 ～ 429 は擂鉢で，色調は赤褐色を呈す。424 は口縁が上方に突出する。櫛目は３条のみ確認できる。425・426 は口縁上端と下端の突出が強いもので，425 は８条以上の櫛目が確認でき，櫛目上端付近まで摩耗した使用痕が残る。426 は外面が赤褐色で口縁外面に光沢がみられ，櫛目は４条のみ確認できる。427 ～ 429 は底部で，427 は櫛目が１単位５条と７条の箇所がみられ，内面が大変滑らかである。428 は櫛目が１単位７条で，底面に藁状の繊維痕が残る。429 は櫛目が１単位 10 条で１条が他より細く，底面に淡黄色の粘土が付着している。430・431 は壺の底部である。430 は内外に暗オリーブ色の自然釉がかかる。底面に置台に使用したと考えられる砂入りの硬質土が付着しており，内面にも砂が付着する。431 は底面で，中央が上げ底となり，内面にヘラ状の痕跡が残る。

432 は無釉陶器の壺で，薄く褐灰色を呈す。

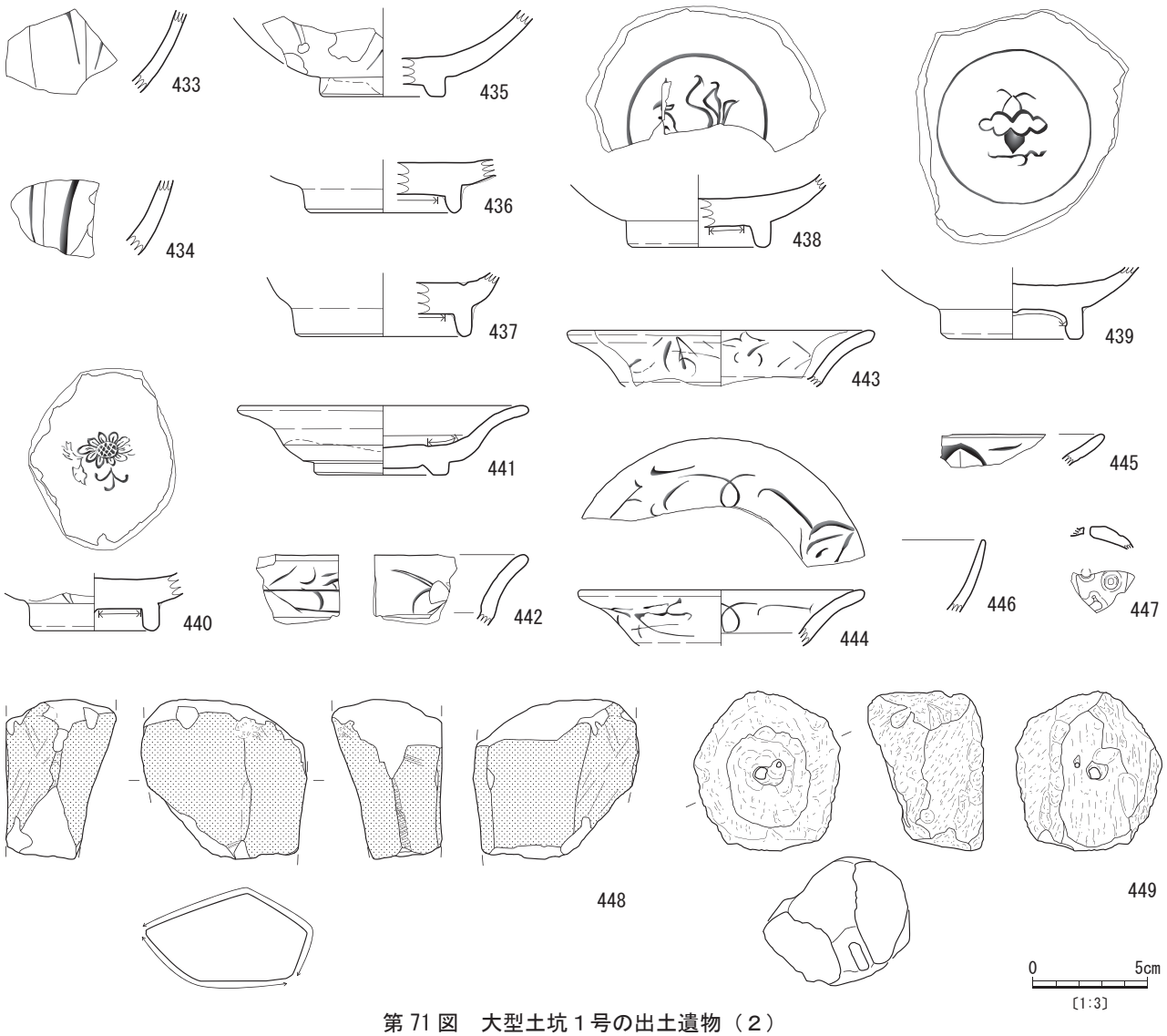
433 ～ 445 は龍泉窯系青磁である。433 ～ 440 は碗で，433 ～ 435 は上田Ｂ類に比定され，蓮弁文をもつものである。433 は青緑色を呈し，鎬がみられず，434 は稜で蓮弁を表現している。435 は蓮弁を片切彫で表現しており，畳付の釉は高台内面途中までかかる。436・437 は釉が高台内面までかかり，高台内の釉は掻き取られている。438 ～ 440 は底部付近のみ残存しており，見込みに草花文様の印文がみられ，440 は胴部外面に蓮弁と考えられる文様の一部が残る。441 ～ 444 は口縁が外反する皿で，441 は体部下半から高台内面まで露胎で，見込みの釉を輪状に掻き取っており，露胎部分は赤橙色の発色がみられる。442 ～ 444 は胴部内外面に草花文様の線刻が施されている。445 は外面に蓮弁を持つ，浅型碗の口縁の一部と考えられる。

446 は白磁碗の口縁で，無文である。

447 は円状の孔が１か所あり，凸部に金色の着色が残



第 70 図　大型土坑１号の出土遺物（１）



第 71 図　大型土坑１号の出土遺物（２）

る白磁で，人などの形状をした袋物や水滴の一部である可能性がある。

448 は砂岩製の砥石で，５面に研いだ痕跡が残る。449 は軽石製品で，円錐状に刳り抜き，奥に２か所穿孔を施している。

450 ～ 467 は石塔・石碑と考えられる石製品で，450 ～ 460 は五輪塔の一部である。

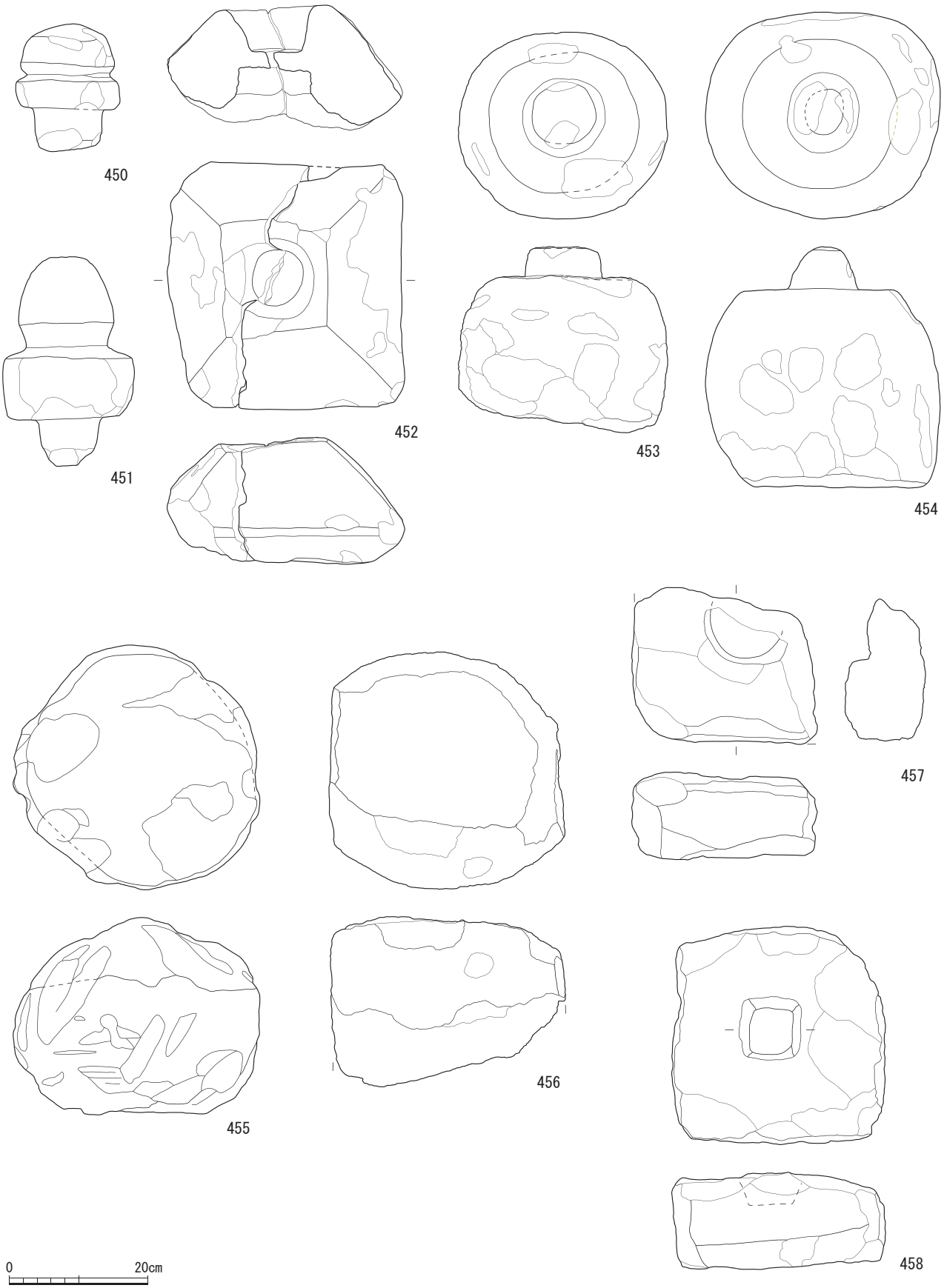
450・451 は空風輪で，450 は軽石製で空輪が低く，ホゾが比較的大きい。451 は凝灰岩製で丁寧に造られており，風輪の上面は外側に傾斜し，空輪は風輪と比較して幅が狭く，側面は稜がみられる。

452 は凝灰岩製の火輪で，上下面両面にホゾ穴がみられる。軒口は反りが無く，下に向かい傾斜する。

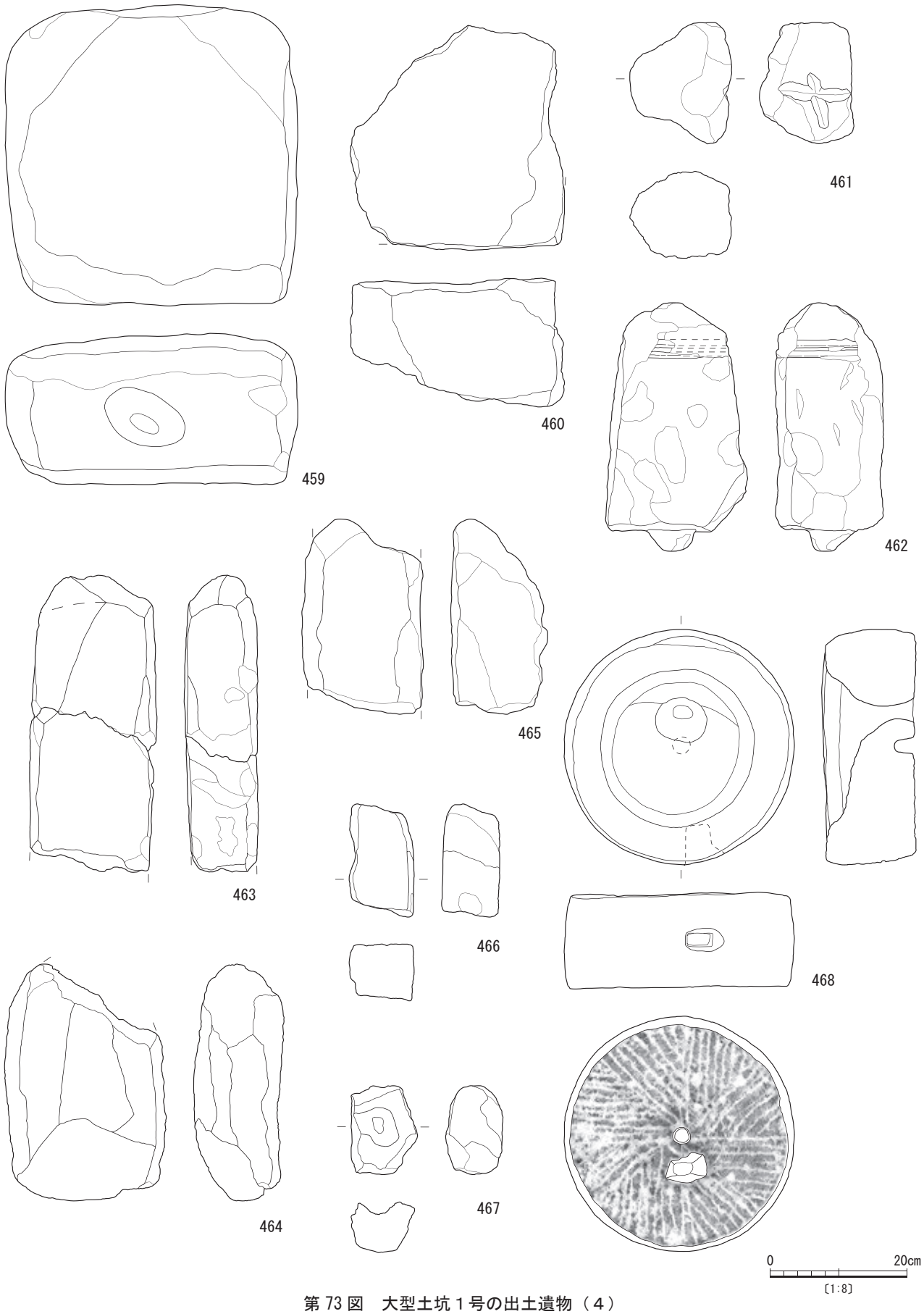
453 ～ 455 は水輪である。453 は軽石製で，形状は上面が円形，側面が隅丸方形である。454 は凝灰岩製で，ホゾが先端に向け幅が狭くなる。形状は上面・側面とも隅丸方形に近く，側面は左右非対称である。455 は破損部分が多く，ホゾがあったかは不明である。灰黒色の凝灰岩製で，志布志湾の夏井海岸でみられる石材と類似する。

456 ～ 460 は地輪である。456 は凝灰岩製で，溶結が弱く剥離が激しいため，側面の欠損部が大きい。457 は幅約 30 ㎝の軽石製でホゾ穴は円形，458 は凝灰岩製でホゾ穴は方形である。459 は 456 と同じ溶結の弱い凝灰岩製で，側面に楕円状の凹みがみられ，重量は 52 ㎏と重い。460 は凝灰岩製で，上面と下面の大きさはほぼ均等である。

461 ～ 463 は軽石製の板碑である。461 は，側面に薬研彫りの一部が残る。462 の頭部は三角柱状に加工され，額部に２条の線を正面及び側面に刻んでいる。正面に梵字等の文字はみられない。また，底面にホゾがあるという特徴がある。463 は正面及び両側面は丁寧に平坦に加工されている。頭部が三角状になっているが，破損が多く明瞭ではなく，額部の２条線や梵字の刻みはみられな



第 72 図　大型土坑 1 号の出土遺物（３）



第 73 図　大型土坑 1 号の出土遺物（４）

い。底面は破損しており，全体の高さは不明である。

464・465 は凝灰岩製で破損部が多いが，形状から板碑の可能性がある。

466・467 は石塔等の一部と考えられるものである。466 は凝灰岩製で，側面が平坦に加工されている。467 は軽石製で，石材は 461 に近く，側面に楕円形の穴がみられる。

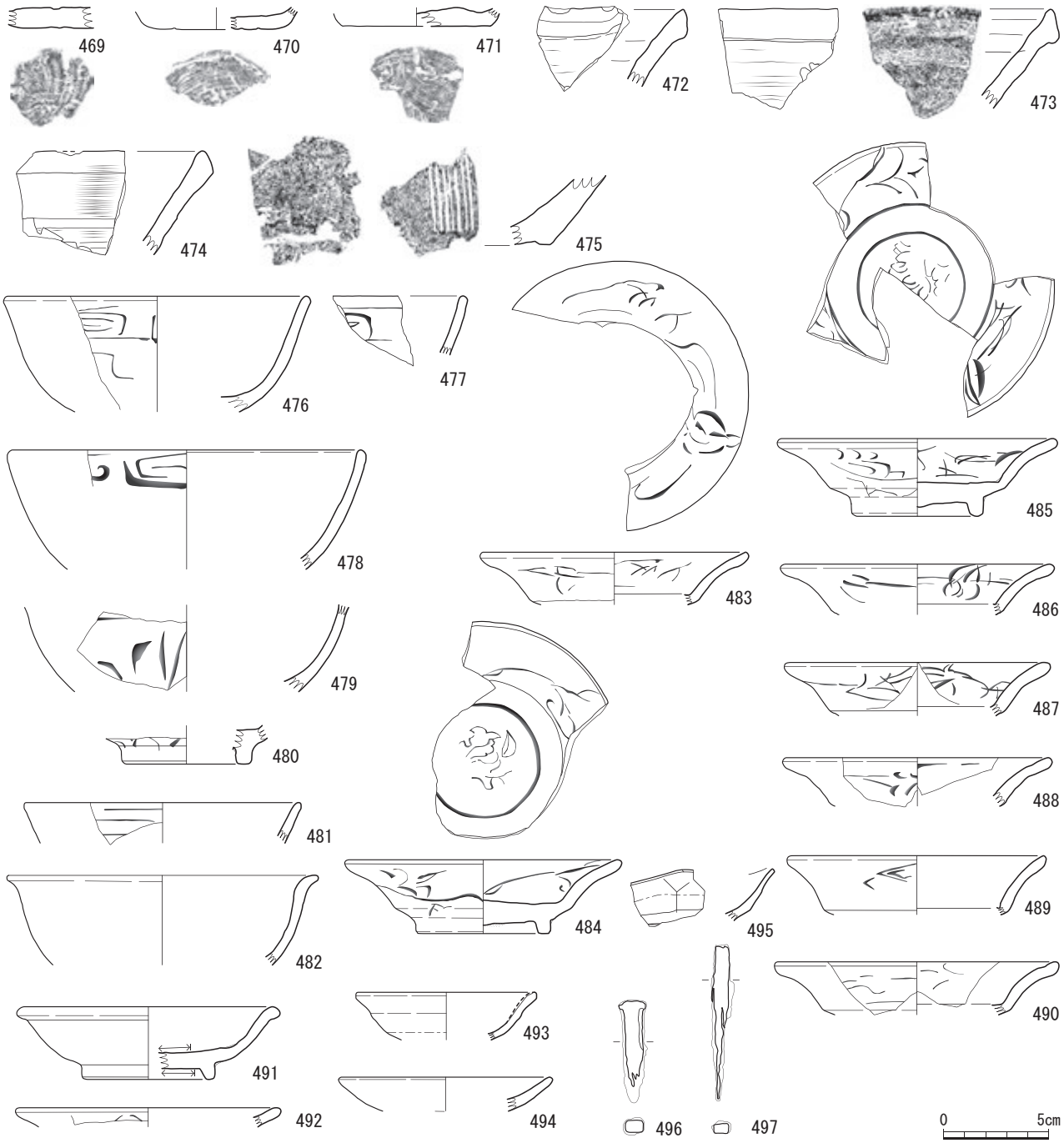
468 は石臼の上臼部で，臼面は８分割である。

大型土坑２号の出土遺物（第 74 図 469 ～ 497）

469 ～ 471 は土師器皿の底部である。469 は底面，471 は底部内面に凹凸がみられ，470 は底面に糸切りとヘラ状工具の痕跡が残る。

472 ～ 474 は東播系須恵器の捏鉢である。472 は注ぎ口で，口縁外面に光沢のある釉がかかる。473 は口縁端が上下にやや突出し，内面に積み上げ痕が残る。474 は外面に回転ハケの痕跡が明瞭である。

475 は備前焼の擂鉢である。内面は黄白色で，７条の櫛目が確認できる。



第 74 図　大型土坑２号の出土遺物

476 ～ 492 は龍泉窯系青磁である。476 ～ 478 は上田Ｃ類に比定される，雷文帯をもつ碗である。476 は雷文帯の下に一部文様が残り，口縁はやや外反する。477 は口縁がやや内弯する。478 は黒色が強く，釉が厚いため文様が不明瞭な部分が多い。479 は外面に蓮弁，その上に雷文とみられる一部が残る。480 は底部で，高台近くに蓮弁の一部が残る。481 は口縁外面に横線の文様のみ残る。482 は口縁部が外反する碗で上田Ｄ類に分類される。483 ～ 491 は外反する皿である。483 ～ 490 は体部内面及び外面に草花文か蓮花文と考えられる文様を有する。484・485 は見込み部分に花文の印がみられる。491 は文様が無く，見込みと高台内は輪状に釉剥ぎがなされる。492 は坏と考えられる口縁部で，外面に蓮弁文の上端が残る。

493 ～ 495 は白磁である。493 はやや黄味を帯び，口縁が外反し体部外面下半が露胎の皿で，森田Ｅ群に比定される。494 は緩く立ち上がる皿の口縁で，森田Ｄ群に比定されるものと考えられる。495 は多角坏で，体部下面が露胎である。

496・497 は断面が長方形をなす角釘である。厚さは，496 は８×６㎜程度，497 は７×５㎜程度である。

大型土坑１・２号出土の接合遺物

（第 75 図～第 77 図 498 ～ 510）

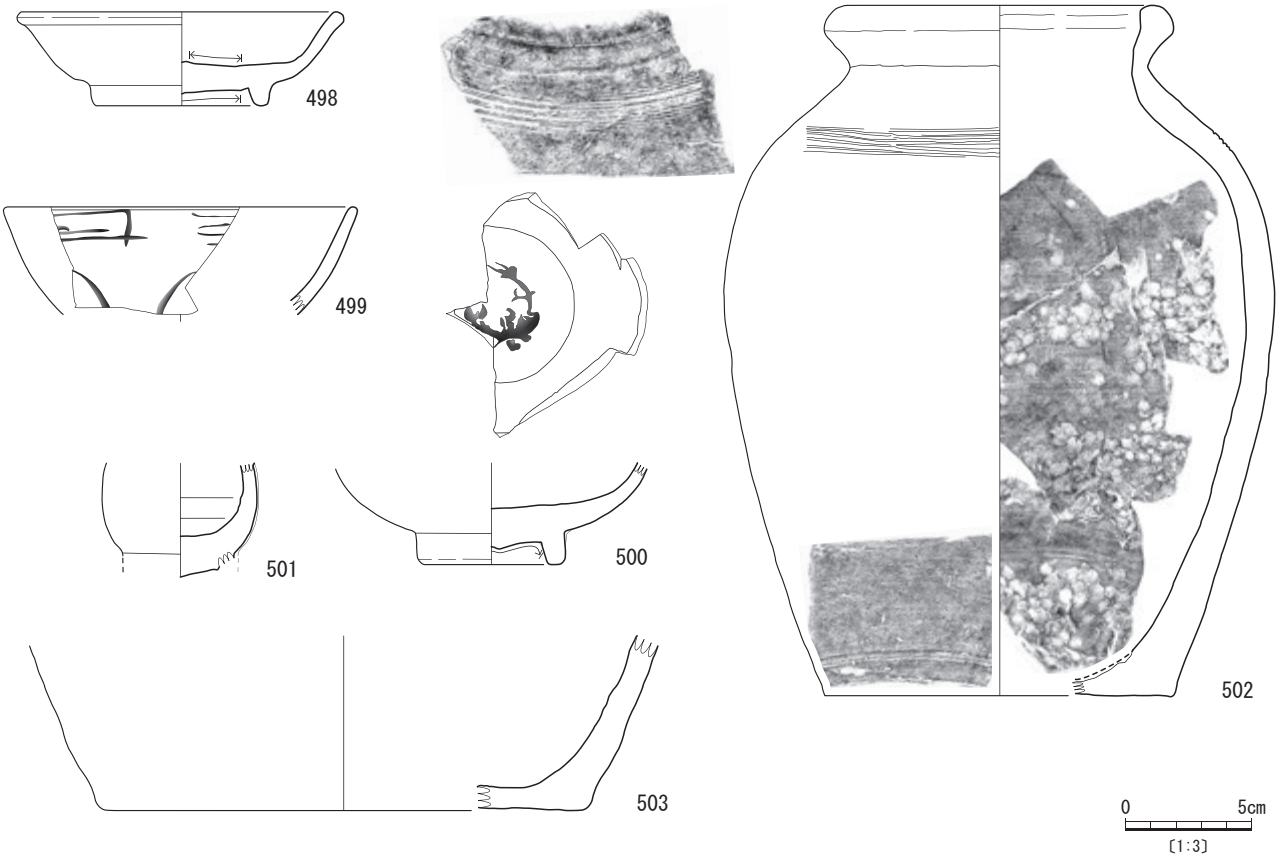
498 ～ 500 は龍泉窯系青磁である。498 は皿で，口縁部がやや外反し，見込みと高台内に輪状の釉剥ぎがなされる。499 は上田Ｃ類に比定される碗で，外面口縁付近の雷文帯の下に蓮弁文の一部が残る。500 は碗で，高台内が輪状に釉剥ぎされ，見込みに圏線と花文の印を有する。

501 は青磁の小型台付瓶である。底部は厚みがあり，口縁に向かい薄くなっている。高台内は釉が残る。

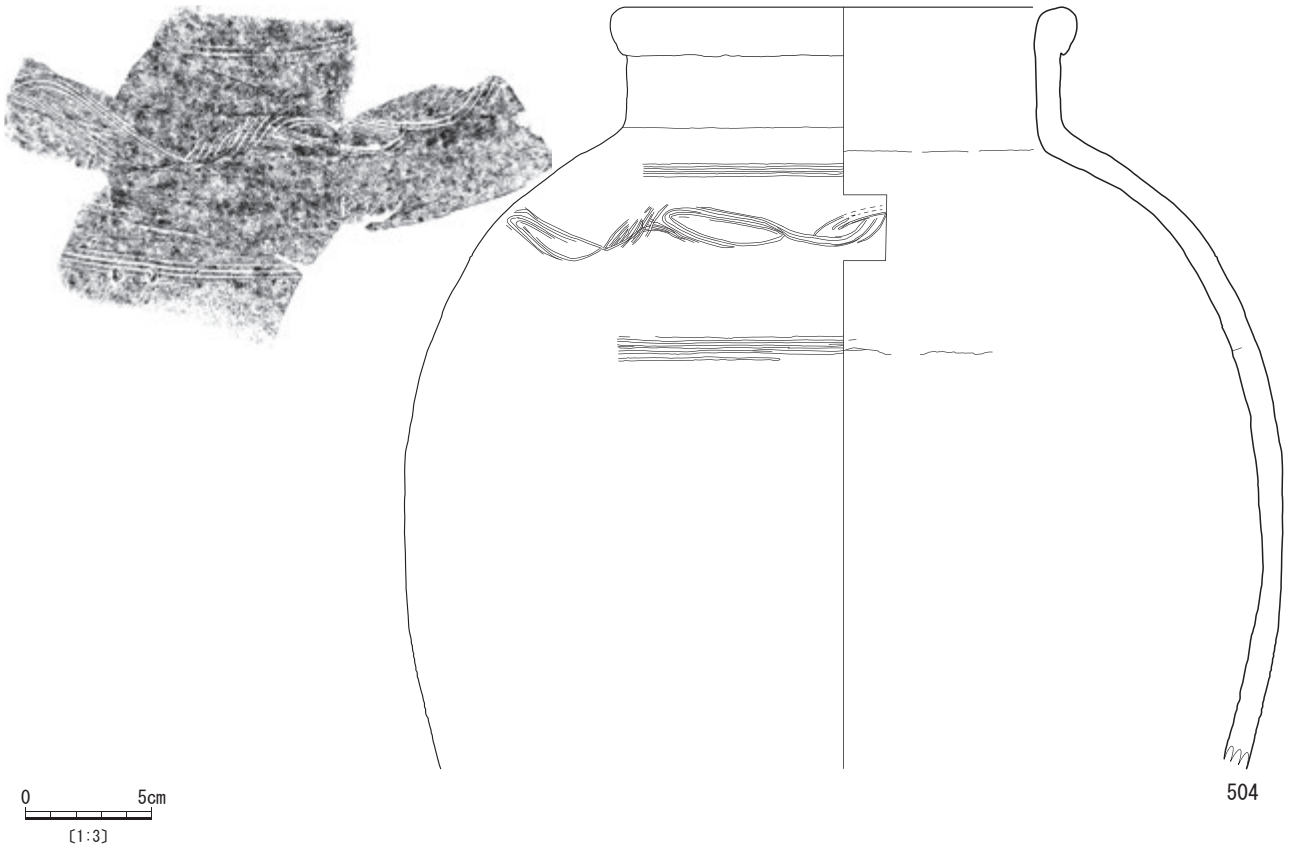
502 は備前焼か中国産と考えられる陶器の壺である。肩部に櫛状の工具で横方向に浅い沈線を施し，内面は剥離が目立ち，底面は厚さ４㎜程度と薄い。

503・504 は備前焼の壺である。503 は底経 19.0 ㎝の底部で，外面は灰白色を呈する。504 は玉縁状の口縁で，肩部に櫛を用い２条の圏線，その間に交差する波状の文様を描く。

505 ～ 510 は接合できないが，同一個体と考えられるタイ産暗緑灰釉陶器の四耳壺である。下半部が埋められた時に，二次焼成を受けており，底部近くは火を受けていないが，口縁部から胴下半部まで釉薬が溶けている。口縁は垂直に立ち上がり，最大径 18.0 ㎝である。頸部



第 75 図　大型土坑１号・２号の出土遺物（１）



第 76 図　大型土坑１号・２号の出土遺物（２）

は最小径 10.4 ㎝まで縊れ，最小径部の下に１条の突帯と，耳部の付け根部分が残る。胴部は最大径 34.0 ㎝で，底部付近まで釉がかかり，内面に輪積み痕が部分的に残存する。第 77 図には想定復元図を示す。

（２）土坑

土坑８号（第 78 図）

Ｈ－４・５区のⅦ層上面で検出された。上位は撹乱を受けている。平面形は整然とした楕円形を呈し，検出面での規模は約 110 × 80 ㎝で，深さは約 20 ㎝である。埋土は黒褐色土の単一埋土であり，Ⅱ層もしくはⅢ層土の可能性が高く，上面からの流入土と推測される。側壁に沿うように長径 20 ～ 30 ㎝，短径 10 ～ 20 ㎝程度の楕円形の礫が並べられており，東壁沿いは２～３段に積まれている。北側は円礫が置かれていないが，人為的に外されたか，元から無かったかは不明である。約４ｍ南側に礫が多量に入った大型土坑１号があり，類似した礫が入っていることから，関連する可能性がある。

土坑９号（第 78 図）

Ｉ－ 12 区のⅣｂ層で検出された。上位は撹乱を受けている。平面形はやや不定形な楕円形であり，検出面での規模は約 110 × 80 ㎝，深さは約 45 ㎝で，床面はＶｂ層付近である。埋土は黒色土にアカホヤ火山灰ブロックが混ざっており，遺構掘削土の一部と考えられる。ほぼ垂直に掘り込まれており，床面は平坦である。遺物は出土していないが，形状が比較的しっかりしており，埋土が大型土坑と類似することから，中世の遺構と考えられる。

（３）溝状遺構

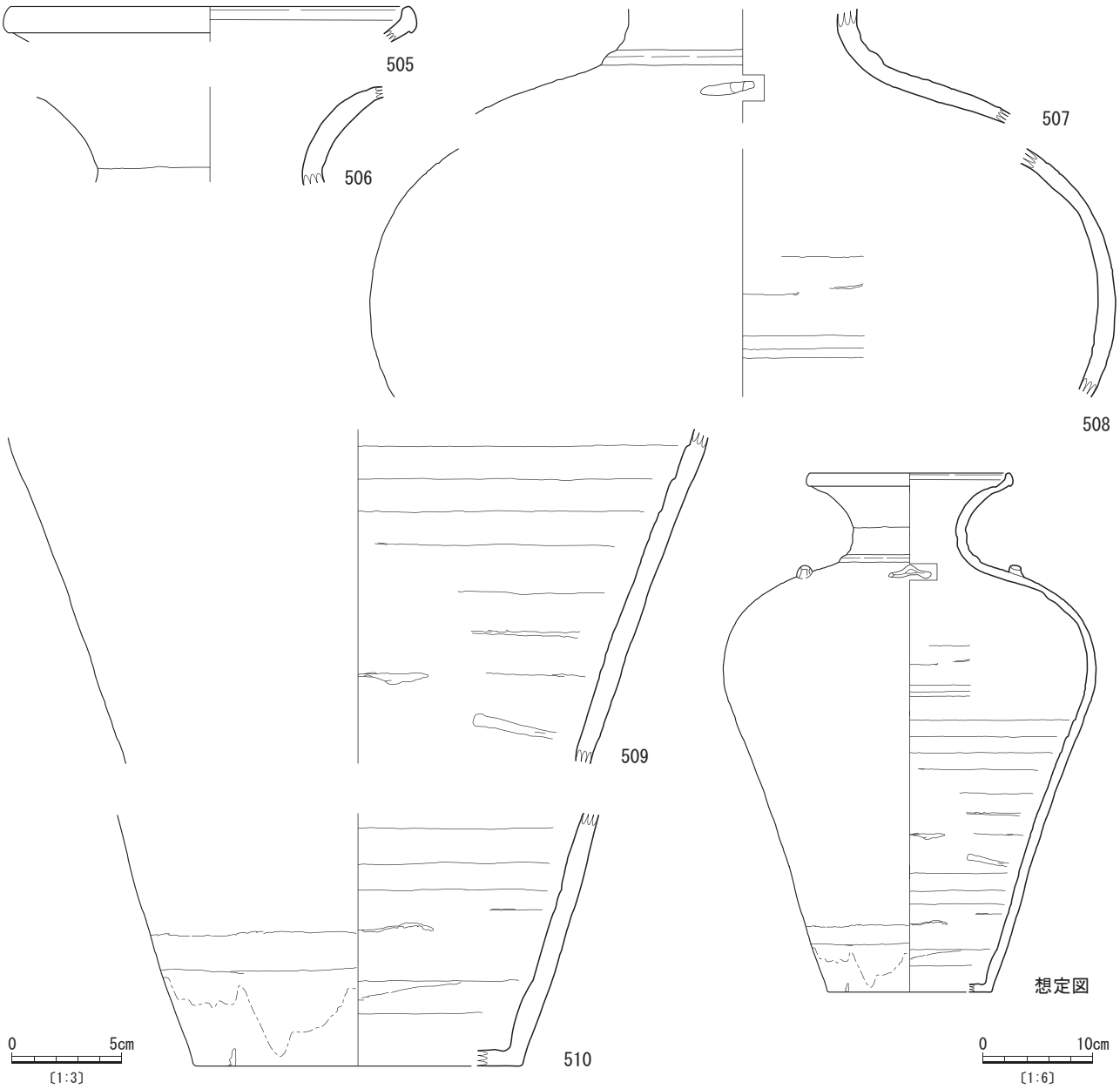
溝状遺構１号（第 79 図・第 80 図）

Ｅ－４・５区のⅣｂ～Ⅴ層上面で検出された。上位は撹乱を受けている。北北東から南南西方向へ地形に沿ってほぼ直線状に掘り込まれている。南側で南東方向へ曲がるが，その先は撹乱を受けている。検出できた部分は長さ約 12 ｍ，幅約 50 ～ 80 ㎝，深さは約 20 ㎝である。特に北側は上部を大きく削平されており，深さは５㎝程度しか残存していない。埋土は黒色土にアカホヤ火山灰ブロックが混じっており，遺構掘削土の一部と考えられ，Ｂ断面の埋土状況より，標高が高い東側から流入したと考えられる。

埋土内で出土した遺物を２点図化した。511 は備前焼の壺肩部で，外面に３条の沈線がある。512 は龍泉窯系青磁の碗か坏の外反する口縁部で，体部外面に草花文と考えられる文様がみられる。

溝状遺構２号（第 79 図・第 80 図）

Ｅ・Ｆ－４～６区のⅣｂ～Ⅴ層上面で検出された。上位は撹乱を受けている。溝状遺構１号に並行し，北北東から南南西方向へ直線状に掘り込まれている。南側は撹乱を受けており，どの付近まで延びるかは不明である。



第 77 図　大型土坑１号・２号の出土遺物（３）

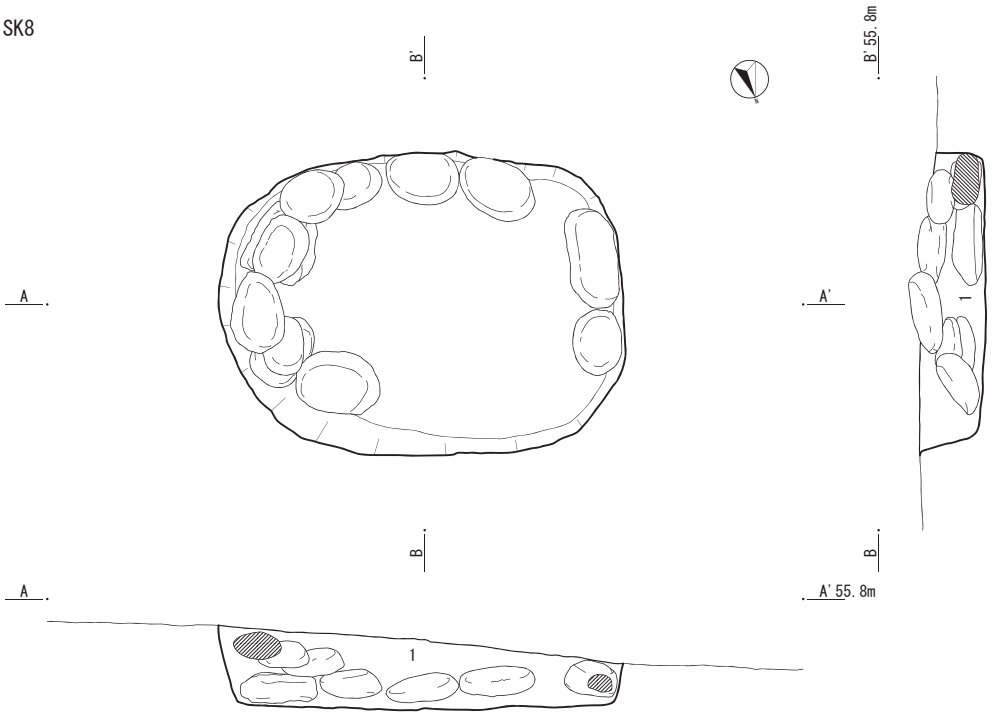
検出できた部分は長さ約 12 m，幅約 50 ～ 100 ㎝，深さは約 40 ㎝である。埋土分布をみると，遺構掘削土であるアカホヤ火山灰ブロックと黒色土の混合土が入り込んだ後，地表上の黒色土が入ったものと推定される。埋土１から中世の遺物や破砕した礫が出土している。

埋土内から出土した遺物を７点図化した。513 は東播系須恵器の捏鉢口縁部で，口縁端が上下に突出する。514 は瀬戸焼の灰釉陶器で，壺の胴部付近と考えられ，やや緑色を呈した釉がかかる。515 は常滑焼甕の頸～肩部で，同一個体の可能性が高い胴部が大型土坑１号から２点出土している。516 は備前焼擂鉢の口縁部で，赤灰色を呈し，端部が上下に突出する。517 は中国産と考えられる陶器瓶の口縁部で，残存部全面に飴釉がかかる。518 は口禿の白磁で，大宰府分類の白磁碗Ⅸ類に比定されるものである。胴部下位は無釉である。519 は青花で，小野分類の皿Ｂ群に比定されるものである。見込みに獅子，胴部外面に唐草文と考えられる一部が残る。

溝状遺構３号（第 80 図）

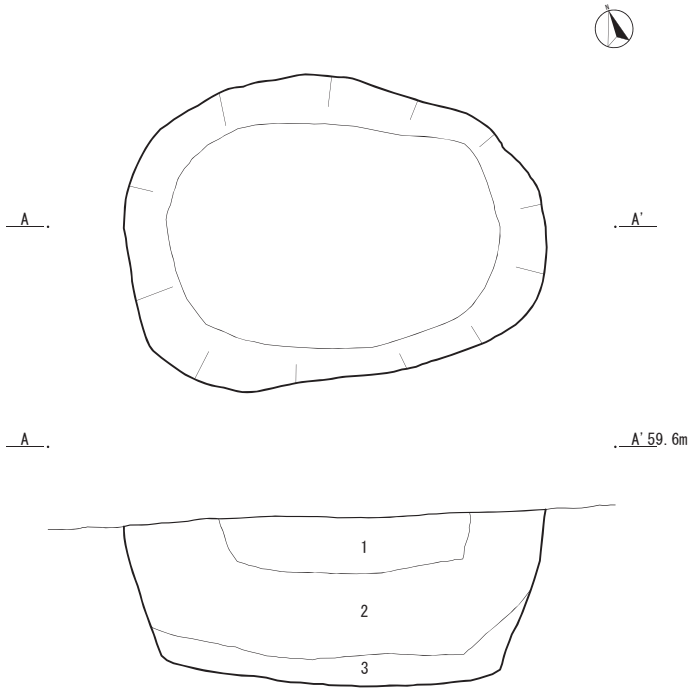
Ｈ・Ｇ－６・７区のⅥ層上面で検出された。上面は撹乱を受けている。溝状遺構１・２号に並行しているが，約 20 m離れているため関連は不明である。南側は溝状遺構４号に切られており，その南側は上部を削平されたためか，検出されていない。残存部分は長さ約 6.5 m，幅約 50 ～ 80 ㎝，深さは 10 ㎝程度である。埋土はしまりの弱い黒色土で，Ⅲ層など上部の土と推定される。遺物は出土していない。

SK8

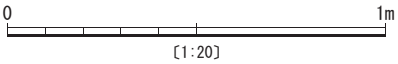


1:黒褐色土(10YR2/3)　しまり弱い。粘性有り。

SK9

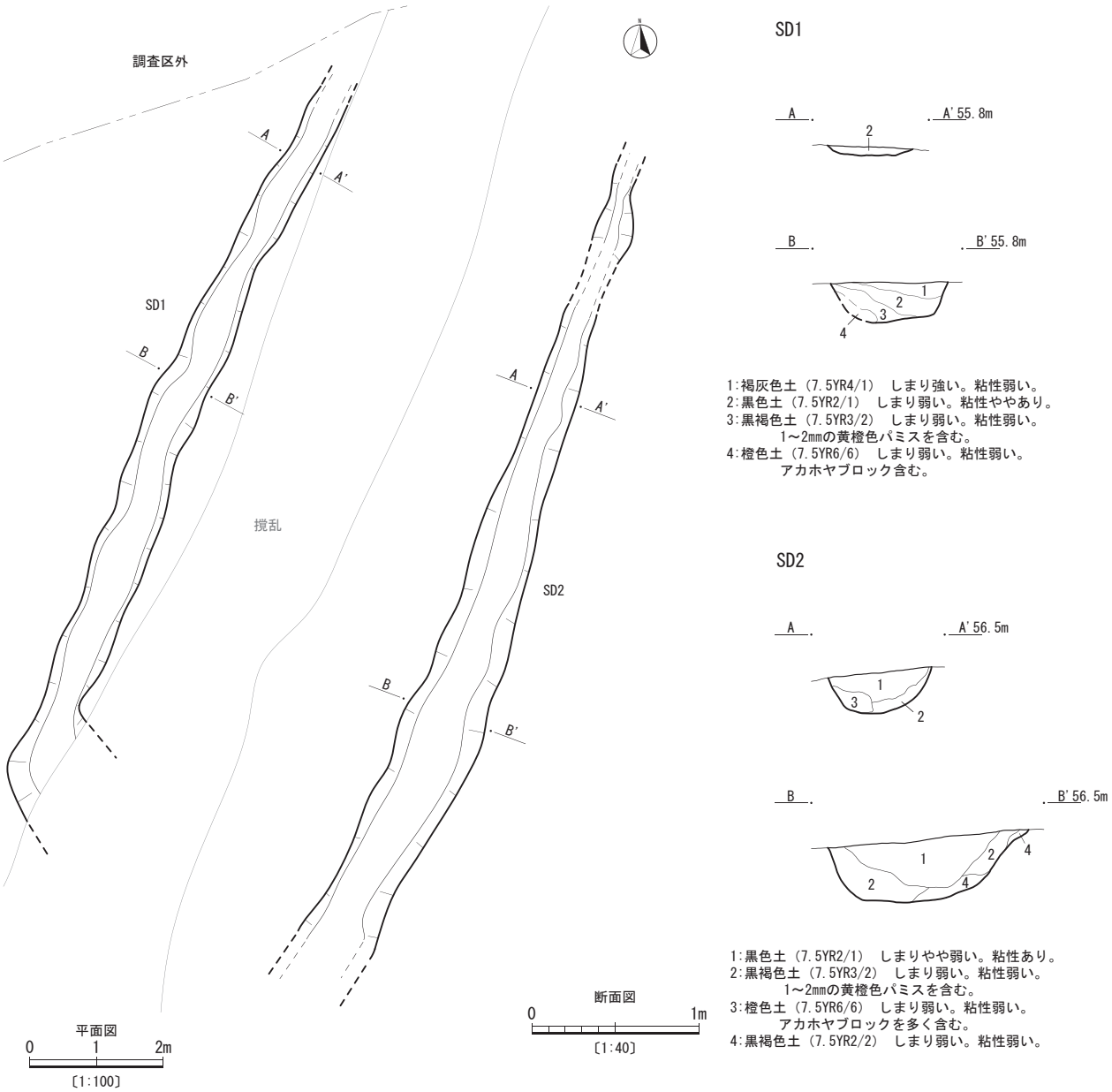


1:極暗褐色土(7.5YR2/3)　しまり弱い。粘性有り。1～2㎜の黄橙色パミスを多く含む。
2:褐色土(7.5YR4/4)　しまり弱い。粘性やや有り。黄橙色パミスを多く，アカホヤブロックを含む。
3:褐色土(7.5YR4/6)　しまり有り。粘性有り。



〔1:20〕

第 78 図　土坑８号・９号



第 79 図　溝状遺構１号・２号

溝状遺構４号（第 80 図）

Ｈ～Ｆ－７区のⅥ層上面で検出された。上面は撹乱を受けている。溝状遺構３号に垂直に，地形に沿って下るように延びている。最も標高が低い西側では，90 度曲がり現在の道路に切られている。残存部分は東西に長さ約 13 m，南北に約４m，幅は約 50 ～ 100 ㎝，深さは 10 ～ 20 ㎝程度である。埋土は茶褐色土を含む黒褐色土でしまりがあり，どの層の土かは不明である。

埋土内で出土した遺物を４点図化した。520 は土師器皿の口縁部である。521 は龍泉窯系青磁の碗で，外面に蓮弁文の一部とみられる盛り上がりを有する。522・523 は白磁である。522 は口禿皿の底部で，灰白色で見込みに圏線がみられる。523 は森田Ｄ群に比定される皿で，体部下位が露胎である。

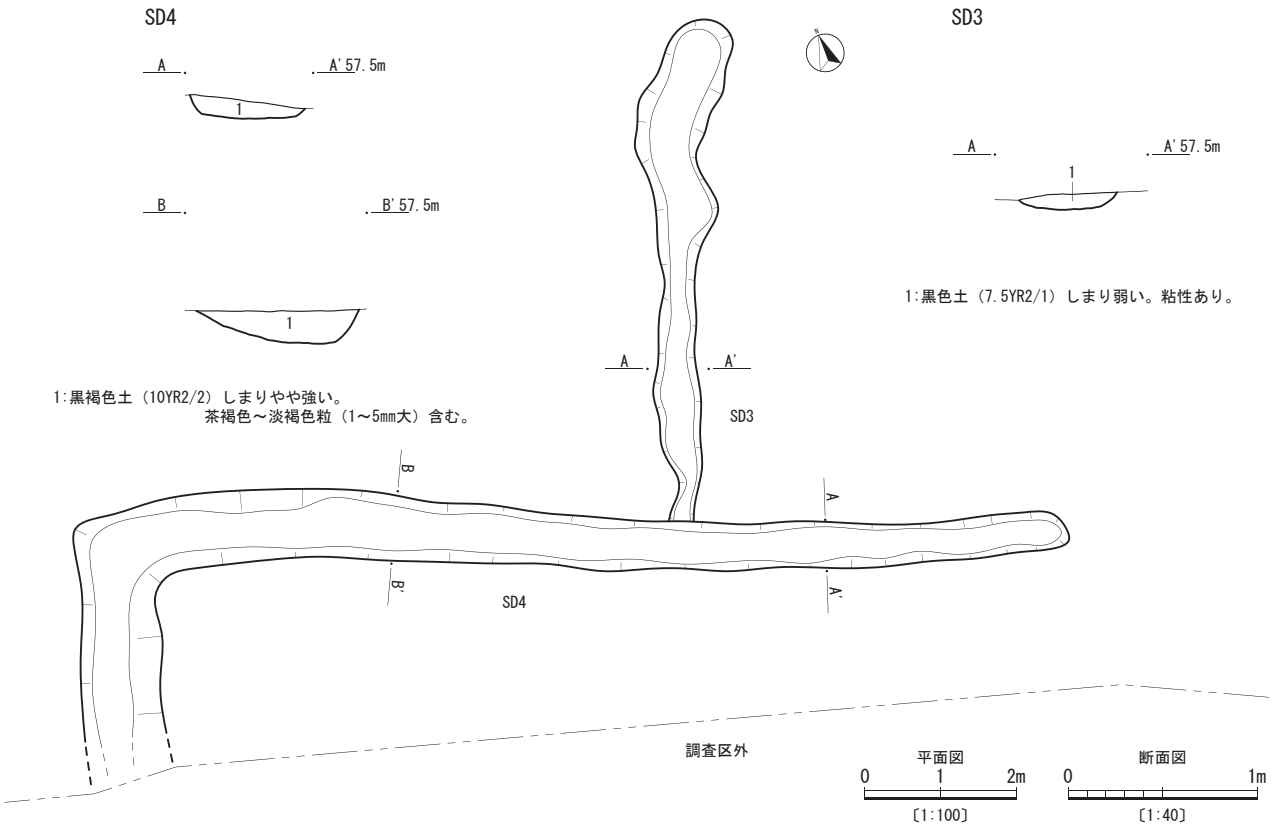
（４）硬化面（第 81 図）

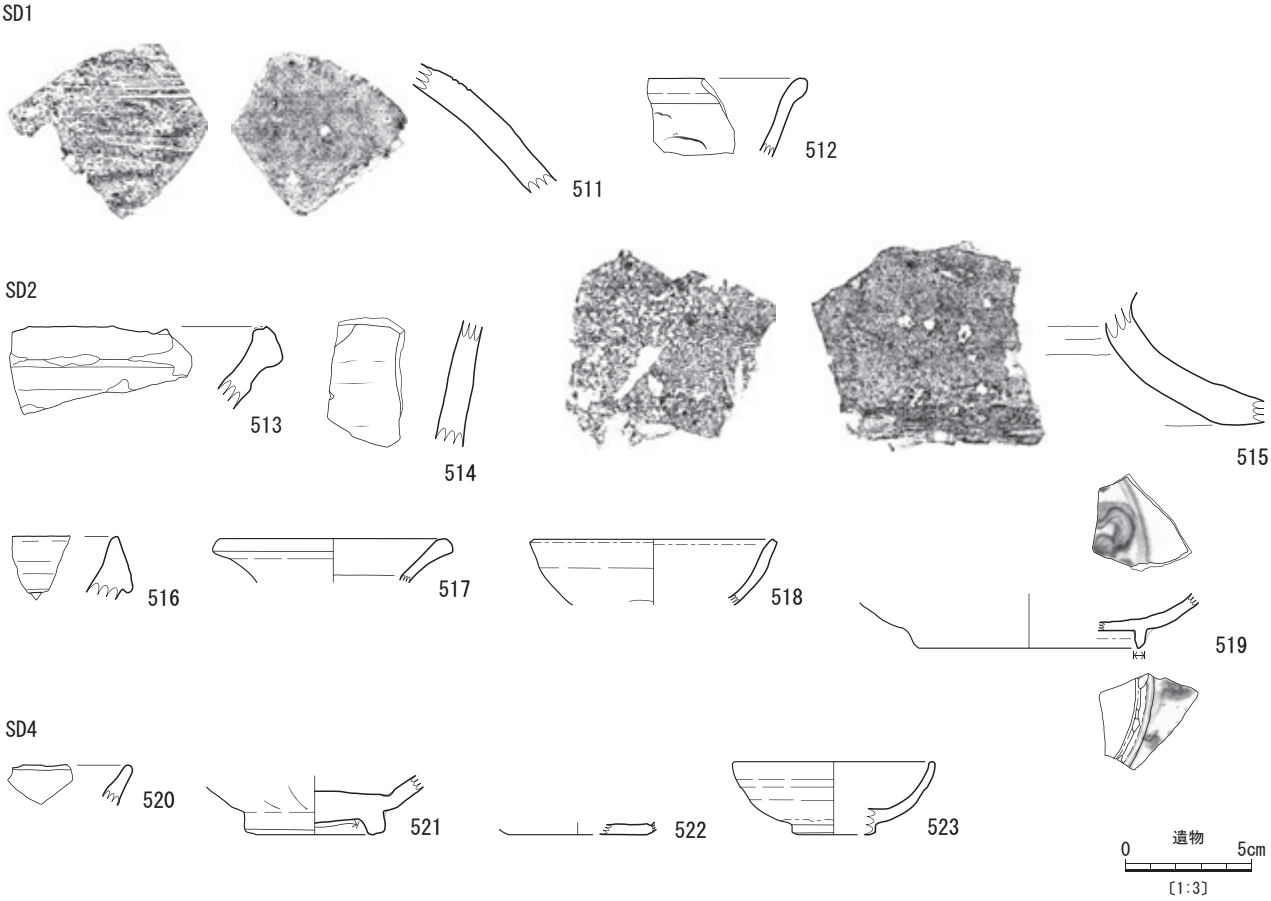
Ｆ－７・８区で検出された。幅は 40 ～ 80 ㎝程度であり，約 9.5 m程度残存している。上面はほぼ黒色土である。現在の道路に並行し，西側の川へ下るように延びている。中世の遺物が上面で出土しており，中世の遺構としたが，近世以降である可能性がある。

遺物は１点出土している。524 は土師器皿であり，底部の切り離しは糸切りである。

３　遺構外遺物（第 82 図）

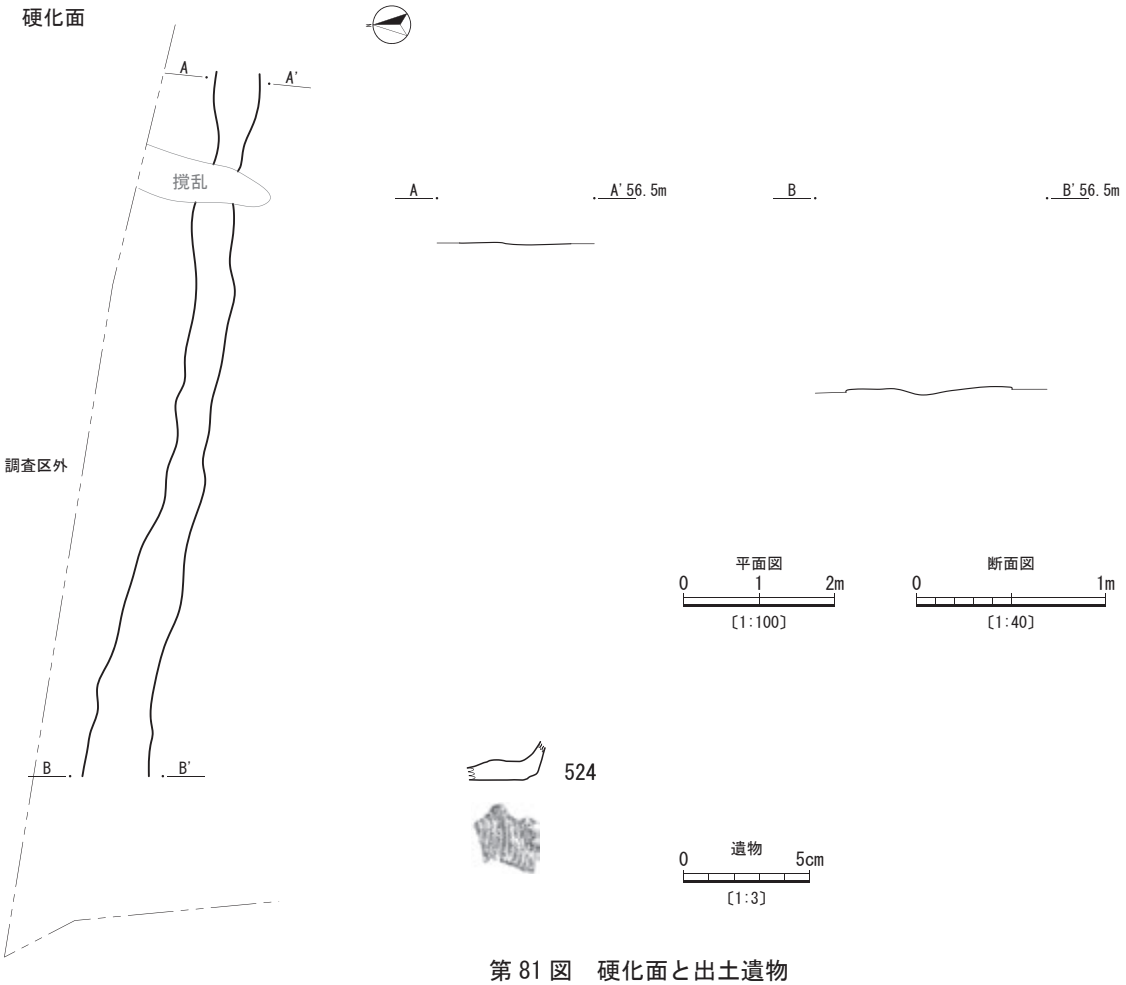
525 は土師器皿の口縁部である。ほぼ直線状に立ち上がり，外面にススが付着している。526 は土師質土器の鍋の口縁部で，外面下方にススが多く付着している。527・528 は東播系須恵器の捏鉢である。527 は口縁下端の突出が弱く，528 は強い。529 は中世須恵器甕の胴部



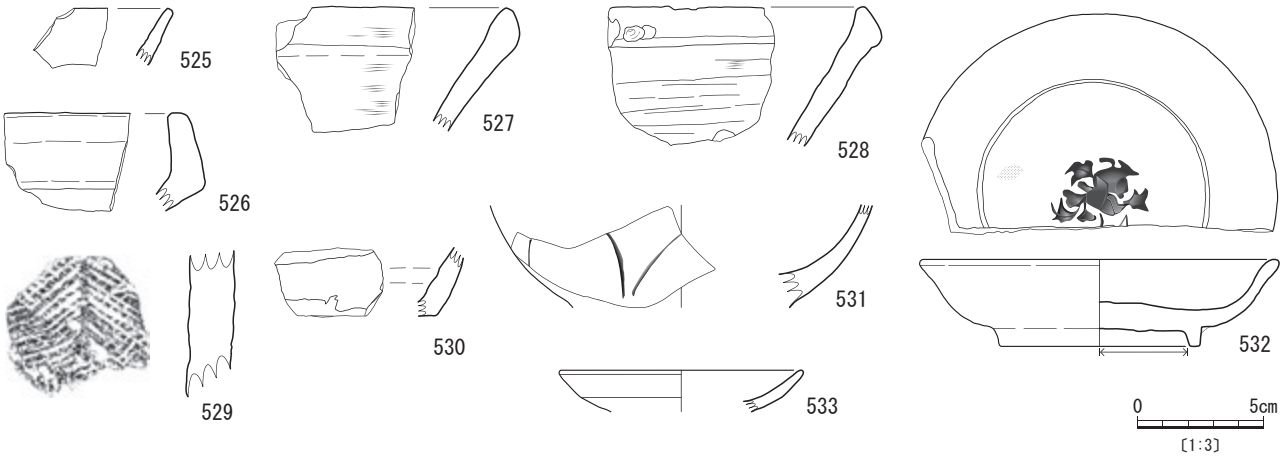


第 80 図　溝状遺構３号・４号と溝状遺構の出土遺物

である。生焼けで土師質であり，外面が赤褐色で矢羽根状のタタキ痕が残る。530は黒釉の天目碗である。底部付近で，底面に釉はみられない。531・532は龍泉窯系青磁である。531は碗の胴部で，蓮弁文と考えられる縦方向の切彫りの文様がみられ，上田Ｂ類の可能性がある。また，回転させ製作した際に残った沈線が文様状に残る。532は口縁が外反する皿で，見込みに圏文や花文の印を有し，見込みに１㎝弱の砂目が１か所残る。533は白磁の皿か坏で，体部中位でやや屈曲する。残存部は全面施釉されている。



第 81 図　硬化面と出土遺物



第 82 図　中世の出土遺物

第 11 表　中世遺構出土土師器・須恵器・陶器等観察表

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	種別	産地	器種	部位	口径 底径 器高 (cm)	調整		色調		白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石	長石	灰石	焼成	備考
										外面	内面	外面	内面										
70	417	大型土坑 1	－	－	土師器	－	皿	口縁部	－	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	褐灰	○	○	○				○	○	普通	
	418	大型土坑 1	－	－	土師器	－	皿	口縁部	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○			○	良好	
	419	大型土坑 1	－	－	土師質土器	－	鉢	底部	－ (17.4) －	丁寧なヘラ縦ミガキ	横回転ヘラナデ	にぶい赤褐	にぶい黄橙	○	○					○		良好	外底：回転痕 内底：ミガキ→横ナデ
	420	大型土坑 1	－	－	瓦質土器	－	羽釜	口縁部	－	口縁横ナデ 縦ナデ	縦ナデ	褐灰	褐灰	○				○			○	良好	
	421	大型土坑 1	－	－	中世須恵器	東播系	捏鉢	口縁部	－	横ナデ	横ナデ	暗青灰	灰黄	○				○			○	普通	口縁暗青灰
	422	大型土坑 1	－	－	中世須恵器	－	甕	胴部	－	矢羽根状タタキ	横ナデ	橙	灰白	○	○			○			○	良好	磨滅
	423	大型土坑 1	①	－	中世須恵器	－	甕	胴部	－	斜格子タタキ	－	にぶい黄	灰黄		○	○		○			○	良好	内面剥脱
	424	大型土坑 1	④	－	陶器	備前	擂鉢	口縁部	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	灰赤	灰赤・浅黄ゴマ	○	○					○	○	良好	櫛目不明
	425	大型土坑 1	①・③	10	陶器	備前	擂鉢	口縁部	－	横ナデ	横ナデ	褐灰・口縁白ゴマ	褐灰	○						○	○	良好	8 条以上のかき目
	426	大型土坑 1	③	－	陶器	備前	擂鉢	口縁部	－	横ナデ	横ナデ	にぶい赤褐 下半灰赤	にぶい赤褐 浅黄ゴマ	○	○					○	○	良好	櫛目不明
	427	大型土坑 1	－	－	陶器	備前	擂鉢	底部	－	横ナデ	－	赤灰	にぶい赤褐	○		○		○			○	良好	使用による磨耗 5･7 条のかき目
	428	大型土坑 1	③	－	陶器	備前	擂鉢	底部	－	横ナデ	横ナデ	赤褐	にぶい赤橙	○	○	○	○					良好	使用による磨耗 7 条のかき目 底繊維灰痕
	429	大型土坑 1	①	6	陶器	備前	擂鉢	底部	－ (13.8) －	ヘラ斜ナデ	ヘラ縦ナデ	暗赤褐	赤褐	○	○			○				良好	底に淡黄粘土付着 10 条のかき目
	430	大型土坑 1	－	－	陶器	備前	壺	底部	－	－	砂付着	暗赤褐	暗赤褐	○				○			○	良好	内外に自然灰釉(暗オリーブ) 底に置台付着
	431	大型土坑 1	①	8	陶器	備前	壺	底部	－	－	－	青灰	褐灰	○	○							良好	外底：丁寧なナデ，粘土付着 内底：ヘラナデ
	432	大型土坑 1	－	－	陶器	－	壺	底部	－	横ナデ	横ナデ	褐灰	褐灰	○				○			○	良好	
74	469	大型土坑 2	－	－	土師器	－	皿	底部	－	－	－	浅黄橙	浅黄橙					○	○			普通	底部糸切り離し
	470	大型土坑 2	③	－	土師器	－	皿	底部	－ (6.4) －	－	－	橙	にぶい黄橙		○				○			普通	底部糸切り離し
	471	大型土坑 2	③	－	土師器	－	皿	底部	－ (7.0) －	－	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			○				普通	底部糸切り離し
	472	大型土坑 2	－	－	中世須恵器	東播系	捏鉢	注ぎ口	－	横ナデ	横ナデ	灰　口縁は光沢のある黒	灰　灰白ゴマ	○				○				良好	
	473	大型土坑 2	－	－	中世須恵器	東播系	捏鉢	口縁部	－	横ナデ	横ナデ	灰	灰	○				○	○			良好	
	474	大型土坑 2	－	－	中世須恵器	東播系	捏鉢	口縁部	－	ヘラ横ナデ	横ナデ	灰　口縁は暗灰	灰	○				○	○			良好	
	475	大型土坑 2	－	－	陶器	備前	擂鉢	底部	－	横ナデ	横ナデ	灰褐	灰褐	○		○						良好	
75	502	大型土坑 1･2	－	－	陶器	備前	壺	完形	(12.0) (13.8) 27.4	横ナデ	横ナデ　車輪状当て具痕	青灰　口縁は暗い	青灰	○					○	○		良好	肩部に櫛状沈線 内面剥脱 底近くスス
	503	大型土坑 1･SD1	⑥	5	陶器	備前	壺	底部	－ (19.0) －	横ナデ	横ナデ	灰白 底：赤褐	灰	○	○			○			○	良好	内底ゴマ
76	504	大型土坑 1･2･SD1･2	①・②・③	大土 1-9	陶器	備前	壺	口縁～胴部	(17.4) － －	横ナデ	横ナデ	灰赤、赤灰	暗赤灰	○		○			○		○	良好	肩部に圏線，間に櫛描波状文 肩と口縁上面にゴマ
77	505	大型土坑 1	③	－	陶器	タイ	四耳壺	口縁部	(18.0) (15.0) －	丁寧なナデ	丁寧なナデ	暗赤灰	暗赤灰	○		○		○				良好	505 ～ 510 は同一個体とみられる。 肩部に低い三角突帯・耳 釉は二次的に被熱 胴部下～底面無釉 釉は浅黄・灰白・暗オリーブ
	506	大型土坑 2	－	－				頸部				暗赤灰	暗赤灰	○		○		○					
	507	大型土坑 2	③	－				肩部				暗赤灰	青灰	○		○		○					
	508	大型土坑 2	①	－				胴部		丁寧なナデ	輪積み痕部分的に残存	暗赤灰	青灰	○		○		○					
	509	大型土坑 1･2	①・③	－				胴部		横ナデ	横ナデ	暗赤灰	青灰	○		○		○					
	510	大型土坑 2	－	－				底部		横ヘラナデ	横ヘラナデ	暗赤灰	青灰	○		○		○					
80	511	SD1	－	－	陶器	備前	壺	肩部	－	横ナデ	横ナデ	褐灰　黄白色ゴマ	褐灰	○	○						○	良好	外面に 3 条沈線
	513	SD2	①	－	中世須恵器	東播系	捏鉢	口縁部	－	横ナデ	横ナデ	緑灰	緑灰	○				○	○			普通	口縁はやや暗い
	514	SD2	－	－	中世須恵器	古瀬戸	壺	胴下部	－	ナデ	ナデ	オリーブ	オリーブ	○					○			良好	胎土灰白
	515	SD2	①	－	陶器	常滑	甕	頸部	－	横ナデ	ハケ目様	灰白	灰	○					○			良好	
	516	SD2	－	－	陶器	備前	擂鉢	口縁部	－	横ナデ	横ナデ	赤灰	赤灰	○	○						○	良好	
	517	SD2	①	－	陶器	－	瓶	口縁部	(9.0) － －	－	－	黒褐	黒褐	○				○				普通	内面一部焼きぶくれ・胎土灰色
	520	SD4	－	－	土師器	－	皿	口縁部	－	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙									普通	精製土
81	524	硬化面	①	－	土師器	－	皿	底部	－	－	－	橙	橙					○	○			普通	底部糸切り離し

第 12 表　中世遺構出土青磁・白磁等観察表

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	種別	産地	器種	部位	口径 底径 器高 (cm)	文様	施釉範囲	釉の色調	胎土の色調	焼成	備考
71	433	大型土坑 1	−	−	青磁	龍泉	碗	体部	−	連弁	−	明緑灰	灰白	良好	上田 B
	434	大型土坑 1	③	−	青磁	龍泉	碗	体部	−	鎬連弁	−	オリーブ灰	灰	良好	上田 B
	435	大型土坑 1	③	−	青磁	龍泉	碗	底～高台部	(5.6) (底)	連弁	−	灰オリーブ	灰	良好	上田 B
	436	大型土坑 1	①	1	青磁	龍泉	碗	底部	(6.8) (底)	−	高台内無釉	オリーブ灰	灰白	良好	
	437	大型土坑 1	③	18	青磁	龍泉	碗	底部	(7.6) (底)	−	高台内無釉	オリーブ灰	灰白	良好	
	438	大型土坑 1	①	3	青磁	龍泉	碗	底部	6.2 (底)	見込みに圏線と草花印文	高台内無釉	明緑灰	黄味がかった灰白	良好	貫入
	439	大型土坑 1	①	2	青磁	龍泉	碗	底部	6.2 (底)	見込みに圏線と草花印文	高台内無釉	オリーブ灰	灰白	良好	貫入
	440	大型土坑 1	①	−	青磁	龍泉	碗	底部	(5.6) (底)	見込みに草花印文	高台内無釉		灰白	良好	
	441	大型土坑 1	③	12･13	青磁	−	皿	完形	12.6 5.8 3.0	−	見込み輪状釉剥ぎ・胴下部～高台無釉	灰白	灰白	良好	
	442	大型土坑 1	③	−	青磁	龍泉	皿	口縁部	−	内外草花文	−	オリーブ灰	灰白	良好	上田 B
	443	大型土坑 1	③	17	青磁	龍泉	皿	口縁部	(12.8) (口)	外蓮花文 内草花文	−	明オリーブ灰	灰白	良好	上田 B
	444	大型土坑 1	−	−	青磁	龍泉	皿	口縁部	(13.2) (口)	外草花文 内蓮花文	−	灰オリーブ	灰白	良好	上田 B
	445	大型土坑 1	③	−	青磁	龍泉	浅型碗	口縁部	−	鎬連弁	−	明オリーブ灰	灰白	良好	
	446	大型土坑 1	−	−	白磁	−	皿か碗	口縁部	−	−	−	青味がかった灰白	灰白	良好	
	447	大型土坑 1	①	−	白磁	徳化か	−	−	−	−	内面無釉	灰白	灰白	良好	水滴などの文具か袋物か
74	476	大型土坑 2	④	3	青磁	龍泉	碗	口縁部	(14.6) (口)	雷文	−	オリーブ灰	灰白	良好	上田 C
	477	大型土坑 2	−	−	青磁	龍泉	碗	口縁部	−	雷文	−	明オリーブ灰	灰白	良好	上田 C
	478	大型土坑 2	−	−	青磁	龍泉	碗	口縁～体部	(17.0) (口)	雷文	−	オリーブ黒	灰白	良好	上田 C
	479	大型土坑 2	−	−	青磁	龍泉	碗	体部	−	口縁雷文 胴部連弁	−	オリーブ灰	灰白	良好	
	480	大型土坑 2	−	−	青磁	龍泉	碗	底部	(6.2) (底)	胴部下連弁	−	オリーブ灰	灰白	良好	
	481	大型土坑 2	−	−	青磁	龍泉	碗	口縁部	(13.2) (口)	雷文	−	明緑灰	灰白	良好	
	482	大型土坑 2	①	−	青磁	龍泉	碗	口縁～体部	(14.8) (口)	−	−	オリーブ灰	灰白	良好	上田 D
	483	大型土坑 2	④	6	青磁	龍泉	皿	口縁部	12.8 (口)	外草花文 内蓮花文	−	明緑灰	灰白	良好	
	484	大型土坑 1･2	①･④	大土 1-4･大土 2-7	青磁	龍泉	皿	口縁～底部	(13.2) 6.4 3.5	見込みに圏線と草花印文 内外草花文	高台内に輪状の砂目痕	オリーブ灰	灰白（緻密）	良好	
	485	大型土坑 2	−	−	青磁	龍泉	皿	口縁～底部	13.4 6.2 3.7	見込みに圏線と蓮花印文　外草花文 内蓮花文	高台内に砂目痕，釉剥ぎ	灰オリーブ	灰白	良好	
	486	大型土坑 2	−	−	青磁	龍泉	皿	口縁部	(13.0) (口)	外唐草文 内蓮花文	−	明オリーブ灰	灰白	良好	
	487	大型土坑 2	①	−	青磁	龍泉	皿	口縁部	(12.6) (口)	内外草花文	−	オリーブ灰	灰白	良好	
	488	大型土坑 2	−	−	青磁	龍泉	皿	口縁部	(12.8) (口)	内外草花文	−	明緑灰	灰白	良好	
	489	大型土坑 2	④	2	青磁	龍泉	皿	口縁部	(12.2) (口)	外草花文か	−	オリーブ灰	灰白	良好	
	490	大型土坑 2	−	−	青磁	龍泉	皿	口縁部	(13.4) (口)	草花文か	−	明オリーブ灰	灰白	良好	気泡多い
	491	大型土坑 2	−	−	青磁	龍泉	皿	口縁～体部	(12.6) (6.4) 3.4	−	見込み輪状釉剥ぎ 高台内無釉	オリーブ灰	灰白	良好	
	492	大型土坑 2	④	9	青磁	龍泉	坏	口縁部	(12.6) (口)	連弁	−	明緑灰	灰白	良好	
	493	大型土坑 2	−	−	白磁	−	皿	口縁～体部	(8.6) (口)	−	外面胴下部無釉	黄味がかった灰白	灰黄	普通	森田 E
	494	大型土坑 2	−	−	白磁	−	皿	口縁部	(10.2) (口)	−	胴下部無釉	緑がかった灰白	灰白	良好	森田 D 貫入
	495	大型土坑 2	−	−	白磁	−	多角坏	口縁～体部	−	−	胴下部無釉	灰白	灰白	良好	
75	498	大型土坑 2	−	−	青磁	龍泉	皿	口縁～底部	12.8 6.8 3.7	−	見込み輪状釉剥ぎ 高台内無釉	明緑灰	灰白	良好	
	499	大型土坑 1･2	④	−	青磁	龍泉	碗	口縁部	(14.0) (口)	口縁雷文 胴部連弁	−	オリーブ灰	灰白	良好	上田 C
	500	大型土坑 1･2	①	大土 1-5	青磁	龍泉	碗	底部	5.8 (底)	見込みに圏線と草花スタンプ文	高台内無釉・砂目	オリーブ灰	灰白	良好	
	501	大型土坑 1･SD1	③	大土 1-19･20 他	青磁	龍泉	小型瓶	体部	−	−	内面部分的に無釉	緑灰	灰白	良好	
80	512	SD1	−	−	青磁	龍泉	碗か坏	口縁部	−	草花文か	−	オリーブ灰	灰	良好	貫入
	518	SD2	①	−	白磁	−	碗	口縁部	(11.0) (口)	−	口禿げ　胴下部無釉	緑がかった灰白	灰白	良好	大宰府白磁碗Ⅸ類
	519	SD2	①	−	青花	中国	皿	底部	(9.2) (底)	見込みに獅子 外唐草文	畳付～高台内側無釉	透明釉	灰白	良好	小野分類皿 B 群

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	種別	産地	器種	部位	口径 底径 器高 (cm)	文様	施釉範囲	釉の色調	胎土の色調	焼成	備考
80	521	SD4	−	−	青磁	龍泉	碗	底部	5.6 (底)	連弁	高台内無釉	明緑灰	灰白	良好	
	522	SD4	−	−	白磁	−	皿	底部	5.8 (底)	見込みに圏線	−	黄味がかった灰白	灰白	良好	
	523	SD4	−	−	白磁	−	皿	口縁～ 底部	(8.0) (3.3) 2.9	−	−	緑がかった灰白	灰白	良好	

第 13 表　中世遺構出土石製品観察表

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
71	448	大型土坑 1	③	11	砥石	(6.9)	7.20	(4.8)	(244.0)	砂岩	
	449	大型土坑 1	−	−	軽石製品	6.9	6.4	5.0	46.2	軽石	
72	450	大型土坑 1	−	⑰	空風輪	18.4	15.0	(13.3)	(950)	軽石	
	451	大型土坑 1	−	⑮	空風輪	30.2	18.9	(17.3)	(7300)	凝灰岩	
	452	大型土坑 1	−	⑪・⑭	火輪	18.2	(34.2)	35.6	(18500)	凝灰岩	
	453	大型土坑 1	−	⑤	水輪	26.8	30.2	26.8	6250	軽石	
	454	大型土坑 1	③	⑧	水輪	34.7	33.8	29.7	38000	凝灰岩	
	455	大型土坑 1	−	⑩	水輪	28.4	35.5	35.2	(17950)	凝灰岩	
	456	大型土坑 1	−	①	地輪	34.0	(34.1)	(24.4)	(22800)	凝灰岩	
	457	大型土坑 1	−	−	地輪	12.6	(26.7)	(22.5)	(5850)	凝灰岩	
	458	大型土坑 1	−	⑥	地輪	10.4	30.8	31.4	5350	軽石	
73	459	大型土坑 1	−	⑯	地輪	22.0	42.6	44.0	52450	凝灰岩	
	460	大型土坑 1	−	④	地輪	18.8	(31.4)	(32.9)	(17150)	凝灰岩	
	461	大型土坑 1	−	−	板碑	(14.8)	(17.7)	(14.8)	(2150)	軽石	薬研彫
	462	大型土坑 1	−	⑦	板碑	36.3	(20.7)	(15.8)	(4050)	軽石	
	463	大型土坑 1	−	③，一括	板碑	(43.4)	18.6	10.8	(2900)	軽石	
	464	大型土坑 1	−	⑫	板碑か	(34.5)	23.6	13.2	(7750)	凝灰岩	
	465	大型土坑 1	−	−	板碑か	(28.5)	17.8	(14.1)	(7300)	凝灰岩	
	466	大型土坑 1	−	②	不明	16.5	9.5	8.5	1300	凝灰岩	
	467	大型土坑 1	−	⑬	不明	(13.0)	(9.7)	(8.2)	(650)	軽石	
	468	大型土坑 1	④	大土 1-15	石臼	径 33.5 × 34.3		14.0	20800	安山岩	

第 14 表　中世遺構出土金属製品観察表

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	器種	部位	大きさ	重量（g）	備考
74	496	大型土坑 2	④	4	角釘	頭～胴部	残存長 3.9 ㎝	11.9	頭は長方形
	497	大型土坑 2	①	1	角釘	胴～先端部	残存長 7.3 ㎝	9.8	

第 15 表　中世土師器・須恵器・陶器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	種別	産地	器種	部位	口径 底径 器高	調整		色調		白石	茶石	黄白石	雲母	石英	黒石	長石	灰石	焼成	備考
										外面	内面	外面	内面										
82	525	−	I	−	土師器	−	皿	口縁部	−	細かいハケ 横ナデ	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙		○	○				○		普通	スス　摩耗
	526	−	I	−	土師質 土器	−	鍋	口縁部	−	ハケ横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○		○					普通	外面剥離・スス
	527	F8	I	−	中世 須恵器	東播系	捏鉢	口縁部	−	横ナデ	横ナデ	褐灰	褐灰	○				○			○	良好	口縁青味がかる
	528	−	I	−	中世 須恵器	東播系	捏鉢	口縁部	−	横ナデ	横ナデ	褐灰	褐灰	○	○			○			○	良好	口唇部は使用による摩耗 口縁は部分的に光沢
	529	F8	I	−	中世 須恵器	−	甕	胴部	−	矢羽根状タタキ	ナデ	橙	淡黄	○	○	○			○		○	良好	内面は著しく磨滅
	530	−	I	−	陶器	天目	碗	底部	−	−	−	暗赤灰	赤黒	○								良好	

第 16 表　中世青磁・白磁観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	種別	産地	器種	部位	口径 底径 器高	文様	施釉範囲	釉の色調	胎土の色調	焼成	備考
82	531	−	I	−	青磁	龍泉	碗	胴部	−	蓮弁	−	灰オリーブ	灰白	良好	
	532	E6	撹乱	63	青磁	龍泉	皿	口縁～底部	14.2 8.0 3.4	見込みに圏線，草花印文	高台内無釉	オリーブ灰	灰白	良好	見込みに砂目痕
	533	F8	I	−	白磁	−	皿	口縁部	(9.8) − −	−	−	黄味がかった 灰白	灰黄	普通	

第６節　近世の調査

１　調査の概要

近世の遺構はⅠ－６・７区で隣り合った石塔・石碑が１基ずつ，その周辺に土坑が４基，その南側に溝状遺構が１条検出されており，石塔周辺に集中している。遺物も石塔周辺の表土で多数出土しており，供献物など，この石塔に関係のある遺物と考えられる。他にはＦ～Ｈ－12 ～ 14 区で溝状遺構が１条検出されている。

２　遺構

（１）溝状遺構

溝状遺構５号（第 84 図）

Ⅰ－６～８区のⅣｂ層上面で検出された。上位は削平を受けている。北は調査区域外，南は道路付近まで直線状に延びている。検出できた部分は長さ約 13 ｍ，幅約 80 ㎝，深さは 30 ㎝程度である。埋土は黒色土に少量のアカホヤ火山灰が混じっており，遺構掘削土の一部と考えられる。床面はほぼ平坦である。

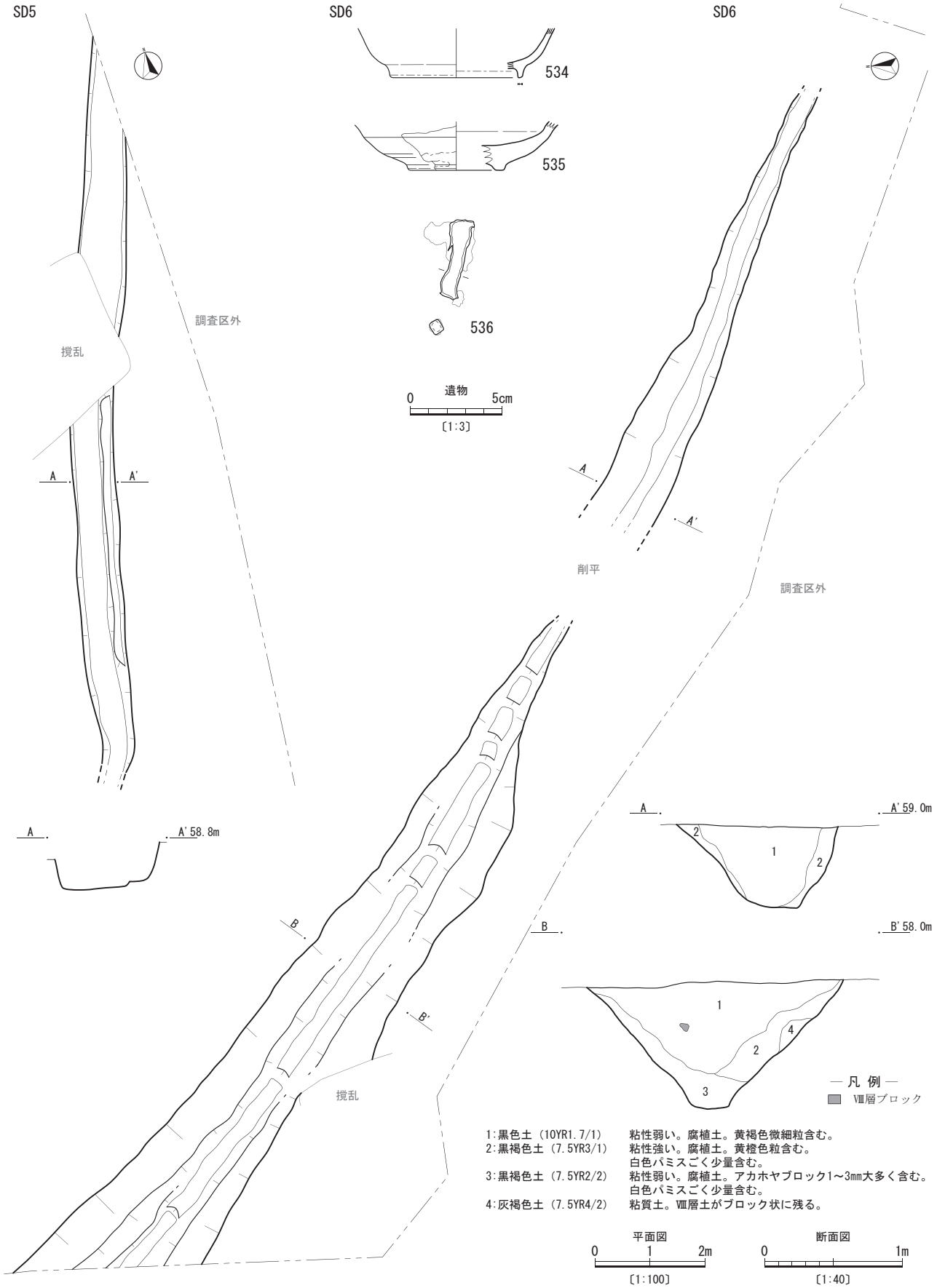
溝状遺構６号（第 84 図）

Ｆ～Ｈ－ 12 ～ 14 区のＶｂ～Ｘ層上面で検出された。上位は東側を中心に大きく削平を受けている。東南東から西北西方向に直線状に延びている。検出面の長さは約 25 ｍで，残存度の良い西側は幅約２ｍ，深さは 1.0 ～ 1.5 ｍで，東側もこの程度の大きさであった可能性がある。断面形状は逆三角形で床面は狭く，埋土はほぼ黒色土であり，下部にアカホヤ火山灰などが混じりあっている。現在の側溝や道路跡と並行であり，床面が階段状になる部分があること，硬化した部分がみられることから，道跡であった可能性が高い。

534 は白磁の皿で，森田Ｅ群に比定されるものである。535 は唐津焼の埦で，内面や外面の体部下半を除き，灰褐色の釉がかかる。536 は鉄釘である。角釘とみられ，頭部付近のみ残存する。

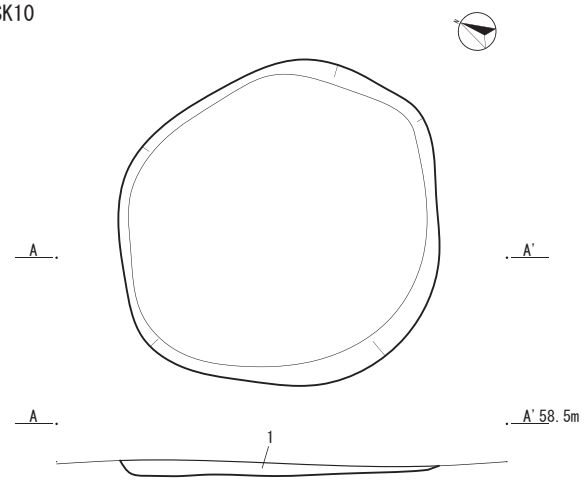


第 83 図　近世と時期不明の遺構配置図



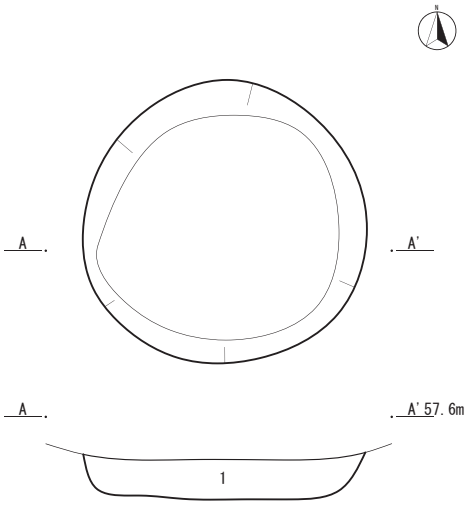
第 84 図　溝状遺構５号・６号と出土遺物

SK10



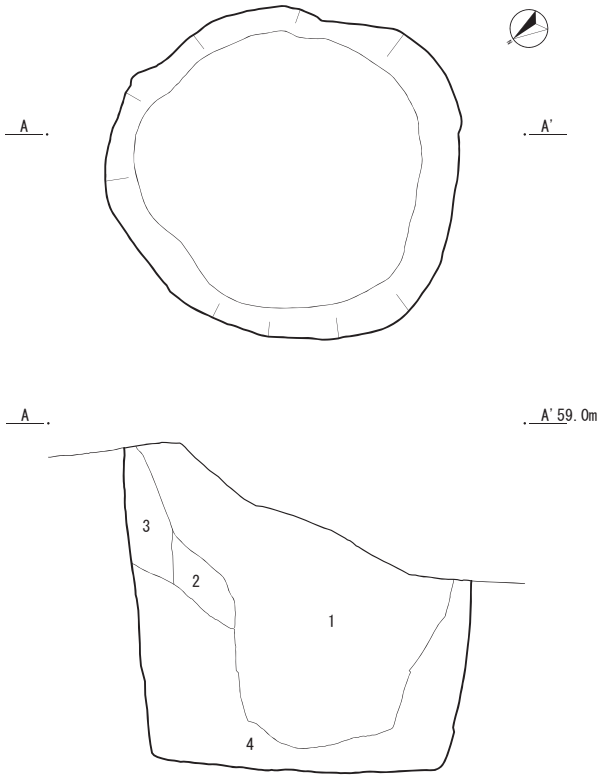
1:黒褐色土（7.5YR2/2）しまり弱い，粘性弱い。

SK12



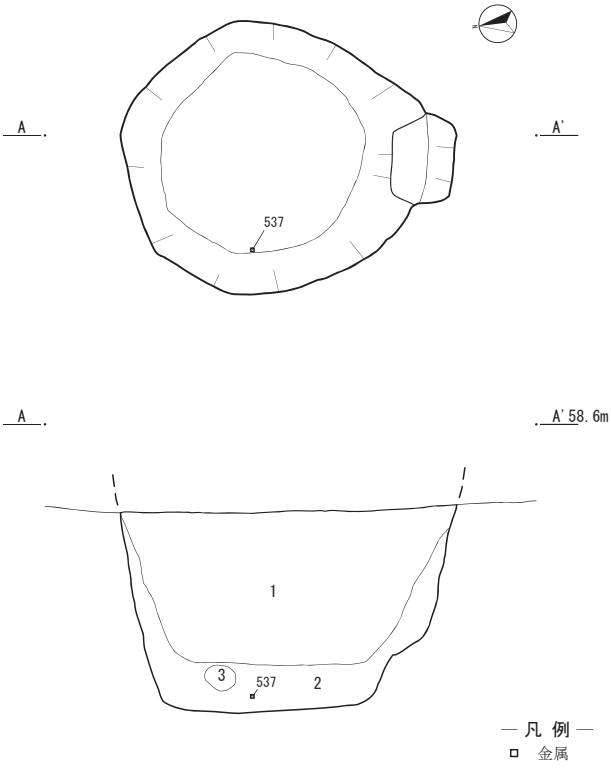
1:黒褐色土（7.5YR2/2）しまり弱い，粘性弱い。

SK11



1:黒色土（10YR1.7/1） しまり弱い，粘性あり。
2:黒褐色土（7.5YR2/2） しまり弱い，粘性弱い。白色粒子含む。
3:暗褐色土（7.5YR3/3） しまり弱い，粘性弱い。
4:褐色土（7.5YR4/3） しまり弱い，粘性弱い。

SK13



1:黒褐色土（7.5YR2/2） しまり弱い，粘性弱い。
2:灰褐色土（7.5YR4/2） しまりややあり，粘性弱い。埋土1よりやや硬い。
3:灰褐色土（7.5YR5/2） しまりややあり，粘性弱い。ブロック状に入る。



537

遺構 0 1m 〔1:20〕

遺物 0 5cm 〔1:3〕

第 85 図　土坑 10 号～ 13 号と出土遺物

（２）土坑

土坑 10 号（第 85 図）

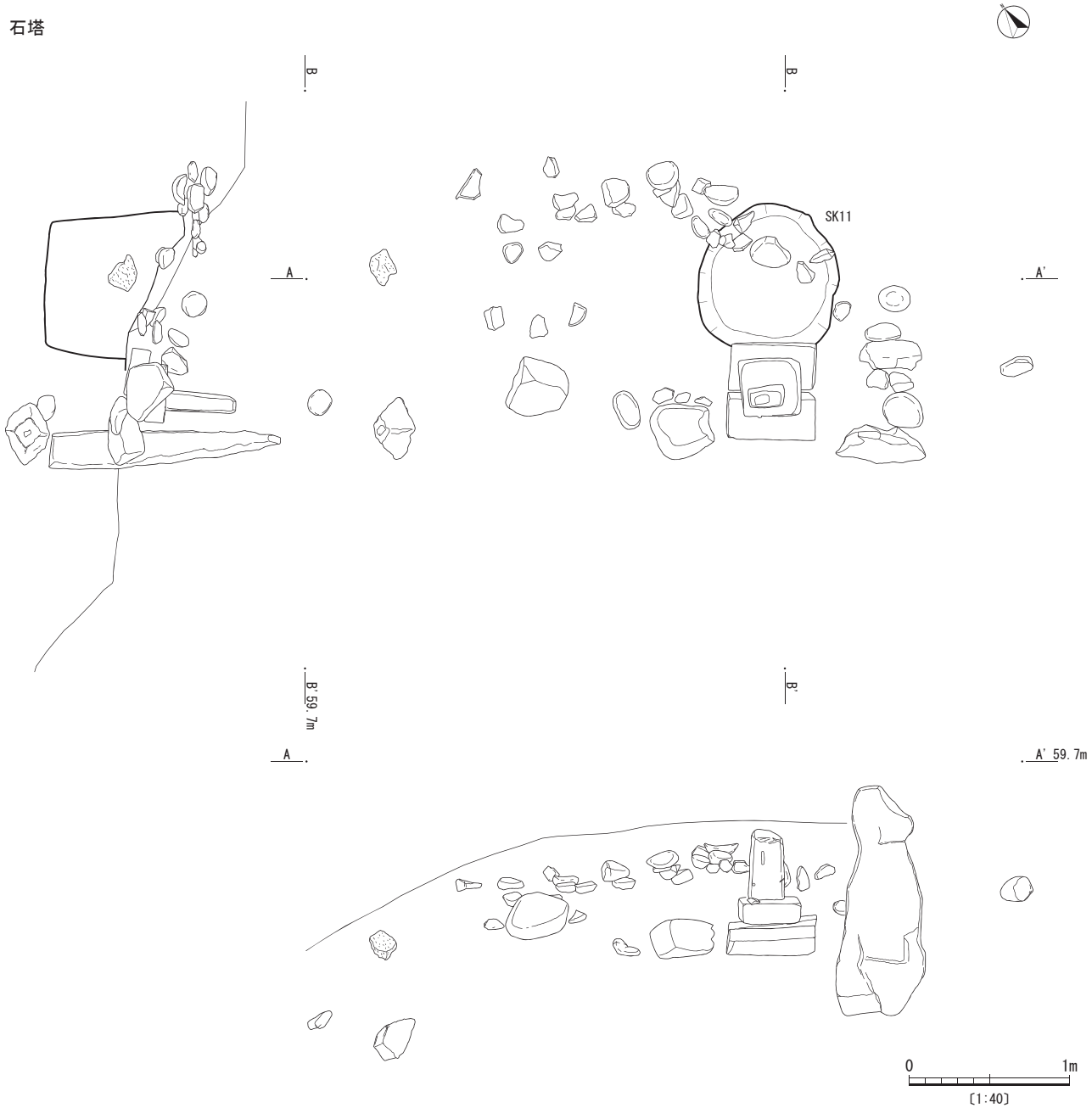
Ⅰ－６区のⅣｂ層上面で検出された。平面は円形で直径 80 ㎝程度である。残存度は極めて悪く，床面より５㎝程度しか残らない。埋土は黒褐色土で，Ⅱ・Ⅲ層土などと考えられる。遺物はみられず，用途も不明である。

土坑 11 号（第 85 図）

Ⅰ－６区のⅣｂ層上面において，石塔を取り外した後に検出された。平面は円形に近く，直径は 90 ㎝程度で，深さは残存度の良い北側で 80 ㎝ほどである。Ⅵ層付近まで掘削されており，埋土４はⅣ～Ⅵ層土が含まれていることから遺構掘削土の一部，埋土１はほぼ黒色土であり，Ⅱ・Ⅲ層土など上部の土と考えられる。この土坑は石塔のほぼ真下にあり，土坑の南側は低くなっているが，最初から低かったか，石塔建立時に削平されたかは不明であるが，削平されていた場合は石塔と建立時期が異なると推測される。遺物が出土しておらず，土坑墓であったかなど，用途は不明である。

土坑 12 号（第 85 図）

Ⅰ－６区のⅦ層上面において検出された。付近は削平が激しく，上部のほとんどを失っており，床面から 10 ㎝程度しか残存していない。平面はきれいな円形で，直径 70 ㎝程度である。埋土はしまりの弱い黒褐色土である。用途は不明である。



第 86 図　石塔と土坑 11 号

土坑 13 号（第 85 図）

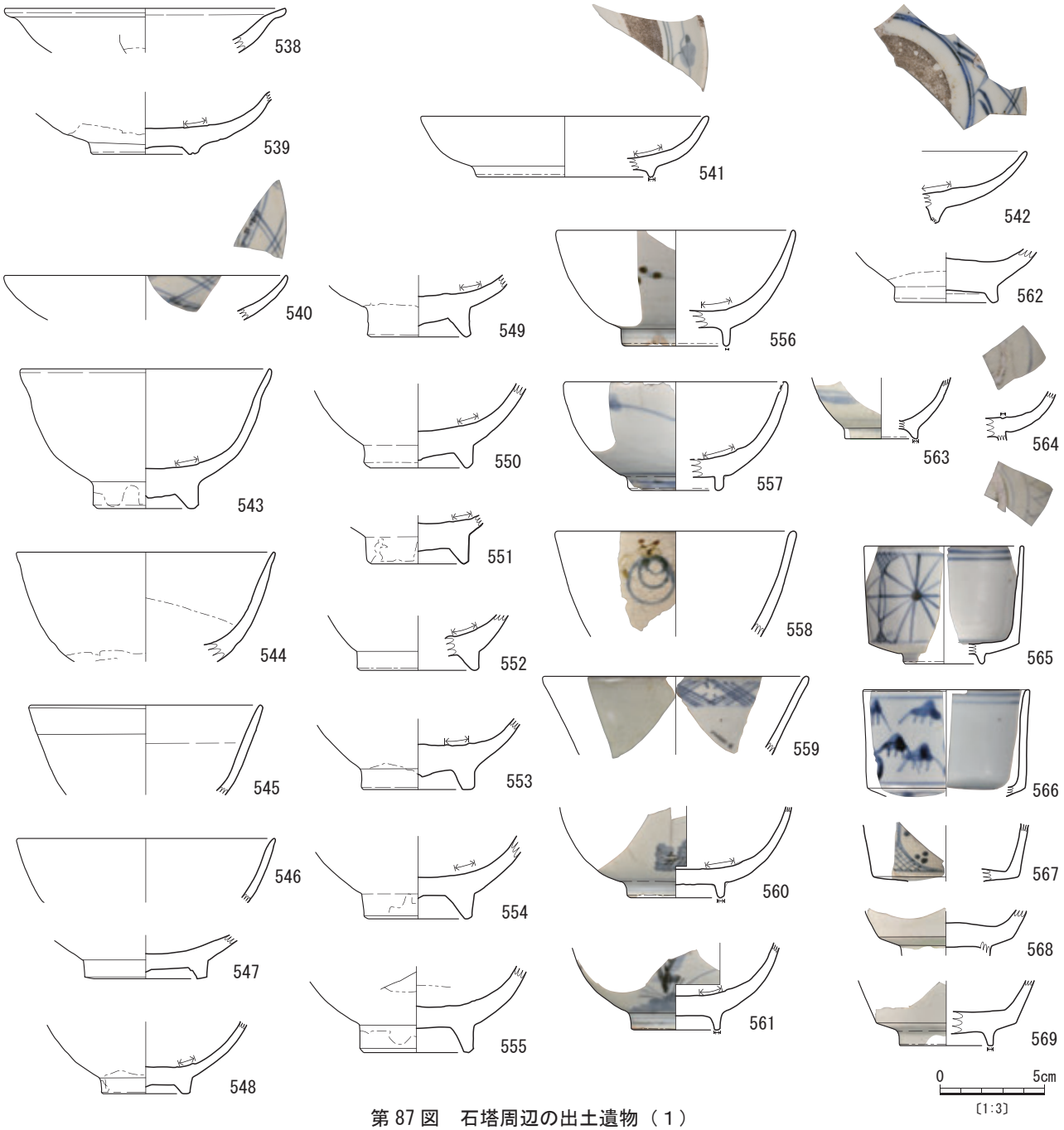
Ⅰ－６区のⅣｂ層上面において検出された。上位は削平を受けている。平面は円形に近く，直径は 80 × 70 ㎝程度で，南側に幅 20 ㎝程度の段が付く。深さは 50 ㎝程度で，段部分は約 40 ㎝である。埋土中にアカホヤ火山灰は少なく，遺構掘削土の多くは埋め戻しに使われなかったと推測される。埋土２中から鉄釘が出土していることから，土坑墓であった可能性がある。

537 は鉄製の角釘で，残存する長さは約５㎝，厚さ５㎜程度で，ほぼ真ん中で 90 度の角度で曲げられている。

（３）石塔・石碑（第 86 図）

Ⅰ－６区の地表面において，草に埋もれた状態で検出された。３段に積まれた石塔と板状の石碑が南西側を向いた状態で並んでいる。石塔・石碑の石材は凝灰岩で，どちらも文字や文様は刻まれていない。

石塔は棹石・中台・芝台の三段の加工石で構成される。１段目の芝台は，約 50 × 30 × 10 ㎝の長方体の石を２点南北に並べて造られており，上面は丁寧に研磨されている。南側の石がやや南に傾いているが，地震等による影響と考えられる。なお，検出時はこの台の上面近くまで埋められていた。２段目の中台は，約 40 × 40 × 10

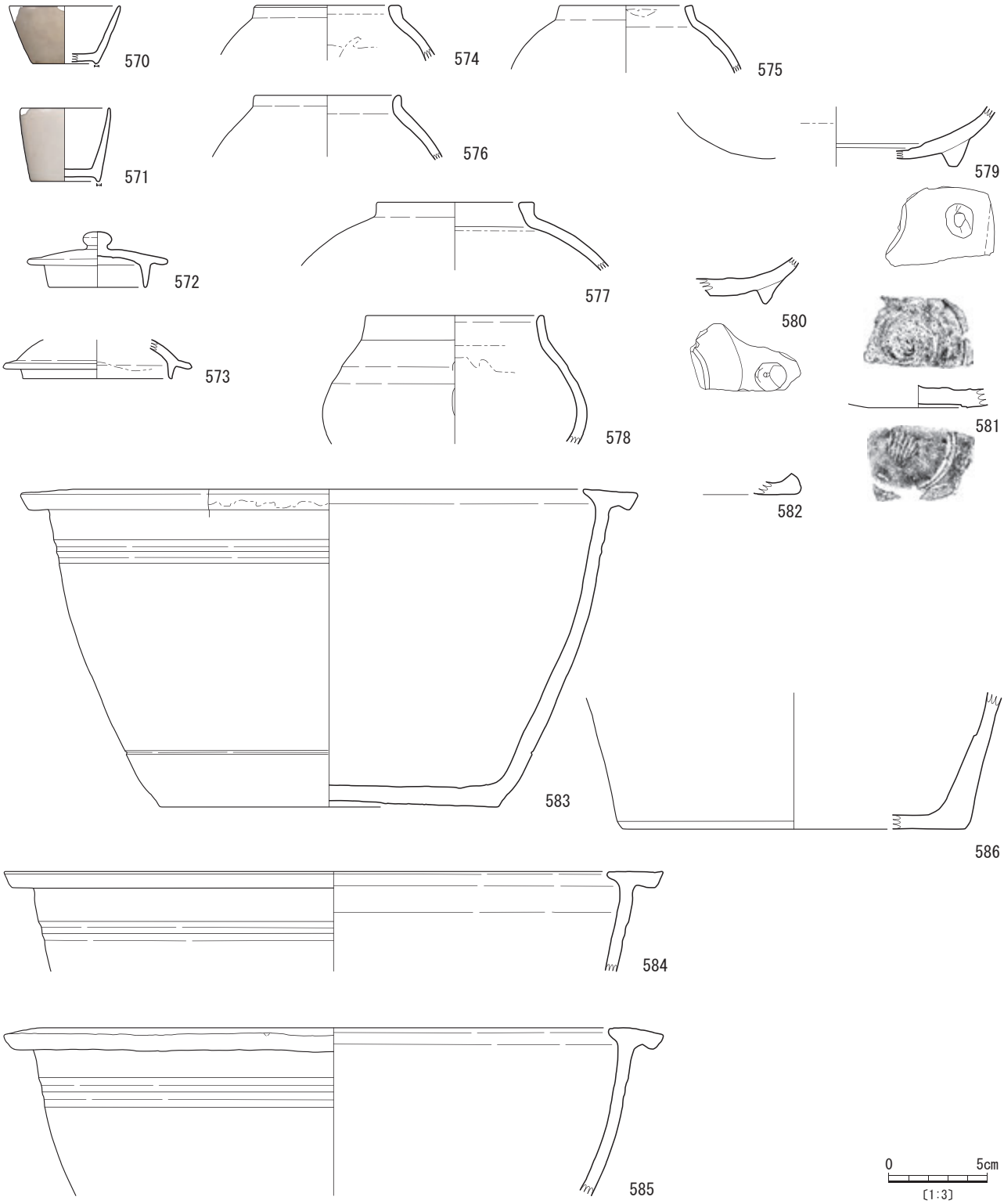


第 87 図　石塔周辺の出土遺物（１）

cmで，断面は台形に近く，側面はやや雑な仕上がりである。上面中央部には正方形のホゾ穴がある。棹石は約45 × 20 × 10 cmで，角は緩やかに加工されている。

石碑は，下から35 cm部分まで土に埋まった状態で検出された。板状大型石の正面部分を平坦に加工しているが，何も刻まれておらず，石塔や周辺土坑との関連は不明である。周囲には多くの人頭大の礫がみられ，五輪塔の一部や陶磁器等も含まれており，これら石塔・石碑や土坑に関連するものである可能性がある。

これらの石塔について，周辺の民家で聞き込みを行っ



第88図　石塔周辺の出土遺物（２）

たが，由来等は不明であった。地域の重要な供養碑であった可能性が高いため，道路建設予定地端に移設した。石塔や石碑の形態から，近世頃に建立されたと考えられる。

3　遺物（第 87 図～第 91 図）

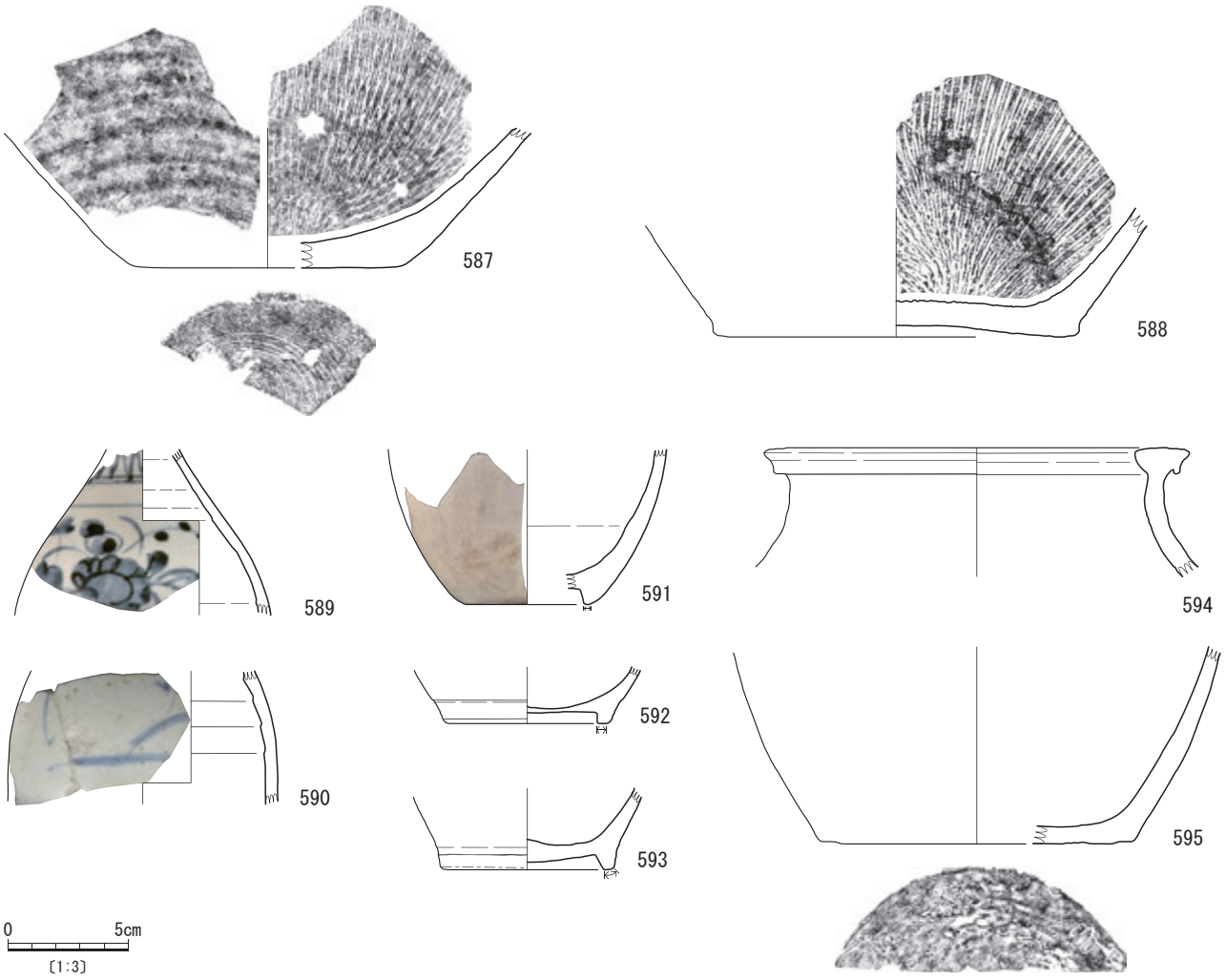
ほぼ石塔周辺で出土しており，器種別に分け 71 点を図化した。

皿・碗（第 87 図 538 ～ 569）

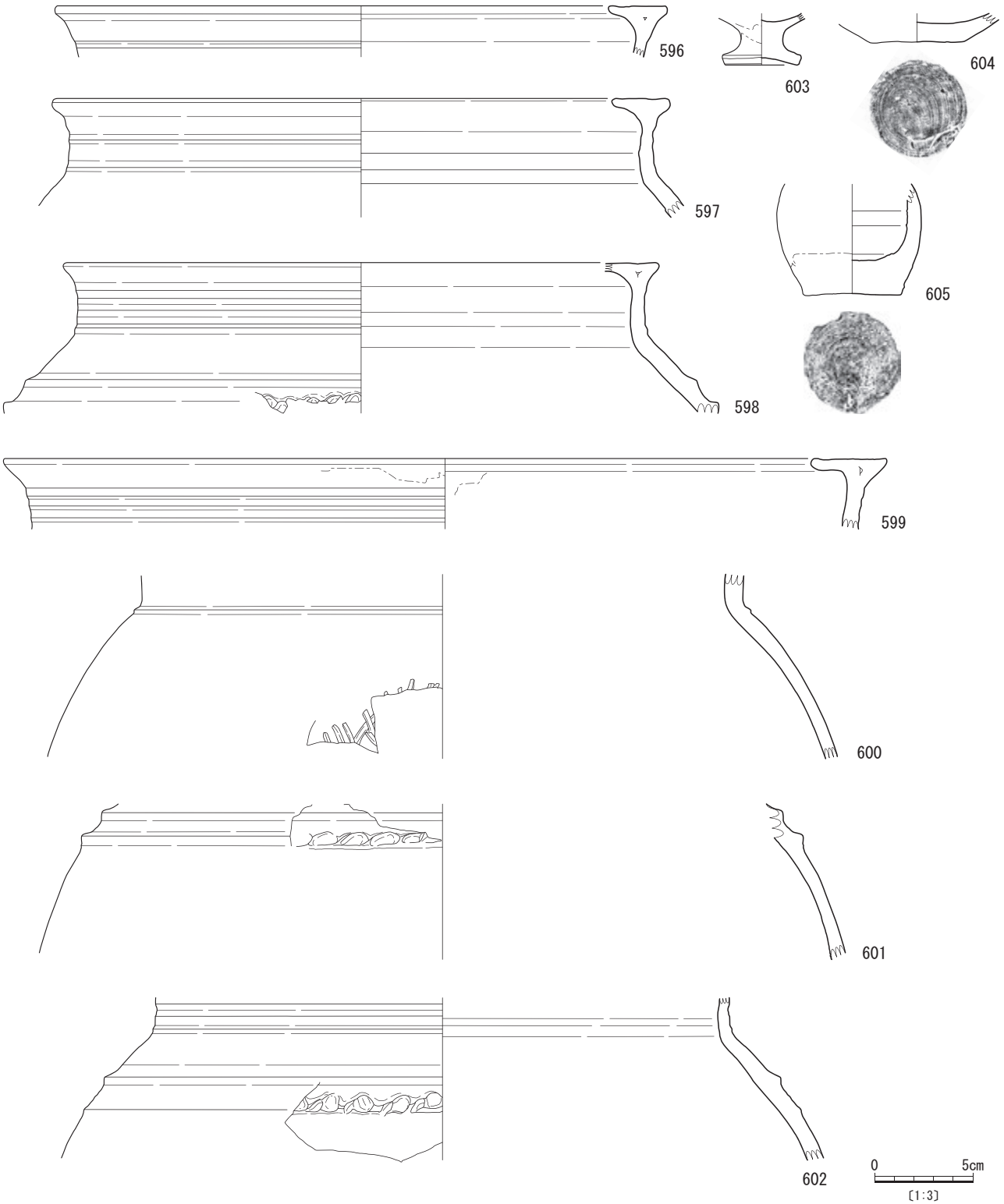
538 ～ 542 は皿である。538・539 は薩摩焼龍門司系の陶器で，白化粧土に透明釉がかかる。538 は口縁部で，端部がやや外反する。539 は，白化粧土が底部下位にかからず，見込みは蛇の目釉剥ぎされ，重ね焼きの際の高台痕が残る。540 ～ 542 は肥前系の磁器で，540 は口縁部で内面に四方襷文がみられる。541・542 は見込み部分を蛇の目釉剥ぎし，体部内面に 541 は山水文，542 は四方襷文が描かれる。

543 ～ 569 は埦である。543 ～ 555 は龍門司系の陶器である。543 は見込み部分に蛇の目釉剥ぎがなされ，畳付から高台内は露胎である。544 ～ 546 は口縁部～体部で，544 は内面上位と外面の口縁近くから下位まで白化粧土を塗り，施釉している。545 は暗赤灰色で他と比べ黒色が強く，回転ナデの跡が明瞭である。546 は口唇部内面が削られ，先端に向け細くなる。547 ～ 555 は体部～底部で，すべて高台付近は無釉で，見込み部分は蛇の目釉剥ぎがなされる。547 は高台削り出し部が高く残っており，段となっている。弱く，間に隙間がみられる。549・550・554 は褐釉のみ体部下位までかかる。

556 ～ 569 は肥前系磁器の碗である。556 ～ 564 は丸碗で，底部が残存するものはすべて見込みが蛇の目釉剥ぎである。556・557 は外面に草花文が，558 は宝珠が描かれる。559 は口縁まで直線状となり，口縁内面に四方襷文が描かれる。560 は体部外面の下位に圏線，中位に花の印文が 2 か所確認できる。561 は外面に草花文，高台内に圏線と「大明年製」の文字が描かれる。565 ～ 569 は筒型碗である。565 は外面に圏線 2 条と菊花文を，圏線と菊花文の隙間に斜格子文を描いている。566 は 2 条の圏線の間に雪持笹文が，567 は残存部位が小さく文



第 89 図　石塔周辺の出土遺物（３）



第 90 図　石塔周辺の出土遺物（４）

様は明確でないが,円の中に３つの黒点を数か所に描き,円と圏線の隙間に 565 と同様の斜格子文を描いている。568・569 は底部で，腰部から胴部に向けやや開き，文様はみられない。

小坏（第 88 図 570・571）

570・571 は肥前系磁器の小坏である。570 は口が開き，やや黄色を帯びた白色を呈す。571 は口縁まで垂直気味に立ち上がり，ほぼ白色である。猪口の用途が考えられる。

土瓶（第 88 図 572 ～ 581）

572 ～ 581 は薩摩焼苗代川産の土瓶である。572・573 は土瓶の蓋で,572 は上面に鉄釉,573 は透明釉がかかる。574 ～ 578 は口縁から胴部で，すべて外面に鉄釉がかかる。574・575・577 は口唇部から口縁内面まで，576・578 は口唇部の釉を掻き取っている。579 ～ 581 は底部で，内面には鉄釉がかかり，外面は無釉である。579・580 は三角錐状で底面が平坦な脚が１か所のみ残存する。579 は煤が底面のほぼ全面に付着する。581 は底面に弧状に段が付き，中央に貝目痕が残る。

蓋（第 88 図 582）

582 は蓋である。口縁部分のみ残存し，上面に鉄釉がかかる。

鉢（第 88 図 583 ～ 586）

583 ～ 586 は鉢で，586 以外は薩摩焼苗代川産である。583 は高さが 16.0 ㎝で，口唇部に貝目の跡が残る。584・585 は口唇部は雑な釉剥ぎがなされ，口縁部下の外面に２重の沈線が巡る。586 は底部で，産地は不明である。底面にも釉がかかり，内面の調整は良い。

擂鉢（第 89 図 587・588）

587・588 は擂鉢である。587 は無釉で赤褐色を呈し，糸切り底で，肥前系陶器の可能性がある。588 は苗代川産で，底部内面際に釉が付着している。

瓶（第 89 図 589 ～ 595）

589 ～ 593 は磁器の瓶で，589・590 は肥前系で，外面に草花文が描かれる。591 ～ 593 は底部で，591 は外面が灰白色，内面が茶色で回転ナデ跡が明瞭である。592 は外面に透明釉がかかり，丁寧なつくりである。593 は薄く青みがかった白色を呈し，底部付近の外面に１条の薄青色の圏線が巡る。594・595 は苗代川産の壺である。594 は口縁部で，口唇部は平坦であり，口縁部は内外に突出し，外面は凹線風にくぼんでいる。595 は底部で，内外面に鉄釉がかかり，底面に貝目痕が残る。

甕（第 90 図 596 ～ 602）

596 ～ 602 は苗代川産の甕である。596 ～ 599 は口縁部で，口縁端部を外側に折り曲げて，断面三角形に作るもので，折り曲げた際に小さい隙間ができているものが多く，いずれも頸部付近に１～２条の凹線が巡る。599 は内面へ向け口縁の突出が強く，口唇部に釉がほぼ全面に残っている。600 は胴部に幅２～３㎜程度の工具で縦や斜方向に釉を掻き落とし，何らかの文様を描いているが，一部のみしか残存しないため詳細は不明である。598・601・602 は肩部に１条の突帯と，その下に縄状突帯が巡る。

仏具等（第 90 図 603 ～ 605）

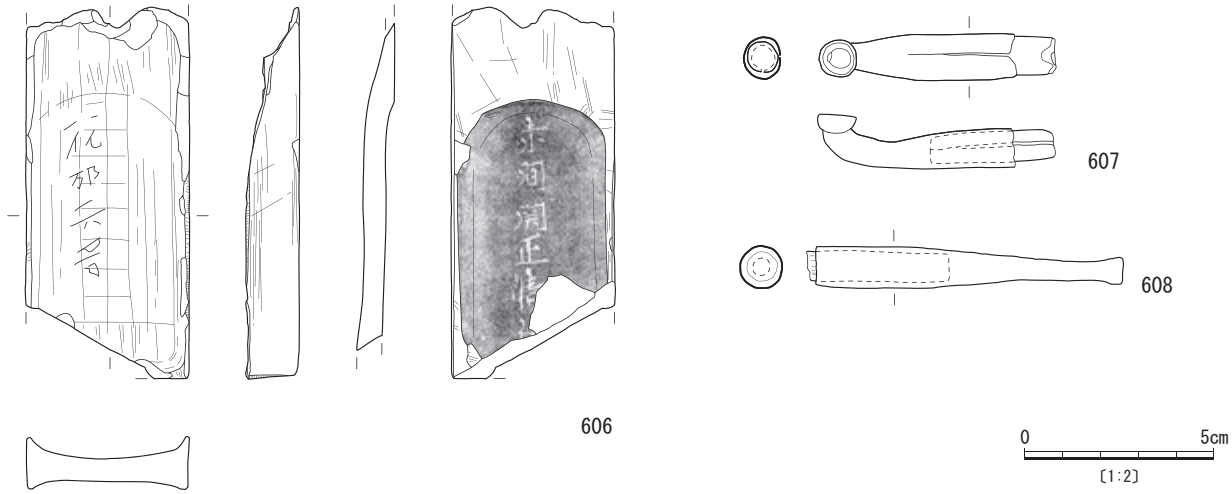
603 ～ 605 は龍門司系の陶器である。603 は高坏の形をした小型の陶器で,仏飯器としての使用が考えられる。604 は灯明皿で，見込みにゴマ目が残り，外面は無釉である。605 は底部糸切りの仏花瓶で，外面に黒釉がかかる。

石硯（第 91 図 606）

606 は石硯で，底面に「赤間関正清作」の文字が明瞭に刻まれており，山口県下関市の赤間産と考えられる。また，陸部には使用時に刻んだ梯子状及び４文字の判読不明の文字が残る。

煙管（第 91 図 607・608）

607・608 は煙管（キセル）で，607 の雁首（頭部），608 の吸口（尾部）と共に，木製の羅宇片がそれぞれに残り，中央部は欠損している。青銅製で，首部と火皿の間に補強帯は無く，首部の弯曲が弱く直線的であることから，比較的新しい 18 世紀後半頃に製作されたものとみられる。



第 91 図　石塔周辺の出土遺物（５）

第 17 表　近世石塔周辺出土陶磁器観察表

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	種別	産地	器種	部位	口径 底径 器高 (cm)	文様	施釉範囲	釉の色調	胎土の色調	焼成	備考
84	534	SD6	①	2	白磁	中国	皿	底部	(7.0) (底)		畳付無釉	灰白	灰白	良好	森田 E 群
	535	SD6	①	6	陶器	肥前系か	埦	底部	(5.2) (底)		胴下～高台無釉	灰ｵﾘｰﾌﾞ～灰白	灰褐	良好	唐津
87	538	石塔周辺	－	－	陶器	龍門司	皿	口縁部	(13.4) (口)		内外面	白化粧土・透明	にぶい褐	良好	
	539	石塔周辺	－	－	陶器	龍門司	皿	体部	5.2 (底)		見込み蛇ノ目釉剥ぎ 高台内無釉	白化粧土・透明	にぶい橙	良好	18c 後半
	540	－	I	－	磁器	肥前系	皿	口縁部	(13.6) (口)	四方襷文	内外面	透明	灰白	良好	
	541	石塔周辺	－	－	磁器	肥前系	皿	口縁～ 底部	(13.8) － 2.9	山水文	見込み蛇ノ目釉剥ぎ 畳付無釉	透明	灰白	良好	
	542	石塔周辺	－	－	磁器	肥前系	皿	口縁～ 底部	－	四方襷文	見込み蛇ノ目釉剥ぎ	透明	灰白	良好	
	543	石塔周辺	－	－	陶器	龍門司	埦	口縁～ 底部	(12.0) 5.0 6.7		見込み蛇ノ目釉剥ぎ 高台内無釉	極暗赤褐	橙	良好	18c 後半
	544	石塔周辺	－	－	陶器	龍門司	埦	口縁～ 体部	(12.4) (口)		見込み釉剥ぎ	白化粧土・褐釉	にぶい赤褐	良好	18c 後半
	545	－	I	－	陶器	龍門司	埦	口縁～ 体部	(11.2) (口)		内外面	暗赤灰	灰褐	良好	
	546	－	I	－	陶器	龍門司	埦	口縁～ 体部	(12.4) (口)		内外面	褐	にぶい赤褐	良好	
	547	石塔周辺	－	－	陶器	龍門司	埦	口縁～ 底部	5.8 (底)		残存部無釉	－	にぶい赤褐	良好	18c 後半
	548	石塔周辺	－	－	陶器	龍門司	埦	口縁～ 底部	4.3 (底)		見込み蛇ノ目釉剥ぎ 高台内無釉	暗赤褐	にぶい橙	良好	18c 後半
	549	石塔周辺	－	－	陶器	龍門司	埦	口縁～ 底部	(5.0) (底)		見込み蛇ノ目釉剥ぎ 高台無釉	黒褐	にぶい褐	良好	18c 後半
	550	石塔周辺	－	－	陶器	龍門司	埦	口縁～ 底部	4.6 (底)		見込み蛇ノ目釉剥ぎ 高台内無釉	黒褐	にぶい橙	良好	
	551	石塔周辺	－	－	陶器	龍門司	埦	口縁～ 底部	4.8 (底)		見込み蛇ノ目釉剥ぎ 高台内無釉	暗褐	にぶい赤褐	良好	
	552	E5	撹乱	－	陶器	龍門司	埦	口縁～ 底部	(5.7) (底)		見込み蛇ノ目釉剥ぎ 畳付無釉	暗オリーブ褐	黄灰	良好	
	553	石塔周辺	－	－	陶器	龍門司	埦	口縁～ 底部	5.4 (底)		見込み蛇ノ目釉剥ぎ 高台内外無釉	褐	灰褐	良好	
	554	石塔周辺	－	－	陶器	龍門司	埦	口縁～ 底部	5.2 (底)		見込み蛇ノ目釉剥ぎ 高台内無釉	暗赤灰	にぶい橙	良好	
	555	石塔周辺	－	－	陶器	龍門司	埦	口縁～ 底部	5.4 (底)		見込み蛇ノ目釉剥ぎ 高台内外無釉	白化粧土・褐釉 極暗褐～褐	にぶい褐	良好	
	556	E4・E5	撹乱	－	磁器	肥前系	丸碗	口縁～ 底部	－ 4.8 5.5	草花文	見込み蛇ノ目釉剥ぎ 畳付無釉	透明	灰白	良好	
	557	石塔周辺	－	－	磁器	肥前系	丸碗	口縁～ 底部	－ (4.6) 5.2	草花文	見込み蛇ノ目釉剥ぎ 畳付無釉	透明	灰白	良好	
	558	石塔周辺	－	－	磁器	肥前系	丸碗	口縁部	(11.4) (口)	宝珠	内外面	透明	黄味がかった灰白	良好	貫入，18c 後半
	559	E5	撹乱	－	磁器	肥前系	丸碗	口縁部	(12.6) (口)	四方襷文	内外面	外面青磁 (明緑灰)	灰白	良好	
	560	石塔周辺	－	－	磁器	肥前系	丸碗	胴部～ 底部	4.6 (底)	圏線・花の印文	見込み蛇ノ目釉剥ぎ	透明	灰白	良好	波佐見か
	561	F13	撹乱	－	磁器	肥前系	丸碗	胴部～ 底部	4.2 (底)	草花文・高台内「大明年製」	見込み蛇ノ目釉剥ぎ	透明	灰白	良好	18c 後半
	562	E5	撹乱	－	白磁	肥前系	丸碗	底部	(5.0) (底)		胴下～高台無釉	緑灰	灰白	良好	見込みに砂目跡 内野山か
	563	－	I	－	磁器	肥前系	丸碗	底部	(3.4) (底)		畳付無釉	透明	灰白	良好	
	564	石塔周辺	－	－	陶器	肥前系	丸碗	底部	－		見込み釉剥ぎ	透明	灰白	良好	
	565	石塔周辺	－	－	磁器	肥前系	筒型碗	口縁～ 底部	(7.6) (3.8) 5.6	圏線・菊花紋	畳付無釉	透明	灰白	良好	
	566	石塔周辺	－	－	磁器	肥前系	筒型碗	口縁部	(7.8) (口)	圏線・雪持笹文	内外面	透明	灰白	良好	
	567	石塔周辺	－	－	磁器	肥前系	筒型碗	胴～腰部	－		内外面	青灰	灰白	良好	貫入
	568	石塔周辺	I	－	磁器	肥前系	筒型碗	底部	－		内外面	灰白	灰白	良好	
	569	G6	撹乱	－	磁器	－	筒型碗	底部	(4.4) (底)		畳付無釉	白磁釉	灰白	良好	
88	570	石塔周辺	－	－	磁器	肥前系	坏	口縁～ 底部	(5.6) 3.4 2.9		内外面	灰白	灰白	良好	
	571	石塔周辺	－	－	磁器	肥前系	坏	口縁～ 底部	4.6 3.4 3.7		畳付無釉	灰白	灰白	良好	19c
	572	－	I	－	陶器	苗代川	土瓶の蓋	完形	7.2 (口) 2.8		外面受け部～ 内面無釉	オリーブ黒	暗灰黄	良好	
	573	石塔周辺	－	－	陶器	苗代川	土瓶の蓋	受け部	(9.6) (口)		内面無釉	白化粧土に透明釉 灰	灰	良好	
	574	－	I	－	陶器	苗代川	土瓶	口縁部	(7.2) (口)		口唇～内面口縁無釉 内面胴下部無釉	暗赤灰	にぶい赤褐	良好	

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	種別	産地	器種	部位	口径 底径 器高 (cm)	文様	施釉範囲	釉の色調	胎土の色調	焼成	備考
88	575	－	I	－	陶器	苗代川	土瓶	口縁部	(6.8) (口)		内面口縁無釉	黒褐	にぶい赤褐	良好	
	576	E4	撹乱	－	陶器	苗代川	土瓶	口縁部	(7.4) (口)		口唇無釉	暗褐	明赤褐	良好	
	577	J13	撹乱	－	陶器	苗代川	土瓶	口縁部	(8.0) (口)		口唇～内面頸部まで釉剥ぎ	オリーブ黒	にぶい赤褐	良好	そろばん玉型
	578	石塔周辺	－	－	陶器	苗代川	土瓶	口縁部	(9.0) (口)		内面頸部無釉	黒褐	にぶい赤褐	良好	
	579	石塔周辺	－	－	陶器	苗代川	土瓶	胴～底部	－		底部無釉	灰オリーブ	にぶい赤褐	良好	18c 後半　底部ス ス
	580	石塔周辺	－	－	陶器	苗代川	土瓶	底部	－		外面無釉	暗灰黄	橙	良好	
	581	－	I	－	陶器	苗代川	土瓶	底部	5.0 (底)		底部無釉	暗灰黄	明赤褐	良好	底部に貝目
	582	－	I	－	陶器	苗代川	土瓶の蓋	口縁部	－		内面釉剥ぎ	オリーブ黒	にぶい赤褐	良好	
	583	石塔周辺	－	－	陶器	苗代川	鉢	口縁～底部	(31.3) (17.2) 16.0		口唇部釉剥ぎ	オリーブ黒	にぶい赤褐	良好	18c 後半 貝目痕
	584	石塔周辺	－	－	陶器	苗代川	鉢	口縁部	(33.4) (底)		口唇部釉剥ぎ	オリーブ黒	にぶい赤褐	良好	
	585	石塔周辺	－	－	陶器	苗代川	鉢	口縁部	(33.4) (口)		口唇部釉剥ぎ	灰オリーブ	にぶい赤褐	良好	
	586	石塔周辺	－	－	陶器	－	甕か鉢	底部	(17.4) (底)		底面にも釉	灰	にぶい赤褐	普通	
89	587	石塔周辺	－	－	陶器	－	擂鉢	胴～底部	(11.4) (底)		－	－	にぶい赤褐	普通	底部糸切り離し
	588	石塔周辺	撹乱	－	陶器	苗代川	擂鉢	胴～底部	(14.8) (底)		底部無釉	オリーブ黒	暗赤褐	良好	19c 以降
	589	石塔周辺	－	－	磁器	肥前系	瓶	頸～胴部	－		内面一部無釉	透明	灰白	良好	
	590	石塔周辺	撹乱	－	磁器	肥前系	瓶	胴部	－		内面無釉	透明	灰白	良好	
	591	石塔周辺	－	－	磁器	肥前系	瓶	底部	(5.4) (底)		内面・畳付無釉	灰白	灰白・にぶい橙	良好	波佐見か
	592	H13	I	－	磁器	－	瓶	底部	7.0 (底)		内面無釉	灰白	灰	良好	
	593	E4・5	I・ 撹乱	－	磁器	肥前系	瓶	底部	(7.2) (底)	圏線あり	畳付釉剥，内面無釉	灰白	灰白	普通	
	594	石塔周辺	－	－	陶器	苗代川	壺	口縁部	(17.6) (口)		口唇部釉剥ぎ	黒褐	灰褐	良好	
	595	石塔周辺	－	－	陶器	苗代川	壺	胴～底部	(13.0) (底)		内外面	オリーブ黒	にぶい赤褐	良好	貝目痕 18c
90	596	石塔周辺	－	－	陶器	苗代川	甕	口縁部	(31.0) (口)		内外面	オリーブ黒	にぶい赤褐	良好	18 ～ 19c
	597	石塔周辺	－	－	陶器	苗代川	甕	口縁部	(31.0) (口)		口唇部釉剥ぎ	オリーブ黒	にぶい赤褐	良好	
	598	石塔周辺	－	－	陶器	苗代川	甕	口縁部	(30.2) (口)	縄状突帯	口唇部釉剥ぎ	オリーブ黒	にぶい赤褐	良好	
	599	石塔周辺	－	－	陶器	苗代川	甕	口縁部	(44.8) (口)		口縁内外一部無釉	オリーブ黒	赤灰	良好	18 ～ 19c
	600	石塔周辺	－	－	陶器	苗代川	甕	頸～胴部	－	掻き落とし文	内外面	オリーブ黒	にぶい黄褐	良好	18c 後半
	601	石塔周辺	－	－	陶器	苗代川	甕	胴部	－	縄状突帯	内外面	オリーブ黒	にぶい赤褐	良好	
	602	石塔周辺	－	－	陶器	苗代川	甕	胴部	－	縄状突帯	内外面	オリーブ黒	にぶい赤褐	良好	
	603	E4	撹乱	－	陶器	龍門司	仏飯器	底部	3.8 (底)		底部無釉	白化粧土・褐釉 暗オリーブ褐	灰	良好	
	604	E5	撹乱	－	陶器	龍門司	灯明皿	底部	4.8 (底)		外面無釉	褐	灰白	良好	底部糸切り離し 見込みにゴマ目痕５か所有り
	605	石塔周辺	－	－	陶器	元竜院	仏花瓶	底部	5.0 (底)		外面胴下部・内面無釉	黒褐	にぶい赤褐	良好	底部糸切り離し

第 18 表　近世石塔周辺出土石製品観察表

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
91	606	E4	撹乱	－	硯	(9.80)	4.30	1.40	(69.2)	頁岩	

第 19 表　近世石塔周辺出土金属製品観察表

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	器種	部位	大きさ	重量（g）	備考
84	536	SD6	－	16	角釘	頭部	残存長 4.5 ㎝　厚さ推定 6 ㎜	11.8	
85	537	SK13	－	1	角釘	最先端	残存長約 2 ㎝ 釘同士が付着している。 木質が残存。	2.3	2 点の釘が付着　木質が残存
91	607･608	－	I	－	煙管	完形	火皿（口径）1 ㎝　高さ 0.5 ㎝ 雁首 5.1 ㎝　最大厚 1.2 ㎝ 吸口 8.1 ㎝　最大厚 1.15 ㎝	（607）7.8 （608）11.8	18C 後半頃と推定（古泉氏の分類）

第７節　時期不明の遺構

杭列（第 92 図）

Ｆ－５・６区のⅣｂ層上面で検出された。この付近は比較的ピットが多くみられ，そのうち並んだものを杭列とした。南側の杭列１号・２号とも東西に並び，すぐ西側の溝状遺構１・２号と直交する。ピット間の間隔はほぼ 1.8 ｍ程度で一定であるが，２号の西側２基のピット間のみ１ｍ程度と短い。大きさは，平面で１号が約 20 ～ 30 ㎝，２号が約 25 ～ 35 ㎝，深さは１号が約 20 ～ 45 ㎝，２号が約 30 ～ 55 ㎝であり，２号の方が大きく深いが，これは１号上面がより削平を受けているためであると考えられる。ピットの底面はほぼ標高 56.3 ｍ付近で一定である。埋土はアカホヤ火山灰を含んだ黒色土で，１号より２号の方がより多く含んでいる。埋土中に遺物や炭化物は含まれておらず，時期は不明である。



第 92 図　杭列１号・２号

第５章　自然科学分析

集石遺構内から出土した炭化物について，平成 30 年度にパリノ・サーヴェイ株式会社，令和元年度に株式会社パレオ・ラボに放射性炭素年代測定の委託を行った。以下にその分析結果を掲載する。なお，報告書刊行における集石号名の変更に伴い，分析時の号名も報告書と同様に変更し，順序も号数どおりに変更している。

第１節　出土試料の自然科学分析（年代測定）

パリノ・サーヴェイ株式会社

１．試料

試料は，集石７号，集石 10 号，集石 16 号，集石 17 号，集石 19 号から出土した炭化物５点である。

２．分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合，これらをピンセット，超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HC l により炭酸塩等酸可溶成分を除去，NaOH により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去，HC l によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ，１ｇの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて，管内を真空にして封じきり，500℃（30 分）850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し，真空ラインにて CO2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し，グラファイトを生成する。

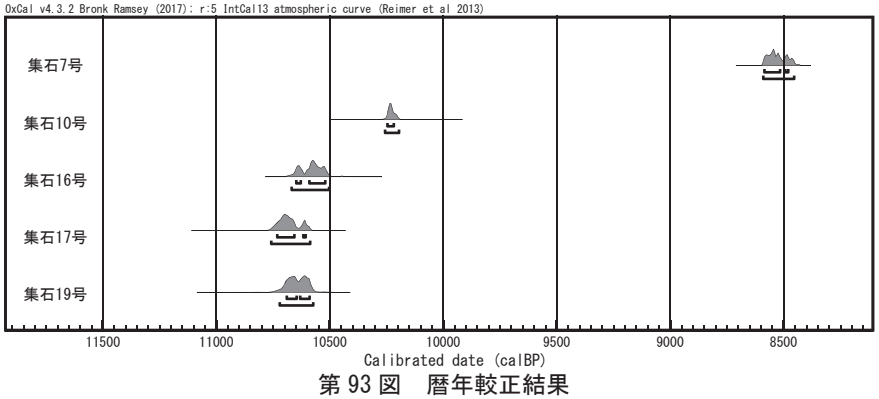
化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１㎜の孔にプレスして，タンデム加速器のイオン源に装着し，測定する。測定機器は，3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC　Pelletron　9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に，標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また，測定中同時に 13C/12C の測定も行うため，この値を用いてδ 13C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また，測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり，誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は，国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach 1977）。また，暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは，Oxcal4.3（Bronk,2009）を用いる。較正曲線は Intcal13（Reimer et al.,2013）を用いる。

第 20 表　放射性炭素年代測定結果

試料名	性状（種類）	分析方法	測定年代 yrBP	δ 13 C（‰）	暦年較正用	暦年較正年代 年代値	確率	Code No.	
集石７号	炭化材（コナラ亜属コナラ節）	AAA	7750 ± 25	-27.09 ± 0.46	7751 ± 27	σ cal BC 6636 － cal BC 6567	8585 － 8516 calBP	0.490	pal-11601 / YU-8753
						cal BC 6544 － cal BC 6531	8493 － 8480 calBP	0.192	
						2σ cal BC 6641 － cal BC 6505	8590 － 8454 calBP	0.954	
集石 10 号	炭化材	AAA	9075 ± 30	-29.50 ± 0.65	9075 ± 31	σ cal BC 8297 － cal BC 8269	10246 － 10218 calBP	0.121	pal-11602 / YU-8754
						2σ cal BC 8308 － cal BC 8246	10257 － 10195 calBP	0.251	
集石 16 号	炭化材（コナラ亜属コナラ節）	AAA	9355 ± 30	-27.67 ± 0.59	9357 ± 29	σ cal BC 8699 － cal BC 8679	10648 － 10628 calBP	0.490	pal-11604 / YU-8756
						cal BC 8641 － cal BC 8571	10590 － 10520 calBP	0.192	
						2σ cal BC 8719 － cal BC 8554	10668 － 10503 calBP	0.954	
集石 17 号	炭化材（コナラ亜属コナラ節）	AAA	9450 ± 30	-26.64 ± 0.53	9452 ± 30	σ cal BC 8783 － cal BC 8707	10732 － 10656 calBP	0.490	pal-11605 / YU-8757
						cal BC 8668 － cal BC 8658	10617 － 10607 calBP	0.192	
						2σ cal BC 8809 － cal BC 8638	10758 － 10587 calBP	0.954	
集石 19 号	炭化材（カヤ）	AAA	9415 ± 30	-23.52 ± 0.61	9416 ± 29	σ cal BC 8741 － cal BC 8697	10690 － 10646 calBP	0.490	pal-11603 / YU-8755
						cal BC 8682 － cal BC 8640	10631 － 10589 calBP	0.192	
						2σ cal BC 8772 － cal BC 8624	10721 － 10573 calBP	0.954	

1）年代値の算出には，Libby の半減期 5,568 年を使用。2）yrBP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。3）付記した誤差は，測定誤差σ（測定値の 68% が入る範囲）を年代値に換算した値。4）AAA は酸－アルカリ－酸処理を示す。5）暦年の計算には，Oxcal4.3 を使用。6）暦年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。7）１桁目を丸めるのが慣例だが，暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように，１桁目を丸めていない。8）統計的に真の値が入る確率はσは 68%，２σは 95% である。



第 93 図　暦年較正結果

３．結果

結果を第 20 表と第 93 図に示す。測定年代は集石７号が 7750 ± 25yrBP，集石 10 号が 9075 ± 30yrBP，集石 16 号が 9355 ± 30yrBP，集石 17 号が 9450 ± 30yrBP，集石 19 号が 9415 ± 30yrBP であった。

第 20 表には較正した暦年代も併記する。暦年較正は，大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動，その後訂正された半減期（14C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することによって，暦年代に近づける手法である。測定誤差２σの暦年代は，集石７号が 8590 ～ 8454 calBP，集石 10 号が 10257 ～ 10195 calBP，集石 16 号が 10668 ～ 10503 calBP，集石 17 号が 10758 ～ 10587 calBP，集石 19 号が 10721 ～ 10573 calBP である。集石 16 号，集石 17 号，集石 19 号の年代値の範囲は重なる。集石７号，集石 10 号はそれ以降の値を示している。

材同定の結果は集石７号がコナラ亜属コナラ節，集石 16 号がコナラ亜属コナラ節，集石 17 号がコナラ亜属コナラ節，集石 19 号がカヤであった。

調査所見によると，縄文時代早期の遺構が検出されているとされ，今回の年代測定結果はすべて縄文時代早期の年代の範囲内に入り，調和する結果である。

引用文献

Bronk Ramsey, C., & Lee, S. ,2013, Recent and Planned Developments of the Program OxCal. Radiocarbon, 55, 720-730.

Reimer PJ, Bard E, Bayliss A, Beck JW, Blackwell PG, Bronk Ramsey C, Buck CE, Cheng H, Edwards RL, Friedrich M, Grootes PM, Guilderson TP, Haflidason H, Hajdas I, Hatte C, Heaton TJ, Hoffmann DL, Hogg AG, Hughen KA, Kaiser KF, Kromer B, Manning SW, Niu M, Reimer RW, Richards DA, Scott EM, Southon JR, Staff RA, Turney CSM, van der Plicht J. ,2013,IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon ,55,

Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

第２節　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤　茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹
Zaur Lomtatidze・小林克也

１．はじめに

鹿児島県志布志市の宇都上遺跡から出土した試料について，加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

２．試料と方法

試料は，集石遺構である集石１号，集石３号，集石５号，集石７号，集石８号，集石 29 号から出土した炭化材各１点の，計６点（試料 No.１～６：PLD-38829 ～ 38834）である。いずれの試料も，最終形成年輪は残っていなかった。

測定試料の情報，調製データは第 21 表のとおりである。

試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた 14C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後，14C 年代，暦年代を算出した。

３．結果

第 22 表に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ 13C），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲，慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した 14C 年代，第 94 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。14C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。14C 年代（yrBP）の算出には，14C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また，付記した 14C 年代誤差（± １ σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の 14C 年代がその 14C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示す。

なお，暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは，大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された 14C 年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動，および半減期の違い（14C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して，より実際の年代値に近いものを算出することである。14C 年代の暦年較正には OxCal4.3（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお，１σ暦年代範囲は，OxCal の確率法を使用して算出された 14C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり，同様に２σ暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は 14C 年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。

４．考察

以下，14C 年代および２σ暦年代範囲（確率 95.4％）に着目して結果を整理する。なお，暦年代と縄文土器との対応については，小林（2017），工藤（2012），新東（2008）を参照した。

集石１号の試料 No.３（PLD-38831）は，14C 年代が 9345 ± 35 14C BP で，２σ暦年代範囲は 8720-8540 cal BC（92.2%）および 8509-8487 cal BC（3.2%）の暦年代

を示した。これは，縄文時代早期前葉に相当する。集石3号の試料No.5（PLD-38833）は，14C年代が9275±35 14C BPで，2σ暦年代範囲は8622-8422 cal BC（87.7%），8407-8389 cal BC（2.3%），8381-8349 cal BC（5.4%）の暦年代を示した。これは，縄文時代早期前葉に相当する。集石5号の試料No.4（PLD-38832）は，14C年代が9515±35 14C BPで，2σ暦年代範囲は9125-8998 cal BC（40.1%）および8924-8737 cal BC（55.3%）の暦年代を示した。これは，縄文時代早期前葉に相当する。集石7号の試料No.1（PLD-38829）は，14C年代が9375±35 14C BPで，2σ暦年代範囲は8746-8561 cal BC（95.4%）の暦年代を示した。これは，縄文時代早期前葉に相当する。集石8号の試料No.2（PLD-38830）は，14C年代が9445±40 14C BPで，2σ暦年代範囲は8833-8621 cal BC（95.4%）の暦年代を示した。これは，縄文時代早期前葉に相当する。集石29号の試料No.6（PLD-38834）は，14C年代が8505±30 14C BPで，2σ暦年代範囲は7589-7526 cal BC（95.4%）の暦年代を示した。これは，縄文時代早期中葉に相当する。

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

小林謙一（2017）縄文時代の実年代―土器型式編年と炭素14年代―. 263p, 同成社.

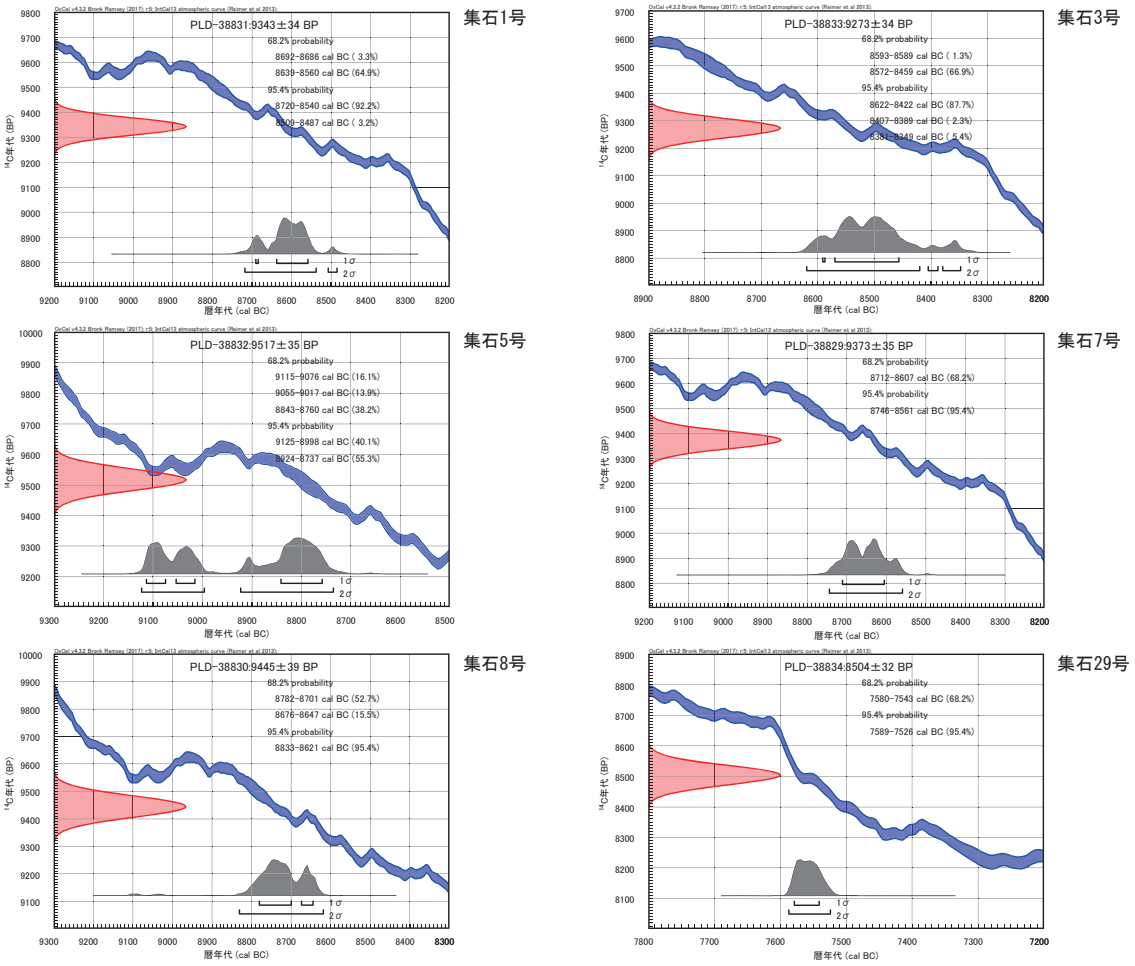
工藤雄一郎（2012）旧石器・縄文時代の環境文化史―高精度放射性炭素年代測定と考古学―. 373p, 神泉社.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J.,

第21表　測定試料および処理（全試料同じ）

試料データ	前処理
種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）



第94図　暦年較正結果

Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

新東晃一(2008) 早期南九州貝殻文系土器. 小林達雄編「総覧縄文土器」:186-193, アム・プロモーション.

第 22 表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C(‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-38831 集石 1 号	-28.80 ± 0.15	9343 ± 34	9345 ± 35	8692-8686 cal BC (3.3%) 8639-8560 cal BC (64.9%)	8720-8540 cal BC (92.2%) 8509-8487 cal BC (3.2%)
PLD-38833 集石 3 号	-26.08 ± 0.14	9273 ± 34	9275 ± 35	8593-8589 cal BC (1.3%) 8572-8459 cal BC (66.9%)	8622-8422 cal BC (87.7%) 8407-8389 cal BC (2.3%) 8381-8349 cal BC (5.4%)
PLD-38832 集石 5 号	-25.96 ± 0.20	9517 ± 35	9515 ± 35	9115-9076 cal BC (16.1%) 9055-9017 cal BC (13.9%) 8843-8760 cal BC (38.2%)	9125-8998 cal BC (40.1%) 8924-8737 cal BC (55.3%)
PLD-38829 集石 7 号	-28.60 ± 0.18	9373 ± 35	9375 ± 35	8712-8607 cal BC (68.2%)	8746-8561 cal BC (95.4%)
PLD-38830 集石 8 号	-30.76 ± 0.22	9445 ± 39	9445 ± 40	8782-8701 cal BC (52.7%) 8676-8647 cal BC (15.5%)	8833-8621 cal BC (95.4%)
PLD-38834 集石 29 号	-26.11 ± 0.14	8504 ± 32	8505 ± 30	7580-7543 cal BC (68.2%)	7589-7526 cal BC (95.4%)

第３節　宇都上遺跡出土遺物の化学分析

鹿児島県立埋蔵文化財センター

本遺跡出土の土器について，双眼実体顕微鏡による形状観察及びエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置による成分分析を行った。

１　試料

表面に塗布または付着している赤色粒子　土器２点

２　観察・分析方法

（１）　形状観察

以下の機器を使用して，形状を観察し撮影を行った。

双眼実体顕微鏡（ニコン製 SMZ1000）での８～80 倍観察

（２）　成分分析

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（堀場製作所製 XGT-1000，Ｘ線管球ターゲット：ロジウム，Ｘ線照射径 100 μm）を使用し，次の条件により分析を行った。

Ｘ線管電圧：15/50kV　電流：自動設定

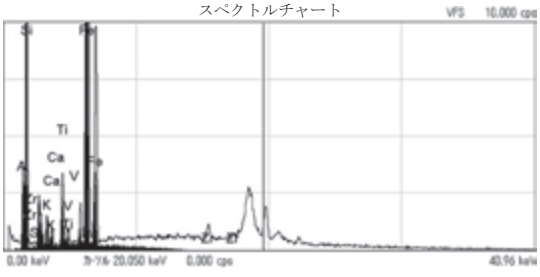
測定時間：200 秒　Ｘ線フィルタ：なし

試料セル：なし　パルス処理時間：P3

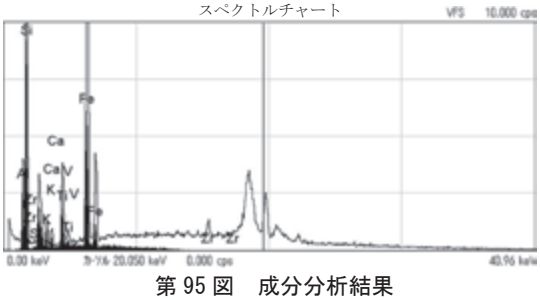
定量補正法：スタンダードレス

赤色粒子の付着している部分と付着していない部分の分析を行い，比較した。

(1) 試料 No.305（赤色粒子の付着有り部分）



(2) 試料 No.305（赤色粒子の付着無し部分）



第 95 図　成分分析結果

３　結果

試料の蛍光Ｘ線分析スペクトルチャート（成分分析）と FPM 定量結果の１例である。

４　考察

蛍光Ｘ線分析の結果から赤色粒子を分析すると，鉄の成分であり，場所によって差が生じた。赤色粒子の付着の有無によるものであり，付着有の部分の方が鉄の濃度が高い。このため，土器（試料２点）に付着する赤色粒子は鉄を成分とする赤色顔料であり，双眼実体顕微鏡による形状観察により，針状結晶は見られなかったので，パイプ状ベンガラではなく，鉱物由来のベンガラと考えられる。

第 23 表　ＦＰＭ定量結果

FPM 定量結果

元素	ライン	強度 (cps/mA)	質量濃度 (%)
アルミニウム	K	36.32	21.16
けい素	K	139.91	52.15
硫黄	K	1.46	0.19
カリウム	K	17.51	2.48
カルシウム	K	9.04	1.04
チタン	K	69.77	1.98
バナジウム	K	1.87	0.04
マンガン	K	41.59	0.66
鉄	K	1539.93	20.18
ジルコニウム	K	20.17	0.13

FPM 定量結果

元素	ライン	強度 (cps/mA)	質量濃度 (%)
アルミニウム	K	29.88	23.13
けい素	K	107.3	61.92
硫黄	K	0.57	0.13
カリウム	K	9.58	2.4
カルシウム	K	6.22	1.26
チタン	K	54.14	2.78
バナジウム	K	2.19	0.08
鉄	K	386.67	8.18
ジルコニウム	K	14.97	0.12

第６章　総括

ここでは，検出遺構・出土遺物が多い縄文時代早期・中世・近世について記述する。

第１節　縄文時代早期

１　遺物

（１）年代等

型式別の出土量を比較すると，前平式土器が最も多く，加栗山式土器が続き，この２型式で大半を占める。このことから調査区付近では，早期前葉において主に活動が行われたと考えられる。また早期中葉から後葉にかけては出土量が少なく，周辺の遺跡では多くみられることから，この時期はごく短期間の活動にとどまったか，時期による選地の違いなどが考えられる。

（２）縞状を呈する土器

小牧３Ａ式土器の 282 ～ 285，305 は，内面の色調が浅黄橙色と赤褐色に分かれる。これらは同一個体と考えられるため，未実測分も含め，写真図版 22 内に掲載した（ただし，図版 22 内の下の２点は別個体）。

蛍光Ｘ線分析（第５章第３節）によると，内外面とも赤褐色の部分は浅黄橙色の部分より鉄分の反応が強く出ており，鉄分（ベンガラ）を含む液体を塗りつけたと考えられる。

顔料は，内面全体に渡って横縞状に塗られている。口縁部の下位及び底部から３㎝程度上位には幅広く，それらの間は幅１㎝程度の細めの線が引かれている。これらの線が横方向に輪状に数回塗られたか，あるいは螺旋状を呈するのか，詳細は不明である。口縁部の内面は，全面に塗布した後，上位の縦幅２㎝程度を工具で横方向にナデ消している。口唇部は顔料が部分的に塗られている。外面については，焼成時に火を直接受けたためか内面よりかなり不明瞭である。285 は外面も横方向に塗られているが，内面と同様であったかは不明である。断面を観察すると，顔料が塗られていない部分は中がアンコ状に黒色化しているが，赤褐色に塗られた部分は黒色化が極めて弱い。これは鉄分が黒色化を弱めた結果と推測される。顔料は何らかの文様を意図した可能性があるが，破片のため，全体は不明である。類似例として，口縁内面上位に赤色顔料（ベンガラ）を塗布する資料が，日置市の稲荷原遺跡や上山路山遺跡などにあり，型式はいずれも岩本式土器となっている。

２　遺構

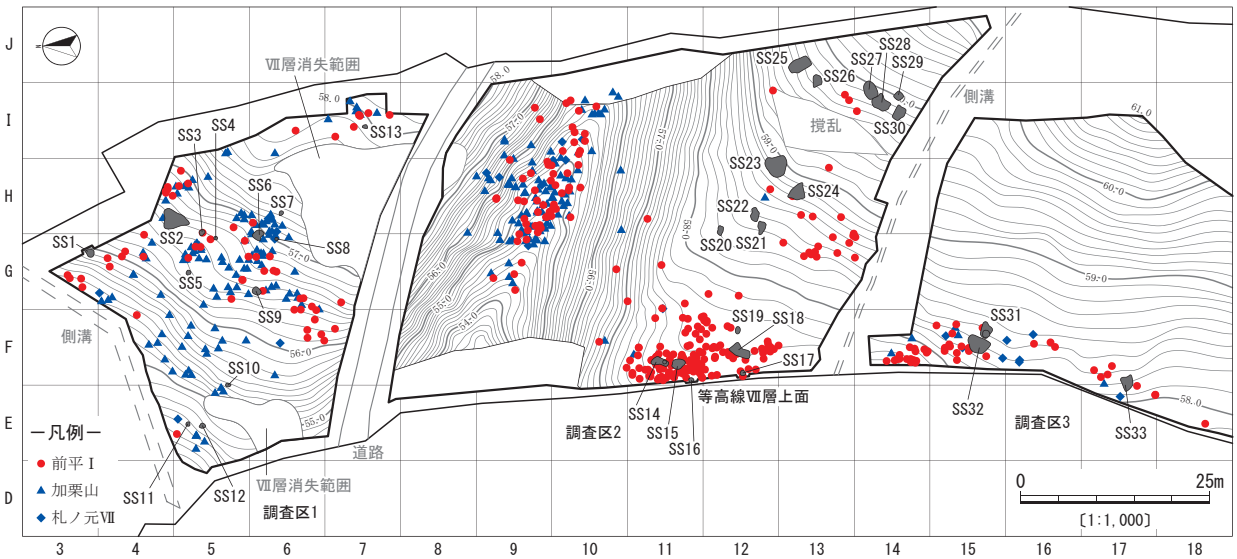
（１）分布

遺構は，集石 33 基と土坑７基及び落とし穴が検出されている。集石は主に調査区１～３に分かれており，遺物分布図（第 96 図）と比較すると，調査区１は加栗山式土器，調査区２は前平式土器Ⅰ類，調査区３は札ノ元Ⅶ類土器が多い。礫は安楽川から８～ 10 区の谷部を通り運んだと考えられ，早期前葉の頃，調査区２→１→３の順で主な活動場所が変更されたことが推測される。

（２）集石の年代

集石内から土器や炭化物が出土しており，年代を考える参考となる。出土した土器の型式及び炭化物の較正年代値（2 σ暦年代）を第 24 表に記した。遺構内遺物は，調査区１は加栗山式土器，調査区２は前平式土器Ⅰ類，調査区３は札ノ元Ⅶ類土器が主体となっており，遺物分布とほぼ一致する。

土器型式ごとの放射性炭素 14 年代値と較正年代値は立神倫史・小林謙一両氏によりまとめられている（立神・小林 2019）。それによると較正年代値は，前平式土



第 96 図　縄文時代早期集石・遺物分布図

器は 11,080 ～ 10,565calBP，加栗山式土器は 10,775 ～ 10,230calBP で，札ノ元Ⅶ類土器は数が少ないためか，年代値はない。調査区１内の集石内炭化物は６基分の資料があり，較正年代値は，集石５号のみやや古くなっているが，ほぼ加栗山式土器の年代と重なる。ただし集石７号のみかなり新しい年代が出たため，別試料で２回目の測定を実施すると，ほぼ他試料と近似した測定結果が得られた。調査区２内の集石内炭化物は４基分の資料があり，較正年代値は３基は前平式土器の値にほぼ一致するが，集石 29 号の１基のみは新しい早期中葉となる値が出ている。調査区３では炭化物が出土した集石はなく不明である。

このように，土器型式ごとの放射性炭素 14 年代値と較正年代値の分析成果と本遺跡出土土器を比較すると，やや異なる部分もあるが，大きな相違点はみられなかった。

（３）土坑等

土坑については谷部の南側にあたる 12 ～ 14 区にやや集中して検出された。形状は楕円形が多く，15 ～ 30 ㎝程度の深さである。埋土はⅥ層土主体で，いずれも遺物や炭化物を含まない。集石に近いものが多く，調理施設に関連する可能性も考えられる。

Ｈ－ 13 区において１基のみ検出した落とし穴は，東側が撹乱を受けており，撹乱箇所に他の落とし穴が存在した可能性がある。埋土が他の土坑と異なり，Ｖａ層上位部分の性質であったことから，早期後葉頃の遺構と考えられる。周辺の集石はすべて早期前葉のものであり，早期後葉には狩猟場として利用されていたと推測される。なお，落とし穴の上部から磨製石鏃が出土したが，落とし穴がほぼ埋没したころに入りこんだものであり，落とし穴と時期が異なる可能性が高い。

３　周辺遺跡との関連

宇都上遺跡が立地する安楽川下流域では，他にも多くの縄文時代早期の遺跡がある。そのうち調査された遺跡は，宇都上遺跡より１㎞北側の緩斜面に位置する稲荷上遺跡，本遺跡の対岸で，安楽川・尾野見川の浸食を受けた痩尾根の台地上に位置する稲荷迫遺跡，隣接した台地縁辺部に位置する高吉Ｂ遺跡，その南側の台地上に位置する船迫遺跡である。その遺跡ごとの遺構・遺物型式の概略は第 25 表のとおりである。

周辺域を外観すると，早期前半は最も河川に近く標高が低い宇都上遺跡・稲荷迫遺跡や高吉Ｂ遺跡の台地縁辺部で集石等を利用した調理場として，早期後半は高吉Ｂ遺跡・稲荷上遺跡などで調理場として，また台地上の船迫遺跡は石鏃が出土しており，狩猟場であったと考えられる。

縄文時代早期の遺跡は安楽川上～下流域でくまなくみられるが，前～晩期は下流域に多くなるため，早期において河川近くの段丘から台地縁辺部へ移動し，下流域では定住化したと推測される。なお，いずれの遺跡でも竪穴建物跡などは１軒も検出されていないが，遺物や集石の量から定住していた可能性が高く，調査区外に存在すると推測される。

第 24 表　炭化物年代測定結果と遺構内土器型式

	集石	測定社※１	測定値※２	遺構内土器
調査区１	１号	パレオ	10670-10490　cal BP（92.2%）	加栗山
	２号			加栗山
	３号	パレオ	10572-10372　cal BP（87.7%）	加栗山
	５号	パレオ	11075-10948　cal BP（40.1%） 10874-10687　cal BP（55.3%）	加栗山
	６号			加栗山
	７号	パリノ	8590 ～ 8454　cal BP（95.4%）	加栗山
		パレオ	10696-10511　cal BP（95.4%）	
	８号	パレオ	10783-10571　cal BP（95.4%）	
	９号			加栗山
	11 号	パリノ	10257 ～ 10195 cal BP（95.4%）	
	12 号			前平
調査区２	14 号			前平
	15 号			前平
	16 号	パリノ	10668 ～ 10503 cal BP（95.4%）	前平
	17 号	パリノ	10758 ～ 10587 cal BP（95.4%）	前平
	18 号			前平？下剥峯
	19 号	パリノ	10721 ～ 10573 cal BP（95.4%）	
	23 号			前平
	24 号			前平
	25 号			前平
	29 号	パレオ	9539-9476　cal BP（95.4%）	
調査区３	31 号			札ノ元Ⅶ
	32 号			札ノ元Ⅶ
	33 号			札ノ元Ⅶ

※１　測定会社は，「パリノ」はパリノ・サーヴェイ，「パレオ」はパレオ・ラボを示す。
※２　なお，パレオ・ラボの測定結果では，ＢＣ値のみの記述であったため，1950 をプラスしＢＰ値とし用いている。また，80%以下の値はカットしている。

第 25 表　周辺遺跡の遺構と土器型式

遺跡名	縄文早期の遺構	土器型式別の遺物量						
		前平	加栗山	石坂	下剥峯	手向山	平栫	塞ノ神
稲荷上	集石３基	×	×	×	×	×	△	△
稲荷迫	集石 64 基・連穴土坑３基・土坑２基	◎	◎	○	△	○	△	△
宇都上	集石 33 基・土坑７基・落とし穴１基	◎	◎	△	△	△	△	△
高吉Ｂ	集石 141 基・連穴土坑４基・土坑８基	△	△	◎	△	◎	△	◎
船迫	なし	×	×	×	△	×	×	×

◎多い　○やや多い　△少ない　×なし

第２節　中世

１　遺物

（１）遺構内遺物等

中世の包含層は，後世の撹乱によって完全に削平されている。またタイ産陶器や青磁皿のように，完形に近い個体が出土したものもあるが，多くの遺物は一部のみの出土であることから，遺構の上部も削平されたと考えられる。このように，中世の遺物は，遺構内における上部以外と表土出土のものに限られる。

遺構内遺物をみると，大型土坑２基の埋土内には石塔類とともに土師器・青磁・白磁・備前焼擂鉢などが出土しており，これらはほぼ 15 ～ 16 世紀代の資料である。このうち青磁皿・碗などの輸入陶磁器や備前焼・常滑焼など，他地域からの搬入品が多く出土している。

一方，これらの出土品の中には，小破片ながら古瀬戸

壺，東播系須恵器捏鉢，口禿白磁皿，鎬連弁青磁碗など，13 世紀後半頃のものも含まれている。

溝状遺構１・２号の遺物は大型土坑に比べ少ないことから，溝が造られた時期に大型土坑の上部が破壊され，当時の表土に含まれていたものが溝に入り込んだ可能性もある。

（２）タイ産四耳壺

１個体と思われるタイ産暗緑灰釉四耳壺が大型土坑から出土している。底・胴下部以外は二次的に火を受けて釉が溶けており，下部が地中に埋められた状態で火を受けたと考えられる。また，この四耳壺以外に二次的に焼けたものはないことから，この壺だけは他の遺物と離れた場所に置かれていたと推測される。

時期について，吉岡康暢氏によると，タイ産陶磁器の移入は大きく第一段階（14 世紀後半～ 16 世紀前半）と第二段階（16 世紀後半～ 17 世紀前半）に分かれ，四耳壺は 15 世紀前半～中葉に移入のピークを迎える（吉岡・門上 2011）。その大部分は沖縄で出土しており，南九州でも少量であるが出土している。これらは南九州において，中世の商人が沖縄島との通商を介し，直接または間接的に中国陶磁に随伴して流入したようである。南九州では中世の拠点港湾をひかえた場所に出土する傾向がみられ，志布志はその一つでもある。四耳壺は志布志市内では，宝満寺遺跡や高城遺跡で出土している。

（３）五輪塔

大型土坑１号内より出土した五輪塔については石材で分類できる。やや硬質の白色系溶結凝灰岩である 451・452・454・459 は一体と考えられ，水輪にホゾをもち火輪と連結させる南九州に多い形態で，14 世紀代のものと推定される。軽石製の 450・453 も一体のもので，熊本や鹿児島の五輪塔の特徴をもつ水輪の最大径が中心部より上位にくるナツメ型で，15 世紀代のものと推定される。やや赤みがかった軟質の溶結凝灰岩である 456・457・460 は地輪で，小型化の傾向がみられ，16 世紀代と推定される。

２　遺構

（１）大型土坑

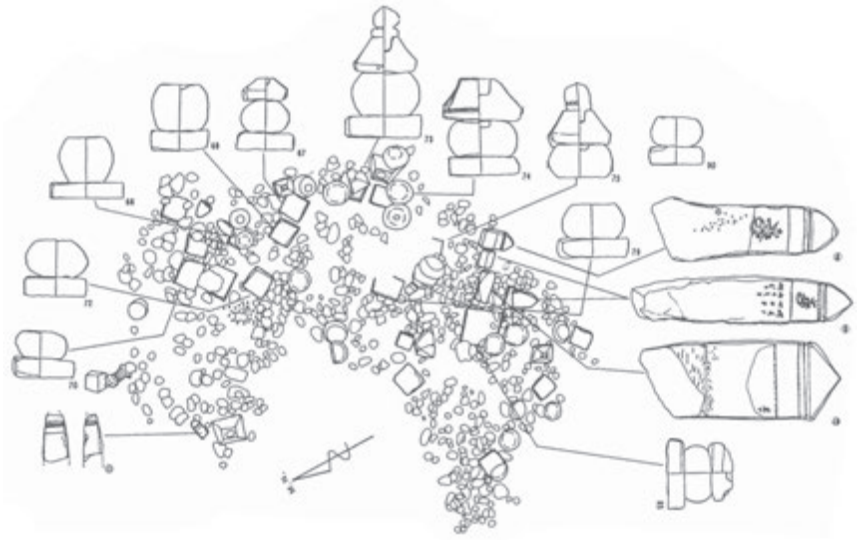
大型土坑１号内には多くの礫が入っている。礫の位置から，西側から石塔や陶磁器などの遺物とともに一気に投げ入れられ，その後埋め戻されたと考えられる。よって周囲に礫を敷いた石塔群が西側のＧ・Ｆ－５区付近に建立されていたが，なんらかの事情で破壊され，この土坑に廃棄されたと推測される。石塔群の周囲に礫が敷かれた例は多く，宮崎市山内石塔群跡（第 97 図）などがある。石塔群がこの付近にあったと仮定した場合，時期不明としている杭列が極めて近くで検出されており，何らかの関係がある可能性がある。

大型土坑２号の埋土内には石塔や礫が含まれておらず，陶磁器等のみである。このことから，大型土坑２号は１号より後に掘り込まれ，埋没過程で地表面に残存していた遺物片や，木製品など植物質のものが入ったと推測される。

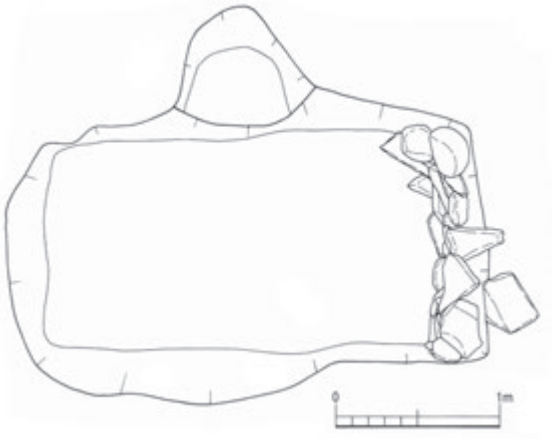
（２）礫を伴う土坑

土坑８号は，他の土坑が素掘りであるのに対し，周りに礫を２段以上積んだ様子がうかがえる。このような礫を伴う遺構の例として，県内では大崎町永吉天神段遺跡における火葬土坑１号があり，主体部の側面に角礫が３～４段重ねられている。また未報告であるが，鹿屋市小牧遺跡でも検出されている。

側面に礫を積み，床面に礫を敷き詰めた土坑としては，姶良市の市頭Ｃ遺跡や鹿屋市領家西遺跡があり，いずれも内部に被熱を受けた跡がみられる。隣接する宮崎県都城市では，床面に礫を敷き詰め，側面に礫を積み上げた土坑が加治屋Ｂ遺跡・鶴喰遺跡で１基ずつ検出されてい



第 97 図　宮崎市山内石塔群の例



第 98 図　鶴喰遺跡 22 号土坑

る。また，床面に礫を敷き詰めた土坑が加治屋Ｂ遺跡で２基，西側の側面のみ礫を積み上げた土坑が都城市鶴喰遺跡で１基検出されている。宮崎県えびの市の北田遺跡では，床面に円礫を敷き詰めた土坑が１基検出されている。

類例をみると，床面に礫を敷き詰め，側面に礫を積み重ねる土坑は，その多くが被熱を受け，炭化物などもみられるため，火葬土坑墓もしくは土坑墓の可能性が考えられる。床面のみに礫を敷き詰める土坑も同様である。宇都上遺跡のように，側面の一部に礫を積み上げる例は鶴喰遺跡で１基みられたのみで（第 98 図），ほとんど例がない。なお，鶴喰遺跡では鉄釘も出土しているため，土坑墓の可能性が高い。

また，大型土坑１号に廃棄された石塔は，土坑８号の上にあった可能性があり，その場合，土坑８号の上に積まれていた礫や石塔を大型土坑１号内に入れたこととなり，石塔は墓塔であったと考えられる。このように類例や検出状況をみると，土坑８号は土坑墓の可能性が高く，墓の一部であったと判断することができる。

（３）溝状遺構・硬化面

溝状遺構は４条検出されており，地点により１・２号と３・４号の２つに大別される。１・２号はほぼ北から南に直線状に延びており，等高線に平行である。大型土坑出土の遺物と同時期の遺物が含まれることから，大型土坑と近い時期と想定される。大型土坑は石塔群が破壊された頃に造られており，その後当地が畑などに作り替えられた際の区域境の可能性がある。３号は１・２号と平行であり，同様の用途が考えられる。４号及び硬化面は，現在の道路とほぼ平行であり，旧道の一部の可能性が考えられる。

第３節　近世

１　土坑及び石塔・石碑

土坑４基及び石塔・石碑（第 86 図）はⅠ－６区に集中している。土坑 10・12 号は底面付近しか残存していないため，用途等は不明である。11･13 号については，埋土断面に桶状の痕跡がみられたこと，13 号の埋土内に鉄釘が入っていたことから，土坑墓の可能性が高い。

石塔・石碑については，文字が刻まれておらず詳細な年代は不明であるが，土坑との位置関係から，15 ～ 16 世紀頃にそれまで建っていた五輪塔などの石塔を廃棄し，その場所に新たにこれらの石塔・石碑を建立したと推測される。ただし，このような石塔・石碑は近世に建立される場合が多いことから，近世において，過去に五輪塔などの石塔があった場所で，供養等の意味で新しく建立された可能性がある。周辺から 18 世紀後半頃の遺物が出土することから，少なくともそれ以前に建立されたと考えられる。

遺物は，仏具など供養塔に供えられたと考えられるものがみられるが，擂鉢・鉢・甕なども多いため，近くに日常用具の捨て場もあったと推測される。

２　溝状遺構

溝状遺構は２条検出されている。５号については，供養塔に近接し，底面が平坦であることから，供養塔への道として使用されていたと考えられる。６号は，底面に階段状の段があること，現在の側溝や道路と並行であることから，河川から台地上へ上がる際の道路などの用途が考えられる。

（参考文献）

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2009『領家西遺跡　天神平溝下遺跡』
　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（141）

2012『稲荷迫遺跡』
　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（169）

2014『船迫遺跡・高吉Ｂ遺跡』
　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（180）

鹿児島県教育委員会　（公財）埋蔵文化財調査センター

2018『永吉天神段遺跡３　第２地点－２　古代・中世・近世編』
　（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（17）

姶良市教育委員会

2013『市頭Ａ遺跡　市頭Ｂ・Ｃ遺跡』
　姶良市埋蔵文化財発掘調査報告書第４集

志布志町教育委員会

1985『中原遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（9）

2003『稲荷上遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（32）

宮崎県都城市教育委員会

2007『鶴喰遺跡（中世編）』都城市文化財調査報告書第 79 集

2008『加治屋Ｂ遺跡（平安時代～近世編）』
　都城市文化財調査報告書第 86 集

中世墓資料集成研究会 2004
　『中世墓資料集成－九州・沖縄編（2）』

吉岡康暢・門上秀叡 2011『琉球出土陶磁社会史研究』真陽社

立神倫史・小林謙一 2019「鹿児島県における縄紋時代草創期～早期の年代測定事例－土器付着炭化物を中心に－」『研究紀要年報　縄文の森から』第 11 号　鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（204）
主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

宇都上遺跡

発行年月　２０２０年３月
編集・発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL　0995-48-5811
印刷所　濱島印刷株式会社
〒899－0052　鹿児島市上之園町17番２号
TEL　099-255-6121　FAX 099-259-1629



鹿児島県